

---

# 《ザ・刀と壱の旅》 ~The Tou and Ichi's travels~

ログ核人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『ザ・刀と壱の旅』 The Tou and Ichis  
travels

### 【ISBN】

N4092C

### 【作者名】

ログ核人

### 【あらすじ】

乗ったバスが事故を起こし 目が覚めたら見知らぬ土地で  
ぶつ倒れていた。そこを盲目の旅人・壱に助けられる。が、助けの  
恩をさせられ、主人公はその場のノリと勢いで壱の旅に同行するこ  
とに……【不定期更新】

起／第一話・その時、大型ダンプがやって来て……

これは、彼女のお話である。

\* \* \*

不意に田が覚める。

ハツキリ言えば、望まぬ田覚めだ。

だから、

「あと五分……」

なぜに五分なのか　とか、そういう疑問も無くはないが、お決まりのセリフと共に、一度田の睡眠にはこうつと思つ。

望まぬ田覚めであつたが、しかしこの一度田の睡眠にはいる瞬間に、いわれもない至福を感じるのは、なぜだろうか。

「はい、五分。終うー了おー。とつとど、起きやがれ」

ああ、わかつてない。わかつてないなあー。この至福をわかれないとは、人生九割損してるよ？

「あなたの二倍は生きてるけどね。そんなんで損した憶えはないわよ」

「おふくろさんよおー、おふくろさん」

「なによ」

「そんなんだからあー、田尻にシワがあー　じつ ふおつ！」

クソお袋めつ！ 寝ていて無防備な青少年の下腹部に、カカトをぶち込むとはつ！

「ほら、早くしないとバスに乗り遅れる  
はいはい、起きますよ。

「ていうか、痛くて眠気跳んじゃつたし」

そんなこんなでオレは起床し、本日が始まった。

下腹部に鈍痛を感じつつ部屋から出ると、そこには朝の匂いがあった。

ようは朝飯の匂いである。

とくに味噌汁と焼いた魚の匂いが強い。二階まで届くのだから格別だろう。

アクビを噛み殺しつつ、階段を降りる。

お決まりのコースに沿つて、まず便所へ向かう。そして朝一番の御仕事を済ませてから、洗面所へ向かい手を清潔キレイにして、次いで顔を洗う。

お手が過ちを犯し、鼻に水が入つてちょっと痛い思いをする破目になつたが、タオルで一度三度と鼻をかんだらどうにか痛みは遠退いた。

「なんで、タオルで、鼻がんでのよ」

鼻の痛みと戦いながら現れたオレに言つのは、テーブルに品を並べているお袋である。

「オレの鼻はデリケートでね」

そんな返答をしつつ、テーブルの席に着く。田の前には、朝食の定番がいらっしゃった。

ほつこつご飯に、アジの開き、ナメコの味噌汁、きゅうりの漬物最後に牛乳。

これが我家の定番メニューである。世間様では朝はパン派とか言つて、こじやれたトーストとか出るのかもしれないが、それは世間での話である。知つたことか。オレは生まれてこのかた、ごはん派だ。

朝食を喰らいつつ、朝のテレビコースを観る。

どうにも、最近のテレビ局は個人の能力よりも容姿を重視するのか、原稿を読みながら噛む人が目立つ。まあ正直、ニュースの中身よりも、この番組の中で噛む人がどれだけいるかを数えるほうが面白い。

そんなこんなで朝食は食べ終わり、一息吐きつつ、ニコース番組の後半を観る。

が、最後まで観れないのが我が常。

番組終了十五分前に家を出ないとバスに乗り遅れ、学校に遅刻してしまうのだ。

正直に言えば遅刻したっていいのだが、まあそこは、ほら、世間体とオレの意識は一致しないもの。遅刻して“いいこと”なんぞあるわけがない。

というわけで、歯を磨いてから浴室に戻り、必要な物があらかじめ詰ったカバンを持ってから、番組終了十五分前といつギリギリまで朝のニコースをしつかり視聴して、家を出る。

我が家学園には指定の制服とかがないので、本当にギリギリまで何もしてなくて大丈夫なのが良いところだと思つ。

ときたま道の状況で遅れたりもするが、始発のバス停にはいつも乗るバスが止まっていた。

方向的に乗る人が少ないのか、本数が多いことが幸いしてなのか、バスの中は混んでいるわけでもなく、かと言つて空いているわけでもない。そんな状況で、オレはいつもと同じように、一番後ろの扉側の窓際に座る。

なんというか“小・中・高”と通学で長年乗り続いていると、特等席というのか、自分の尻がピッタリフィットしてやたらと落ち着く席ができたりする。この一番後ろの席が、つまりオレの座る席というわけだ。

眠気を引きずっている時はこのまま寝に落ちるのだが、いまはそうでもないので、カバンに手を突っ込み、読みかけの文庫本を取り出し、読書することにする。

一ページ目を読み終えたとき、扉の閉まる音が聞こえた。それで停止していたエンジンが駆動し、時には子守唄の“じとき振動と音を発しながら、バスが走り出す。

これから約一時間、座りっぱなしだ。

心地好い揺れに身を任せつつ、読書に専念するとしよう。

どれほど時が過ぎたのだろうか。

区切りのいいところで、いつたん読書を休む。

目を休ませつつ、いまどの辺りを走行中なのだろうかと、窓の外に視線をやる。それにあわせるかのように、バスは赤信号で停車した。

現在位置は、通行量の激しい、よく渋滞する大街道の途中にある交差点だった。この交差点を右に折れて、そこにある急な坂道を登れば、目的地たる終点までは、あと十五分ほどである。

「まあ、道が混まなければだけど」

長年のバス通学の経験上、渋滞する確率は八割強だ。

ハツキリ言って、混まぬ方が珍しい。

というか、オレがバスの心地好い揺れに身をまかせて寝入つたとき有限って、終点到着時間的に道が空いていたと予測できる。つまり何の因果か、オレが寝てないときほど道が混んでいるのだ。正直、ショージきな話 というか、誰だって逆のほうが好ましい。現状、非常に損した気分である。

が、世は無常にも事も無く、オレが損する方向に動くわけだ。  
まあ、嘆いてもしようがない。

貴重な時間を有効活用するために、読書を再開しよう。

そう思い、指が文庫本に触れ、右手人差し指が枝折に触れた刹那。

低音なクラクションが間近から大音で聞こえ、

反射的に見たそこには、

大型ダンプが、

刹那の距離に、

次にあつたのは、息が詰るほどの衝撃

ではなく、

わき腹をツンツンと探るように突かれる感覺だった。

が、とうとつにツンツン突きは止む。

数泊の間を置いて、今度はさわさわと、わき腹から背中にかけてをまさぐるような手の触感があり、それは次いでもみもみと微妙に力を加えて、触れた物体を確認するように動く。

なんだ？

もみもみされる感覺に耐えかねてガバッと目を開いたオレの視界に映ったのは、カサカサにジャリつてた地べたであった。左のほうにジャリが食い込んで、中途半端に痛い。そのうえ、口呼吸するたびに砂の味がする……

そこでオレは、自身の不自然さに気がつく。

「なぜにジャリの上で寝てるんだ……？」

声を出して初めて判つたが、口のどこかを切つているらしく、じんわりとした痛みが鉄っぽい血の味と侵入した砂の味とまじり合つて口内に広がつた。

ああ、そうか 確か本読もうとしたらダンプが……、あの後どうなつたんだろう？ よくわかんないけど、外に投げ出されたのかな……？ 口の中、痛いなあ……声を出すのは控えよう。

「もし、もし」

声を出すのを控えようと決断したとたん、もみもみ触感と共に声がふつってきた。

「もしもし、大丈夫ですか？」

「血と砂の味が口の中いっぱいに広がつてますが、たぶん大丈夫です」

オレは答えつつ、首と眼球を最大限に動かして、声の聞こえたほうを見やる。

そこに居たのは、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着て、オレをシンシン突いていたと思しき棒のような物を左手に握り、右手で

オレの右肩甲骨あたりを揺すりつつ、明後田の方向へ目線をやつて  
いる、少しバサついた黒髪を肩口でテキトウにぶつた切つた、女の  
ような顔をした人物だった。

「そうですか。それはよかつたです。てっきり、行き倒れかと思つ  
てしましました」

安堵したふうに言うその声は、透き通るよつに澄んだ　あるいは、  
は、儂げな色だった。聴いた感じだと女性の声のようだ。

うつ伏せ状態のままなうえ、右肩甲骨あたりに手を押し込むよう  
に置かれて身動きがとりにくいで、

「ははは、いまどきの日本で行き倒れはないですよ」

地べたに左ほっぺを食い込ませたまま、返答する。

「大変。やっぱり無理をしているのですね。おむすびしか持つてない  
んですけど、いま出しますから、どうぞ食べてください」

我が返答のどこいら辺を聞くと、そんな反応ができるんだろうか。

彼女の声色には、本気で「大変っ！」という雰囲気がこもつてい  
た。

まあ、お腹は空いていないが、彼女がおむすびを取り出すために  
右肩甲骨の上から手をかけてくれたおかげで、オレは地べたと頬を  
すり合わせている現状から抜け出せる。

全身に力を込めてみても、とりたてて痛むところはなかつたので、  
ガバッ！　と身を起こした。

目の前に広がるのは、東京砂漠の端っこ　ではなく、

「あつれええええええええええええええええ」

遮る物の無い、だだつ広い、果てに見える山脈のすそ野まで広が  
る田園風景……。

「ええッ？」

「どーなつてるんつ？　と全身で疑問符をアーティスティックに表  
現していたら、おむすびを取り出した彼女が少し探るようにさまよ  
わせた手にガシッと肩をつかまれた。やはり視線を合わせないまま、  
彼女は「落ち着け」と言わんばかりに、ずいっとおむすびを差し出

していく。

オレは無言のままにそれを受け取り

きつと、コレを全部食つて全身全靈で落ち着けば……

田を開じ、神聖なモノをいたたくよつに、オレは一口、また一口と、おむすびを噛みしめた。

ちよつと塩つけが強いなあ、口内の傷にチトしみるなあ、とか思いながらも美味しくいただき、指先つちょに付いた米粒をも綺麗に喰らい

鼻から大きく空氣を吸い込み、「スウ～」と口から息を吐く。深呼吸をし、呼吸を整えてから、

ゆつくり、慎重に、両の眼を見開き……

……

……

……

「…………。口口、何所？」

「しんぶるこずぞべすとな疑問系。

誰か、我がシンプルな脳にも理解できるよつて、この状況を説明しておくれ……。

「この辺りは、クレベル王国の外れですよ」

おお、お優しい彼女さん。我がシンプルな脳でもわかるよう端的に教えてくれてありがとう。

でも、

「いつ日本に王国ができるんですかあつ？ わたくし、ムツ'ロロウ王国しか存じませんでしたよ……最近は衰退しているらしいですけど……」

ダンプにぶつ飛ばされて、時を駆けてしまったのかなオレ。それとも時代の流動はオレが思うよりも早く速く激しいのかな。時代の流れに取り残されちゃったのかなオレ。

「あの……、さつきから貴方が言つてはいる“一ホン”て、なんてい

う意味なんですか？ それとムツゴロウ王国という国名は初めて聞いたのですけど、ここからは遠いのですか？」「

ああ、彼女さん。アナタは明後日の方向を見ながら、何を問うて  
いるのですか？

いるのですか？

日本の意味つて。そりやあ、突き詰めた歴史背景云々付きの意味はオレも知らないけれどさ、その問い合わせは愚問でしきう。  
それにムツゴロウ王国は王国だけど国名じやないってことくらいこゝ知つていいでしきう？ 動物とディープに全身全靈で語り合つアノお人を知つていれば。

「本当に知らないんですか？」

私は、今まで知りませんでしたけど、

タシフにふ一飛はされて頭を強く打つたとかしてない

?

「 “ だんぶ ” ですか？ その言葉も初めて聞きました。やはり貴方は遠い国の人なのですか？ こつちの言葉が上手なので、てつきりこちらの地方の方かと」

どうする。  
あられる?  
なんてだ?——全然  
詰かかみ合わなし……

どうすんの  
オレつ！

とりあえず、叫んで現実逃避することにした。

起／第一話・旅は道連れ、世は二倍の見返りつ

とりあえず、現状を受け入れることにした。  
いや、というかね、受け入れたと言うか、諦めたって言ったほう  
が正しいか。

もうね、学力が胴体擦るどころか時々墜落しちやつて超低空飛行な我が頭脳の処理能力限界を突破してしまったのさ。

もつてこいつ！ って感じ。

注意！ いちおう、飲酒は二十歳になつてからでもまあ、修学旅行でチューハイとかグビグビ飲みまくつている人達いるけどね。ていうか、なんでこの年齢（現役の高校生）で酔っ払いは意味もなく絡んできてウザッタイっていう知識を得てているんだろう。オレと早寝の友人（A）以外の、同室の奴らが飲んだクレ野郎どもだつたからつていうのと、教員諸君も焼肉をお供に出来上がつていたつていうのが、原因なのは間違いないけどね。てか、修学旅行で飲むなよ教師達……。

でいう、ちうさい現実逃避はダメですか？

……そうですか。

でもね、修学旅行云々は実話だよ？

はい

じやあ、現実を見ますよ。

モーリー・モード

爆発した。

「ええと、いまさっきまで行き倒れていて、私が起こして、私があげたおむすび食べて、絶叫したんですよ？」

ものすごく平静な声音で言つてくれるのは、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着て、左手に棒のような物を握り、明後日の方向へ目線をやつている、少しバサついた黒髪を肩口の辺りでテキトウにぶつた切つた、女のような顔をした人物だった　　ていうか、女の人がとあります。

「ええ、そうです。そなんですけれどもっ！　アナタに起こされ、おむすび恵んでもらつてゐたりからして、どうなつてゐんだあつ！　つていう心情なんです、いまの自分」

「アナタじやありません。イチです」

「はい？」

「だ・か・ら、私の名前です。私はアナタなんて名前じやありません。イチです。イ・チ」

明後日の方向をムツと睨みつつ、眉間に小さなシワを寄せ、若干ほっぺをぷくつと膨らませるアナタさん　　改め、“壱／一”さん。

んん～このお人は“我が道を往く”タイプのお人なのかな。まったく、オレの話を聞いていないように思えるんだ、ちょっと前から。“わかりました。アナタさん改め、壱さんですね。わかりました。わかりましたから、オレの話を聞いていただけないでしょ？　「ダメです」

えええー、まさかの拒否ですか。

押したら『俺の話を聞けっ！』って代わりに叫んでくれるボタンが欲しい。とっても欲しい。ボタン連打して『俺の話を聞けっ！』つてリズミカルに我が心情を代弁して欲しい。いまこの瞬間に欲しい。どなたかプリーズッ！

　　というか普通、ちよろつとでも、こう、ねえ、こんな状況のと  
「貴方の名前を聞いていません」

さ…………思考すらぶつた切るのですか。

でも、なるほどそいいえば名乗つていなかつたですね。

「オレは、オレの名前は佐刀です、磨磨佐刀」

「え？ あのもう一度いいですか」

ああ、口の中が血と砂でジャリジャリなもんで、発音悪くなつて聴き取りにくかつたですか。

「磨磨佐刀です」

今度は舌で口内舐め回して洗浄したから発音バツチリだつたでしょ。

「え？」

鹿さん若さうに見えて、じつはお年を取っているんだじょうかねえつ？

「と・ぎ・ま ゃ・と・う で・すフ！」

今度は、今度は強調したよ。とっても強調して言った。力んだオカゲで口の中にいっぱいに鉄っぽい血の味が充満してゐるもん。

「……え？」

じつは訊ねておいて知る氣ないでしょ！オレの名前、と心の隅で思つた刹那

「……ああ」

と鹿さん、やつと聞き取つてくださいた。

ああもひ、ジラシープレイみたいなことはやめてくださいよ。

「トウデスツ！」さんですか

なあーんでソ口をチョイスしちゃつたんですか。

「トウデスツ！」つて……」

ずいぶん斬新な聞き取り方しますねつ！

いや、世界は広いですから（現に意味不明な場所にオレ居るし）、探せばそんなネーミングの人も居るでしょう。あるいは、さつき言つていたクレベル王国でしたつけ？ には名前に小さい『つ』や『！』を標準装備している人も居るでしょ！つよ。

でも、

「最後の『ですフ！』は、どうがんばつても名前じゃないでしょ」「そうなのですか？ こつ、終わりが『つ！』だと、元気のない時でも名前を呼ぶときに『つ！』で空元氣振り絞つた感じになつて、

「いつもいいと思しますけど」

「空元気じやあ、とってもダメでしょ。ところが名前呼ばれたた  
びに空元気振り絞らせてるみたいでイヤですよ。元氣ない人を強制  
労働させるみたいな名前は。

「じゃなくて、『ですっ』は名前じやあいませんから、呼ぶときは  
はくつ付けないでくださいよ」

「はい、すみません どうぞ」

「父をこうして、オレは君さんの親父さんじやありますよ」

「なに言つてるんですか？ 当たり前じゃないですか。トウさんが、  
私の父をんなわけがあつません……」

「だから、そう言つて」

「……私の父さんはもうこの世に居ませんから」

えええ！ なんでの場面でカミングアウト？

処理する難易度が超高い纖細な事柄を、なぜ唐突に言われるので  
しょうかねつ。

「あの、その、ええと……」

我がボキャブラリーは残念なことじやうへーーの句が継げずに言  
いよどんでしまつ。

「なんですか？ トウさん」

一瞬前のカミングアウトなんぞ無かつたかのような氣をへいで、  
君さんは小首を傾げる。

よし、話題を変えよう。このタイミングを逃すべからず。

「どうか、その呼び名は固定なのでしょうか。もつ変更できない  
のでしょうか？」

そして何より、

「“と・ぎ・ま や・”の部分は、なぜ無かつたことになつてゐ  
んでしょう」

とても切実な疑問なのです。なんたつて自分の名前ですかうね。

「だつて、呼び難いじゃないですか」

おひ、おひ。君さん、しつとスゴイと叫んだ。こまスゴイこ

と言つたよ。なんですか呼び難いって！

「普通、名前は“一音／二文字”ですよ。トウさんの名前が長すぎます。王族さんとかですか？ それともムツゴロウ王国ではそれが普通なのでしょうか？ すみません、遠い国の風習は知らないのに、“一音／二文字”までの名前が普通つて、ここ何所だよて、ああ……オレの知らぬ所だったっけか。我が現在位置は、ど一〇でーすーかーなのでしたね。

てか、さつきの“トウヂスツ！”っていう無茶な呼び方は“一音／二文字”以上だったと思うのですけれど……気にしたら負けですか？

……そうですか。

「すみません。オレがこっちの風習をしらなかつただけですね。オレ、王族じやないですし、ムツゴロウ王国もたぶん“一音／二文字”以上が普通でしじょうけれど 強いてあの王国の風習をいえば、”全身全靈で”ティープなまでに動物と語り合えつ！” ってのだと思ひます」

気持ちの切り替えつて大事だよねつ！ 情け容赦なく色々と起りやがる現実を生き残るためににはつ！

「スゴイ王国なのですねえ、ムツゴロウ王国という所は」

おおお～と感心しきりな壱さん。確かにスゴイですけど、実際にスゴイのは動物が逃げ腰になるほどスキンシップがティープな国王様だけだと思いますよ。

ともあれ、

「なにはどうしても、オレの名前は“一音／二文字”に縮小されるわけか。トウ、とう、刀、ねえ……」

どう頑張つてもオレに拒否権は無さやうだし……、なんだかなあ……。

ダンプにぶつ飛ばされて、状況がよくわからぬままに改名させられて、

「我ながらエキサイティングな人生に足を突つ込んじゃつたなあ

深い深い深淵より深い溜め息が、血の味でガビガビな口から漏れてしまつても、しかたないじゃないですか。

なんかノリと勢いで改名させられてますけど、こんな現実 どうやつて受け止めると? 勘弁してほしいですよ。心身不安定過ぎて、なんかずっと中途半端な丁寧語で喋つてるじゃないですか、オレ。いまさら気がつきましたよ。

「はあ……」

深い深い深淵より深い溜め息が、血の味でガビガビな口から漏れてしまつ

「さて、そろそろ行きましょうか刀さんつー!」

すくつと元気に姿勢良く起立すると、壱さんはほがらかに しかし視線の合わない表情をこひらけに向けて、「わあわああー」と出発をうながしてくる。

壱さん、意外と強引なんですね。初対面では、おしとやかな大和撫子に見えたんだけどなあ……。どうやらオレの眼は節穴だつたらしい。

「行くつて、どこへですか?」

正直、自分の現在位置が不明ないま、あまり動きたくないのです

が。

「この先にある ハズ の宿場町ですよ」

言つて、壱さんは問答無用で歩みを開始する。

「なんですか、ハズつて、歯切れ悪いですね」

そんなオレの言葉に、彼女は立ち止まり、

「だつて、しようがないじゃないですか。教えてもらつた道をちゃんと進んでいるかは、すれ違う人に聞かないとわかんないんですもん。それにその答えが正しいという保証もないですしちゃ」

眉間にシワを寄せ、ほっぺをぷくつと膨らませる。不満がある時にほっぺをぷくつとさせるのは壱さんの癖なのだろうか? ちょっとかわいい……て、そうじやなくて

「あの、壱さん」

「なんですか」

「あの、その、やっぱり、その、あの.....眼が?」

「タメが長いですよ。それに、わかつていて訊いていくでしょう、刀さん」

壱さんは呆れたふうに頭尻を下げる。

「え、はい、すみません」

「いえいえ、謝ることじやなことですよ。むしろ好都合です」

「ひとつ、とこつよつーンマコつて感じの笑みを、壱さんはそのまま元に浮かべた。

「なんですか、好都合って」

オレには好ましくない都合に思えて、気が気がないのですが。

「旅は道連れ、世は三倍の見返りつてこりじやないです。米一粒の恩は一生の恩とつ！」

それは「」では常識なんでしょうか。それとも壱さん限で常識なのでしょうか。というか米一粒＝オレの一生だと、オレはいつも何千回の一生を捧げなくぢやいけないんだろ？

「刀さんには、杖の代わりにでもなつてもらいましょうか。あ、安心してください、ちゃんと食べ物は支給しますから。刀さん行き倒れていたんですけど、お金とかはないでしょ？ し、刀さんにとっても損な話ではないでしょ？」

言つと、壱さんは杖で足元を確認しながらゆづくづく歩ずつ歩んでいく。

そりゃあ、頼れるアテのない我が現状だもの、壱さんの「」提案は魅力的ではあるけれど、

「壱さん、女性ですよね？」

「ちおつ、訊いてみる。

「当たり前じゃないですか。なんですか、私のことを男だと思つてのですか？ あ、それともイケナイことでも？」

そう、イケナイこと、それです つて言つても、べつにオレが

なにぞするぞといつわけではなく、

「いちおつ言つておきますけど、オレは男ですよ？　なにかするつもりなんてミジンコほどもないんですけど、危ないかも、とか思わないんですか？」

壱さんはスッと立ち止まると、一いちを向いて、

「いやああああああああ

自らの両腕で自身を護るよひに抱きしめた。

イマサラですか。

べつにもう、驚きとか、戸惑いとか、狼狽とか、無いですよ。疲れていますもの私　じゃなくて、オレ。ああ、一人称が変化し始めるとは……ちょっと危ないかなあ……。

「　なんてね。冗談ですよ、じょーだん」

テヘッと小憎たらしくも素敵な笑みを顔面に浮かべて壱さん言つけれど、もし今の一瞬を通行人さんに目撃されいたら、確實にオレは変態さん達の「ミコニティーへ仲間入りのでしたよ。無実の罪で我が心を殺す気ですか、アナタはっ！」

「もしも刀さんが鬼畜変態畜生だつたら、私は容赦なく奥の手を使用しますからね」

なんですか、奥の手って。

といふか、なぜに口の端を薄く吊り上げて言つんですかね。“今宵の琥鉄は血を欲しておる”ってセリフが似合に似合で怖気がしますよ。

じつは、じつは身が危ないのはオレだつたりするんじゃなかろうか。

ああ、なんか背筋がゾクゾクしてきた。

「さあ、行きましょうよ刀さん。陽が暮れてしまつたら野宿ですよ？」

そう言つた壱さんは歩みだす。

が、これはどうなんだろ？

オレは一緒に行つたほうかいのだろうか？

てか、一緒に行つて大丈夫なのだろうか？

どうする。

どうすんの。

どうすんだ オレッ！

「あの、何はともあれ 、助けてくれてありがとうございました」

いまさらながら、お礼を書つことにした。

## 起／第三話・サターナイトファーバー

地道を進みゆく壱さんの足どりはゆっくりに見えてなかなか速く、気を抜くと置いて行かれそうになるので、オレは金魚のフンになつたつもりで、ひたむきに彼女の後をつかず離れず追つかける。周りの景色を楽しむ余裕などはない。

小刻みな歩幅でずんずん歩む壱さんの背中を凝視していたらふとして思う。

確かに、確かにぶつ倒れていたところを起こしてもらつた。けれども、よくよく考えてみて、おむすび一つで旅の道連れにされてよかつたのだろうか、オレは。右も左も上も下もマルッと理解不能な我が現状としては、むしろ助かったと言えるけれど……こんな状況だもの、疑心暗鬼にもなろうつて。よくわからない事ばっかりで、不安なのだ。

「これはどこでーすーかあつ？」と心の内で叫んだりしてみるが、体内で虚しく響くに終わる。

壱さんは歩きながら、頼んでもいのに、自分の出身地はフォスエイジ天帝国だ（聞いた感じだと、どうやら日本に近いような印象を受ける国である）等々 オレを飽きさせない為か、ただ単純に自分が喋りたいだけなのか、話してくれたが、しかし根本的なところでオレがもっとも知りたいことは、まだ語られていない。

オレの知りたいこと。

それは単純。

ここは何所？

フォスエイジ天帝国って、地球のどの辺にあるんでしょうね？

日本語が余裕で通じる壱さんが「出身のその天帝国って。決して、決してオレは世界地図を丸暗記しているわけではないので断言したりは出来ないが、そんな国名、我が人生の築いた事典には記載されていない。

というか根本的なところからして、なぜに大型ダンプにぶつ飛ばされて、いま、オレは、この地道を、壱さんの背を追って歩いているのだ？

近代文明の痕跡すら見受けられない、この地道を。

「何をさつきからブツブツ言っているのですか？あれですか、私の艶やかな後姿を見て“よくじょー”してしまったんですか？奥の手、使っちゃいますよ？」

振り返りも立ち止まりもせずに、壱さんは楽しそうにおっしゃる。「そんなバサついた髪した人の後姿を見ても、オレは艶やかだとは思いません。ゆえに欲情もしません。ですから、奥の手は使わないでください。オレがブツブツ言っているのは、ここは何所で、なんでもオレはここにいるのか、ダンプは？バスは？街は？オレの見知った風景は何所に？という現状に対する疑問です」

理解しがたい現状にイライラしているのか、オレは少々失礼な物言いをしてしまう。

なので当然、壱さんの気に触る。

彼女はシンシンとして立ち止まると、じりじり半身を向けて、合わない視線の睨みをくれながら、

「ヒドイ物言いです。乙女の心はズタズタです。しょうがないじゃないですか、山道を歩きっぱなしで、野宿のじじ通し、身体を洗う余裕なんてなかつたんですね」

じ立腹つてなぐあいに、ふくつとほっぺを膨らます。

出逢つてからまだ微々たる時間しか共有していないが、壱さんは気分を損ねるとほっぺをふくつと膨らませる癖があるようだ。それがけつこひ、かわいい。というかオレのツボ といつのは置いといで。

「てか、お風呂はいってないんですか？……なんか好い香りがした気がする んですけど」

次瞬、壱さんは自らの身体をバッと抱きしめ、

「刀さんの頭の中は、いかがわしいことだらけなのですか？ 口

エロ魔人さんですか？ 香りつて、いつの間に私を香ったのです

つ

ズリズリとすり足で後ずさる。

ちなみに刀さんというのは現在進行形でオレの呼び名であるが、決して我が本名ではない。“磨磨佐刀／とぎまさとひ”、これがオレの名である。

が、しかし壱さんが言つところの“この世の普通”では、名前は“一音／一文字”までらしく、それゆえ勝手に名前の後“一音／一文字”を取つて“刀／とう”と呼ばれることになってしまったのだ。本心としては生まれ持つての我が名前を使用してほしいが、それを主張し続けても徒労に終わる可能性極大なので、もう諦めた。

で、香つたどうのという話だが、

「べ、べつに、まじまじと香つたわけじゃないですからね。ぶつ倒れてたところを起こしてもらつたとき、ふわあ～と花の香りみたいのがしたつてだけで」

「

とかなんとか、しょーもないやりとりをしてこなづかに、目的地たる宿場町に到着した。

宿場町の入り口と思しき丸太を突つ立てただけの簡素なゲートがあり、その脇には一人が入室したら満員となるであろう大きさの簡素な木造ほつ建て小屋があつた。

壱さんとオレが簡素なゲートを通過しようとしたら、

「旅人さんかい？」

腹に響く重低音が呼び止めてきた。

壱さんはそれに反応し、

「はい、その通りです」

と答え、音源と思われる小屋のむかっとい覗き窓へと歩み寄り、「ここでは何か手続きが必要なのですか？」  
慣れたふうに訊ねる。

「おうよ。名前と滞在日数を記録帳に書いてくれ」

わつさい窓がちっさく開かれ、ゴツイ手が使い古されてヨレヨレシワシワになつた手帳のようなモノをツイと押し出す。

「あら、困りました。文字書けないのでよ、私」

「じゃあ、そつちの、あんたの連れっぽい兄ちゃんは？」

たぶんオレに話がふられたので、壱さんの肩越しに手帳っぽいモノをのぞいてみる。が、やはりとかなんというか、そこに書かれている文字は、我が人生の中で書いたことはおろか見たことすらないモノだつた。

「オレも無理です」

知らないモノは、書きようがない。

「あら……。刀さん、文字書けなかつたのですか？」

「ええ、こんな文字見たことも書いたこともないです」

「それじゃあ、しょーがないですね。すみませんが、口答するので代筆していただけますか？」

「まあ、書けねえんじゃしかたないわな。　　で、お一人さんの名前は？」

「私は壱です。こちらは刀さん」

オレの呼び名まで答えてくれる壱さんであるが、オレの名前は磨磨佐刀……なのだが、まあもういいや……。

「イチとトウ……よし。ド、滞在日数」

壱さんはアゴに入差し指を当て「んー」と逡巡してから、「滞在日数……絶対に守らなければいけませんが、こいど言つたものは？」

「いやあ、べつに絶対じやねえよ。田安でいい」

「という小屋の人返答を聞いて、

「うーん……では、滞在日数は三日で」

明らかにその場の思いつきっぽい口調で告げた。そしてついでとばかりに、小屋の人からこの宿場町で“宿代が一番安い宿屋”と“安くて美味しい食事処”と“風呂屋”的場所を教えてもらひ、

「では行きましょう、刀さん」

ほがらかな微笑みを浮かべて、彼女は歩みだす。

そのお姿に見とれていたら放置されそうになつたので、オレは慌てて後を追う。

道案内という大役をおおせつかつたので、オレは壱さんの手を引き、小屋の人から聞いた目印を頼りに、まずは“宿代が一番安い宿屋”を目指して宿場町を進んだ。

目印を探すついでに視界にはいる宿場町の建築物は、石造りだつたり木造だつたりと様々な様式だつたが、なんとなあぐどいかで見たことあるような雰囲気なので、ここではおそらく異物なオレの目でも、違和感をかんじることはなかつた。

そして、いまは木造建築の前である。

いかにも時代劇に登場しそうな雰囲気をかもしだす、ここが第一目的地たるこの宿場町で“宿代が一番安い宿屋”だ。

横引きの戸を開けて店内にはいる。すぐ正面には受付カウンターと思しきものがあり、そこにはひょろりと骨ばつた男性がいた。その男性は、オレと壱さんが入店したことに気づくと、

「いらっしゃいませー」

もみ手をしながら、完全に自動化されていると推察できる営業スマイルを向けてきた。こちらに対応つつも他の方々へ指示のようなものを飛ばしているところからして、支配人さんのようなポジションにいる人だろうか。

壱さんは握つた杖の先つちょがカウンターの下部を軽く叩く位置まで近づき、

「部屋をとりたいのですけど、空いてますか？　一番安いやつ」

单刀直入に訊く。

支配人っぽい男性は、カウンターの内側で、何か記録帳的な物をパラパラと確認するようにめぐつてから、

「はいい～、『ござこますよお～』。一室のみで『ござこますが

壱さんとオレの顔を交互にうががいつつ、「どうごたしますか？」

と手をもみもみ動かす。

「じゃあ、その部屋を」

じつにあつさり決めると、壱さんは早々に口答代筆で手続きを済ませてしまつ。

「一室つてことは、オレはその辺でじる寝ですか」

んん～まあ、雨風しのげるだけマシという、ポジティイブシンキングな考え方をして耐えよう。そつさ、気にしなければ気にならないさ。

「え？ 刀さんがその辺で寝たいのなら、それでかまいませんけど……。なぜ、宿をとつているのにあえて？」

なぜつて、オレは男で、壱さん女で。あえて訊くかい、部屋一つしかとれてなくて。

「気にしませんよ。それに私には、奥の手がありますから」と言つや、空腹らしい壱さんは次なる目的地――“安くて美味しい食事処”へ向かおうと行動を開始する。

オレと同じ部屋で過ごすことは、壱さんのなかではじつでもいいことらしい。少なくとも、空腹には負ける重要度合だ。

男はオオカミなのよお～とか歌われていたりするが、オレは柴犬くらいにしか思われてないのだろうか。あるいは奥の手が、オオカミを狩る猟銃のようなモノなのだろうか。

ともあれ、またもオレは道案内の役目になつわけだ。

壱さん的には、初めての場所でどこぞに向かつとき、導いてくれる連れが居るだけで大助かりなのだと。

言葉を選ばずに言つと、目を見えない人の気持ちはオレには解りえない。目を瞑るとか目隠しをするとかして、擬似的に見えなくすることはできるが、しかしそれはどこまで言つても擬似的である。本当に案内されるだけで大助かりなのだろうか？ というか、オレはちゃんとサポートできているのだろうか？ まあ、誰かに助かっ

た的なことを言わるのは、悪い気分ではないが。

と、そんなこんなで。“安くて美味しい食事処”に到着である。

どこの時代劇に登場するような御茶屋を連想させる、こじんまりしているが開けっ広げな木造建築だつた。テーブルやイスが半分以上店内から道にせり出して置かれているので、なんかほとんど屋台みたいであるが、まあ“安くて美味しい”のグレードにあつた外見といえよう。

で、入店して困った。

壁にかけられたメニューっぽい札の文字が、オレは読めない。壱さんにはメニューっぽい札が見えていない。

さあ、どうして何を注文しようか。

と思案していたら、店の奥から質素で簡素な服装の上に薄汚れたエプロンをつけた小柄な人物が現れた。

「いらっしゃいませ、ご注文は？」

ボニー・テイルな髪型に、精悍そうな印象を受ける顔立ち。かと言つて男っぽいわけではなく、身体には女性特有の曲線美を有している。ハキハキとした声質の娘さんだ。

「すみません。私たち文字が読めないので、品を教えていただけませんか？」

こういう状況は慣れているのだろう、壱さんが安くて美味しい食事処の娘さんに言つ。

「ん、お安い御用だよ。んじゃあ、言つよ」

で、まあ娘さんは全十一品目を読んでくれ、壱さんは「じゃあ」と注文するが、オレにはその品書きがどんな料理を言つているのかがマッタク想像できず……どうしたものか。

「……壱さんと同じものを」

無難な選択をするしか、オレには選択肢はなかろうつて。

で、運ばれてきた品を見て思うのだ。

コレは食べても大丈夫なのだろうか？

オレは、なかなかどうして胃腸が弱いのだが……。

ああ、壱さん、そんな口の周りにベットリ汁付けるほど焦つて食わなくても……ていうか、そんなに急いで食べたくなるほど美味しいのだろうか……コレ。

テーブルの脇に置かれていた布巾で壱さんの口元をぬぐいつつ、オレは悩む。

食うべきか、食わざるべきか。答えの難しい難問にオレが思考を焼ききりそうになった

と、その時。

店の前に数人の、いかにもな男たちが現れた。

ポニー・テイルな娘さんは、そんな店前で群れる者達へ、「毎度毎度来たって無駄だつて言つてるでしょ！ ここの土地を明け渡すつもりはないわッ！」

いまさつき接客してくれた人と同一人物であることを疑いたくな

るほど、険しい憤怒混じりの形相と声で言い放つた。

目前に置かれた食品を“食うか・食わないか”的で悩みつつ、オレは店の前で繰り広げられているやりとりの様子をチラリチラリとうががい これはまた、ベタなまでに関わらない方がよろしい状況だ、と判断をくだす。

食うべきか食わざるべきかを考えることは放棄して、いかにこの場から脱出するかを考えた方がいいだろう。どうしたものか、どうしようか、どうしよう

と、我が脳があわあわ慌てふためく情態に陥つても、しかし壱さんは我関せずと平然な態度でお食事を継続する。

店の前で繰り広げられているやりとりに、気が付いてないのだろうか？

「壱さん

」

早く店を出ましゅうべ、と口元田わいとした瞬間

「あやつ！」

ポニー・テイルな娘さんが、いかにもな男の一人にどつかれて背後へぶつ飛び、並べられていく簡素なテーブルやイスの中へ打音と共に崩れゆく。

ああ、もう、一番望まない展開になってしまったよ……。

バイオレンスは

「うううううまでした」

イヤだなあ。と思おうとした思考にかぶせて、壱さんガロ元をぬぐいながらおっしゃった。ちなみに完食である。

「どうしたのですか？　なにか少々騒がしいようですが」

マイペースなのか、あえてなのか、壱さんは不思議顔で訊いてくる。

「ええと……、お店の娘さんが、いかにも一なガラの男の人、ぶつ飛ばされました」

小声で、耳打ちするように答える。が、それを聴いた壱さんは、「あら、それは好都合」

不敵な薄ら笑みを口元に浮かべた。

なんだろう、悪魔のような修羅の笑顔とでも言おうか。

こまの壱さん、ポニー・テイルな娘さんをぶつ飛ばした男と回じよう空氣をまとっている気がする。

「好都合って、なにがですか？」

店の中を見下して見回す男たちに勘ぐられぬよう細心の注意を払いながら、超小声で、なるべく目立たぬよう壱さんの耳元に口を近づけて、オレは問うた。

「え？　なにがって。それは当然　いまこのお店に恩を売つておけば、この食事代くらいはタダに出来るかなーって」

「あんた何考えてるんつ！」

「だから食事代を浮かそつと」

違うわいつ！　ていうか心読んだ、いま、心読んだつ。

「いえ、物凄く小声で口に出てますけど? まあ、なにはともあれ」

と壱さんはすくっと姿勢を正して『起立なさる。なに、なにをするつもりつ?

立ち上がるなり、壱さんはちよつと高い音の舌打ちをした。それも一度や一度ではなく、何度も何度も首を動かして、まるで何かを探るように。

「ん……。この感じからして……、三人……」

壱さんは「うむ」と神妙な面持ちで、いかにもガラの悪い男たちの人数を言い当てる。

「て、ええつ! 壱さん、眼、見えて?

「ええつと……、そこな倒れるお店の方」

またもグルグルと店内を探るように舌打ちした壱さんは、ぶつ飛ばされて横たわっているポニー・テイル娘さんに声をかける。娘さんは、痛みに表情を歪ませながらも、

「な、なに?」

と聞き返す。

「この方々を無力化したら、私達の食事代を無料にして、お持ち帰りに一品ほどいただけたりしますか?」

要求が増えてるし。

ていうか、

「無力化って、オレは荒事なんて無理ですよ。それに壱さんだつて……」

とそこで、壱さんはどうして位置が判るのか、オレの口に人差し指をピッと当て、語りを塞ぎ、

「ふふふ、大丈夫。荒事は私の領分です。 奥の手を『』覧に入れますよ?」

楽しそうに、イタズラを思いついて実行しようとしている子どものような表情で言つのだ。

「それで、どうしますか? そこな倒れるお店の方」

ポニー・テイルな娘さんは数泊逡巡するが、

「い、いいわ。無料だらうが、二品だらうが三品だらうが」

壱さんの提案を受け入れる。

「あら、一品ふえましたね。ふふ、得しちゃつたつ」

嬉しそうに言ひや、壱さんは行動を開始する。

例のちよつと音の高い舌打ちが始まり、肩幅に両足を開き、道を探る杖を握った右手を頭上へ掲げ、腰を左に突き出す……？

なんだこのポージングは。

どこかで見たことあるような……あ、“サタデーナイトファイバーノ”。

かの俳優ジョン・トラボルタが白いスーツに黒のシャツを着て、右手を上げて、腰を左に突き出すポーズが印象的な、ファイバーという和製英語まで生み出したらしヒット映画の“サタデーナイトファイバー”。

壱さんがしているポージング、俳優ジョン・トラボルタのしていた印象的ポーズに酷似している！

だが、なぜっ？

このディスクダンシングのポージングで、どうしてガラの悪い男たちの相手をしあるのでしよう。

あ、もしや、この我知らぬ世の場所で荒事とこうと、ダンシングバトルを戦うとか？

と思ってみても、男の方々は踊る気配なく……といつか壱さんが突然した奇怪なポージングにドン引きしている。

が、「はつ！」として我にかえり、それぞれ自らの得物を懷から取り出す。

て、壱さんどうするつもりですかっ！

明らかに向ひ壱さんは殺る気満々じゃないですか。リアル刃物構えてますよつ！

どうすんの。

どうなんの。

どりしたいの 売さんつ！

例のちよつと音の高い舌打ちが、リズムを刻み始める。  
売さんの表情に、小悪魔の笑みが浮かぶ。

## 起／第四話・敵に同情、味方は外道

なんとこ'うか……。

あれだよね、こつこつアレンジジャラスでバイオレンスな状況つて、“マンガ・小説・ゲーム・ドラマ・映画”等々で描かれているのを観て、おもしろいと思つたり、若干の憧れ妄想（謎な組織に狙われている女の子を偶然に助けてしまつて事件に巻き込まれてしまう、とかね）したりするけれども……実際、当事者になると、あれだね、心臓に悪いだけだ。

で、オレの心臓を悪くしている原因。

それは

いかにもワルです！ つて面構えしてる男の人たち と見せかけて、じつは、べつにある。

関わらなきや良いのに、食事代を浮かせてなおかつ無料でお土産をいただこうというセコイ思考の下で、いかにもワルな男達にケンカを吹っかけた人物。この人が現状、我が心の臓を悪いあんばいでドキドキさせてくれて……、もう勘弁してほしいです。

いまその人は ちょっと音の高い舌打ちをしつつ、肩幅に両足を開き、道を探る杖を握った右手を頭上へ掲げ、腰を左に突き出すという奇怪なポージングで、リアル刃物を構えているワルな男たちと対じしている。

どうがんばっても、頭がオカシイだろうとしか言いようがない。

「ヒ、ヒドイです、刀さん。私はオカシイ頭なんてしてませんっ！  
言葉の暴食反対ですっ！ 乙女の心は傷つきましたっ！」

ほっぺをぷくっと膨らませて抗議してくる。が、奇怪。ポージングを維持したままなので、なんか滑稽だ。

ちなみに、刀さんというのはオレの呼び名であるが、決してオレの本名ではない。“磨磨佐刀／どぎまと”、これがオレの名である。

で、口に出てしまつていったようであるが、本当の事しか言えなくて、すみません。ついでに発言の訂正はしませんよ、思考に余裕がないので。

しかし、そう思つてしまつても　いや言つてしまつても、仕方ないぢやないですか。

最初、本当に最初は、ワルな男たちも奇怪なポージングにドン引きしてくれていたけれども、ファーストインパクトが強烈という以外に、このポージングが現状、リアル刃物に対し有効な戦闘手段であるとは言えない。それは素人目で見ても明らか。

「壱さん、どうするつもりですか」

奇怪なポージングで我が前方に立つ、紫色が主色の民族衣装みたいな服を着た、ばさついた髪の女性　壱さんに、オレは問う。

ある意味で、この現状は死活問題である。

とばつちりを喰らうというのも、そうであるが、もつとも問題なのは、現状でオレが頼れる人は壱さんしか居ないという事である。

こんな、大型ダンプにぶつ飛ばされて、気づいたら見知らぬ土地にぶつ倒れていたとかいう、理解し難い状況。正直、不安な気持ちでいっぱいであるし、そんなオレを救つてくれた人が、セコさ満点の自業自得だったとしても、危ない目にあうのは見るに耐えない。

だからといって、自分がリアル刃物を構える人達の前に立ちはだかるとか、向かつてゆくとか、そんな事できるほどの肝つ玉、持ち合わせていないので、加勢するとかもできない。というかちょっと足が震えてるわ

「どうするつて、チヨイつて追い帰すだけですよ？」

ていう、オレの心情は爪先のアカほどもくみ取らない、超が付くほど余裕な態度で壱さんは答えてくれる。

「言つてくれるぢやねえか、アマがあ！」

先頭で刃物を構える男が野太い音で吠えた。

「それに、さつきから舌打ちしやがつてよおー、うるせえんだよつ

！」

言い放つと同時に、腹の前に刃を構え、先頭の男が突進する。

それに続けとばかりに、残り二人の男も、刃を振りかざして壱さんへ向かう。

ああ、どうする、どうしよう、ああ、どうしたら……。

こんな瞬間に限つて、思考は止まるものだ。

なにをどうしたらしいか思う以前に、脳内は真っ白。

オレはただ、目の前の光景を静観するしかできない

音の高い舌打ちで刻んでいたリズムが、いつの間にか全身へと伝わつており、壱さんは全身で一定のリズムをとつていた

そして、目前には腹部で刃を構えた男が迫る。

壱さんはリズムにノリながら、掲げていた逆手持ちの杖を振り下ろした。が、その一撃は一泊の差で男の目前を空振り、男の進攻を阻止するに至らない。

男の一撃が壱さんに到る！

オレは視線を逸らしたかったが、真っ白な脳は身体を動かしてはくれない。

見たくもないものを、見てしまう　と思われたが、そつはならなかつた。

壱さんの振り下ろした一撃は、男の額にはヒットしなかつたが、しかし振り下ろした先には、男の踏み込み足が。その足の膝を突くような位置に杖はあり、踏み込みを妨害していたのだ。

右足の踏み込みを邪魔された男は、乗った勢いを制御できずにバランスを崩しかけ、とつさに体勢を維持しようと不自然に大開な足構えと、腕の開きをしてしまう。

無理にバランスを保とうとして爪先立ちのようになつてしまつた右足、その膝へ壱さんは振り落ちてそこにある杖を叩き入れ、力を加えて膝を折る　膝カツクン。と見せかけて、肉薄し、あらぬ位置にある刃を握った右手を自らの左手で掴み引き、自らの右足を男の右足後へ踏み込ませると、肉薄の勢いと掴み引く力を利用して、

ボディータックルをしたように男を押し倒す　　と同時に引っ掴んでいた手を離す。

足の踏ん張りを邪魔されている男は、やられままに若干ふつ飛び、ぶつ倒される。

それが一瞬の出来事。

そしてその勢いのまま、壱さんはタップを踏むような軽快な足さばきで、倒れている男を避けて、後から迫り来ていた男に向かう。

第一の男は、先頭の男がぶつ倒されたことに一瞬たじろぎ、動きが鈍っていた。

ある程度の距離に接近するや、壱さんは大きく右足を踏み込み、同時に杖を薙ぎ放つた。杖は第一の男の右手甲に鈍く痛い音をたてながら命中し、手の中に在った刃物を叩き落とす。

踏み込んだ右足を追つてきた左足が追い越し、第一男の横に着地する。同時に身体を寄せた壱さんは、杖を握っている手の人差し指、中指を立て、杖は残りの指と掌で握り、刃物を落として所在無さげな第一男の右手服袖を一つ指と杖で挟み、捻つて掴む。空いている左手は、男の捻り掴まれた腕の肘に当てがい、肘が曲がらないように固定する。同時に、引き戻る自らの右足を、男の右膝に叩きいれ、それを折り、倒れこむような勢いと、捻り掴んだ手を引き上げる力を利用して、第二男を引き倒す。

最後、トドメとばかりに第一男の横つ面へ杖の一撃をみまう。

第二男は横つ面を押されて苦悶の声を漏らす。

この間、壱さんは音の高い舌打ちをしつぱなしである。

そして、ついにフル面の男は最後の一人になつた。

最後の男は、第二男が引き倒されると同時に後方へ飛び退つたので、壱さんとの距離は開いている。

「くそ……」

刃物をチラつかせつつ悪態吐く最後の男　　と、しかし何故かその口元にはニタリと悪笑みが浮かぶ。  
なんだ、なにか隠しているのか？

と思つた瞬間、最後男が声を上げた。

「先生っ！ お願ひしまスッ！」

誰、先生つて。

といふか、最後は他力本願なのかよ……。

「聞いて驚けつ！ そして戦慄けつ！ 先生はかつて、クレベル王國近衛騎士団で武勲をあげた、とてもスゴイお人だつ！」

まるで自分の事のように鼻高々と語る最後男であるが……

「……あの、刀さん。センセイさんはもうご登場しているのですか？ 人が増えたように思えないのですが……。気配をここまで完全に消せる方を相手にするのは、少々骨が折れそうで……」

見据えていない眼差しを最後男へ向け、音の高い舌打ちをし辺りを探るように頭部を動かしつつ、戸惑つたように訊いてくる毒さん。であるが、

「えつと……、安心していいのかわかりませんけど、誰もご登場しないですよ……。少なくとも、オレの眼には映つてません」  
オレは事実を壱さんに告げる。が、それに驚いたような反応を示したのは、最後男だつた。

「なつ？ せ、先生？ 先生？ ビコですかつ！ センツせつ！」

すごい動搖つぶりである。

なんか親とはぐれた子供のようだ。

せんせー、せんせーと連呼しまくりながら、辺りをせわしなく探る最後の男。と、幾度目かの叫びのあとに、

「お、おう。ちよつとまつてくれ……。い、いま行くから……」

どこかしらから、弱々しい返答があつた。

「せつ！ 先生つ！」

最後の男が慌てたように、声が聞こえた方角と思われる食事処の脇道へと駆けて行く。

「せ、先生つ。ど、どうしたんですか。大丈夫ですかつ？」

姿は見えないが、どうやら先生と呼ばれる人物は、大丈夫じゃな

い状況にいるようだ。

「あの、壱さん」

「」の隙に、提案してみる。

「なんですか？」

「いまの「ひ」に逃げましょ「ひ」よ」

「ダ・メツ！ です」

壱さんはムツとしたように眉を寄せ、ふくつとほっぺを膨らませる。

「どうしてですか？ いまが絶好の逃走場面なのに」

「まだ、お土産をもらつてしません！」

それですかー。

せめて、せめて食事処のポニー・テイルな娘さんの為だと書いて欲しかった。

無料でもらつ予定のお土産の為に戦つて、どんな？ それって

どんな？ 自らの欲の為に武力行使していいの？

「なんですか？ 刀さんは欲しくないんですか？ お土産」

むうーと眉を逆八の字に、唇を尖らせ、理解できません的な表情でおつしやる壱さんであるが、オレにはお土産に対する壱さんの情熱が理解できません。

「どうしてそこまで 」

お土産が欲しいんだですか？ と尋ねようとしたオレの言葉に

かぶせて、

「待たせたな」

ちよいと渋めな、しかしどこか力の抜けた声がした。そして、食事処の脇道から最後の男に肩を借り、鞘付きの剣を杖のように使って一人の人物が登場する。

「すまんな。今朝方ちょっと寒かつただろ、アレで腹を冷やしてしまつたらしくてな。すまん。腹の調子が絶不調なんだ。ほんと、時間とらせてスマン」

ああ、きっとこの人、良い人だ。

物心付いた時から胃腸が弱いオレとしては、この朝冷えによる腹痛で登場が遅れた人物へ同情を禁じえない。

「ああ、わかる。わかるよ。あの、腹の痛みで安眠を破壊される哀しみも、ぶつけようもない腹痛への憤りも、そして辛さも。わかる。わかるよ先生と呼ばれし人。オレの腹巻きをわけてあげたいくらいだよ。朝冷えに対抗するには腹巻きが最強なんだ。」

「腹痛……ですか。ふふ、腹痛に効く、いい丸薬がありますよ」  
言うや、壱さんは懐に手を突つ込み、水戸黄門が職権乱用する時にバンッ！ と見せびらかす印籠のような、手の平サイズのケース（印籠のような外見ではない）を取り出す。

そして、それをポイッと腹痛人物の前へ放り投げた。  
弱々しくソレを受け取った腹痛人物は、

「すまん。情けに感謝する」

礼を言い、隣に居るワル面の最後な男に「水を……」と告げる。  
どこからか水を調達して舞い戻った最後な男から水を受け取り、  
ケースから黒い小粒な丸薬を取り出し、それを口に放り込むや、追  
うように水を流し込む。

「すぐには効いてこないのだろうが 感謝する、これで役割を果たせる」

「ああ、同情しちゃつたけど、この人、恩をあだで返す気満々だ。  
杖代わりにしていた剣を抜き放ち、右手に剣、左手に鞘という構  
えをとつている。」

「今まで堪えるようになつむき加減だったのによく見えなかつた  
顔が、剣を構えて初めてうかがえた。腹痛で弱つたり、恩をあだで  
返すようなマネをしなければ、若い年輪のよつなシワを刻む表情が  
渋くもカッコイイ人物である。なんか現状、色々と損をしているよ  
うであるが。」

「んん~失敗しちゃいました」

人差し指を唇にあてがいながら、悩ましげにおっしゃるのは壱さんであるが、この状況で失敗って、致命的なんじゃ……。

「な、なにを失敗してしまったんですか？」

問うオレ。

「ん？ いえ、丸薬をおゆずりする代わりに、手を引いてもらひえばよかつたなあと」

ああ、確かに。

「しかし、もう手遅れですね」「

諦めたようにつつ立つ壱さん。

「では、ござ参るううううう！」

威勢よく駆け出した腹痛人物は しかし、一歩、三歩と、弱りきつたおじいちゃんみたいな足どりをすると、その場に腹を抱えてうずくまつてしう。

「やつぱり」「

腹痛人物が崩れ落ちる音を聞くや、壱さんは悲しげな表情を浮かべた。

なんかまるで腹痛人物がうずくまつてしまつのがわかつていたような物言いだつたので、オレは疑問に思い、「やつぱりって？」

お尋ねしてみたら、壱さんは平然と、「だつて、おゆずりしたの下剤ですもの」残酷なことを言いやがつた。

ゲ・ザ・イツ！ 地獄の三文字つ！

壱さんつ！ それは、それだけは、それだけはやつちやいけない非人道的なおこないでしようよ、ねえ！ 腹痛の人 下剤つて、そりや便秘に苦しむ人にはイイと思いますがね。しかし相手は朝冷えの腹痛ですよ。ねえ、これだけは譲れないよ！ 胃腸が弱いオレとしてはつ！

「普通、敵対する人を助けないでしよう？ 何かを守らうと思つながら、卑怯であるうと、いかな手段を用いても敵は倒すモノですよ」

しつと語る壱さん。

確かに、確かに間違つたことは言つてないよつて思えるよ。

でも、でもね、壱さんの守りたいものって、飲食費を無料にして、

なおかつ無料でお土産をもらひつていう条件でしょ？

「あああああ！ ううぐつ。ダメだ、もう今日はダメ……今日は

……もう、許して……」「

下剤を盛られた腹痛人物は、弱々しく剣を鞘に収めると、隣の最後な男へそう告げ、哀愁ただよう背を向けてどこぞへ去り往く。

「せ、先生っ！ ま、待つてください！ センツセーツ！」

取り残された最後な男は、ぶつ倒れのびている己が仲間をたたき起こして、手を貸し肩を貸しながら、去り往く先生を追いかける。

「テメヒラ、おぼえてるよつ！」

最後に超三流な捨てゼリフを吐いて。

まあしかし、結果オーライといつやつだらうか。

とりあえず、目先の危機は去ったわけだし。

「それじゃあ、今回の食事代を無料にするのと、お土産をよいつつお願いしますね」

食事処の席へ早々に戻り座るや、壱さんはいまだに呆気にとられている感じのポニー・テイルな娘さんへ告げた。なんか、お土産の数が増えているように思えるが、気のせいだらうか。

「壱さんて、いつもこんな事してるんですか？」

なんだか、旅の道連れにされたら、命がいくつあっても足りなさそうな気がしてきたのだけれども。

「まさか、そんなわけないじゃないですか。今日は偶然です。運がいい事に」

よくはないでしょ？ と思いつつも、まあ常に壱さんが食事代等々を浮かせる為にケンカ吹つかけるわけではない事を知れただけよしとしよう。

もうね、起こる出来事全部を気にしそぎると精神が持たないようになってきたし。

諦めの境地といつヤツか。

どうにでもなれつていつ。

ある意味、オレ最強っ！ てな心構え……みたいな。  
気にするから気になる。気になれば気にならないつ！  
よし、現時点からこれを我が座右の銘にしよう。  
で、目前に問題がある。

「壱さん、これは美味しいんですか？」

ポニー・テイルな娘さんに聞こえない程度の小声で、訊いてみる。  
先ほど壱さんが美味しそうに喰らつていたお品の事だ。オレはまだ  
食していないので。

「そんなの味覚なんて人それぞれですから…… といつか食べればわ  
かることじやないですか。どうして食べないんですか？ 食わず嫌い  
でお残しする人は、末代で飢え死にしますよ」

初めて聞いたよ、食わず嫌いは末代が呪われる的なお話。まあ、  
壱さんの世の理では の話だろうが。

べつにオレは、田の前の品が得体の知れないものだから、それが  
イヤで、食べるのをためらつているわけではない。

先に語ったように、オレの胃腸は基準よりデリケートにできてい  
る。

下手にモノを食べると、先の腹痛先生のようになつてしまつ。  
目の前のお人が、あるいはお腹下した人に對して、常識的かつ人  
道的な対応がとれる人だつたならば、恐る恐るにでも、オレは田の  
前の品を食えただろう。が、腹痛の人へ下剤を盛るのが壱さんであ  
る。生存本能的に、そんな人の前でお腹は壊したくない。

食つべきか、食わざるべきか。この選択肢は、ああ究極だわ。

「どうして刀さんは、食べる食べないで迷つてゐるのですか？ 食  
べられる時に食べておかないと、後悔しますよ？ そもそも作つて  
くれた人に対して失礼じやないですか。それに食べたくても食べら  
れずに死に逝く人がゴロゴロいるのに、そんな貴族的で贅沢な悩み  
なんてしていたら、呪い殺されますよ」

「……すみません」

確かに、志さんと言つとおりである。

謹んで田の前の品をいただくことにつけ。

食べてみたら、不味くはなかつたが、こままでに味わつたことのない舌への刺激があつた。

なんどうこの料理は。

例えようのない、味である。

だが食べるには問題ない味であつたので、完食した。  
そのタイミングを見計らつたかのように「いや、見計らつてい  
たのか。ポニー・テイルな娘さんが、志さんの要求したお土産の詰つ  
た包みをもつて現れ、それを志さんの前に「トトリ」と音を発て、置く。  
置かれたお土産の包みを探るように手で触れ、  
「さて、お土産もいただいたことですし、帰りましょ」  
早々に帰還しようとする。

が、それをポニー・テイル娘さんが引き止めた。

「あの、あなた達は旅人さんですか？」

「そうですが、なんでしょう？」

立ち上がるのを中断して志さんは答える。

「どれくらい滞在するんですか？ もづ、宿はどうて？ なんなら  
家に」

急かすように追つて尋ねる娘さん。だが、志さんは平靜に答える  
だけ。

「滞在は二日を田舎に」。宿はもつとつとあります。 わあ、刀さ

すくつと立ち上がり、

「お土産」ちやうせまでした

お土産の包みを手に、志さんは店から出でゆく。

「いわしつきました」

オレは慌てて後を追つた。

壱さんは少し歩いたところで急に立ち止まる。

「どうしたんですか？」

本当に突然だったので思わず訊いた。そんなオレの声をたどるよう、「うん、壱さんはこちらを振り向く、

「道案内してもらわないと、あと荷物持つも」

お土産の包みを握っていた左手を差し出す。オレは包みを受け取り、空になつてなおそのままの位置にある彼女の手をとり、進むことにする。が、

「どこに向かうんですか？」

まあ、オレが目印を知つていて案内できるのは、宿屋、食事処、

風呂屋だけであるが。

「一度、宿に戻りましょ！」

宿屋へ戻る道中、

「壱さん」

手を引き歩きつつ、オレは壱さんへ声をかける。

「なんですか？」

「危ない事は極力しないでくださいね」

まず、私利私欲の為に強制武力介入はしないでください。

次に、逃げられる時に、私利私欲の為に戦闘継続しないでください。

壱さんはなんだかんだで、強いお方のようなので、自分の身は自分で守れるのでしょうか、オレには無理なので。

「……はい」

壱さんはなぜに頬を紅らめているのですか。

まあ、わかつていただけたなら、それでいいのですけど、と、それはさて置いても、

「そういえば、奥の手つてなんだつたんですか？あの舌打ちですか？というか最初のポージングはなんだつたんですか？」

激しく疑問である。

そもそも、壱さんは眼が見えていないのではなかつたか？

あの機敏な動きは、果たしてどうやつて？

ファーストインパクトだけ強烈な、あの奇怪ポージングは、なんの意味が？

「奥の手は、使う前に勝負ついちゃつたので、結局使つてないんですよ。最初の構えからズババババンッ！　て発動する予定だつたんですけど。というわけで、真の奥の手は……ふふ、ひ・み・つ、なんですよー。『うご期待です』

『うご期待つて、さつき頬を紅らめて「……はい」つて危ない事しないつて約束したばかりじゃないですか。もう、どこかしらでバトルするつもりなのですか……。願わくば、秘密が永久にひ・み・つでありますように。

お星様にでも願つておこいつか。いや、いつそのこと悪魔にでも頼もうか。オレを害すもの全てをその腕で退けてくれそつた、悪魔に。ともあれ、

「じゃあ、あの舌打ちはなんなんですか？」

という疑問は残る。

オレに手を引かれて半歩後を歩いていた壱さんは、そんな我が問いかけを聞くや、踏み出しの一歩を大股にして、覗き込むようしかしこちらを捉えない眼差しで、

「知りたい？　知りたいですか？」

と、なぜか御一人様テンションアップで、「知りたい？」としつこいくらいの連呼で言つ。

「いえ、無理に聞くつもりはないです」

まあ、べつに知つてどうなるものではないだらうから、強要する気なんぞ元よりない。

「そこはあ、素直に知りたいですつて言つてくださいよ」

ふくつとほっぺを膨らませる壱さん。

どうやら、喋りたかったようだ。

「じゅあ、知りたいです」

「じゃあ？」

頭に「じゃあ」ってつけたらダメなのですか。よくわかんないと  
ころをこだわりますね。

「知りたいです、教えてください」「ちょっとくづいたつていうように聞こえなくもない、我が言い回

し。

「では、教えて差し上げましょ」

「どうやら我が言い回しは正解だつたよつだ。  
どつかぬ慢げに、誇らしげに、鼻高々といった感じに志津さんは語

る。

「あれはですねえ～、「反響定位」なのですよ」

「“はんきょうてい”？」

「なんだろう、初めて聞いた言葉だ。意味がわからない。

「その、“はんきょうてい”は、具体的にどんなモノなんですか  
？」

「んん、私の感覚の話なので、わかり難いかもしだせませんが」「

とそこで、志津さんは例の若干音の高い舌打ちを打ち鳴らし、

「　　ていう音を持続的に発して、その反響音でモノの外形や距離  
をつかむのです。反響音の大小で距離とか、深みとか柔らかさで質  
感とか

ものすこく得意げに語る志津さんであるが、その態度にも納得な凄  
い技であることは、なんとなあくオレにもわかつた。

ようは、イルカとかコウモリみたいに辺りを探つてこるといつこと  
じだり。

しかし、これは語るに安しであるが、実際に扱うところのは、相  
当難儀なことのように思われる。

トレーニングで鍛えれば、ある程度までなら扱えるようになるだ  
らしが、しかしあんな機敏に動く戦闘で耐えうるまでに使いこなせ  
るというのは、相当な訓練と生まれ持つたセンスが必要だろ。

んんー、じつは志津さん、凄い人なのだろうか。

どことなくセロイ方向性の思考をお持ちのようであるが、もう少し彼女に対する見かたを改めねば。

とかなんとかしてこらへり、安宿の前に到達していた。

部屋に戻つて持ち帰つたお土産を置くや、

「さあ、刀さん。お風呂屋さんへ行きましょ。」  
オレの返答は聞かず、壱さん既に退室していく。

背を追いつつ、

「あの壱さん、なんで杖を置いてきたんですか？」

まさか忘れたわけではなかろうに。」

「だつて、お風呂屋さんじゃあ邪魔になるだけですし。それに、刀さんが私の眼になつてくれるんでしょう？」

そんな微笑みながら言われると、ちょいと照れるが……まあ、いや。

て、あつ！

「そつといえはオレ、着替えとか持つてないんですけど」「風呂屋へ行くならば最低限持つてい行つたほうがいい物を、自分は持つていないと告げる。

「大丈夫です、私もあつません」  
ダメじゃん。

「宿から借りればいいんですよ」

ああ、なるほど。

と納得してみたものの、安宿はそんな貸し出しサービスしていなかった。

けれども、もみ手もみもみな支配人っぽい男性が、

「んん~、うちのお店で使い古した制服でよかつたら差し上げます  
けど」

良い人だ。営業スマイルが鬱陶しい事にのつえないが、この支配

人っぽい人は良い人だ。

そんなこんなで、安宿側の善意によつて着替えをゲットし、いまは風呂屋へ向かい壱さんの手を引いて進行中である。

「あ……、身体拭くヤツが無い」

えらく中途半端なところで、オレ気がついた。

「それなら大丈夫ですよ。お風呂屋さんでもらえますから」  
オレに右手を引かれながら、壱さんは空いている左手で「『安心めされい』ってなぐあいにグツと親指を立てる。

借りるではなく、もらつなのは、なして?

「お金払う時にくれるんですよ。常識じゃないですか」

そんな常識じりませんでした。

で、目的地に到着。

なんか無駄に巨大な石造り建築である。古代ローマつて感じの。

「おおー」

と見上げていると、クイックと手を引かれた。

壱さんが早くしろとうながしている と、思つ。

入り口と思われる開けっ放しの戸をくぐつたそこには、受付カウンターと思しきものがあつた。とりあえず前まで移動する。

「いらっしゃいませ」

人当たりの良さそうな微笑みを浮かべて、額にバンダナのようなモノを巻いた受付の人があつた。

あの手続きはオレにはわからないので、壱さんにおまかせする。  
と身体の前面くらいは覆い隠せそうな大きさの布が手渡された。  
手触りはゴワゴワ。どうやら、これがバスタオルであるらしい。しかも本当にもらえるようで。オレはてっきり、壱さんが旅館やホテルに宿泊したオバちゃんのことく、何でもサービスと称して悪意無くパクッてるんだと思つていたが 勝手な想像でセロを誇張してゴメンナサイ。

で、案内役らしく風呂屋の店員さんが導くまま後にくつ付いて移

動していくと、徐々に空気がむしり運びはじめてくる。

「それでは」「ゆっくり」

ペコリと一礼して去り行く店員さん。だが……なんだろう。オレ

は銭湯のようなヤツを想像していたのだが、

「なにこの巨大な鍋は」

目の前には巨大な鍋のようなモノが一つドンッ！ とあるだけで、

「どこのお風呂？」

んんーよくわからん。

木で出来た板の壁に囲われた所の中央に、中華鍋の持ち手を無くしたような巨大なそれがある以外には、服とかをいれて置くヤツと思われるカゴがあるだけである。他にこれといってモノは無い。

「なにを言つてるんですか、刀さん。いまここがお風呂じゃないですか」

「ここが？ お湯も無いのに？」

そりゃ、どこのもお湯が無い。外見がどうあれ、風呂という場所での共通点は、お湯だらう。が、それがこの場所には無いのだ。これのどこのお風呂だと？

「お湯は、もうすぐ来ると思ひますよ」

「……は？」

なに、お湯が来るって。

と、そのとき。

何かが上から落ちてきた。

それは巨大鍋の内へと、巨大な滝つぼが「」とき壮絶な水しづきと轟音をあげておさまる。

「な、な、なんだ……？」

「だからお湯ですよ」

当たり前のこと驚かないでください、と言わんばかりの態度で

壱さんは言つが、

「なん、なんで、お湯が上から降つて来るの……」

わけがわからない。

「なんでもって言われても、当然の事を説明するのは意外と難しいですな……んん~」

「どうやら、オレの知らぬ事だらけなこのひの世では、お湯が上から降つて来るのがお風呂屋さんの普通であるらしい。」

「まあ、気にしなければ気になりませんよ。」

なんかちょっと前に、それを座右の銘にしたような気がするが、やっぱ無理だつた。

「さあ、早く入りましょう」

ツイと手を引かれ、

「へ?」

と、ちよいとふ抜けて振り返ると、

そこには

なんで。

どうして。

どうしちゃった。

酔さま、アナタ、真っ裸でなにしてるんつ!

こいつの間にか風呂に入る準備を万端整えた壱さんだが、そこにいらっしゃった。

起／第五話・セレに居たのは、エガリ様アヌスカ？

「あ、そこ、そこイイ……あつああ気持ちいい」

「い、ここですか？」

「そうです、そこですか、んつああつ」

「すみません。初めてなもので、イマイチ感覚がわからなくて……」「あつん、ああ……、ふあんつ。……だ、大丈夫ですよ。刀さん、お上手です。わ、私も、じつは初めてでええんつ　ああんつ！」

ソ「おオおつ！」

「はあ……まあ、気持ちイイならいいんですけどね」

なんというか、壱さんのテンションが間違った具合にシフトアップしているから、会話だけ聞いたら何をしているのか理解し難いが、とくに変なことはやっていない。

というか、オレは全然気持ちよくなぐ、ただ手が疲れるだけである。

「……はあ」

なんかもうダルイので、オレがなにをビーハしてやっているのか、現実逃避で再確認してみよう……

では、プチ回想スタート

壱さん、アナタ、真っ裸でなにしてるんつ！

いつの間にか、風呂へ入る準備を万端整えた壱さんが、そこにいたらつしゃつた。

「なにしてるんつ！　て、お風呂に来てるんですから、お風呂入るうとしてるに決まってるじゃないですか」

愚問です、と眉を寄せて言つ壱さんであるが、

「だからつて、なんでイキナリ真っ裸になつてるんですかつ。オカシイでしょつ…」

ていうか、もつ、お風呂に入りた過ぎて我慢できなかつたとして

もね、せめて、せめて前を隠せっ。

「オカシイのは刀さんですよ。それとも、刀さんの国では、服を着たままお風呂に入るんですか？」

超が付くほど不思議顔で、壱さんは小首を傾げる。

「いえ、脱ぎますけど……」

まあ、一概には言えないかも知れないけどね。オレの知るかぎりでは、脱ぐ。

「じゃあ、オカシクないじゃないですか。それともアレですか、私の美しすぎる裸体を見て、“よくじょー”してしまいましたか？元気イッパイになつてしましましたか？」

なんだよ、元気イッパイつて……

「オレは予想外のことにつかれてるだけです。欲情していないですし、元気イッパイにもなつません。だから、前を隠してください」

「そうですよね……」

と、うつむく壱さん。やつと前を隠す氣になつてくれましたか。

「……こんな傷だらけの身体じゃあ、キモチ悪いだけですよね」ええつ、なんのお話ですかつ、唐突に。ていうか、なんでそんな急にテンションダウンなの？

「わかつてるんですけどね……、自意識過剰でしたよね……」

自らの身体を抱くように、胸を持ち上げるように腕を交差させる壱さん。

「おっ！　ふおっ！　じつはとつてもタワワッ！」

「じゃなくて　いや、目前の双丘がインパクトッ！　なのは事実ですけど、そうではなくて。なんだ自意識過剰って？　そんなインパクトッ！　を持っているなら、べつに過剰じゃない気がするけれど。それに、傷だらけの身体って？」

見たらイカン場所を手の平ガードで隠しつつ、壱さんの身体をちょいとうかがわせていただく。

なんというか、切り傷とかが深すぎると患部が完治しても傷部位

がちょっと盛り上がりで痕が残ってしまうことがある。そんな傷跡が、壱さんの身体中に大小無数に刻み込まれていた。

いきなり真っ裸の女性が目前に現れ、超動搖して、オレの観察能力が低下していたのか、その刻まれた傷跡は、その絹のようにつむぎ細かな肌の上では、結構目立っている。

どうしたらこんなに傷だらけになるのだろう。

というかオレは、壱さんになんと言葉をかけねばいいのだろうか

……。

「んん~、まあ、なにはともあれ」

「口口口色んな出来事呼び込んでくる感じで、一緒に居て飽きないから、

「オレは、壱さんのこと好きですよ」

理解不能な自らの現状を忘却できるくらいに、グイグイ引っ張つて行つてくれるし。

だから、とは言いませんけど、まあ、気にしなければ気にならないというか、なんというのか。

んん~、言葉つて難しいなあ……。

「……ほ、ホントウですか？」

なぜ、顔をほんのり紅に染めているのでしょうか。

というか、両手を股に挟んでモジモジするんじゃない。インパクトッ！　な双丘が寄せて上げてになつてるじゃまいから！　なんだその破壊力はっ！

手の平でガードを作りつつ、

「オレがウソを言つても、なにを得するんですか。ウソ言つくらいなら、何も言わないことを選びますよ」

なんか、イマサラちょっと冷静になつて思つてみると、このショチュエーションって、絶対オカシイだろう。どんな人生経験よコレ。「そ、うですか。そうですよね。ウソ言つてたら、奥の手ですからねつ。　じゃあ、刀さん

「じゃあ、て何よ。じゃあ、つて。

「髪を洗つてもらえますか?」

「どこから話をつなげてくると、オレが壱さんの髪の毛洗つことになるんだしようね。」

「べつにいいですけど、なぜに?」

「べつにいいなら訊かないでくださいよ 刀さん、私の髪がばさついてるって言つてたじやないですか。ばさついた髪の女には興味が無いって」

なんとか、ビシッと指を突きつけてくる壱さんである。よくわからん。

それに、髪の毛がばさつてこるとは言つたような気がするけれど、後半は絶対に言つてないと思う。が、いちいち指摘するのも面倒なのでテキトウに流しておく。

「“洗い花”と“洗い草”は、服を入れておくかゴの下に置いてあるはずです」

「“洗い花”と“洗い草”……て、なんですか?」「んん? 刀さんの国には無いのですか?……?」

説明を聴くに、よつはシャンプーとセッケンとこうといふか。壱さんは名前を忘れたと言つているが、“洗い花”というのは水辺に咲く花らしく、それで髪を洗つとツルツルでサラサラになるらしい。“洗い草”は薬草を練り上げてドロドロのペースト状にしたモノのようだ、傷の消毒とかにもそのまま使えるモノであるらしい。壱さんが脱ぎ散らかした民族衣装っぽい服を回収してカゴに入れつつ、その下を見てみる。そこには、小瓶が二つ入った桶があつた。

「これが、“洗い花”と“洗い草”か」

カルピスの原液に細かくバラバラにされた花っぽいヤツが浮かぶ小瓶と、青汁をものすごく濃くしたような液体の入った小瓶……んー、カルピスっぽいヤツは、まだイイとして、この濃い青汁っぽいヤツは、どうなんだろう……。

というわけで、プチ回想エンド。

まあ、つまり、オレは壱さんの髪を洗わされているわけだ。

てか、よく考えたら女人の人と混浴してるんだよな……。なんか、ゲームとかマンガとかだと、嬉くも恥ずかしいイベントに突入したりする場面だけれど、まあ現状そんなイベントが起ころる気配は一切感じえない。というか、ひょっとして、いまがそのサービスシーン的なところなのだろうか？ なんかもう色々あり過ぎて感覚がマヒしてしまったのか、自分の状況がよくわからないぜ、ちくしょー。

「……はあ

ともあれ。

他人の髪を洗うなんて、そうそうあることではないので、洗いの感覚がイマイチわからないのだが、

「あ、そこ、そこイイ……あつああ気持ちいい」

もつすごい久しぶりに頭を洗つらじい壱さんは、気持ち良さそうに恍惚とした表情をしている。それはもう、テンションが変な方向へシフトアップしてしまつほどに。

オレも風邪をひいてしばらく風呂に入れず、治つてから久しぶりに風呂入つて頭洗つた時は、やたらとそれを気持ちよく感じたりしたことがあるので、なんとなあく気持ちは理解できるし、喜んでちらえているようなで、嫌な気分ではない。

あれだね、こういう時、床屋さんとかだと、

「どこか、かゆいところはありますか？」

とか訊いてくる。まあ、答えたタメシはないけれど。

「全体的に」

自らの身体を“洗い草”で洗浄中な口チラのお方は答えてきた。  
しかも、全体的つて。

「はあ……」

まあ、べつにいいですが。

それにしても、この“洗い花”。オレの知るシャンプーのようこそ泡が立つわけでもなく、果たしてコレはちゃんと洗えているのだろうか。髪が指にからまつて、メチャメチャ洗い難いし。

やはり、蓄積した汚れを落とすには、一回の洗いだけではダメなのかなあ……。

「壱さん、一度流しますよ」

言つてから、オレは『テカイ中華鍋』のような湯船から桶で湯をすぐおつとして、水面に映つた自分との対面

「…………誰？」

したハズなのに、そこに映つているオレはオレではなく。いや、オレはオレだけど、そこに映るオレはオレじゃなく……？なんだ、どうなつてゐる。オレがオカシイのか？

ちょっと待てよ。

水面から視線を外し、深呼吸一つ。  
改めて、水面を覗き込む。

そして再度、ご対面……

「…………おつ、オウ」

どちら様『エスカ』？

それに、今まで目先の超展開に目を奪われて気づかなかつたが、よくよく見れば、服装までもが今朝着ていたものではない。なんだコレは、どうなつてゐる。

意味がわからん……いや、大型ダンプに追突されたハズなのに、たいして怪我をしていなかつた理由はコレか？　いや、なら本当のオレは今頃……いやいやまさか、そんなことは。ん、だとしたらこの身体の持ち主は？　それがオレの身体に？　なんだどうなつてるんだ。わけわかんねえぞ……。

ああ、シンプルな脳に過重負荷がかかるよつた出来事ばかりだな。なんか頭痛くなつてきた。

頭が痛い……。

あれが、あるいは頭を強く打つて自分を認識できなくなつてるとか？

じゃあ、服装が違うのは 田が覚める前に盗まれた、とか？  
じゃあなんで、いまの服を着ていいんだって話になるか。盗んだヤツがわざわざ代えの服を着させてくれるとは思えないし。

あれか、物語ではよくある、心というか魂を入れ替わつてしまつとか、そういうやつか。いや、しかしアレは、双方の頭部を互いに強打するとか、一緒に高所から落ちるとか いや、どちらにしろ、入れ替わつてしまふ者は同じ場に居るのが必須だろ？ その必須をクリアしていたら入れ替わつてしまつたあと同じ場に居るはずだから、オレが現状一人で居るというあたりで、魂入れ替わりは違うか。まさか、壱さんがこの身体の持ち主というわけはないだろ？ といふか、それだとオレの身体が女性になつてしまふから、まず壱さんがこの身体の持ち主である可能性は無いだろ？

じゃあ

じゃあ、なんだ？

大型ダンプにぶつ飛ばされて氣を失つたオレが見てる夢かコレは。夢オチか。

でも、だとしたら何で別人になる必要がある？

といふか、夢つてこんなに物事をハッキリ認識できるものなのか。わからん。

わからない事だらけだ。

「刀さん、刀さんっ」

ああ、もう、わからない事だらけで処理能力低下してゐるのに

「な・ん・で・す・かっ！」

「な、なんですかって、刀さんが一度流すつて言うから、身構えてたんじゃないですか。それなのに なんでそんな、怒つたような言い方するんですか…… 私なにか気に触ることしましたか？」

「ああ、はあ……。またオレはイライラを壱さんにぶつけてしまつた……か。

「すみません。なんといふか色々わけがわからない状況といふが、頭が痛いといふか混乱しているといふのか……とりあえず、壱さんは悪くないです。」めんなさい

「……大丈夫ですか？ 調子が悪いなら無理せずに休んだ方がいいですよ？」

理不尽なオレのイライラをぶつけられても、壱さんは気づかなかった風な優しい声色でそう言つてくれた。

なんでだろう、その優しさが、妙にしみる。

「大丈夫です、たぶん」

そう言いながら、オレは桶に汲んだお湯を壱さんの頭にぶっかけた。

「熱つ！ どど、どういう仕打ちですかコレは！ 热くてハアハアしてゐる私を見て、自分もハアハアするつもりですか？」

いや、それこそ何だよ。

「すみません。お湯が熱いか確かめませんでした」

頭部を押さえて身悶えしている壱さんは、

「謝らなくいいですから、水、水をつ」

切実な要求をしてきた。

が、

「水はどうに？」

要求に早急に応えたいのだが、肝心の水が見あたらない。

「ぬ、ぬるめる用の水が、その辺にタルか何かにはいつてのはずですっ！」

ヒントを得て探索してみたら、デカイ中華鍋のような湯船の死角にぬるめる用の水はあつた。

そこから水を桶で汲んで、

「水いきますよ」

壱さんの頭にぶっかける。

「冷たつ！ いま、心臓がキュッてなりましたよっ！ キュッて！」

今度はお湯を要求された。

で、またお湯をかけたら水を、水をかけたらお湯を、とそんな繰り返しがなされて、

「ぬるま湯にすればいいんだ」

ところの発想にたどり着くまでに少々の時間を費つた。

そして、熱いんだか寒いんだか感覚がバカになつてきてしまふ。壱さんは、どうでもいいやと言つよつに立ち上がり、

「もうここです。湯船に浸かりたこので、手を貸してもいいですか

」

抱っこをねだる子どものよこ、手を差し出す。

これは、どうこうふうにしろとこりのだ。

「 ところよつ、入れてくれる嬉しいです

思ひに、壱さんは一人で入れるだらつ。絶対に。

とつあえずオレは、壱さんがスベッて転ばなによつて手を貸した。よくわからないが、壱さんはそんなオレのやり方に少々不満らしい。

く、

「 わうだ。ついでに服を洗つておいて下やー

とか、言いつけてきた。

オレが知る限り、お風呂屋さんのお風呂で洗濯するのはマナー違反だと思つ。

「 なにを言つてゐるんですか？ 普通ですよ、身体を洗つてこそに衣類を洗うのは」

どうやらココでは、許されるらしく。

桶にお湯を汲んで、そこで民族衣装っぽい壱さんの服を手洗いする。

「 パシゴシ洗いながらこして思つ。

やつぱつ、この状況つて、オレがテンション上げるべき状況なんじゃなかろうかと。壱さん女で、オレ男で、一緒にお風呂なのだからと思つたが、なんといつか、ここ数時間で非常に疲れたといつのか、色んな意味でオレ、ボロボロな気がする。

まあ、いいや。

それは置いておいて　　桶の水面に映りこむ血らの姿を改めて見る。

やつぱつ口はオレじゃがない。似てなくもない　　といつかとつても似ているが、自分で自身に違和感を覚えるこの感覚は、常なら感じえないモノだ。

現状が夢であるといつ可能性は否定できないが、しかしこのお湯を熱いと感じるし、頬や手の甲を思いつきつねつてみたら痛いかつた　どの感覚も、とても鮮明に感じえる。夢でこんなにハッキリした感覚を味わえるものなのだろうか……。

夢だったとしたら、どうしたらオレは目覚められる。

というか、いまが夢で現実に肉体があるとしたら、大型ダンプに追突されたあのオレは、いつたゞくなつてゐる……。このまま目覚めても、果たして大丈夫なのだろうか。

あるいは「レが夢でない可能性は……

「志さん」

「なんですか？」

湯船の縁にアーチを乗せて気持ち良さそうにおどろんでいる志さん  
は、そのままな体勢で応えてくれる。

「別の時代とか、別の世界とか、そういうの口ではないドコから誰かがやつてきた、とか、そういう話を聞いたことないですか？」

一番ありえなさそうで、いまオレが体験している現状的に、これは夢ではなく、実際にオレがどこか異なる場所に飛ばされたという可能性　これだとオレが自らの身体と似て非なる肉体を動かしている理由がわからぬが、可能性としては否定できない。

「別の時代……、別の世界……。まあ、旅をしていると、その土地にある伝承とか物語を耳にすることが多いので、そういう話も聞いたことはありますけど。でも、どうしたんですか急に？」

「オレが、その“口ではないドコからやつて来た誰か”、あるいは“この世界はオレの夢かもしけない”と言つたら、どうします

？」

「どうしますかって言われても……私にどうしてほしいのですか刀さんは？　とこりうか、どうしたんですか？　本当に調子が悪いんですか？　寝言は寝て言えといりますよ？」

眉尻を下げて、怪訝そうに言つた。

「でも、じいて血ひならば」

んむ、とアゴに指をあてて逡巡したあと、志やんは言葉を無理矢理に出す。

「いま、刀さんが居て、私が居るところ、この瞬間が全てでいいじゃないですか。物事は總て、気にしなければ気になりますんよ」

そんなあつけらかんと言われても、オレ的には死活問題な事柄だと思つんだけどなあ……。

「そんなことより、出たいので手を貸してください。お話ししていたら、ちよつとのせせてしましました」

そんなことって……。こやまあ、志やんこといつば、そんなことつちやそんなことだけぢれ……。

「はあ……」

志やんに手を貸し、もらつたタオルと着替えの入ったカゴの前まで誘導し、もう一回のタオルを手渡す。

ササシと身体をふいた志やんは、

「んつ」

と両手を開いて何かをうながしている。が、全然オレは意図を察することができないので、

「なんですか」

素直にお尋ねする。

「服、着せてください」

アンタ、子どもかよつ。

「自分で着てくださいよ。なんでオレがそんな事しなくちゃいけないですか」

なんとこうか、ちょっとイラッとした。

「だつて、いつも着ているやつじやないと、表裏とか前後ろがわからんないです……だから」

そんなしょぼくれなくとも、いいじゃないですか。

「はあ……」

なんか「」に来てオレ、溜め息を吐きまくっている気がする。  
ちやちやっと、安宿の厚意でゆずつてもらつた着替えを壱さんに着せてから、思つた。オレは服の表裏とか前後を教えるだけでも、よかつたんじやなかろうかと。

着替えた壱さんは、

「んー、安い生地ですねえ。なんか「」します」  
安宿のご厚意を踏みにじるよつた、服の「」感想をのべた。  
そんな壱さんを見てふと思つ、「

「オレ、風呂入つてないなあ」

と。

壱さんはすっかりサッパリしているけれども、オレは壱さんの髪を洗つたり服を洗つたりで、自分を洗えてない。

「入つてないなあつて、入ればいいじやないですか」

ひとつ風呂あびて、ポツポツとほんのり紅色な肌を冷ますよつて、  
服をパタパタさせながら、こともなげに壱さんは言つ。

誰のせいで、風呂は入れてないとお思いか。

ともあれ、風呂には入りたいから、入るとしようつ。だから、

「壱さん、出て行つてもらえますか」

「なんですか？」

本当に、「どうして?」といつ風に小首を傾げるもんだから、困つたものだ。

「お風呂にはいるために、服を脱ぐからです

「脱げばいいじやないですか」

なにをそんな事。とでも言いたげな表情の壱さん。

んー、オレは人前で速やかに真っ裸になれるアナタほど、恥じら

いを捨てきれないのですよ。

「恥ずかしがらなくとも、私は見えませんから、大丈夫ですよ」  
見る、見ないの問題じゃないんですね。  
でもまあ、もうどうでもいいか……。

「口に来て、オレが得たモノがあるとすれば、即決で諦める潔い  
思考だらうね。

というわけで、脱衣開始。

脱衣時の衣擦れ音を聴き取つたらしく憚さんが、不意にボソリと

一言

「見えていな」とはいえ、乙女の前で本当に服を脱いで生まれたま  
まの姿になると、刀さん……そつち系の变态さんですか?」「.  
怒りたいような、もつ本当じどうでもいいような。なんだらうね、  
この複雑な心境は。

でもね、

でもそ、

でも、本当に一つだけ思つのは

恥じらいもなく、即行で真っ裸になつたアナタはなんのよ  
つ!

まあ、そんな事を思いつつ風呂に入った。

そして、一つ経験値を上昇させた。

風呂は心の洗濯とか言うが、洗濯中ずっと異性の存在を意識し続  
けてのソレは、心地好いものではない。

そんな超が付くほどごどうでもいい経験値を。

## 起／第六話・奇抜なドリンクキングと微妙な手掛けり

風呂からでたら、壱さんは迷わずカウンターでビンに入った飲み物を一本購入した。

一つをコチラに差し出してくるが、

「なんですか、これは」

一瞬、色合い的に風呂から出たら飲むモノの定番たる牛乳系飲料かと思ったのだが、ビンを受け取つてよくよく見てみると、反対側が透けていた。牛乳系飲料にしては、薄すぎる。

「なにして、風呂上りの定番じゃないですか。あれですね、刀さんところどこので世間知らずさんですね。じつは遠い国の貴族さんですか？ 金にモノ言わせてハアハアしてるんですか。あ、寄生的幸せをつかんじゃいましたが、私」

貴族さんも、金にモノ言わせてハアハアはしないと思いませんけどね。

それに、なんですかね寄生的幸せって……。  
まあ置いといて、

「世間知らずというより、この世をマック知らないので、ある意味世間知らず以上だと思いますけど。でも、とりあえず壱さんは、人としての常識はわきまえてるつもりですよ　人としての常識はつ！」

そんなオレの言葉を、なかなか開かないビンの紙フタをツメで力り力りかき、意識の九割をフタにそそぎながらも壱さんは聞いてくれたようだ、

「あれですか、さつき刀さんが言つてた、『ココではないドコかからやつて来た誰か』、あるいは『この世界はオレの夢かもしけない』てヤツですか、この世をマック知らないって？ そんな都合のいい言い訳じゃあ、世の荒波の中では生きていけませんよ？」

壱さんにだけは言われたくないなあと想つるのは、なんでだらうね。

自分に都合のいいことしか聴き取らないそのお耳の能力を、いま田の畠たりにしたからかな。

とか思いつつ、オレは自分の手にあるビンの紙フタを開けた。なかなか開けないフタにイライラきたらしこ壱さんは、指を無理矢理フタに押し込んで開こうとするが、オレはその手を止めて、オレが開封済みのビンと取り替える。

絶対にそのまま指をねじりこんだら、中身をぶちまけることになるだろうから。

受け取った壱さんは、肩幅に足を開き、左手を腰にあて、姿勢を正して、グビッと一気にビンの中身を飲み干す。

じつに豪氣に、気持ちいいくらいの飲みっぷりであるが、途中から口に含みきれなかつた薄い牛乳色ドリンクがあふれて、これまた豪快にこぼしてるのは、いかがなものだらう。

「一息で飲むのが、決まりなのですっ」

力んで語る壱さんであるが、結局ちゃんと飲めてないと思つたのだけれども。

ていうかお風呂に入った意味がなくなる気がする。

まあともあれ、自分の手にあるソレを飲んでみよつと思つ。

本能的にどうのか、初めてのモノの二オイを一度確かめてしまつのは、どうしてだろうか。とりあえず、二オイは無い。といつうか、オレには認識できなかつた。

恐る恐る口に含み、ころがしてみる。

んー、

「……味が無い」

マツタク風味が無いわけではないのだが……。なんというのが適切なのだろう……。強いて言つなれば、三倍薄めた牛乳って感じだ。

思うに、これは一息で飲み干さないと美味しくない。といつうが、味わうようなモノではない。

「さ、帰りましょう」

早々にビンをカウンターに返した壱さんは、オレの手をとるや、

歩みだせとうながしてくる。

自分を中心に戸を回してゐる人だなあ、と改めて思う。

壱さんが早く早くと腕をぶん回してくるもんだから、

「ツー、ボアツハツ」

ガツクンガツクン身体が揺れて、飲もうとした三倍薄い牛乳風味ドリンクを、

「鼻から飲むハメになつてしまつた……」

「なに奇抜な飲み方してゐるんですか」

ビックリ！ というより、ちょっと引き気味におっしゃる壱さんである。

が、誰のせいだと思つてゐるんでしょうね。

オレが奇抜なドリンクをしてしまつたのつ！

とりあえず、お風呂屋さんを出る。

カウンターに居た店員さんが、店内で飲み物こぼしまくるヤツらにイイ気持ちをするわけもなく、ものすごい威圧的な視線をくれていたというのも、急いで出た理由だつたりしなくもない。外は夕暮だつた。

そよ風が、風呂上りの熱つた肌を優しくなで、心地好い。  
なんとなく、深呼吸してみたり。

今まで道筋の目標を探す事にイッパイイッパイだつたのか、理解不能な現状にビビツて余裕が無かつたのか、よくわからないが、風呂屋から出て初めて、そこに在る町並みをまともに見た気がする。子どもたちが、残り少ない今日という日を思いつき遊んでいたり、そんな子を連れ帰りに来たと思しき大人がいたり、買い物帰りの親子や、店先で会話するご夫人方、寄寄せの為に安さやサービスを叫ぶ店員さん、なんとも黄昏時の空色とあいまつて、のどかな光景である

「 て、なに和んでんだらう、オレ」

「和むつて、なにがですか？」

一人和んで、一人でツツ「ヨミ」をいれていたオレに、壱さんがちょっと握った手を引いて問うてくる。

「え？ いや、のどかだなあと。東京じゃあ、こんな光景も少なくなってきてるなあと」

そんなオレの返答を聞いた壱さんは、

「“とうきょう”がどんな所なのかは想像できないけど、目の前にのどか的な光景が広がっていて、刀さんがそれに和んでしまうという気持ちは、なんとななくわかりますよ」と柔らかい表情になつて言う、

「町が奏てる音も、匂いも、肌で感じる雰囲気が楽しげで、優しげですから」

ずっと突つ立つて町並みに和んでいてもしょうがないので、来た道を戻り、いまは宿屋の前である。

そして、開けっ放しの戸をくぐり込むとしたとき、

「部屋は空いてるかね？」

と荷物を背負つた初老風の人物に、真横から声をかけられた。いつの間に近づいてきていたのか、気配にまったく気づかなかつたが。どうやら、宿屋の店員さんと見間違われたらしい。

まあ、宿屋のご厚意でたまわつた店の制服を着替えとして風呂上りに着たのだ、店先にそんな服装で居れば、間違われて当然といえば、当然のことである。

にもかかわらず、そんな当然の出来事への対処法を間違える人が、オレのお隣に居た。

「去れっ！」

よくわからないが、初老風人物の言動が、壱さんのカンに触つたらしい。

壱さんは、飼い犬が不審人物に唸り吠え掛かるように、ものすごく険しい表情と口調で言い放つた。

が、なぜに「去れっ！」なの？

ていうか、服を無料でくれた宿屋さんに対する恩を最大級のアダで返してやるよな。

初老風人物はビビッタように縮こまり、サーツと足早にこの場から去り行ってしまう。

お客さんを一人逃がしたわけだ……客商売でこれは痛い。

そして訪れたお客さんに対し、いきなり「去れっ！」とか言う暴挙は、客商売的に痛いどころか、致命傷である。

オレの知る世では、来店したお客さんに冷たく当たつて、帰るときにちよつとコビルようなじぐさをするという、ツンデレを売りにするお店が存在したりするが（なにがイイのかオレには理解できないけど）、ここはツンデレを売りにする宿屋ではないだろうし、そもそもこのオレ知らぬ世でその価値観が通用するのかわからない。ともあれ、ツンデレなお店でも、さすがに来た客に「去れっ！」とは言わないだろうと思つ。それはもはやツンではなく、ただの拒絶だ。あれか壱さん新ジャンル開拓か。店員さんが皆、お客さんに対して拒絶的つていう。

いや、まあ、ともあれ、

「あんた達、なんてことしてくれぢやつてるんつ！」

開けっ放しの戸の前で　つまりは、カウンターから支配人ぽい男性が見ている田の前で、訪れたお客さんをお店の意向とは関係無しに追い返したら、怒られて当然だ。

というわけで、罪償いの皿洗いを現在遂行中である。

いつたん部屋に戻つて、洗つた壱さんの民族衣装っぽい服を乾かす為に広げて吊るし、案内された厨房っぽい所の隅で、水道が無いので井戸から汲んできた水をタライに注いでから、オレが皿を洗つて、壱さんが皿拭くという役割分担で。

あれだね、宿から出て行けって言われなかつただけマシといつやつか。

「はあ……。壱さん、どうしてイキナリあんな事を言つたんですか

？」

せめて、あの暴挙に理由があつてほしい。

「どうして？ んーまあ、あとでわかると思いますよ。そしてその時にはもれなく宿代が無料になつていてるはずです」

意味がわかりません。

なに、お店にとつて大事なお客さんを追い返すことが、壱さんの崇高な頭の中では、宿代を無料にするためのプロセスとして必須だと？ まったくもつて、成績超低空飛行の我が思考形態には理解できない。普通に考えれば、営業妨害で倍の宿代を請求されそうだが。

そんなこんなで、皿洗いから解放される辽河には、夜になつていた。

部屋に戻るや、壱さんは待つてましたと嬉しそうに食事処でゲットしたお土産の包みを開いてと、オレに向づ。

お土産は、晩御飯に姿を変えた。

晩飯の料金も浮かすこんたんだつたとは、やのせんやじま恐れいる。

例の如く 壱さんはもうすこい勢いで、それはもう見てて気持ちいいくらい、とても美味しいそつに即行完食。いまは満足したように喜色満面のほくほく顔で、部屋にひとつずつドアに落ち着いていく。

ちなみに、オレはまだ食事中。

「やういえば

」

と、唐突に壱さんが口を開く。

「 “別の時代とか、別の世界とか、口ではないドコカから誰かがやつてきた” という話しがひとつ思つ出したのですけど、聞きますか？」

テキトウに聞き流していくと思つていたが、じつやら身を聞いて聞く必要がある、ありがたいお話をしてくれたのだ。

「是非、聞かせてください

ちゃんと壱さんは「機嫌を損ねないよつて、へりくだり気味にお願いする。

「では」

と壱さんは語りだす。『どうやら』機嫌を損ねずにするんだよつだ。

「 といつても、これは立ち寄つた村の語り部さんから聞いたお話をですから、なにか問われても、私は詳しく返答できません。とうのをご理解くださいね」

「わかりましたから、先をどうぞ」

「まず」

というわけで、壱さんは長々と語ってくれた。

オレ的に噛み碎いて解釈すると、オレ以外にもどこか見知らぬ場所に飛ばされた物体や人が、過去にもあつたということ。しかしオレと異なるのは、物体そのモノが登場しているというところか。

例えば、突如として出現した鋼鉄の大鳥の話し。この鋼鉄の大鳥は突然上空に現れて、落ち、炎上し、その腹から複数の人を吐き出したらしい。人は死亡していたらしいが。たぶん、飛行機が墜落したのだろう。突如として行方不明になる飛行機は現にあるし。それの大半は事故や事件だろうが、説明が出来ないモノも確かにある、だろうと思う。

もうひとつは、よくない事つづきだった村に、祈り続けていたら、突如として救世主が現れ、未知の知識で厄災から村を救つたとか。

まあ、そんな話しが多々聞かされ、

「というか、なんで訊いたとき、すぐに話してくれなかつたんですか」

少し不満に思うこともあつたりするわけだ。オレはいち早く、自分の現状を把握する手掛かりが欲しかつたのに。

「そんな尖つた言いかたしないでくださいよ。話がとつぴ過ぎて、とつさに出てこなかつたんですもの……。それにこういう系統の話は、ほとんど土地にある信仰の為に作られたモノばかりですから。そんな話を聞いても私は面白いと思わないので、語り部さんがコレ

系の事を喋つてゐるとき、身を入れて聞いてなかつたんです。武勇伝とかの方が、現実味があつて面白いですか？」

「壱さんが言わんとする事もわからないではないが、

「現に、オレがとつぴな話を実体験してゐるんですけど。案外、本当の事も語られていたかもしませんよ」

語り部さんの話が全部土地信仰の為の作り話だとしたら、オレが体験してゐる“いま／現状”はなんなのぞ、という事になる。たぶん、作り話でないモノや、現実に起こつたことを大げさに語つてゐるモノもあるだろう。

「せうだつたとしても、現にココに存在する刀さんが“別のドコ力”から来た、なんて信じろと言われても、ちょっと疑つてしまいますよ」

いや、まあ、立場が逆ならオレもそう思ひだらうけど。

「あ、でも本当だつたとしたら、私つてずいぶん面白い出来事の真つただ中に居ることになりますね」

パチンッと拍手を打つて、ドキドキワクワク感が満載の素敵に楽しそうな表情で、壱さんは言つ。あれだね、他人の不幸は蜜の味つてヤツかね。

「そちらから来れる、といつことは、こちからも行ける可能性がある、ということですね。といふか、そうじやなかつたら不公平ですし。ああ、だったら私が刀さんの時代か世界に行くということも可能といつことですよね。時が世界を越える旅。きっと誰もしたことないでしようし」

「なんだか壱さんのテンションが勝手に上昇を始めた。

「そうとなれば、情報収集。語り部さんから詳しい話を。遺跡の調査とかも……」

「すごい、オレを置いて予定が組みあがつていぐ。

「となれば、明日に備えて、もう寝ます」「ご就寝らしく。

でも、

「なんでも、服を脱いだるんですか?」「

健康法と称して、そつやつて寝る人もいるけどね。

「健康の為ですよ」

そつやる人が「ココに居た。

壱さんは早々に掛け布団に包まつて就寝体勢に移行しようとしている。

なんとか、安い掛け布団だからだろうか、布団が薄くて、壱さんのボディーラインをクッキリなぞり浮かび上がらせていって、なんか真っ裸よりH口イ。

という直覚があるのか、ないのか、知らないが、

「では、おやすみなさい、刀さん

本当に寝るつもりらしい。」

「変な氣を起こしたら、奥の手ですかね」

「そんなつもり、ホコリっぽくもないですよ

「そう言われると、なにか悔しいのですが。変な氣、ちょっとだけなた起こしてもいいですよ?」

そんな悩ましげな視線くれてもね、

「つづしんで、遠慮します」

聞くや、壱さんはふくっとほっぺを膨らませて、ベッドサイドの卓上にあるランプを探りで発見するや、フツと吹き消してしまつ。部屋は薄闇に支配される。

ねえ、壱さん、

なして、

なぜに、元、

どうして、

ランプの灯りを消してしまつてじょうね。オレ、まだ「飯

食べる途中なのにつ!

## 起／第七話・厄介事と手掛かりはウサ耳と共に現る

不意に目が覚める。  
ハツキリ言えれば、望まぬ目覚めだ。

だから、

「あと五分……」

なぜに五分なのか　とか、そういう疑問も無くはないが、お決まりのセリフと共に、一度目の睡眠にはこういつと思つ。

望まぬ目覚めであつたが、しかしこの一度目の睡眠にはいる瞬間に、言われもない至福を感じるのは、なぜだろうか。

「はい、終うー了おーです。ひとつと、起きてください」

ああ、わかつてない。わかつてないなあー。この至福をわかれないとは、人生九割損してるよ？

「そんことで損した憶えはないですよ」

「おふくろさんよおー、おふくろさん」

「なんですか？」

「そんなんだからあー、田尻にシワがあー　『じつ ふおつ！』

クソお袋めつ！　寝ていて無防備な青少年の下腹部に、カカトをぶち込むとは！

「刀さん、私をお母さんだと思つなんて。じつは母親大好き人間さんですか？　でも、まあお母さんにはなつてあげられませんけど、頭をなでなでしてあげます」

下腹部に鈍痛を感じつつ、なにぞ頭をなでなでされている触感に、不可思議を覚え、薄く目を開く……

「……誰？」

そこに居たのは、毎朝オレを文字通りたき起こすお袋の姿ではなく、肩口でテキトウに黒髪をぶつた切つた、まだ若いっぽい女だつた。

「そしてオレは母親大好き人間じゃない」  
マサコン

右手はオレの頭をなでなでするように動いているが、その眼差しは「チラではなく明後田の方向を見ている。

ギリリツ！

と、下腹部にせりなる メリコボのような痛みを感じたので、反射的に首をもちあげそちらを見やる。

頭をなでなでしてくる黒髪をテキトウにじぶつた切ったこの女のヒザが、イイ具合にオレの下腹部に刺さっていた。

なにこれは、どんなアメヒムチ（アメブレイ）ですか。  
「ヒディですよ、刀さんつ。私のイヤンんなトロロや、＊＊＊＊つ  
などころとか、もう舐めまわすよつて、無理矢理ワタシを知りつく  
したくせにっ！」

「ひつ！ の小つち『つ』のあたりで、恐喝するよつてヒザがメ  
キヨリと食い込む。

「ウッ！ ヌグウッ！」

なんの話をしているの、ねえつー！

「ていうかなにさ、舐めまわすよつて無理矢理知り尽くしたつて！  
知りませによそなこと。免罪ですよ」

という我が家訴えを聞いた壱さんは、

「ほんとうに？ 本当に私のことも、昨日のパッシュション溢るる夜の  
ことも、憶えていないと？」

なんか、いまにも泣きそうに表情を歪める。

「なんですか、パッシュション溢るるつて。オレが『』飯食べる途中に  
壱さんがランプの灯り消しちゃつて、オレがもう一回ランプに火を  
灯そうとしたのを、壱さんが暴力的に阻止してきて て、そうで  
すよ、オレ、壱さんにヘッドロックかけられた辺りから記憶が無い  
んだすよ。ねえ、冗談でも人のこと落とさないでくださいよ。てい  
うかオレ、ヘッドロックされたあげく落とされるようなことしてま  
せんよ？ パッシュション溢るるどいるか、口から泡と一緒に魂が溢る  
ところでしたよつ！」

改めて思えば、視覚に頼つていらない壱さんにとって、ランプの灯

りはあつてないようなもので、寝る前に灯りを消す必要があつたのか疑問であり、彼女が初めから何がしかオレに仕掛けるつもりであつたと、予想しておくべきだった。

後悔先に立たず。

思つたところで、後の祭りであるが。

「あら、ちゃんと私のこと憶えてるじゃないですか。もお、オチャメさんなことしないでくださいよ」

いやだもあと、乙女チックなしぐさでシンと我が肩を、指で突いてくる壱さんであるが、「もお」のあたりでしつかりとオレの下腹部にそのビザは全体重」と襲い掛かってきて、なおかつシンと乙女チックに突いてきた指は、文字通り突いてきており、肩の間接を外さんばかりに見事、食い込んでいる。ざ・地獄突き。

「オチャメもなにも、寝惚けてただけじゃないですか……はあ。そもそも寝起きからそんな拷問じみた痛みを『えられたら、誰でも嫌でも思い出す、というか知つてるふりとかしますよ』

「またまたあー」

と壱さんは微笑み、えぐりこむように色々とグリグリつー。

「痛い痛い痛い、イ・タ・イつ！」

我が心からの叫びを綺麗にスルーして、

「さむ、そんなことより、目覚めたなら、朝ごはん食べに行きましたよ。もう、お腹ペコペコで、背中とくつついてしまつうです」駄々つ子のよつこ胸ぐらを掴んで、ガツクンガツクン揺さぶつてくる。

「わ、わかりました、から、いい加減、指でグリグリ突くの止めて、ビザをじかにくださいよ」

そんなこんなで、よくわからない現状の一囃は、暴力的に始まつた。

脇にどいた壱さんは、どじでのヴィーナスのよつこ薄布一枚を胸

の前で押さえているだけという、なに考えてんだらうとこつお姿で、「よくそんな恥ずかしい恰好しててお腹壊しませんね」オレだったら寝冷えしてお腹壊して、半田は便所から出られなくなるわ。

ああ、恐ろしや。

「だつて、服を着ようにも、刀さんが着替えをどこに置いたのかわからないんですねもん」

「ふつとほっぺを膨らませて抗議していく壱さん。

「ああ、確かにそうですね……。でも、『はんきょつてい』とかいう、あのスゴ技で探せば見つけられたんじゃないですか?」

「そんな面倒なことするくらになら、刀さんを起こしたほうが早いです」

はあ、そういうもんですねか。

そんなこんなで、ヴィーナス気取りなポージングの壱さんはそのままに、昨日吊るしておいた壱さん本来の着衣たる民族衣装っぽい服に触れてみる。

「あ、まだ乾いてないです」

まあなんとなあく予想していたが、室内干しでは余程空気が乾燥してない限り、そういう衣類は乾かない。

「えーどうして湿ってるんですかあ」

壱さんは不満そうに歯を尖らすが、

「どつしてつて、昨日風呂場で服洗えつて言つたの壱さんでしょう

よ

物忘れ激しいにも程がある。

「ええーじゃあ、こんな露出“強”なイデタチで私に町へ出ると? 野獣な男性陣の眼の肥やしなれと? 刀さんはそれでいいんですか?」

知りませよそんなこと。

ていうか、寝る前に露出“強”なイデタチになつたのはじ自分でしょう。

しかしあま、こちおう、

「宿屋さんの、」厚意による服があるじゃないですか。それを着ればいいでしょ?」「う

アナタは宿屋さんの恩をアダで返すよつた言動してましたけどね。

例の如く、壱さんに宿屋さんより頂いた使い古しの店員服を着せていると

トントンッ、と扉をノックする音が控えめに鳴った。

「開いてますよから、どうぞ」

壱さんがノックの音に応える。

が、ちょっと待つてよ壱さん!

肌色多めなアナタに、オレが服を着せている なんて、こんな場面を見られたら、いらぬ誤解されそうじやなですか!

て、思うのは一瞬だけれど、口に出すまでには時が足りず、

「し、しつれいしますう……つー

ノック音の主が入室するのを防ぐことはできず、

「し、しつれいしましたあ……

ドン引きされて退室されてしまうのは、なんかもつしかたない事だったと諦めるしかない。

思いつきり真ん丸くした目と目があつたなあとか、表情が引きつってたなあとか、どうしてか冷静に思考している自分が居た。

「待つた! 待つて、ドン引いたまま行かないでっ!」

頭の中にあるどこか冷静な部分を押し切つて、焦ったオレが、退室した影を呼び止める。

閉まりかけた扉が止まり、

「い、いえ。おとりこみちゅうをジャマするつもりはないで、でもなるべく早くしていただけだと」

なにを要らん気を使っているのを、訪ね人よ。

「なにもお取り込んでですかりつ。服を着せていくだけですかり。このお人が服を一人で着られないだけですから」

超が付く早ワザで壱さんに安宿服を着せ、まだ閉まりきっていない扉を開き、誤解を解くために訪ね人へ語りつと、

「……あれ？」

するが、オレの目線には人影はなく……？

と思つたら、

「あ、あの」

下の方から声がした。

音源の方へ視線をやると、そこには長い棒のようなモノを大事そうに抱く、怯えたウサギのような人物が、クリッとした眼を潤ませて、そこに居た。

「お姉ちゃんを、お姉ちゃんをたすけてくださいっ！」

うさぎチックな人物は、懇願するように声を振り絞る。

が、左右で縛つたツインテイルな黒髪がウサギの垂れ耳を連想させ、その身から発する雰囲気もどことなくウサギ風な来訪者の言つことが、

「お姉ちゃんを助ける……？ つて、どういづ？」

オレにはイマイチ飲み込めなかつた。

突然現れ、「助けて」と言われても正直、困る。オレはどこぞのスーパーヒーローじゃない。自分の身に起こっていることに対処するだけでイッパイイッパイというか、処理能力の限界を突破してどうでもいい感じになつてしまつてゐるくらいだ。

「立ち話もなんですから、こっちへいらっしゃいな」

いつの間にかベッドに腰掛けっていた壱さんが、ポンポンと自分の隣へ座るようにながす。

ウサギ風な来訪者は、それに誘われるよつに長い棒のよつなモノを大事そうに抱きながら、どこかビクつきつつ入室し、壱さんの隣へ腰掛けた。身長が足りないせいか、ウサギ風な人物はベッドに腰掛けると足が爪先立ちのようになる。

雰囲気でウサギ風人物が座つたのを感じした壱さんは、

「それで」

とウサギ風な人物に訊ねた。

誰ですか？ と。

なんでも、昨日のお食事処のポーテイルな娘さんが、このウサギ風な人物のお姉さんらしくと言づのを聞くや、

「あらちゅうどいい、いまから朝ごはん食べに行くところだつたんですよ。お話の続きは、朝ごはんを食べながらにしましょ」

壱さんは話を強制終了させて、

「さあ行きましょう」

とつてもイイ笑顔で言づのだった。

ちよいと狼狽氣味なウサギの垂れ耳風ツインテイル人物であるが、しそうがないと諦める事をオススメしよう。

なんですか？

どうしてか？

それはね、

頼つた人物が、スーパーヒーローじゃなく、ただの腹ペコ星人だからさ。

## 起／第八話・罪と罰と旅の果て

現在それなりに晴天な空の下、オレ達は例のお食事処を目指していた。

左右で縛つた髪がどことなあくウサギの垂れ耳に見え、どこか怯えているようなふるふるとした雰囲気が、またウサギを連想させる、線の細い小柄な身体にエプロンを装着した人物が、ときおりこちらを気にしながら、長い棒のようなモノを大事そうに 幼児がぬいぐるみを手放さんとするが」とく、ぎゅっと抱き、いまにもズッコケそうな頼りない足取りで、我が前方を歩いている。

名前は“バツ”というらしい。

いつたいどんな文字が当てはまるだろ?。イチさんは、壱という字を勝手に脳内で当てはめているが。

まあそれはどうでもいいか。

問題なのは、我が隣を歩行中な壱さんを、ビジビのスーパーひー口一と勘違いしているということだ。

詳しい話は、お食事処で「飯を食べながら」という条件を壱さんが強行したので、まだ詳しい事情は聞いていないが、ご対面時の「お姉ちゃんをたすけてくださいっ!」という切羽詰った感じなセリフと、昨日のガラの悪いヒト達から推測するに、どうしようもなく、これから荒事が起こるのではないかと想像してしまう。

「どうしたんですか? これから朝はんを食べるといつのに、意氣消沈して」

雰囲気というのか、空氣というのか、で我が心情を察してくれたらしげ壱さんが、杖の代わりに繋いだオレの手をチョイチョイと引つ張る。

「これから事を思つと、元氣もなくなりますよ……」

荒事は嫌いだ。小説とかマンガとかアニメとかゲームとか映画とかでヴァイオレンスな表現がされているのは気にしないけど、とい

うかむしろ好物だけれども、それは非現実の そういう“表現方法／演出”であって、リアルな痛みや危険や悪意はともなわない。だが、リアルな痛みや危険や悪意をともなう“それ”は好まない。オレは痛みに興奮するマゾヒストではないし、危機な状況にロマンを想う妄想家でもない。ましてや悪意に立ち向かえるほどの勇者でもない。だから、昨日のようなになつてしまつではなかろうかと、心配であり不安で、テンションダウンしてしまつのも、自然なことだ。

それに寝起きだし。

「なんですか？ あれですか、刀さんは朝ごはんを食べない派なのでですか？ 健康によくないですよ？」

ものすごくズレた御意見の壱さんである。

「どこの世に、朝ごはん食つことで意氣消沈するヒトが居るんですか」

いやまあ、探せば居るかもしねませんけどね。  
「じゃあどうして？」

壱さんは不思議そうに眉を寄せて小首を傾げる。  
どうしてって、それはだから

「わふうっワツ！」

オレが「わふうっワツ！」って叫んだ訳じゃないですからね。タイミングが狙つたように絶妙だつたけれども。

「大丈夫？」

オレは田の前で豪快にずつこけたバツに、手を貸しながらいう。「イテテ……だ、だいじょうぶですぅ……。なにかに、足をとられ

て」

バツは恨めしそうに、自らの足元を見やる。  
オレもそれに吊られて視線をやる。そこには、

「なんだろう……本？」

革張りの、本の形をしたモノがそこにあつた。  
なんと気なしに、手にとつてみる。

結構、分厚くて重い。

ゆえに、いまにもズッコケそうな頼りない足取りのバツが、足を取られても、まあ、いたしかたないかなあと思つ。

パラパラと中身を見るが、しかしそこには文字らしきものは無く、

「白紙……てことは、これは手帳かな？」

「トト寧に最後のページには、羽ペンのようなモノがはさまっているし。

「手帳？ そんなモノどうでもいいじゃないですか。早く朝ごはん食べましょーみつー！」

空腹でイライラし始めたらしい壱さんだが、オレの肩を外すかのよう、繋いだ手をブンブンと景気良くぶん回す。

わかりました、と壱さんをなだめつつ、涙目なバツに手を貸し立ち上がりせ、じつはもう皿の前まで来ていた例のお食事処へ入店する。

ちなみに、拾った手帳は、そのまま道端に床すのもなんだか気が引け、どうしたものかと迷つていろいろうちに、壱さんがイライラし始めてしまつたので、仕方なくオレはフト口口にしまつ事にした。

「そういえば、昨日は居なかつたよね？」

オレはお食事を運んできたバツに問うた。

着席したのは昨日と同じ席であり、注文したメニューも同じであり、違うのはバツという存在のみ。

「さ、きのうは、お台所で仕込みの手伝いをしていたのです」

オボンをぎゅっと抱いて、なんとかオレの言葉に怯えたようにビクッとしつつ、バツは答える。昨日の今日だし、お姉さんが何か大変な事になつてゐるらしいしで、まあ怯えられるのもしかたないかなあ、と思うのだけれど。しかしあとつと傷つくというか、なんと云ふか。

「い…………」

壱さんに話をふらうかと思つたのだが、例の如く、彼女はもつすごい他の追随を許さない勢いで、運ばれてきた「朝ご飯を喰らつていらっしゃるので、なんといつか思わず出かけた言葉を飲み込んでしまう。

触らぬ神にタタリ無し。

なんでだろう、不意にそんな文字列が脳裏をよぎったのは。

まあともあれ、

「空氣を読むと、本当はこんなところだ朝ごはん食べてる場合じやないような気がするけれど」

べつに壱さんが空氣読めない人だとは言つていい。決して、断じて言つてない。

「『お姉ちゃんをたすけてください』ってこののは、どうこう？」

昨日このお店を訪れたときのオレと壱さんに關する極少な情報から、宿泊している宿屋を探し出してまで、オレ達と一緒に何か壱さんを尋ねてきたのだから、よっぽど事態なのだろう。

「そ、それはですねっ！」

と、バツは破裂したように一気に語る。

まあなんというか、どこの世でもヒートのやるいとに大差ないこということだらうか。

バツの姉、ポニー・テイル娘さんを連れ去つた理由 地上げ。

この屋台みたいなお食事処の土地に、どれほど の価値があるのかオレには理解できないうが、バツの姉を連れ去つた連中、つまりは昨日のいかにもワルな連中と腹痛先生 その親玉は、この土地を手に入れるために強引な手段に出たということだ。

朝ごはんを食べている場合ではない気がするが、しかし根本的なところからして、

「そういうのは、警察のお仕事じゃない？」

壱さんが暴れてどうなる問題じやないと思つ。

「ケ、ケイサツウ……て、な、なんですか？」

バツは困ったように形のいい眉を『ハ』の字に、眼に潤みを増幅させ、抱いたオボンをいつそうギュッとして、訊いてくる。

ケイサツは世界共通語ではないらしい。

まあ、当然か。

しかしなんと言えばいいんだろう……。  
んん~、

「こいつ……なんて言つんだらう。兵士？ 憲兵？ んん~いやまあ、  
国の役人というのかな。そういう、権力のある……」

オレの言つたことを、自分なりに解釈したバツが、

「領主さまですか？」

領主と警察がイコールかどうかは知らんが、まあそんな感じの偉い人に頼むべきではなかろうか。といつニコアソスは伝わったようだ。

が、

「お姉ちゃんが何度も何度も、領主さまにはお願ひしにしている  
ですけど……」

しょんぼりするバツ。

領主に頼んでも、事態は現状に到つていて、そういうわけか。

「越後屋、おぬしもワルよのお」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

「あはははははっ！」

的な、そんな裏があつたりするのかなあ。

役人と悪人は紙一重といふか。

ともあれ、領主が悪かどうかは置いておいて、いまこの時には役に立たないヤツであることには違ひなく。

に、してもだ。昨日の今日な素性が不透明な壱さんを頼るよりか、  
こういう時の『近所さんじやないのか？』

「そ、それは……その……」

それ以上の言葉はなく、バツは視線を泳がせ、曇った表情でうつ  
むいた。

あれが、『近所さんもトバツチリせー』めんじゆねとこりやつか。

「美味しくありませんね」

不意に、今のままでも飯を喰らつていた志さんが、口元を布切れ拭いつつ言つた。もちろん、血の前に出ている飯は完食済み。オレはまだ三分の一も食べてないのに、なんたるハヤワザか。で、美味しくないって、どうこうこと？

「昨日の『』飯が気に入ったから、今日の朝『』はんはコレと決めていたのに。なんですかコレは、昨日とは比べ物にならないほどすうっと志さんは大量の空氣を吸い込み、

「マズイっ！」

鬼瓦みたいな憤怒の形相で、吸い込んだ大量の空氣を使用し、言い放つた。

「……は？」

完食しておいて、なにゆえにそんな事を言つのか。

「なんですか、コレは詐欺ですか。ふざけてはいけませんよ。食の恨みは永久の恨み。他の事なら多少は無かつた事にしてあげないこともなくもないんですけどね。コレは、コレばっかりは、無かつた事にはできませんよ。責任者を出しなさい！ そして昨日と同じ飯を食べさせなさい！」

んんー、黙々っ子？

フアミレスとかで親をちよこと困らせるお子様の光景がだぶついた。

「『』めんなさいです。ぼ、ぼく、まだちゃんと料理作れないのです。せ、せきにんしゃ お姉ちゃんは……」

たぶん年下のバツを困らせていく志さんて、どうなんだろ？

「お姉ちゃんがどうしたんですか」

眉間にシワを刻みながら、険しい表情で志さんは言葉を吐き出す。どうしたんですかって、そのことでバツはアナタを訊ねてきたのに。全然、ヒトの話を聞いていないのですね。

なにがどうしてどうなったのかを、バツは語りそれを聴いた壱さんは、

「案内なさい」

スクツと席を立ち、杖を握り締めて、連れ去られたバツの姉の居場所を求めた。

「私の朝ごはんを、奪還しますっ！」

なにか間違っているような気がしないでもないが。

いまにも駆け出さんばかりの壱さんは、苛立たしげに「まだですかつ」と吐き捨てた。

思い立つたが吉日と言つように、即行動に移行した壱さんを、しかしもつとも駆け出したい衝動を心に抱えているであろうバツが、「ちょ、ちょっと待つてほしいのですう」

と呼び止め、そしてそのまま、お店の奥へ消えてしまったのだ。どうしたんだろう？

と、思つたやさき、バツは戻ってきた。手の中に、宿屋で会つたとき大事そうにしていた棒のようなモノを抱いて。この棒のようなモノを取りに行つたのだろうか。

「それって？」

どう見てもそんなに大切なモノには見えないと云うが、ぬいぐるみを抱きかかえている方が似合つているというか、自然というか。

「こ、これは」

バツは言いながら、棒の上部を握り、引いた。

すると、棒の上部 握りこぶし一つ分下の位置から、棒は上下に割れ、バツが上部を引くのに合わせて、下部からギラリと輝く刃が現れる。あれだ、ヤグザさん達が使うような、ツバの付いていない、日本刀みたいな。といふか

「　日本刀？」

「　どうみても、オレにはバツの持つそれが日本刀にしか見えないのだが。

「二ホントウ……？　ち、ちがいますよ。」、「これはお肉解体包丁です。お、お料理するときに欠かせない、か、家宝なのです」だから置いては行けない、と説明してくれるバツであるが。

ある意味で刀は、お肉を解体する包丁だと思うけれども。あれが、マグロを解体する刃渡りの長い包丁が、どうしても刀に見えてしまうオレの眼には、やつぱりバツの手にある刃物は日本刀に見えてしまうというだけか。

「ん？」

なんとなあくギラつく刃に魅入られていたオレは、刃に文字が刻まれている事に気が付いた。

「……そはりゅうどうするときのなかであるがままで？」

其は流動する刻のなかで、あるがままで。

どういう意味だろう？

「なにしてるんですかっ！　早く行きますよつ！」

だがしかし、オレの思考は怒れる壱さんに妨害されてしまう。

「わ、わかりましたから、杖をぶん回さないでくださいよつ」

バツに案内された場所は、宿場町から少し離れた所で、

「　……デカ」

目の前には、いかにもお屋敷ですと主張する巨大な門が立ちはだかっていた。

ここが柄の悪い連中の本拠地らしい。

「でもこの門は、どうしよう。ノックしただけじゃ、開けてくれないだろうし……」

裏口とかを探すべきなのだろうか。

ていうか、なんか流れに身を任せてココまで来ちゃったけれども、これからつまりはケンカを売りに　いや、売られたケンカを買ひ

に行くんだろう。

なんかなあ……、正直に言ひつと、引き返したいのだが。

隣に居るバツを見やる。

潤んだ瞳で、堅く閉ざされた巨大な門を睨み、唇を噛みしめている。

そんな姿を真横で見て、自分だけ引き返すというのは、チキンハートなオレでも、さすがに出来ない。

「裏口を探さないとダメですね」

ペタペタと巨大な門を触つて探つている壱さんに言ひ。

どう頑張つても、この門は開きそうにないし、その左右から伸びるこれまた巨大な壁の高さは、到底、乗り越えられるモノではないし。

「裏口？ なんでそんな回りくどい事をしなければいけないんですか。朝」はんがかかるつているんですよ？ 正面突破で最短ルートで、朝」はんを奪還しますっ！」

グツッとこぶしを握り、宣言する壱さんであるが、

「でも、どうやってこの門を開けるんですか？」

それがまず目前の最大の問題だ。

が、

「ふふつ、この程度は問題の内に入りませんよ刀さん」

不敵な微笑みをたたえて、壱さんはグツとサムズアップする。なに、なにするおつもりなのですかね。

で、壱さんのとつた行動はといふと。

手足を、全身を使い、身体を叩いてコイキなリズムを刻みたしかストンプとかいう名称のダンスに類似している気がする行動をし、

全身が奏でるリズムが絶頂に達した瞬間、

「来たれ イワさんっ！」

手にしている杖を、地面にぶつ刺した。

半ば地中に埋まつた杖。

ていうか、それだけ。

「あの壱さん。確かにそんなに深く杖をぶつ刺せる筋力はスゴイと思ひますけど、それにどんな意味があるんですか？」

素朴なオレの疑問に、しかし壱さんはピッと人差し指を立てて向

け お静かについて意味かな？

そして、その右手人差し指を、頭上に掲げる。同時に、肩幅に両足を開き、腰を左に突き出す。

壱さん、なにをしているんだい？」やいましきう……。

バツも状況をあまり理解できていないのか、呆気にとられてしまつていて。

シンツと静まり返る周囲の空氣……。

その静寂を待つてましたを言わんばかりのタイミングで、壱さんは掲げた右手でパチンと指を打つ。

するどどうだらう、地面にぶつ刺さつた杖の周囲の土が、まるでアイスを溶かしたかのように流動的なモノへ変化した。そしてそこから刺さつた杖が、せり上がつてくる。

いや、せり上がつてきたのは、杖だけではなかつた。

握つた杖に引き上げられるように現れたのは

杖を握つた右手を頭上へ掲げ、肩幅に両足を開き、腰を左に突き出すというポーリングの……

小つさいオッサンだつた。

オレの腹部くらいまでの身長で、我が隣で呆気にとられているバツとタメくらいだ。だが、その肉体はバツとは比べ物にならないくらいに、オレとも比較できないくらいに、筋骨隆々。どつかの美術館にありそうな、英雄の筋肉美を愛でる石膏像のよつな、重厚で鎧のような印象の筋肉体だ。

ただ残念なことがあるとすれば、身長が高いことではなく、己が肉体を見せつけたい願望のあらわれとでも言つべき、一糸まとわぬ赤裸々な破廉恥極まりないイデタチであるといふところか。

オレは無意識に、バツの視界を手でおおい隠してしまった。

「壱さんなんなんですか、この破廉恥漢はつ！」

「イワさんです」

「誰がネーミングを訊いたよ。

「そうじゃなくて、なにがしたいんですか。こんな露出狂を出現させてしまう」

「どうしてどうやってこの変態が出現したのかといつ疑問すり出却してしまって、本当に理解しがたい出来事である。

「なにがしたいって、それは当然、正面突破の為ですよ？」

なにを当たり前のことを。とでも言ひたげな表情でおっしゃる壱さんだが、しかしどうなの「コロ」。

アレか、私は一絲まとわぬ、どこにも武器は隠し持つていない、無抵抗な存在だ、やあ話し合おうではないか、的な こちら葛飾区亀有公園前派出所（通称、じち亀）に登場した海パン刑事的な発想か？

どう頑張つても、裸で迫つてこつたら、永久にココの門は開かないと思つんですけどね。普通に考えて。

「せめてもうちょっとマトモな手段はなかつたんですか」

どうしてこんな破廉恥漢なんですか。

どうしても割り切れない気持ちを壱さんにぶつけitagaba、いまままで無言でいた露出狂が、

「へへ、メーン」

口を開いた。

「な、なんですか」

「私は“イワンジエネビニツテ・フルステナ・ソコロフ・シヨリングルス・ノーム・ノーマン・ゴーレ・ム”という。初めてまして」  
破廉恥漢は初対面の挨拶と共にハンドシェイクを求めてきた。

なんだこの、外觀からは想像できない紳士な中身は。

ていうか、壱さんはイワさんと呼んでいなかつたつけか？ めちゃめちゃ長い名乗りだったと思うのだが。

「は、初めてまして」

いちおう礼儀として（露出狂に礼儀を通す意味があるのか疑問は尽きないが）、挨拶をし、握手をした。

イワソジュネビーツテ・フォルステナ・ソロロフ・ショリングルス・ノーム・ノーマン・ゴーレ・ム（名前が無駄に長いので以下、イワさん）は、オレにしたのと同じように、バツにも挨拶をする。どん引いているバツは、しかし恐々といった感じであるが、それに応じた。

胸筋を無意味にピクピクさせながら満足そうに頷いたイワさんは、「で、マイ・マスター。私はなにをしたいのですか？」

壱さんにかしづいて問う。

「私の朝ごはんを連れ去った、万死に値する方々に、天誅を下し、速やかに私の朝ごはんを奪還する そのお手伝いをイワさんにはお願いしたいのですが」

「イエス、マイ・マスター」

イワさんは、変態を屋敷に近づけまいと頑強に立ちはだかる巨大な門へと向かう

運動会が開催できそうなほど、無駄にだだつ広い庭の向こう側に、やつとこさ屋敷の入り口が見えてくる。

無論、そこに到るまでには障害があり連中が襲い掛かってきたが、そんな連中を、赤子の手をヒネルようにポイポイとブツ飛ばし捨て、道の安全を確保し先行するイワさんの後姿を追いつつ、オレは背後に視線をやつた。

そこには、変態の侵入を阻止できず、無残に破壊された門が、悔しそうに在る。

イワさん……、ただの露出狂ではなかつた。

なんだこのデタラメ過ぎる物理的破壊力は。

「イワさんが、壱さんの言う奥の手ですか？」

オレは繋いだ手の先にいる壱さんに問うた。

見た目にせよ物理的にせよ、イワさんの破壊力は、奥の手といつても過言ではない。

が、返ってきたのは、

「違いますよ。イワさんは、イワさんです」「ちょっと意味はわからんが、奥の手ではないとこいつ答えたつた。つまりは、壱さんの秘める奥の手と言つヤツは、イワさんをも越える何かといふことか？」

なんかちょっと怖くも思えてきた……

といふところで、屋敷の入り口に到着した。

高級そうな木製の扉を強引に開き、屋敷内部へ侵入する。ダンスパーティーができそうな、奥行きも高とも無駄にある玄関ホールはしかし、妙な静けさに包まれていた。

が、数瞬後には、異変を察知した眼つきの悪い連中が群れ、血走った殺氣溢る居心地最悪な空間へと成り果ててしまう。ダンボール箱があつたら、かぶりたい。そんな我が心情。これは冗談じゃなく、ヤバイ。

ヤバ過ぎる状況だ。

が、怖くて過呼吸なオレの気持ちなんぞ察するつもりなんかそもそも無いだろ？壱さんは、余裕げな態度で、

「私の朝ごはんを、返しなさいっ！」

堂々と言ひ放つ。

けれど向こうのサイドには、まったく意味が通じず、ゆえに返答はない。

「そうですか、そちらがそのつもりならば、いたしかたありません。イワさん、行きますよっ！」

「イーハス、マイ・マスター」

ものすごく一方的な武力行使が始まつた。

壱さんは例の舌打ち 反響定位を駆使しながら、舞うようこ、

群れるワルな連中をなぎ倒してゆく。

イワさんは R 指定なヴァイオレンスで、破廉恥漢にドン引いているワルな連中を駆逐する。

瞬く間に、玄関ホールの静寂は取り戻された。

と思ったのも束の間、

「せ、先生っ！ いらっしゃりですっ！」

切羽詰つた感溢れる、そんなセリフがホールに響く。が、すぐには何も現れず。少しの間を置いてから、

「待たせたな」

腹に響く、渋い音声と共に、一人の剣士が登場。そして、

「これは……」

「ミミのよつに元氣じゅうでノタレているワルな連中を見て、言葉を失う。

そして現状を作り出した元凶を視界に捉えるや、

「なつ。 またお前たちか」

剣を引き抜きながら言つ。

「ん？ その声は、どこかで聞いた憶えがありますね……」

そりや聞き覚えもあるでしょう。昨日、アナタが下剤をもつた相手ですもの。

「あ、そうそう。お腹の調子はいかがですか？」

ポンと拍手を打つて、世間話でもするかのよつな口調でいつまきを

ん。

「よくも悪くも、全部出たわつ！ て、そんな事はどうでもいい。なんのつもりでココへ来た」

腹痛先生は剣先を「チラヘ突きつけながら、問う。

「私の朝ごはんを返してもらいたいに」

当然のように返答する吉さんだが、その答えは根本的なところからして間違っている。

「朝ごはん？ なんのことだ」

まあ、意味がわからなくて当然だから、腹痛先生の反応はいたつて普通だ。

と「口で、バツが意を決したように口を開く。

「お、お姉ちゃんを、か、かえしてつー」

「そう、それが本来の理由だ。

「ん？　お前は……ああ、あの店の者か。しかしなんだ？　お前の姉など、私は口へ連れてきた憶えは無いぞ」

「どういうことだ？　と側らに控えるザ口（A）に腹痛先生は訊く。」

「ソソソと耳打ちがなされ、

「なるほど。私の知らぬところだ、そういうことがあったのか。しかし人さらことは、強引な。ともあれ、合意解つた。ゆえに全力をもつてそれを阻止する」

腹痛先生は構え、斬りこんで来る

「待て」

「とにかくで、べつの声にそれは妨害された。

声の主は、いつの間にか現れた、チャラけた感じの頭が悪そうな人物。

待てと言われて腹痛先生はその言葉に従つている。といふことは、この頭が悪そうなヤツはそこに偉いのか？

と、そんな事はどうでもいい。問題なのは、頭が悪そうなヤツが従えて現れたザ口が、ポニー・テイル娘さんを拘束してここ登場しているということだ。

「お、お姉ちゃん！」

駆け出そうとするバツ。だがそれを、

「来ちゃダメっ！」

ポニー・テイル娘さんが、止めた。

「この声、見つけましたよ。私の朝ごはん

壱ちゃん……。一人だけ別次元にいらしやるわ……。

「まさか、ここまで用心棒を連れてくるとは思つてなかつたけれど。まあそんなのはどうでもいい。なにも争つつもりはないんだから

頭悪そうなヤツは、なんか意味のわからない事を、演説するよう

「

にオーバーな身振り手振りで語る。

争うもなにも、先に暴力に出たのは、そちらじゃないのか？

「解決策は簡単。いま、キミが大事に抱えているその“異界人が鍛えし剣”をボクにくれれば、それでいいんだから。そうすれば、キミの大好きなお姉ちゃんは無事に解放されるハズだよ？」

頭悪そうなヤツは、イヤラシイ笑みを顔面に貼り付けながら、どうだい簡単だろ？ とバツの抱くお肉解体包丁を指差しながら言つてくる。

なんだろう、なんかムカつくのは。

「ていうか、なんだ“異界人が鍛えし剣”って。

「お食事処の土地が欲しくて、バツのお姉さんをさらつたんじゃなかつたのか？」

「店の土地？ ああ、たしかに剣を手に入れるついでに、いただこうとは思つていたがね。あんなショボイ土地なんて、得たところでなんの特にもならないさ。そもそもあんな土地より、価値のあるその剣があればそれでいい。ボクが欲しいのはその剣なんだから」

新しいオモチャを目の前にしてテンションアップしている子どもみたいだなど、コイツを見て思つ。

「バツ、こんなバカにお父さんとお母さんの形見をわたしちゃダメよつ！」

キリリとこんなバカを睨みながら、ポニー・テイル娘さんは言い放つ。

「で、でも……」

戸惑うバツ。当然である。自らの姉と剣。本来なら同じ天秤に乗るモノではない。が、同じ天秤にポニー・テイル娘さんは自ら乗つてしまつたがゆえ、バツは迷つ。

「なんだか、のけ者にされている気がして、面白くないですね」

「イエス、マイ・マスター」

そりやまあ当然じゃなかろうかと思つ。

「お腹も空き過ぎて背中とくつ付いてしまいそうですし　お話の腰を折つてしまい申し訳ないとは思いますが、そろそろ終わりにします。といつわけで刀さん」

「いきなり話をふられても困るのだが。

「な、なんですか？」

「朝ごはん奪還を妨害しそうな人数を教えてもらえますか？」

つまりは、ポニー・テイル娘さんを奪い返すのを邪魔しそうな人数

ということか。

「ええっと

「腹痛先生とその脇に控えるザコ（A）。

頭悪そうなヤツと、その隣でポニー・テイル娘さんを拘束しているザコ（B）。

合計は、

「四人ほどですけど」

人数を聞いた壱さんの口元に浮かぶのは、余裕たっぷりな小悪魔の微笑み

お食事処へ帰り着くなり、壱さんは朝ごはんを作れとポニー・テイ  
ル娘さんに強要した。

そういうばいつの間にか、イワさんの姿がないが、まあ露出狂は居ないほうが精神衛生的に好ましいから、気にしないでおこう。

壱さんの朝ごはん奪還の決着は、割とすぐについた。

腹痛先生とイワさんとの死闘は凄まじいモノであつたが、拮抗していい勝負をしていたのはこの二人だけであり、ザコ（A）と（B）はあつさり倒され、頭の悪そうなヤツも、壱さんの地獄突きを股間に喰らい、同じ男としては同情してしまいそうな最後を迎えた

ナラ。

でもしかし、事ここに至つて死人が出ていないのは、奇跡というか、壱さんの技量の格が違うということだろうか。

そう、あれほどに凄まじい戦闘を繰り広げているにもかかわらず、だれも死んでいないのだ。

「半殺しならぬ、七割殺しですけどね」

帰り道、壱さんはそんな怖いセリフをサラリと言つてのけていた。いま目の前で、口元をギトギト汚しながら美味しそうにご飯をかつ喰らつている子どもみたいなお人が、同じ口でそんな事を言ったというのは、少々想像し難い。

ともあれ、頭の悪そうなヤツが言つていた、お肉解体包丁が“異界人が鍛えし剣”であるという言葉が、どうにも脳裏に張り付いてはなれず、ご飯を作り終えたポニー・テイル娘さん（名前はツミといふらしい）に、その事について訊ねることにした。

いつたん台所に入り件の包丁を取つて戻つてきてから、ツミさんが語るに、

「コレは私たちの両親が首都エタレアに住んでいた頃に知り合った鍛冶師が、この宿場町で料理屋をやると言う両親に作ってくれたものなんです。私たちはその鍛冶師に会つた事はないんですけど」

と言いつつ、ツミは眠つていた刃を起こす。

「でも、なんでそれが“異界人が鍛えし剣”ってことになるんでしょう？」

べつに普通に作られた刀みたいな包丁だろ？と思うのだが。

「それは、その鍛冶師さんが、必ず鍛えた作品に刻む印に由来するらしいです」

これです、とツミさんは刃に刻まれている文字を指差す。

「其は流動する刻のなかで、あるがままに。……どうしてこれで異界人？」

理由がよくわからず、問い合わせて見たらば、なんとか目を見開いているツミさんの表情があつた。

「ここの印が読めるんですか？」

オレだってそれなりに学校で学習しているわけだし、超がつくほど難しい漢字でもないのだから読めて当然だろう。

と思いつつ、シミヤさんの表情」に見えた壁にかかるお店のメニューをみて、ハツとして気がつく。

オレは、「このお店のメニューが読めない。というかまったく知らぬこの世の文字が理解できるはずもなく。しかし、包丁に刻まれた文字は読めて？」

「どうしてコレを作った鍛冶師は日本語が使え……」

つまりそれは

手掛かり発見ということか？

当たり前のように無料で昼飯に変わった朝飯を食べたあと、宿屋への帰り道にて。

「壱さん、訊いてもいいですか？」

手を繋いだ先にいる壱さんに、オレはひとつ問い合わせをした。

「なにですか？」

「首都エタレアって、どこに在るんでしょう？」

つまりは、例の鍛冶師が居るらしい場所である。

「エタレアですか……。んんー改めてどこって言われても口答するのは難しいですね。そもそも私、地図が見れませんし。でもまあ大雑把に言つと、クレベル王国の中心に近い 正確な中央よりやや南よりにある中央首都です。整備の行き届いた道路の終着点にして出発点。にしても、エタレアの事を訊くなんて、急にどうしたんですか？」

小首を傾げる壱さん。

「その、エタレアにオレと似たような境遇の人人がいるかもしねないんです。だから、なにか知れるかなあと思いまして」

「ああ、なるほど」

納得というよろこびで壱さんは頷く。

「あの壱さん」

「はー？」

「壱さんの旅について、気がむいたらいいんですけど、一度エタ

レアに寄り道するつて可能ですか？」

そんなオレの問いかけに、しかし壱さんはしばらく沈黙して、「可能ですかって言われば、可能ですけどね。刀さん、回りくどい言い方しないで、单刀直入に意見をいつたらどうですか？　もみ手をして相手の顔色うかがいながら相手の察する能力にオンブに抱っこで、自分の意見を伝えようなんて　いつじやないですか、同じ釜の飯を食らわば、腹割つて喜怒哀楽も共食いだつて。それとも私は腹割つて意思疎通するにあたいしませんか？」

ふくつとほっぺを膨らませ、しかし落ち着いた声音で言つ。

つまりは 対等な立ち位置で語り合おうじゃないかこの野郎つ！　といふことか。

「そうですね……。壱さん、一度エタニアに行かせてください」

「もちろん、かまいませんよ。そもそも私、目的あつて旅しているわけじやないです。それになにより、面白やつうことになりそうですね」

思い立つたが吉日というノリと勢いで、エタニアに向かうことが即決された。明日の朝一で出発だそうな。

「でも　ひとつだけ、残念なお知らせがあります」

ホントに残念そうな口調で壱さんは言つ。

「私、この宿場町がクレベル王国のどの辺りにあるのか、知らないんですよ。行き当たりばつたりの流浪の旅をし続けていたもので」

それは致命的に思えたがしかし、明日の朝一までに誰かに訊けば、その問題は解決である。

宿屋に着くや、支配人っぽいお人がもみ手モモモモで接してきた。なんでも、昨日、壱さんが去れと言い放ち、この宿屋のお客ではなくした例の者が、べつの宿屋で他のお客様の荷を盗んでいたところを、捕まつたのだそうだ。

壱さんが追い払わなかったら、この宿屋で盜難騒ぎになつていた。ありがとう。そして雑用させて申し訳ない。だ、そうな。

やういえば、宿代が無料に云々と志さんは言つてこたが、つまりはこの事か？ 恩着せがましい気もするけど。

ともあれ、

「どうして、泥棒だつてわかつたんですか？」

部屋にもどつてから、素朴な疑問をぶつけてみた。

「足音を不自然に殺していましたし、なにより、フト口を探られましたからね刀さんが」

ベッドにちよこんと腰掛けた志さんがいうには、どうやらオレはスリに遭いそう というか遭つていたのか だったらしい。

「他人のフト口を探るヒトが、マトモなヒトのわけがないですし。と、そんなところです」

いやいや、スリに遭つていたらしいオレ自身が、すられていた自覚が無いのに、なにゆえに志さんにはわかつたのか？

「音ですよ、音」

「ひとむら平然と音をさせねつこつて、

「お畳寝しますので、夕食になつたら起きてください それでは、おやすみなさい」

氣持ち良さそつた寝息と寝顔を残して、夢の世界へ船をいじめ出しだ。

こつたこ志さんには、この世界はどうなふつに見えて（知覚されて）いるのだらうか？

そんな事を思いつつも、オレもする事がないので、畳寝する事にした。

気づいたら、外から燃えているような黄昏の光が差し込んでいた。だいぶ本氣で寝ていたらしい。

「おはようござります、刀さん」

声のしたほうを見てみると、先に田覗めていたらしこ志さんが居た。

「さあ、夕食を食べに行きましょウフー！」

元気良く、壱さんのテンションは高い。

べつに何が悪いといつわけではないのだが、なんか「飯を食いまぐりな気がする。

当たり前のように、例のお食事処へ足を運ぶ。

「あ、いらっしゃーい」

シミさんがほがらかな笑顔で迎えてくれる。その影に隠れるゆつにバツの姿も、見え隠れ。

他にお客さんの姿は無い。

例の如く、お品を注文してから、

「これって、そもそも何系統の食べ物なんだろ?」

運ばれてきた品を見て、思うわけだ。

あえて形容しようにも、オレはコレに類似する食い物を知らないし。

んんー。

「食べられれば、『ご飯はそれでいいじゃないですか。語るに舌を使

わす、全力で料理を味わえつて、どこかの偉い人も、きっと言

うと思いますし。くつちやべつてないで、美味しく食べましょうよ

つ

全力で味わい中な壱さんが、口から噛み碎きすり潰した食物を「ボオファッ!」と豪快に撒き散らしながら、そんな事を言う。

わかりましたから、一度と口にモノ入れて喋らないでくださいね。

「そこまで豪快に食べてもらえると、料理人みょうりにつきるわ」

あつはつはつ、と笑いながら、布巾を片手にシミさんが登場した。ちょうどいい、彼女に訊ねたいことがあったのだ。

それは、

「鍛冶師の名前と住まい?」

なんでまた、と小首を傾げるシミさん。

なんでかどうしてかを、オレはザッパリ語る。

「エタレアに行くんですか。なるほど」

頷き、

「住まいはわからないんですけど、名前は……」  
「という情報を得て、まあとりあえずの目標は立ったわけだ。  
それで全てが万事解決するとは、思ってないけれども。  
何もしないよりは、何かしているほうが、気が楽く。  
それだけ。

翌日、早朝。

宿場町に訪れた時と同じ服装で、入ってきたところから出て行く  
ために、掘つ建て小屋のある宿場町入り口を目指して歩いていた。  
この宿場町がどこなのかは、掘つ立て小屋のオッサンに訊けばい  
い。

「というわけで、安っぽい入り口が見えてきた。

「ん？ なんだろう？」

「どうしたんですか、刀さん」

「え、ええ、なんか入り口の所に、誰かが待ち構えているので」「  
あれが、七割殺しにされたワルな連中が報復しにやってきたのか？  
と、思ったのも一瞬の事で、入り口の所に停められたリアカーに  
腰掛けているツインテイルと、その脇に立っているポニー・テイルは  
知っている姿だった。

理由は、報復の可能性がありそれから逃れる為というのと、単純  
に両親が育つた土地を見てみたいというものだった。  
オレはいま、リアカーを引いて地道を進んでいる。  
ともあれ、重い。

人間一人と、荷物多数と、食料品。  
ちなみに人間というのは壹さんとバツである。

我がお隣には、ほがらかな表情のツミさんの姿もある。  
なんだかなーと思いつつ、ちょっと前の時間を回想してみたり。

「私と弟を、旅の道すれにしてもらえないでしょうか」

待ち構えていたツミとバツは、開口一番そんなことを言った。

理由は先の通り。

だがそんなことより、

「弟つて？……まさか、バツ？」

オレにはそつちのほうが、衝撃だつたりした。

眼球が落つこちそうなほど目を見開いているオレとは対照的に、ツミさんは「何を当たり前の事を」という態度である。

なんというか、オレの目も節穴になつたといつたのか、腐つたといつたのか、

「どう頑張つて見ても女の子だろう」

ていうか、そもそもツインテイルと男が等しい場所にカテゴライズされていない我が知識なので、

「どうして、ツインテイルなんだー」

回想終わり。

陽も暮れてきて、川べりで野宿ということになつた。

壹さんが一人の道すれを拒否しなかつたのは、まあオレを旅の道すれにしているあたりからして、大した理由があるわけでもないだろうけど、予想するに、好んだ料理を常に食えるからではなかろうかと思う。

ともあれ、夕食を食べ終わり、たき火にあたりながら何をするでもなくして、いたば、ふと思い出すことがあつた。

フト口に手を突つ込んで、それを引っ張り出す。

白紙の手帳である。

「これが文庫本だつたら、暇つぶしになるんだけれども」

なんせ白紙なので、読むところがない。

ご丁寧に、羽ペンが付属しているけれども、

「インクがないから、使い物にならないよなあ」

昔、飼っていたインコのぬけた羽を、羽ペン代わりにして遊んで

いたのを思い出したり……

「イ、インクなら、あ、ありますよお」

不意に真横から声が降ってきたのでちょっと驚いたが、そこには手に小ビンを持ったバツの姿があった。かゆいところに手が届くといつやつか。

でもなあ、

「これといって、書くことがない」

小ビンを受け取って、手の内でじるがしてみても、とくに思いつくことはない。

というか最近、手で文字を書くことが少ない。パソコンとか、ケイタイとか、書くというより打ち込むことのほうが多い。

学校では、まあ黒板に書かれていることをノートにうつしたりしていただけれども、正直にいうと、黒板に書かれていることそれ自体が、教科書の写しだつたりするので、あまり積極的にノートはとらない。

たぶんオレ、漢字とかそんなに書けないだろ? なあ。読めるけれど。

「日記とか書いたら? 旅日記」

食べられる草を狩りにいっていたシミさんが、薄闇から登場して言つ。

「日記ですか……」

三日どころか、二日ともたなかつた記憶があるので。

でもまあ、メモしておけば役に立つこともあるかもしれないし、なによりヒマだし、

「書いてみよ?」

と、いうわけで。

薄闇が濃闇になり、たき火の灯りを頼りにしながら、口々に来てから体験したことを前文の「」とく、皆さんと出来つけようと前から記入してみたわけだが……

なんか後半、ちょっと面倒になつて大雑把になつた氣も、しない  
ことない。

まあいいか……

旅は、まだまだ始まつたばかりだし。

これから書き込むことのほうが多いだら。

この手帳に書き込むところが無くなる頃には、旅が終了している  
ことを願うばかりだが……

「刀さん、なにさつきから黙り込んでいろんですか？」

夜飯を喰らうことに集中していた壱さんが、完食して口チラフに旅  
を向ける。

「秘密です ガツはツア！」

「私に隠しことなんて、ヒドイですよ！」

平然とボディータックルをかましてくるこの人と一緒に居たら、  
旅が終わる前にオレが終わつてしまいそうで……

前途多難である

壱さんに耐え切れるかなあ……

オレの肉体……

『ザ・刀と壱の旅』 → The Tou and Ichiro's  
travels

第一部【起】 終わり。

と不意に、

『なにしてるの？ おじいちゃん』

懐かしさを読み返すことに夢中だった私は、突然、横からかけられた愛らしい声によつて現実に引き戻された。

## 小休止・ティータイム

年老いて思うのは、言葉尻に「～じゃ」とか「～だのう」とか、いかにもな老人語は絶対に使わないといつといふだらうか。では、なにゆえ老人は言葉尻に「～じゃ」とか「～だのう」をつけて話す、と思い込んでいるのだらう。

作り話の洗脳はトテツモナイとこいつことだらうかね。

まあ、掃除中に発掘した“コレ”を書いていた頃の私は、そんな些細なこと気にかけているヒマなんてコレッぽっちもなかつたが。あえて読み返さなくとも、自分の身に起きたことは根深く脳裏に焼きついているので、いまだ鮮明に思い起こせるのだが、

「あれかね、掃除中にアルバムとか発見すると、普段まったく見もしないのに、やたら無性に見たくなってしまう感覚つてやつかね」

とこうわけで、本棚の整理中に発見した懐かしき手帳を再読していふうちに、時を忘れていた私を、

「なにしてるの？ おじいちゃん」

横からかけられた愛らしい声が現実に引き戻した。

「それは？」

長い黒髪にクリツとした眼を持つ、白のワンピースに身を包んだ幼い娘っ子 我が孫は、小首を傾げて、私の持つボロけた手帳を指差す。

「ん？ これはね、私が若かった頃につけていた日記のよつなモノだよ」

「ふーん」

と生返事をしつつ、こまだ興味深げに私の手元をガン見な我が孫

は、

「どんなこと書いてあるの？」

ペタンとその場に尻をつき、聞き入る体勢で問うてくる。

「そうですね」

改めて問われると、一概に『言ひがたいほど』トントモナイ体験談が書かれているのだが、

「ばあさんと出逢つた頃の話、かな」

まあザックリ語るならば、つまり『うひこと』だ。

「おじいちゃんとおばあちゃんとの、なれそめ？」

無垢な瞳を『ひらり』に向けてくる我が孫は、それはもう田舎に入れても痛くないが、

「間違つてないけどね。“なれそめ”なんて言葉、どうで覚えたの？」

「べつに“言ひてはダメ”とこう言葉ではないけれど、我が孫にはまだ早いと思うのだ。

「おばあちゃんが言つてた」

あのアクティブばあさん……純粋な孫の前で、何をくつちやべつていやがるんだろう。

「ねえねえ、おじいちゃん」

「なんだいね？」

「どんなこと書いてあるの？」

「えつ……。ん、んんー」

語つて聞かせたい内容かと問われれば、正直あまり語りたくない内容なのだが

「あ、そういえば、塩まんじゅう買つてあつたんだよ。どうだいね？ そろそろお茶の時間にしないかい、ね？」

「するー！ 塩まんじゅう大好きー！」

ダダッと台所の方へ駆けて行く我が孫……。

「食に関する尋常ならぬ執着をみせるのは、ヨリの誰の血を受け継いじやつたんだろー……」

まあ、いまはその食に対する執着のおかげで話をやらせたのだが。

といふことを、我が孫が毎の寝に入つてから、アクティブなばあ

さんに語つてみた。

「だから、私の塩まんじゅうが無かつたのですか……まったく、ヒドイですよ」

昔は黒かつた今は銀髪をキュッとうなじの辺りで束ねた、いつたいアンタは何歳なんだという疑問を投げかけたくなるほどあまり老けていない姿の我が相方は、不満そうに形のいい眉を寄せた。

「いいじやないです、それくらい孫にゆずつても」

「よくないですよ！ この世は弱肉強食つ、喰える時に喰わぬは愚か者つ！ 嘉れるモノがあつてそれを残す者は、もはや生きる価値なしつ！ ですよ？」

「ですよ？ つて、だからなんなんですか。言葉の使いどいろを間違えていますよ。力んで語つておいて、恥ずかしいですよ」

我が言葉を聞いた隣に座るお人は、いきなりヒジ鉄の制裁を放つてきおる。

「つっ！ …… も、もう私も若くないんですから、そういうのは御勘弁願いたい」

肋骨にヒビが入つてそつた感じに、痛みを引きずるんですけれど……。

「それくらい当然の報いです。なんですか、恥ずかしくて語りたくないからつて、私の塩まんじゅうをスケープゴートに使つたつてつ！ 許せませんよ」

「ゴブシを握つて、憤怒する我が相方さん。

「明日、買ひなおしてきますから、一発目を放つのは御勘弁願いたいです。素で、素で昇天してしまいそうなので」

「べつに私は、塩まんじゅうの事で怒つているわけではないのです」

「じゃ、じゃあ何に？」

「恥ずかしいと思ったその心に、私は怒つてゐるのですつ。私たちの物語ですよ？ 私たちの生きた証ですよ？ それが恥ずかしいつて、なんですか。私は聞かれて恥じるような生き方はしてませんよつ！」

我が相方さんは、どこかの独裁者みたいに力説する。

「……そ、そうですね。すみません」

ついつい気圧されて謝ってしまったが、べつに私とて歩んだ道のりを恥じてはいるわけではないのだ。でもね、改めて語りうるとすると、顔面が熱くなるというのか、なんというのか。

「自分の人生を語れる相手が居て、たとえ自分が死してもそれを語り継いでくれる者が居る。それはとても恵まれた幸福なことなのですよ。だから、自信を持つて私たちの生き様を、後世に語り継ごうじゃありませんか、ね？」

その勢いでアナタが自らの子らに、寝物語として自分の生き様を語りすぎたせいか、モノの考え方がものすごくアナタそっくりになってしまった息子と娘を思つと、若干の抵抗がなくもないのですがね。

「まま、昼寝から目覚めたら、語つてみましょうかね」

食に対する異常な執着がある事と、セロトイドによるを除けば、人としてよき例になるでしょうし。

「じゃあ、それまでに塩まんじゅうを買って来てくださいよ」

「さつき買いたおさなくてもイイって言つてたじゃないですか」

「そんなこと言つてしませんよ。怒つていない、と言つただけです」

「……さいですか」

そんなこんなで、塩まんじゅうを再購入しに行くハメになつてしまつたが、

「まあ、いいか」

「き使われているおかげか、足腰はいまだに弱りきつていないしま、悪いことばかりではない。

自らの“経験／人生”を物語れる相手がある、

それを聞いてくれる相手がある、

それだけで人生、捨てたものじゃない。

といひ言葉を、どじかの映画で見たか聞いたかしたのを、いまふ  
と思い出したのだが、私は孫に自らの物語を語り終えたら、コレに  
もう少し言葉を付け加えて、それを物語のシメの言葉に使おうと思  
う。

物語を共につづるヒトが隣にいるところだけで、  
その物語は、よりこいつそ面白くなる

『ザ・刀と毒の旅』 The Tou and Ichinis  
travels

第一部【起】終幕。

第一部【承】開幕

## 承／第九話：夜明け

「残念なお知らせです。塩まんじゅうは、『好評につき完売いたしました』

縁側に腰を下ろし、庭を流れる風を感じながらお茶をたしなむその御方に、私は深々と、それはもう脳挫傷で死ぬんじゃないかとうくらい深く勢いよく頭を下げて詫びた。

だが、なかなかリアクションがない。

苦痛というべき沈黙が私を襲う。

自らの罪によって強いられる死へのカウントダウンを噛みしめながら、十三階段を一步、また一步と踏みしめ進む死刑囚のことく。

「コチコチ」と時を刻む柱時計の音が、今まで経験したことないくらいに強調されて耳へと流れ込んでくる。

「コチコチ、コチコチ」

ゴクリッと思わず生睡を飲み込んでしまう。

床にめり込みそうなほど深く密着させている額に、嫌な汗が、脂

汗がジワリをにじみ出ているのがわかる。

呼吸もなんだか不規則で、胸がなんだか苦しい

ふいに、気配が動くのを感じた。

視覚は怖くてギュッときマブタを閉じてしまつてるので機能していないが、嫌でも音を拾つことをやめない頑固な聴覚が、衣擦れの音を微かに聞く。

気配が、恐怖すべき気配が、超近距離前方で動きを止めたのがわかる。わかつてしまう。

奥歯がガタガタと鳴りそうだ。

というか、もう、お股の間から何か漏らしそう。

こんな怖さ、怖がられる事をなりわいにしているであろうスースー姿の方たちが搭乗している高級車に、自転車でこすつてしまつたとき以来だ。

「 です」

なにか、前方にいらっしゃる御方が言こなさつたが 不覚にも、うまく聞き取れなかつた。聞き返すのは恐りしそうで、できよひません。

「もういいですよ」  
「はい？」

「もういいですよ。無いものを求めたつて、仕方ないじゃないですか。そのうち買い直しておいてくれれば、いいですよ」

前方のお方の声色は、それはもう平静で。

むしろ逆にそれが怖いのだが。

「お、怒つて、ないで『ござりますか？』

長いこと油をさしてもらつていないブリキ人形の『とく、ギギギ』と軋む音が聞こえそうな硬い動きで、面を上げ、前方のお方の表情をつかがつてみる。

お茶が飲み干された湯のみを両手で包むように持つていらっしゃる、昔は黒かつた今は銀髪をキュッとうなじの辺りで束ねた、いつたいアンタは何歳なんだという疑問を投げかけたくなるほどあまり老けていない容姿のそのお方は、呆れたように眉尻をさげている。「言葉遣いがオカシイことになつてますよ。それに呼吸と脈拍が乱れすぎます、それだと長くない寿命が更に縮んでしまいますよ?..」寿命を縮めているのはアナタなのですがね。

ともあれ、キレイなくてよかつたです。即死の危機からは脱した、ということだと思しますので。

私は正座の姿勢で、

「 .....ほつ」

と一息ついた。

強張つていた全身の筋肉が、一気に弛緩する。

「なにを『ほつ』としているんですか」

年齢不詳の銀髪さんは、呆れた表情のままに、お茶のおかわりを淹れに台所へ向かおうと一步を踏み出した

「あらっ？」

と思つたら、和服じみた民族衣装の裾を踏んで、一ぱりぱり倒れこんできた。

私は正座しているので、どうせに避けようがなく。

まつたく、いくつになつても……このドジつ娘め。

とでも言つてやううど、受け止めよつかと思つたのだけれども、残念な事に年齢不詳の銀髪さんは身体の前に両手で湯のみを持つており、その湯のみはずつこける勢いにのつて、まるでハンマーを振り下ろすような勢いでこちらへ向かってきており、私の視線の先には湯のみの底がスローモーションで迫ってきて

「ガツはツア！」

額を湯のみの底でぶん殴られ、なおかつそれに続くように年齢不詳の銀髪さんが全身で突っ込んできおる。正座という姿勢のため、前方からかかる力にたいして抗うこと難しく、心もとない腹筋を駆使してみても、（自分の重み）+（銀髪さんの重み）+（ずつこけの勢い）にかなうはずもなく、

「ぬおッはツア！」

前の次は後と、後頭部を床に強打し、正座の後倒しといつ無理な姿勢と年齢不詳の銀髪さんの体重の苦しさを感じ　急激に、なんだかとつても眠くなってしまい、しかし眠気に抗う気力は湧かず、なるがままにすべてをゆだね……

薄ぼんやりとした意識が、なにかをとらえた。

それは心地いいと思えるもので。

その心地好さにすべてをゆだねていたら、それが詩であることに気がついた。

どこかで聞いたことがあるよつな、とても耳触りのよい詩であると。

不意に、なにか温いものがそつと自分の手に触れてきたことに気

がつき、それを起として意識が鮮明に近づいて、詩が、歌声が至近から聞こえていることを知り

ふうっと歌声は途切れ、手からも温もりが消える。

歌に聴き入つていたオレの意識はもうすでに覚醒しており、歌声の主がなかなかの歌唱力をもつてているという驚きよりも、なぜこの歌を歌声の主が知っているのかという事のほうが不思議で、

「どうしてこの歌を？」

疑問を口に出していた。

「あら、起きていたのですか刀さん。もう、急に動かなくなつてしまふから心配してしまいましたよ。と、それはともかく、うわごとのように“塩まんじゅう”と連呼していたのですけど、塩まんじゅうって何ですか？」

オレの疑問に答えることなく、自らの疑問をかぶせてくる、黒髪を肩口でテキトウにぶつた切つた、紫が主色の民族衣装に身を包んだ人物は、なんでかオレを横から覗き込むような体勢 バストアツブな絵図で我が視界に映りこんできた。その背後には星々が煌く夜空が広がっている。

若干の思考の間を置いて、自分がその人物に膝枕されているということに気がついて、急にこいつ恥ずかしくなり慌てて身体を起した。

とたん、視界がぐわんと揺れ、なんだか頭が重い というか、後頭部がズキンズキンとうずく。

なんだ、なんでこんなに後頭部が痛むんだ？

オレはズキズキする部位を優しくさすりつつ、思い当たる節を探してみる……。

んんー？

そういえば、オレは日記を書いていたような。

いや、書き終つて

本棚の整理中に発見した懐かしき手帳を再読していくうちに、時

を忘れて……。眼に入れても痛くない孫に、一概には言いがたいほどにトンデモナイ体験談が書かれた手帳の中身を訊かれて、誤魔化す為に塩まんじゅうを生け贋に捧げて話をそらし、でも「私の塩まんじゅうをスケープゴートに使つたつてっ！」と相方さんを激怒させたあげくに塩まんじゅうを再購入しに行くハメになつて、しかし何だか嫌な気分じやなかつたから恥ずかしくもよさげなセリフをぬかして、だけれども残念で悲しいことに塩まんじゅうは売り切れゴメンで

「……あれ？ なんか、んー？ 色々どいぢや混ぜになつているような？」

夢と現の区別が曖昧で。

いやしかし、どちらにせよ後頭部が痛いことには違ひなく。

夢にせよ現にせよ、痛みの原因は、明後日の方向に視線をやりつつもこちらを見ている人物 壱さんであると確信が持てる。

ノリでボディータックルされるか、湯のみで殴られたのちボディープレスされるか、の違いでしかなく、地に後頭部を打ち付けた原因は他にあるうハズがない。

いやいや、後頭部の痛みの原因なんかイマサラビツヒヨウもないのだから、どうでもいい。

そんなことより

「塩まんじゅうってなんですか？」

壹さんが素敵な疑問顔で繰り返す。

アンタはそろばつかですか。夢でも現でも塩まんじゅうなんですかッ。

と若干の苛立ちを覚えたところで、なにが好転するわけでもないので、

「それはそれは美味しい、ほっぺたが落ちるにとどまらず、他人を湯のみでぶん殴つたあげくにボディープレスしたくなるほどの味わいな　おまんじゅう、ですっ」

「それは“しお”という名の危ないお薬が混入した、いろんな意味

でオイシイおまんじゅうなのでしょうか

眉間に小じわを刻んで、真剣な表情でおひしゃる壱さん。だが、

なんでそんなどうでもいいことひりで、眞面目な反応を返してくださるのかしら、ねッ？

「いやもひ、危ない意味の“オイシイ”おまんじゅうでいいですか  
ら、オレの問いかけに答えてくださいよ」

「問い合わせ？」

んな、可愛く小首を傾げたつて何も出ませんよ。てこうかむしろ  
オレが出して欲しいのですよ、返答を。

「せつを口ずさんでいた歌についてです」

「見上げていらんですか？」

「そうです」

と力んで言つてみたものの、なんでか壱さん黙りこくり  
沈黙……。

なに「ンは。どんなジラシのプレイですか。

「いえ、べつにジラシで楽しんでいるわけではなくて、あの歌について何を問われているのかわからなくて」

壱さんは眉尻を下げて困ったさんな表情をする。

ああ、なるほど、急ぎすぎましたかオレ。

「どうしてあの歌を知つているのですか？」

やう、どうして壱さんが、“見上げていらん夜の星を”を知つているのか。

オレもリアルタイムで知つていいわけではないが、テレビを観て  
いると昭和を代表する名曲であるとかで不意に流れていたりするし、  
最近でも有名なアーティストがカバーして歌つてしたりするし、  
か“坂本九”氏の歌であったと思つ。

つまり、オレの世界での有名曲である。

それを、なぜ壱さんが口ずさむ。

「どうしてつて」

なんだそんなこと、とでも言つたげなキョトンとした顔つきで、

「 覚えたからに決まってるじゃないですか」

あたりまえじゃん、と壱さんの表情が語っている。

もうひつ！

抱きしめひやうひつ！

形容し難い、指先をワナワナと動かしまくってしまう、煮え切らない、全身を駆けずり回るこの感覚が、もはや憤りとかそういうモノを超越して、いっそ抱きしめてしまいたくなる。という奇妙な感覚が、お頭の九割を占領したが、しかし優秀な理性というか自制心が、それらの奇妙な感覚を駆逐して、オレに冷静さを取り戻してくれる。

「いやもひつもつともなんですけれど、そうではなくて……、えーと、どうやって覚えた　いや、そう、誰かに教わったんですか？」

「ええ、そうですよ」

オレはやつと最適な問いを貰ったようだ。

そして壱さんが語るに、

「ほり、まえに鉄の大鳥のお話をしたことがあつたぢやないですか、じつはですね、そのお話を私に聞かせてくれた人が、先ほどの歌も教えてくれたのですよ」

アバウトすぎてオレが得たかった回答とはちょいと違うが、

「ちなみにどんな感じのお人でしたか？」

兎にも角にも、いまのオレは、自分の世界とのつながりが髪の毛ほどの細さでも得られれば喜ぶべき事態なので、些細な情報でも欲しい。

「そうですね……」

深いところにある記憶を呼び起こそうとしているのか、壱さんは曲げた右手人差し指をアゴにあてて、思案顔で「んんー」とうなり、「ひとつ約束を果たせずに来てしまった、せめて歌よ響けよ世界を越えて　と言っていたのが印象的な方でしたね」

うん、と一人思い出し納得したように壱さんはうなずく。  
来てしまつた、世界を越えて、か。やっぱりオレと同じような人

が居る可能性は大きいと考えて間違いない、のかな。

いや、でもしかし、壱さんに歌を教えたその人物は、ここが何所だか検討がついているのか？ “来てしまつた”つて、来たくなかつたけど、来てしまつたていうことなのか？ んんー考えても、よくわからない。

オレが思考の迷路に迷い込み始めたならば、

「ふあ～」

壱さんが大きなアクビをきました。

そしてスクツと立ち上がるや、

「それでは刀さん、たき火のばんと見張り、交代です」

と言い残し、いつの間にか握っていた杖をたくみに使い、少し離れたところに在るリアカーの近くまで移動し、杖でなんだろう毛皮のカタマリのようなモノをつつくと、姿勢を低くして手で直接それの感触を確かめ、その中へもぐりこむ。よくよく目を凝らしてみると、その毛皮のカタマリの下には、シミさんとバツが安らかな表情で寝息をたてている。

なんだ、どうこうこと？　たい？

疑問と共に意識を広げると、どうやらオレはたき火の前で壱さんに膝枕してもらつて寝ていたらしいといつことを知る。

「で、オレにどうしようと？」

あまりにも周辺警戒とたき火ばんがヒマを極めるものだったので、どうやら壱さんにボディータックルされてそのまま寝ていたらしいオレが見ていた夢を含めた、いまに到るまでの出来事を日記帳に書き書きしたわけだが、

「さすがに、眠い」

星々が煌く夜空は、いまや薄明るい。

いやまあ、つまるところ、気持ち良さそうに寝ているお人を叩き起こすということができなかつたマイチキンハートなわけで。

夜の次には朝が来るわけで。

オレは眠いわけで。

早くどなたか自然起床してくれないかなあ……。

そんな事を願いつつ、起きているのか寝ているのか曖昧な思考の中をただよっていたオレの耳に、

「どなたかアーッ！ 助けてくださいましーーー！」

そんな騒音が飛び込んできたのは、果たして夢か現か

なんだか遠くが騒々しかった。

テレビをつけたまま寝入ってしまったときの感覚、とでも言おうか。

夢と現の境目が、つまりははうるやく。

テレビの電源を切るために 騒音を排除して安眠を獲得する為に、少し意識を覚醒に近づけ、薄日を開けた

瞬間、若干の砂埃をまとつて登場したソレと、オレは寝起きで「ゴンニーチワ」したくなかったけど、してしまった。

ソレとはなんぞや？

当然、気になつてあたりまえなのだか、オレは数泊の間、ソレをまじまじと見つめても、初めはソレが何なのか理解できなかつた。というか理解したくなかったというのか、拒絶というのか、現実逃避というのか。

ソレは、獣の頭部だった。

それもやたらとテカイ。

巨大なイノシシとでも言おうか。かの有名な宮崎駿監督作品“ もののけ姫 ”に登場した、あの巨大イノシシを思わせる。

あぐらをかいて、たき火の番をしつつ居眠りをこいていたオレの目前で、頭を地べたに這いつぶばらせている巨大イノシシ。だがひとつ、奇妙な点がその巨大イノシシにはあつた。

頭のテッペンから、棒のようなモノが生えているのである。長いとは言いがたい我が人生だが、頭から棒を生やした生物など見たことも聞いたこともない。

棒状のモノを見つめていたらば、その延長線上、巨大イノシシの背中の方から、朝日をバックに、人影が現れた。

逆光になっていて誰なのかよく見えないのだが、

「朝ごはん～朝ごはん～、美味しいおいしい朝ごはん～」

とてもなく上機嫌な感じで「朝一」はん」を連呼している声には聞き覚えがあり、

「……壱さん？」

試しに名前を呼んでみたれば、

「あら、刀さん。おはよーい!」とこます。早速、朝一はんにしましたよう！」

彼女は楽しそうに言い、そこから流れる動作で、巨大イノシシの頭部に刺さつてその息の根を止めたと思しき棒 壱さんの杖をねばつこに音をさせながら引っこ抜いた。

なんか、あまり心臓によるしくない目覚めだ……。

頭の中身が「ンー」チワしちゃつている巨大イノシシから皿をそむけて、気分転換にと、朝の空を見上げてみる。

あ、小鳥さんがお歌を歌いながら飛んでいるよ

「さ、刀くん。まどろんでないで、解体するの手伝つてちょうどいいつの間にか背後に居たシミさんが、ポンッとオレの肩をたたく。件の日本刀風お肉解体包丁を肩にかつぎ、朝日をあびながら、そよ風にポニー テイルをゆらし、爽やかに。

生きていたモノを食べるためには解体する。

そんな人生初の経験をした本日 といつても実際には、巨大イノシシを肉にしてゆくシミさんの手際を眺めるばかりだったが、オレはイマサラながら、“いただきます”と“じちそうさま”の重要性っていうのが、意味というのか、を理解した気がする。

巨大イノシシのお肉は、それはそれは獸で肉々しいモノであったが、

「「」わかつもまでした」

気持ちちは美味しいいただきました。

「それはそうと」

オレは、猛獸の「」とく骨付きお肉に喰らいついでいる壱さん以外の方々に、ずっと氣になっていたことを訊ねてみる。

「当然のように一緒に朝食を楽しんでいる、そのお人は、誰さんなのでしょう？」

謎なお人は、我が正面、はふはふ言いながら焼きたてお肉を食べているバツの隣で、お上品に巨大イノシシ汁をすすっている。金色で装飾された白主色の法衣　　のような服を身にまとつた、長い金髪が印象的な人物。女人の人かな、たぶん。

「いま食ってる、お肉を連れてきた

「ミミさんが食べるのを止めて、我が問い合わせに答えてくれようとする

が、「……そういえば結局のところ、どちら様なのかな？」

巨大イノシシを連れてきたということ以外、知らないらしい。そういうえば、夢と現の狭間で「どなたかアーツ！　助けてくださいましいーツ！」って誰かが叫んでいたのを聞いた気がするのだが、叫びの主は、この長い金髪のお人なのかな。

そんな感じで疑問の眼差しを向けると、長い金髪のお人は、これまた上品に口元を拭つてから、

「助けていただいたお礼も、あげく名乗りもせず、失礼いたしましたこと許してくださいまし」

頭を下げ、

「わたくし、メスマ屋十一代目次期当主　　口工と申します」

朝日の下で、長い金髪に天使の輪を出現させお上品に微笑み名乗る口工さんは、なんだか本物の天使のように美しく、思わず見惚れてしま

「ぐおつぼつ！」

不意に腹部へひじ鉄の一撃を喰らい、いまさつき食べたものたちが喉の辺りまでリバースしてくるのを　　そこから先へ臨界突破しないよう堪えつつ、一通り悶絶してから、

「いきなりなにするんですかっ！　壱さんっ！」

オレは隣にいらっしゃる、理不尽な暴力の発生源へ抗議の声を上げる。

「我が心からの訴えに、しかし壱ちゃんはお肉をもぐもぐと喰らって、ハムスターの！」とくぼつペを膨らませながら、「いえなにか、刀さんからとってもイヤラシイ気配を感じたもので、そのまま刀さんがエロエロ変態魔人に墮ちてしまつては、私はしては少し哀しいものがありますから つまり、愛のムチといつやつですよ」

メシを喰いながら愛のムチって言われてもね。といつか、一糸まとわぬ赤裸々な破廉恥極まりないイデタチの破廉恥漢 イワさんを地面から呼び出して共闘していたアナタに言われても、なんか説得力に欠けますよ。

ていうかね、

「壱さん、口のまわりが油でギトギトになつてますよ」「もつともらしく何かを語るなら、せめてお口のまわりをテカテカのギトギトにしないでくださいよ。

オレは布切れで壱さんの口元を拭いつつ、

「 誰も横取りなんてしないんですから、落ち着いて食べてください」

そんな進言をしてみた。幼子のような食い方をしますよね壱さん。「私は全力で味わっているだけです」

壱さんはぷくつとほっぺを膨らませる。

なんだかなあ……。

腹に一撃喰らつて一瞬でもイラッとした自分が、

「なんだかなあ……」

オレはとりあえず、腹への一撃のお返しに、壱さんのぷくつと膨らんだほっぺを、全力で突つつくことにした。

「仲がよろしいんですね」

オレと壱さんとのやりとりを、なんとか目を細め見ていたローハンは、不意にそんなことを言ひ。

「そうですか？」

不意にひじ鉄くれてくる人と、不意にひじ鉄くられた人との、どうして口エさんはそんな優しい眼差しで見れるのか。オレとしてはちょっと複雑な気分なのが。

「ええそれはもう、私と刀さんはお互いの趣向から毛穴の数まで熟知している仲ですから」

趣向は、まあいいとして。

毛穴って、壱さん オレとアナタはどんだけティープな仲なよ。

常識的に居ないでしょ。ビリの世の中を探してもさ。毛穴の数を熟知し合っているフレンドリーなんて。

ていうかむしろ教えて欲しいよ、我が毛穴の数を。すると、壱さんはズイといっからに身を近づけて、

「じゃあ深夜、一人つきりのとき語り合いましょう」

吐息が耳を舐めるほど近距離で、そんな事を言うもんだから、一瞬でもドキッとしてしまった自分が非常に残念です。

普通に考えて、お互いの毛穴の数について夜中に一人つきりで語り合っている光景って、それはもう狂氣的でしょう。

「ていうかもう毛穴の話はどうでもいい、というか置いておきましょ」

毛穴の話を続けたところで、得るものなんて何もなぞうですからね。

「そうですか？ それは残念です」

どうしてそんな心底から残念無念みたいな表情できるんですか壱さん。

まあそれも置いておいて。

「よく考えてみれば、オレが壱さんと出会ってから、まだ一週間も経っていないんですね」

なんかやたらと濃密な時間を過ごしたような気がいたが。

「あり、そうなんですか？ それにしても、いぶんと仲がよろしいよう見えましたけれど」

口工さんは口元に手をあてがい、お上品に驚きを表す。

「べつに、一緒に過ごした時間が親密だと同義であるなんて決まりはないでしょ？ 長くお互いを知っていても犬猿の仲ということだってありますし。それとは逆に、出会ったその瞬間から意氣投合して十数年来の親友のごとくなったりだつてします。ようは相性の問題なのですよ。その点、私と刀さんの相性は、それはもうビックリするぐらいバツチリだつたと、そういうわけです」

コブシを握つて口を動かす壱さんの力説を、口工さんは慈母のような眼差しで聴いて、最後にひとつ「なるほど納得」と肯く。  
いつたい口工さんは何に納得しちゃつたんだりう。ていうかバツチリな相性つて、何ぞ。

「それは、朝晩と えつと、その……」

なぜそこで言いよどむの壱さん。てか、朝晩ってなに。あれですか、食生活の相性ですか、朝メシ晩メシって感じに。

「そんな人前で言うなんて……恥ずかしい」

ええっ！

なにその、今までにないくらいの恥らつた表情はつ！

で、結局なにが相性バツチリなのか、オレが知りえるまえに、出発の準備 おかたづけとあいなつた。

おかげを行いつつ、次にどこへ向かうのかといつ話になり、「助けていただきたお礼をさせたいみたいので、是非に我家へいらしてください」

ならばと口工さんが提案してきた。なんでも本日中に訪れることになろう村は、口工さんが生まれ育ち、現在も暮らしている所なのだそな。

オレの知らぬ間に人助けをしていたらしく壱さんは、出された提案に対し、

「では、そうさせていただきましょう」

当然のように即承諾した。

遠慮つていうか、謙虚さつていうか、ザ・日本人なオレからすれば、承諾するにしたつて、もうちょっとまわりくどいデコレーションされたキレイな言い方があるんじやなかろうか、と思つてしまつただが。

「どうして好意を受けるのに、まわりくどい態度をとらなければいけないんですか？ むしろ私には、失礼に思えますけど。なんでも素直が一番ですよ」

言うつや、我が右側にいらっしゃる壱さんは、探るように左手を空にさまよわせ、その手がオレの肩に到達すると、そこからたゞつて首から頬の方へ、そして左手を我がアゴとほっぺの境目にピタリと置き、

「…………ですから私、自分の心情に素直にならうと思います」「モノを捉えぬ潤みの増した瞳でこちらを見上げ、なんだかとつても悩ましげな表情をする。

なんだかとつてもロマンティックな、このまま我が頬と壱さんの唇が衝突事故を起こしちゃいそうな図じやないか。

そんな状況がゆえに、ひとつだけ疑問を訊ねさせていただきたい。「どうして壱さんは素直になると杖の石突を　あのイノシシさんの脳天ぶち抜いちゃった杖の石突を、我が頭部に突きつけることになるんでしょうかね？」

艶っぽい表情の壱さんは現在、左手でガツチリと固定したオレの頭部に、右手で握った杖の石突を突きつけているのです、なぜか。「さつき私のほっぺを『ぶうつ』でしたじやないですか刀さん。ですからその報復ですっ」

そんな素敵な笑顔でおっしゃられると恐怖倍増なんですが。ていうか、報復つて、ぷくっと膨れたほっぺを軽くつついただけじゃないですか。

「生まれて初めてです、あんなハズカシメを受けたのはつなにその敏感過ぎる羞恥心はっ！」

「どうかそれ以前に、アナタ、百倍は恥ずかしいことしてゐるでしょう。絶対に。」

て、思つてゐるそばから、鋭利な何がしかか我が頬に食い込んでき  
ちよるぜおつ！

お口の方が二回な空氣を吐いて、そのあと

と仕切りの拍手をひとつ打つて、シミさんがら登場した。  
「かたづけ終わつたから、そろそろ出発しましょ。」

目前の暴挙が見えていないのか、ツリさんはいたつて平静な態度

だ。

「あ、あのジリジリ」

「田の前で繰り広げられている事について、なにか思ひどいろはないのでしょうか？」

できれば、いますぐ迅速に春さんを止めていただきたいのですが。  
なんて我が心情は察してはいただけないようで、シルさんはオレ  
と春さんへ交互に視線をやってから、

西人

「心のやうにせよ、心のやうにせよ、平穏過れる思春の持ち主のやうだ。土鍋で寝るが、口を離さぬよつて、ほほえましい光景を眺める眼差しをしきや

つているもの。

ほどにね

ほどほどとか言い前に止めていただきたい。ていうか、背を向けてリアカーのほうへ歩みださないで

カームバーツク！

といつ心からの叫びを眼差しで全力表現していたら、不意に食い

込んだ鋭利なヤツから我が頬は解放された。

が付着してた。

「ヒドイですよ壱さん。ホントに出血しちゃつてるじゃないですか  
っ」

てか、下手したら穴が開こちやうだつたんですよ。冗談にしても過激すぎます。

我が抗議を耳にした壱さんは、確かめるように左手で我が頬に触れ、指先が液体の感触を知るや、

「あら、ほんとうに。でもコレくらいこなれ、ツバツけておけば治りますよ」

悪びれた様子がミジンコ程もない態度で言つてきた。  
なんか怒るのもバカらしいと思えてくる。

「はあ……」「……」

溜め息を吐いたそのとき、我が頬を生温かくて湿つた軟質の何かが撫でた。背筋にゾクゾクと変な感覚が走る。

数瞬の間、なにが起きたのかわからなかつたが、「な、ななにしてるんですか壱さんっ」

超近距離にある壱さんのお顔を拝見して理解した。

「なについて、だからツバつけたんですよ」

言つて壱さんはチロリと舌を出す。

ていうか、つまるところ、壱さん、アナタ……オレのほっぺを舐めやがりましたね。

「さあ、さ、そろそろ出発しますよ」

だか壱さんは何事もなかつたかのように、我が手を引いて、眼になれといつてくる。

なんだかなあ、  
どうなんだろう、  
なんて思考するヒマもなく、

オレは壱さんの眼を兼ねたリアカーを引っ張る人動力となり、我ら御一行は、口エさんが生まれ育ち暮らす村を田舎し出発した。

川べりから出発して、川沿いの踏み固められた道を、えんやえんやとリアカー引いて歩いたわけだが、なかなかどうして村までは距離があり、さすがにリアカー引きっぱなしでは、我が体力のキャパシティーを軽く越えてしまう。そんなわけで。

「あの、そろそろ休憩にしませんか？」

いっぱいいっぱいな雰囲気が声に乗つかつてしまつてているのが、自分からして恥ずかしいというか情けないのだが、身体はプライドよりも休息を求めてるので、言葉はかなり素直に出てきた。

「なんですか、もう息があがつてしまつたのですか？」

言葉だけだとなんか気にかけてくれているような老婆さんの物言いだが、表情は露骨に「情けない」と語つてている。

事実、自分でもそう思つ。

女性三人と子ども一人が、まったく疲れの色を見せていないのに、そんな中にあつてチキンハートでも男である自分が、ヒイヒイ言つちゃつて休ませてくれとは。しかし残念ながら、意地を張つて無理をする余裕もない。

と、事ここに至るまでの出来事を、オレは倒木に腰掛け休息しつつ、件の手帳に書きとめた。

ちなみに、べつに疲れていないけど休んでくれている方々は女性三人は、ツミさんの淹れたお茶をたしなみつつ、なにぞ楽しそうにお喋りをしている。女三人揃えばカシマシイ、というのだったつけか、こういうの。

「と、トウお兄ちゃん。」「これはなんてよむの？」

で、もう一人オレの休息に付き合つてくれている人物 バツは、日記を書く我が隣に腰掛けて、ときおり手帳に書かれている文字を指差しては読み方を問うてくる。どうやらオレの書く異文化な文字に興味があるようだ。

「カシマシイだよ」

漢字で書くと“姦しい”。まさに読んで字の如く。

ともあれ、国語を教えてあげられるほど、オレは学を極めていいので、あまり問われても困るのだが。

「ど、どうこういミなの？」

知的好奇心に田を輝かせながら問われては、むげにはできません。ああ、なんで異世界に来てから学校の勉強をもつひよつと真面目に受けおけばよかつたと思うんだろうな……。

無いものねだり、と言えばそつなのだらうが、思ったところで後悔は先に立ってくれない。

「目の前でおこなわれている光景の事だよ」

女性陣を示して、とりあえず答えてみるが、言つた途端に、正しいのか正しくないのか自信がなくなってきた。

ともあれ、ここに来てわかつたことがある。

この世界の方々には、おおよそ日本語喋りが通じるけれども、ここに存在しないモノの名称だったり、存在するけれど名称が違うものだったり、そもそも概念が違うものだったり、があつて通用しないモノもあるということ。

そして文字はまったく共通していないということ。とりあえず、日記を盗み読みされる心配はまったくないということが知れた。正直、わかるうとわかるまいと何かが変化するようなことはないが。

まあいいや。いまはとりあえず、

「あの、口エさん。あとどれくらいで村に到着するのでしょうか？」  
自分の体力が村に到着するまで持つかを心配しておこいつ。

## 承／第十壱話・喰い過ぎ、注意！

「では、刀さん。私と夫婦になりましょ」

壱さんは真剣そうな声色で、そんな突拍子もない事を言い切つた。

「は？」

オレは聞き間違いであると確信しているが、

「いま、なんと？」

確信をさらに確たるものとするため、聞き返した。

「何度も言わせないでください」

壱さんは苛立たしげにオレの手首をとり、

「私と刀さんは、夫婦 メ・オ・トツ！ なんですか？」

そしてその美味そうな匂いを手繰るようにして、ガツガツと杖で足元を確認しつつ舞台上へ歩みを進めてゆく。

べつにオレは行きたくないのだが、壱さんにへし折らんばかりの力で手首を拘束されてしまつてるので、抗つても強制的に引きずられ、その背を追つ。

美味しい匂いただよう舞台上へ、壱さんとオレが上がると、お祭り特有の高揚感に支配された人々が声を飛ばしてくる。

みんな楽しそうだ。

でも残念ながら、オレはお祭りとかの異様な盛り上がりがちょっと苦手だったりする。決して嫌いなわけではない。ただ、積極的に参加するよりも少し距離を置いて見物する事を好む人種というだけだ。

が、オレ強制参加決定なよつで。

「なんだかなあ……」

現実逃避を兼ねて、回想することにでもしよう。

なんで唐突に、壱さんが夫婦になりましたなんて言い出したのか。

あるいは彼女の性質をもう少し知つていれば、予想する」とも可

能だつたのかもしれない

とりあえず、体力の限界を突破する前に、ローハさんの村へ辿り着けた。

家へと道案内をしてくれたローハさんの背を追いつつ、オレは辺りを見回す。

レンガ造りの家と木造の家が密集するように立ち並んでいた。ローハさんが言うには、一田あればこの村の全域を巡れるらしい。異国情緒に八割、ローハさんの話に二割の意識をさしつつ、歩みを進めていると、不意に開けた場所に出た。

共同の水くみ広場なのだそうな。言われて見れば、広場の中心には井戸がある。井戸を見ると、髪の長い女性が奇怪に喉を鳴らしながら這い上がってくる光景を思い出してしまつのは、某ホラー映画が有名すぎるからなのか、あるいはアノ映画を見てちょっとチビッてしまい、色んな意味で心についた傷のせいなのかな。

ともあれ、言わなければオレはその井戸の存在に気がつかなかつただろうつ。

なぜか？

井戸の向こう側に、地味な井戸より目立つものが存在するからだ。学園祭のようそうを思い起こさせる、手作りかん溢るる舞台と看板。そこに群がる楽しそうな雰囲気の人々。遠目から眺めているだけで、なにか本能に近しい部位にある感情を刺激する。どこかで感じたことがあるであろう感覚 太鼓の音色が腹に響いてくれたら、なんかシックリくる。焼きそばの出店があつたらなおのことといい。雰囲気だけで推測すると、そこにはお祭りの気配が広がっていた。看板に書かれている文字が読めたら、なにがおこなわれているのか推測するまでもないのだろうが。

「明日から収穫祭なのですよ」

楽しげに誇らしげにローハさんが教えてくれた。

祭りにも様々なモノがあるんだなあと思う。収穫祭か、話に聞い

たことはあるが、学園祭と花火をぶつ放す夏祭りしか実体験のないオレからすると、なんか新鮮な感じがする。

「そんな事より、先ほどから美味しいそうな匂いがするのですけどこれはいつたい？」

溢るる唾液を「じゅるり」とすすりつつ、鼻をひくつかせる壱さんは、危ないお薬でもキメてしまつたかの「」とく嬉々としてテンション高く浮き足立つてゐる。

美味しいそうな匂いだけじゃまだイケるのは、ある意味で幸せだらうなあ。と思いつつ、

「確かに、イイ匂いしてますよね」

壱さんはテンション急上昇はしないが、疲れて空いたお腹を抱えるオレとしても、この匂いは魅惑的だ。口内がやたらと潤つて、気を抜くと口の端からからツーっと汁が垂れてしまいそうになる。「明日の本番へ向けて、今日は予選大会なのですよ。夫婦大食い祝事が、収穫祭の玉玉ですので」

舞台のほうを示しながら教えてくれる口Hさんの話しを聞いているのかいないのか、「

「なにを食べるのですかつ」

祭りよりも大食いの品田が壱さんは重要なようだ。

「おまんじゅうです」

口Hさんは気分を害すこともなく答えてくれた。

「おまんじゅうですか　なんとも、いまの私にとって喜ばしい品田です」

壱さんのテンションに極まり。言葉だけなら落ち着いているように思えるが、体はジリジリと匂いただよつ舞台のせつへにじり寄つてゐる。

「そんなど、おまんじゅうを食べたかたですか？」壱さん

「ええ。今朝、刀さんが『塩まんじゅう』と連呼していたのを聞いてからずっと」

さいですか。単純ですが、見聞きしたモノが不意に食べたくな

る感覚は、わからぬくないですよ。宮崎駿監督作品“千と千尋の神隠し”を視聴して、冒頭のお父さんとお母さんが“神様が食べる料理”を喰つているシーンに登場する食べ物がとっても喰いたくなつた経験がござりますから。

「ああっ、もう我慢なりません！ 私は予選大会に出ますっ」

「痛い。痛いですよ壱さん。手に力を込めすぎつ。オレの手を握り潰すおつもりですかっ！」

「でも、夫婦大食い祝事つていうくらいなんですから、夫婦じゃないとダメなんじやないですか？ ね、口工さん？」

握られた手の血色がどんどん悪くなつてゆく。が、悲しいかな力ワザでは壱さんに敵はないので、力んだところで出れぬものは出れぬという現実をお教えするほか、我が手の血色を正常に戻す術はない。

「夫婦大食い祝事は、“新婚夫婦がこれから食べるに困らぬように”という願いと、“長年共に過ごしてきた夫婦がこれからも食べるに困りませんように”という願いを込めた祭り事なので、出場権があるのは夫婦のみということになつています。でも夫婦なら村の者であつても外の者であつても、それを問わず出場できますよ」

口工さんの親切丁寧なご説明を聞いて、飢えたる強者な壱さんも心を静めてくださるかと期待した自分が浅はかでございましたつ。痛い。痛いです。よりいつそう手に力がこもつておりますよつ！

ねえ、壱さんっ！

ここにはもう、声を荒げて抗議せねば、と思い、壱さんのほうを見てみると、

「…………」

手にこめる力は右肩上がりに黙り込み、眉間にシワを刻んで、なにやら真剣に考え込んでいる様子……。なんとか“声をかけるべからず”というオーラが壱さんの全身からみなぎつているように見えるのは、強迫観念によるオレの幻覚かな。それとも生存本能による幻覚に見せかけた警告かな。

つまるところ、よくわからない気迫にオレは負けるわけで。声なんかかけられるわけもなく、ただ呆然と壱さんが静まることをお祈りするわけで

と不意に、壱さんから形容し難い気迫が消え去り、万力の「」とき手から力が抜けた。

そして壱さんはイタズラを思いついた子どもを思わせる素敵な表情で、

「では、刀さん。私と夫婦になりますよ」

というところでプチ回想を兼ねた些細な現実逃避は終了いたしまして、イヤでも現実と向き合うわけです。

舞台の上には長テーブルと六人分の簡素なイスが設置されており、壱さんを含めた六人のお人がイスに座りスタンバっている。ちなみに壱さん以外は男の人だ。

オレは長テーブルを挟んだ壱さんの正面につつ立っている。立っている人数はオレを含めて六人で、オレ以外は女の人 どうやら、長テーブルを挟んで居る男女のペアが出場する一組“夫婦”であるらしい。

座った人はひたすら喰う係り。立っている人はまんじゅうを運んで補充し、なおかつ座っている人の口へまんじゅうをぶつ込む役目をになつてゐるらしい。つまり、大口を開けて鎮座する壱さんに、オレがまんじゅうを喰わせると、そういうわけか。オレ的には自分で食べてよと思うが、“食べる人”的ベースや限界を“食べさせる人”が理解しているか否かというところで、相方との親密度／理解度を推し量る目的がこのルールにはあるらしい。こんな事で親密度がわかるとはオレには思えないけれど。

というか、シレツと“夫婦大食い祝事（予選）”に出場してるので、オレと壱さんは夫婦ではない。なので、この“夫婦大食い祝事

(予選)“元出場する資格はない。などなんか出でやつてこる。ダメじやん。

「壱さん、お腹空いでるのはわかりますけど、ウソはやつぱりダメですよ。よつにもよつて祝い事でウソつて、なんか輪をかけて悪いことしている感じで居心地がわるいです」

祭りの喧騒にまぎれ、虫の羽音ほどの音量で壱さんに耳打ちしてみるが、

「いまさら言つても後の祭りですよ、刀をさ。ここはこりきよく、お腹を満たしましょう」

まつたく悪びれた様子のない答えが返ってきた。

「それに、食べ物で遊べる方々の祝いなんて、ただの遊興です。真面目に考える必要なんてありませんよ」

悪びれていないが、ふざけている訳でもない声色で、

「食べ物で遊べることがどれだけ贅沢か氣にも留めない幸せを満喫している方々からしたら、私たちの吐いたウソなんて些細な事お祭りの余興くらいでしかないでしきょうから」

どこか冷めた印象の言葉が吐かれ終わるのを見計らつたよう、ふたつの一口サイズ蒸しマンをのせたお皿が壱さんの前に置かれ、それ等を満載した手押し車がオレの横にやって来た。

いいわけしようがしまいが、 “夫婦大食い祝事（予選）” は始まってしまったようだ。

鳥のヒナが、エサを親鳥に求める光景を思い出した。

大口を開けて、エサが放り込まれるのを鳴きながら待つヒナ鳥。

壱さんを含めた喰う係りの方々は、さしづめ鳴かないヒナ鳥か。

そんなことを思いつつ、壱さんの大口に一口サイズ蒸しマンを放り込んでいたら、ひとつ疑問が生じた。口を開けているだけの人には蒸しマンを放り込み続ける、という図が六組分。それを見て、どうして会場の方々は盛り上がりがれるんだろう。おもしろいか？ この図はオモシロいのか？ 蒸しマンを喰わされている人と喰わしている

人を見てオモシロいのか？ 端的に言つて、メシを喰つていいだけの人を見て楽しいの？

なんて思考をしながら機械的に放り込み作業をしていたら、いつの間にか“夫婦大食い祝事（予選）”は終了していた。というか終わっていたことにオレが気づかず、勝手に記録更新し続けていたらしい。

壱さんはだいぶ余計に蒸しマンを喰つたようで、着ている紫主色の民族衣装みたいな服ごしに見てもわかるくらい、マンガの過剰表現のごとくお腹が膨れている。まるで妊婦さんだ。

「初めて一人でがんばった共同作業でしたね、刀さん」

膨れたお腹を愛おしそうに撫でながらそんなセリフを言われると、べつの意味に聞こえてしまふのはオレが妄想族だからですかね。ともあれどうしよう、予選を突破してしまった。

無駄に圧倒的大差で……。

「てか、なんで無理して食べ続けちゃったんですか。満腹でもう食べれないって言つてくれればいいものを」

ちょっと壱さんのせいにしている気はするけれど、お腹があんなオモシロいことになるまで喰う必要はなかつたでしょう。

「刀さんはおかしな事を言いますね。私は決して無理なんとしてませうツプスッんよ？」

態度は平静ですけど、「～せ」の後で口からなんか産まれちゃいそうになつてるあたりが、無理をしている証拠です。

お祭り特有の高揚感に支配された人々が飛ばしていく称賛の声を聞き流しつつ、口工さん、ツミさんとバツが居る所まで戻ると、「すごいです。これなら本戦でも優勝間違いなしですよ」

ウソぶつこいて出場したあげくに予選突破してしまつた事がどんなに大罪に思えてしまうほど、素敵過ぎる微笑と拍手で迎えてくれたのは、天使と見まごう口工さんである。

ツミさんとバツも称賛をもつて迎えてくれた。

無駄にがんばったのは、主に志さんであつて、オレは特になんにもしていない。ゆえに称賛されてもさしてうれしくもなく、ウソぶつこいたという罪悪感ばかりが降りかかる言葉によつて肥大化してゆく。

というわけで、素直に事を話してみた。

「あら……では未来の新婚さんが前倒しで出場したということですね。こんなにイイ結果がだせるのですから、きっと先は明るいことでしょう」

まつたく気分を害した風もなく、ロヒさんは「一〇一〇」と微笑みながら「うんうん」と何度もうなずいた。とつてもフトコロがお広いようだ。そして些細な幸福があつたかのようなほんわかした雰囲気をまつとて、オレ達を自らの家へ案内することを再開する。

「だから言つたでしょ?」

杖の代わりにオレの手を取りながら、そして得意げでもなく志さんが言つ。

「お祭りなんてオメデタイ事をしているのですから、起こつたことは余程じやないかぎり、良いほうにほうに解釈するものです。それにはズイと志さんはこちらに身を寄せ、オレの耳を吐息がくすぐるほどに顔を接近させてくる。

「まだ知れぬ未来では、あながちウソであるとは限りませう。 پすッんよ?」

そうですか……。でもね、未来を思うよりもね

人の耳元で吐きそうになるくらいなら、喋らないでいただきたいつ!

大惨事にするおつもりですか。オレの耳から肩にかけてをつ!

と、村に到着して早々忙しない感じであつた出来事を、オレは窓際にある安楽イスに腰掛けゆつたりしつつ、件の手帳に書き始めた。

壱さんの手とリアカーを引きながら辿り着いた口工さんの家は、威厳さえ感じる重厚な木造建築だった。メスム屋という銘の、おまんじゅう屋らしい。“夫婦大食い祝事（予選）”の蒸しマンもこちらの商品だとか。

案内されるがままに奥行きのある廊下を歩いてゆくと、密間らしき部屋に通された。すると壱さんはチョイとオレの手を引いて、「ベッドまで運んでください」

とお申し付けてきた。言われたとおりに寝心地良さそうなベッドまで行くと、壱さんは即行で大の字になり、ベッドに沈んだ。満腹でイッパイイッパイだったらしく。

でまあ、オレはしばしの間、満足したような可愛い寝顔を見せる壱さんを観察し そして、手帳に事を書いておこうと思い、窓際にある安楽イスに腰掛けて、「意外と書いてるなオレ」と自賛しつつ書き書きした。

ツミさんはメスム屋のおまんじゅう作りに興味があるらしく、口工さんに頼んで調理場の見学に行つた。バツは床にお尻を着いて座り、お茶の御供にと出された蒸しマンにパクついている。壱さんは大の字で休憩中。と、手帳に書き終わつてしまつて、手持ち無沙汰でどうしたものか……。

意味もなく手帳をパラパラめくつて なんとなーく、ホントに思いつきで、手帳の最後の方のページを丁寧にチギリ取つて、長方形の紙入手した。

なにをするのか。まあ、べつに大した事ではなく、紙飛行機でも作つて飛ばそつと、そんな思いつきである。

あつという間に、手の平サイズの紙飛行機は完成した。

窓の外にでも、景気良く飛ばそうかと思ったが、しかし他人の家の窓から良くな飛ぶポイ捨て的行為をするのは気が引けるので、室内で飛ばすことにする。というわけで、テキトウに投擲した。すると紙飛行機は、オレの折り方がヘボかつたせいか、予想だにしないアクロバティックな軌跡を描いて いままさにバツが喰わんとして



もう天然記念物っていうのかなんていうか国をあげて保護すべき純粹な子だようとオレは思うわけだ。

こんないもう じゃなかつた、弟がいたらなあ。オレはもうちつとマシな人格者になっていた気がしてならないよ。  
なんで我が父と母は、もうちつと頑張ってくれなかつたかなあ……。

なんてね、ことを思いつつ、

この年齢になつて初めて、嬉々として折り紙をやるきがする。  
こんなに楽しい気持ちになれるモノだつたけかなあ、折り紙つ

て

承／第十話…あんじゅう帝（前）

「なにをしているんですか？」

折り紙に興じていたらば、不意に背後から声をかけられた。

「折り紙ですよ」

オレは応え、いつの間にか目を覚まして明後日の方角を見ながら訊ねてきた壱さん的手に、雑だがなかなか悪くないデキの“折り鶴”を乗つける。

彼女は探るように慎重に指先の触覚を駆使して“折り鶴”的形状を読み取り、

「小鳥……のような形状が紙で再現されているようですが……、これが折り紙というモノなのですか？」

「そうです。それが折り紙というものです」

「どうか、それ以外の答えをオレはしない。

「知的な遊びのようですね。完成形へ到る形状を逆算しつつ四方形の紙を折っていくとは」

壱さんは言いながら、オレの折った“折り鶴”を分解してゆく。「なかなかどうして、私の知的好奇心という欲求をくすぐりますね。これは」

分解しきられ折り畳のついた四方形の紙と成り果てた“折り鶴”を、再び折り、元の姿へ復元しながら、壱さんは楽しんでいるような笑みを浮かべる。

「どうわけで、どうしてか、オレ、バツ、壱さん、の三人で折り紙をするという図がうまれた。

「バツう～、ちょっと手伝つてもいいえる?」

しばらくすると、教わった蒸しまんじゅうを試作中のジニアさんが調理助手を呼びに現れた。

「あ、う、うん。わかつたよ、お姉ちゃん」

バツは急いで作り途中な“折り鶴”を完成させると、シハヤの背を追つた。名残惜しそうな眼差しがだいぶ尾を引いていたけれど。結局、壱也と二人っきりになってしまった。だからビコしたといふわけではないのだが、なんとなく、黙々と紙を折る壱也の手元をに視線をやる。

「壱也さんは、なにを折ってるんですか？」

「ものす」へ真剣そのもので、興味がわく。

「んー」

手元は機敏に動くも、言葉は口の中で怠惰なようだ。けつこうなタイムラグの後に、壱也は口を動かす。

「あきました」

残念なことに、やっと出した言葉は、オレの問い合わせに対するフォーアンサー（for Answer）ではなかつた。

がしかし、

「あきるの早過あがせんませんか」

黙々と折り紙しているから楽しんでいただけているものと思つていたのに。

「だつて」

壱也さんは面白くなれつつ口を尖らせ、あるこはすねていのむつにも思える態度で、

「つやつぱりといです」

何か言葉をグビッと飲み込んだ。

「それよりも」

楽しことと思いつこちやつたつ、とにかくにパチンと拍手を打つて、

「男と女が部屋に一人きりになつてしましましたけど……刀さん、私にいつたい何をするおつもりですか？」

壱さんは訊いてくるが、

「オレが何かする前提で言われても困るんですけど」

正直、まつたく、なにも、オレは壱さんになにざるなんてこと  
考えてない。

「またまたあー。魅惑のわがままボディーを前にして、抑えきれな  
い溢るる欲望がワナワナと湧き上がってきてるのでしょ？」「

壱さんは自分の身体を魅せつけるように撫でながら小首を傾げる。  
「」でオレは考えるわけだ。

ここまで壱さんから推測するに、「」で正直に欲望なんぞ溢れ  
てきていないと言つたら、問答無用で鉄拳制裁が執行されることだ  
らう。（オレ欲望溢れない） =（壱さんは魅惑のわがままボディー  
ではない）、ということに彼女の中ではなってしまつのだらうから。  
しかし待て。

「」で、オレ欲望溢れてきます、と言つたらどうなるか？  
たぶん、恐らく、絶対に、「なんてイヤラシイっ！ エロエロ魔  
人さんに成り果てる前に私が成敗してくれます」みたいな意味のわ  
からぬこと言つて、武力を執行していくに違いない。

どちらを選択しても、オレは何がしかの痛みを負わなければなら  
ないのか……。

この危機を回避する為に、オレはいつたいどうしたらい。

どうする。

どうすんの。

どうすんだ オレッ！

「散歩にでも行きませんか？」

無理矢理にでも話題を変えるしか、危機回避する方法は考えつか  
なかつた。どうせ真正面から問答しても、オレは確實に大なり小な  
りの痛い思いをするだらうし。

「お散歩……ですか？」

幸いにして、壱さんは話題変更に乗つかつてきてくれた。

ちなみに、散歩それ自体に特段の意味はない。苦し紛れに口から  
出てきた単語がそれだつたというだけだ。

「そうです、お散歩です。夕食の前に適度な運動をしておけば、さらに美味しいご飯を食べられるでしょうしね、だから行きましょうよ散歩」

自分でもなんか必死だなあと思つが、「しかたありませんね。刀さんがそんなに私とお散歩をしたいとうのなら、行つてあげてもいいですよ」

駄々っ子に渋々付き合つてあげる、みたいな態度で壱さんは承諾してくれる。必死感がいい方向に解釈されてよかつた。がしかし、釈然としない何かが胸の内でモヤモヤとするのだが、この気持ちはなんだろう。うう。

……気にしたら負けなのかな。

なんだかなあと思いつつ、これから行く窓の外へと視線を転じてみる。

そこには、黄昏色の光が満ちていた。

村に到着したときの空色からして血は過ぎているだらうと思つていたが、折り紙に意志を注いで結構な時間を喰つていたらしい。「さあ早く行きましょうよ。誘つておきながらモタつくなんて、人としてダメダメさんですよ」

外に意識をやつていた我が手首をグイッと掴み、壱さんは急かしてくる。

「壱さん……」

「なんですか？」

「これからは迅速に動くことを誓いますから、急かすフリして手首を握り潰そとしないでいただきたい」

結局、オレは何を選択しても痛い思いをするところ宿命の下にいるらしい。

辺りに広がる稻穂を、ときおり波打たせるそよ風を感じつつ、

「なんだかなあ……」

と見上げた夕刻の空に、オレは一番星を発見した。

今現在、オレは壱さんのお手を引ひつつ、村へと至るまでに通つた畦道を歩いている。

オレとしては村の中を一周する程度でよかつたのだが、祭りの熱気が冷めぬ喧騒の空氣を感じた途端、「もう少し静かなお散歩がしたいです」と壱さんがほっぺをぷくつと膨らませて「機嫌斜めなご様子だつたので、いたしかたなく畦道へと歩みを進めたのだ。

「騒がし過ぎる所は好きじやないんです」

何を喋るでもなく、畦道の中間ほどまで歩んだといつて、ぱつつと壱さんが言つた。

「音が聴こえ過ぎて、怖いのです」

怖い、とはすいぶんとまた似合わない言葉を口にしますね。

「刀さんは私をなんだと思つていいんですか？　怖いものくらいありますよ」

「それに魅力的な女性には、か弱い一面も必要でしょう？」

壱さんはおどけて言つた。

そりゃあまあ、ひとつへりこは怖いものがあつて当然だと思いますけど、

「壱さんが怖いつて言つと、なぜか“まんじゅう怖い”を思い出してしまつから不思議です」

「おまんじゅうは怖くあつませんつー！　むしろ大好きですつー。」  
手を引っ張り、

「おまんじゅうは怖くあつませんつー！　むしろ大好きですつー。  
ものす」  
真剣に宣言した。

畦道の中心で、まんじゅうが好きと叫ぶ。

某感動ストーリーのように涙は誘わないけれども、まんじゅう屋さんは泣かない程度に喜ぶだろうから、

「オレじゃあなくて、口上さんに言つてあげれば喜ぶと思いますよ  
まあ、あのお人ならば大抵のことに天使の「」とき微笑をもつて応えてくれるのだろうけれど。

「ちなみに“まんじゅう怖い”は、読んで字の如くな意味じゃないですよ」

「じゃあどんな意味があるのでですか?」

「意味とこ‘うか……、有名な落語のひとつなんですけど」「ら、ぐい……？ なんですか、“らぐい”って」

ポカーンと口を開けて、しかしどこか興味津々といつよつに、壱さんはオレからの返答を「な・ん・で・す・かっ」とリズミカルに腕をぶん回しながら問うてくる。

しまった。またも問われて回答に困ることを口走ってしまった。オレも正確に説明できるほど落語をしつているわけではない。が、なにか答えないと、壱さんにオレの腕がぶん回し千切られてしまうピンチなわけで。

「えっと、落語つてのは……」

とりあえず知っていることを聞かせておこう。

「オレの世界にある話芸のひとつとして。筋のある滑稽なお話を身振り手振りを加えて語つて、最後にオチをつけて聞く人に楽しんでもらひう芸 だったハズです、たしか」  
ものすごくザックリしているが、間違つてはいないと思つ。正しいといつ自信はないけれども。

「話芸、ですか……」

口の中で言葉を飴玉のようにこねがしたのち、「ふーん」となにかとりあえずわかつてくれたようだ。

「“まんじゅう怖い”つてのは、“らぐい”的話のひとつである、と?」

壱さんセコイけど理解力があつてくれてよかったです。

「どんなお話なんですか?」

やつぱり興味持ちますか。

しかし残念なことに、スラスラ語れるほど熟知していないのです。けれど、返答しないといつ選択肢が、オレに用意されているわけもなく

「えーっとですね」

一番星を見上げながら、埋没した“まんじゅう怖い”の記憶を発掘することにいたしましょう。

閑話：『まんじゅう怖い の説明っぽい妄想』

「ヒマだねえ」

お茶を淹れなおしながら、艶やかに着物を着崩す、頼れるシミ姉さんが言った。

「ボ、ボクはこういう静かなの、す好きだよつ」

淹れなおされたお茶をお盆に乗つけて集まつた面々の前へ配りながら、前掛けが妙に似合つ女の子と勘違いしてしまつ、健気なバツ坊が微笑む。

「まあ悪くはないけど、たしかにヒマといえ巴ヒマですよね」

オレは礼を言いつつ出された薄ついお茶を努めて美味そうにする。シミ姉さんは頼もしいし憧れるけれども、どうして茶の淹れ方がなつていないので、玉にキズだなあと思つ。ま、完璧過ぎるのもよくないから、ちょうどいいのかも知れないけれど。

「じゃあ、嫌いなモノや怖いモノを言いあいませんか」

拳がスッポリと入つてしまいそうな大アクビをかましていた遊び人の壱さんが、怠惰に思いつきを口にする。

「嫌いなモノ、怖いモノ、ねえ……」

あまりにもヒマなのか、煙管をくゆらせながらシミ姉さんが遊び人な壱さんの話に乗つかつた。

「あたしやあ、カミナリが怖いねえ。理由なんてわかりやあしないんだよ。ただ、アレが轟くと背筋がゾクツとしてねえ」とシミ姉さんは自らを抱くように身震いする。

「ここのまえ台所に居た、ゴ、ゴ、ゴキブリがボクは、怖いよつか、顔に向かつて飛んできた時は、い、息が止まりそつだつたものギュツとお盆を抱いてバツ坊は顔をしかめた。

「オレも『キブリ』が顔に向かってきたらイヤだなあ」

「なんですか皆さん、情けない」  
「なんか、なんてわからない。ただ理由なんて知らずとも全身全靈が拒絶するのだから、好ましからぬモノである」とこ違いない。

「なんですか皆さん、情けない」

「言いだしつへな毒さんが、ずいぶんとふんぞり返つたことを言つ。「カミナリ」なんて大音量の太鼓だと思えば、お祭り気分で樂しいじゃないですか。それになんです、男の子がそろつて『キブリ』が怖いだなんて。あんなモノ、たた脛ぎつてるだけの虫じゃないですか。恐れているヒマがあつたら握り潰してしまいなさい」

「せめて叩き潰すにしてくださいませんかね。どうやらオレには『キブリ』を握り潰すなんて高等なマネは、一生かかってもできやうござりませんし。

「とこうか偉そうに言つますけど、毒さんごだつてひとつへりいあるでしょ、怖いモノ」

「私にあるわけないでしょ。物事を恐れていたら賭け事なんてやつてられません」

遊び人らしい言ひ回しではあるが、

「本當ですか？」

「はぐらかされていふようにしか思えない。

「当然です」

毒さんは、胸を張つて鼻を鳴らすが、

「本當に本當に本當ですか？」

「信じられない。とこうか、むしろ疑わしい。

「ないものはないのです」

「しかたがないでしょ?」とシレツとした表情で言つてのけられると、こっちとしては面白くない。だから、口が暮れるんじゃないかといつへりいこひついへ問ひ詰めた。

すると、

「……じつは、あります」

やつと折れた毒さんは、「『』だけの話しだしてくださいね」と

念を押す。

「わかりました。それで、なんなんですか？」

オレはやつと掘みかけた尻尾を放すまいと、慎重に答えをつながした。

それでも壺さんは言ひか言ひまいかと口を開閉させ、そしてやつと、神妙な顔つきで呟く。「

「おまんじゅう、です」

「……はい？」

「ですから、おまんじゅうです」

言ひと、壺さんは両の手で顔をおおいかくし、

「おまんじゅうの話をしたら、気分が悪くなってしましました……」  
這いするように隣の部屋へ移動すると、  
「氣分が悪いので、寝させてもらいますよ」  
頭までスッポリと布団にもぐってしまった。

「じ、じひょ！」

お茶請けを用意していたバツ坊が、あわあわと動搖する。

「お、お茶菓子、おまんじゅうだよ！」

バツ坊は素直な優良お子様だから、その反応は間違っていない。  
だが、オレは壺さんの弱点たりつるものを知つて、

「口ひるの恨み晴らし」と、まんじゅう攻め

思わず一タリとしてしまうわけだ。

願わくばバツ坊がオレみたくなりませんよ！」

オレは人数分のまんじゅうが乗つたお盆から一つを取ると、それを壺さんがもぐった布団の中へと放り込んだ。

すると、

「怖い、怖い　怖いから食べてしまいましょう！」

もぞもぞと布団の中身はう「めあ、

「ああ、美味し過ぎて、怖い怖い

なつ！　喰いおつたつ！」

ていうか、騙されたつ！

自分のまんじゅうまで喰われて冷静ではいられなくなつたオレは、力いっぱいに布団を剥ぎ取り、

「ふざけないでくださいよつー。」

美味そうに口のまわりをペロリと舐める、してやつたり顔な壱さんに、オレはあいつたけの憤怒をぶん投げた。

「本当に怖いものはなんなんですかつー。」

我が全力投球を受け止めた壱さんは、しかし悪びれた風もなく、「そうですね……」

ちよつと考えたのか、シレッと神妙な表情で言いおつた。

「今度は、濃いお茶が怖いです」

## 閑話休題

「 ていう話です」

自分解釈な“まんじゅう怖い”を聞かせてみたが、しかし「オレが正しいのか、あいかわらず自信はない。

「へえ、高度な頭脳戦術ですね。尊敬に値しますよ」

この話に感心するヒトが居るとは、激しく予想外でした。

なんかもう、溜め息すらでない。

語る事からよくも悪くも気が散つて、辺りを気にする余裕ができた。

「日が落ちるまで、もう秒読みですねえ」

話して聞かせることに集中していたから氣に留めていなかつたが、辺りはもう夜の一歩手前である。

「帰りませんか？」

オレは壱さんに帰還することを提案してみた。

すると、どうしてだろう

「 ガウアツ！」

いきなり振り上げた左拳でアゴを殴り上げられ、そのままの勢いで地べたに倒された。

そして息の根を止めるかの「」とへ、倒れたオレの上に壱さんのはしかかつてくる。

「い、いきなり何をするんですかっ！　アナタはっ！」

近距離にある壱さんの顔面へ、ツバが飛ぶのも知つたこっちゃんないと、オレは抗議の声を荒げた。

「シッ！　静かにしてください」

なぜオレが怒られるつ？

納得いかないので、再度、抗議の声をあげようとしたら、それにかぶせて、周囲を気にしている風な真顔の壱さんが言つてきた。

「殺気を感じました」

オレは殺意を感じましたよ、アナタからつ！

ああ、怖い怖い。

「あら、それはつまり、話の流れから察するに、私のことが大好きつてことですか？」

小声で嬉しげに言つてくれるが、なんですかそのポジティブというより自分中心の思考は。

ていうかそんなのはどうでもいい。オレは三度目の抗議の声をあげようとして大きく口を開いた

「いまはちょっと黙つてくれださいね」

「ら、握り拳を口に突つ込まれた。アゴが外れそうなくらい無理がある。息が詰つて苦しい。」

あまりの辛さに、意図せざ無言の涙が出てきおつた。

しばし静寂のみが場を支配し

不意に、我が正面、壱さんの背後で、なにかが煌いた。一瞬、自分の涙かと思ったが、しかしすぐにそれが鋭利な刃物の光沢であることに気づく。

壱さん！ 後ろ、うしろっ！

オレは迫りくる正体不明の危機を知らせようと最善をつくすが、「なんですか刀さん。私の拳をレロレロ舐めたりして……。なにかが覚醒してしまったのですか？」

なぜかとつても残念そうな表情をするアナタが残念でなりませんよ壱さん。そもそもヒトの口に拳を突っ込んでるアナタはいつたい

と言いたい」とは天を貫くほどにあったが、いまはそんな場合ではない。

オレはアゴが外れることを覚悟しつゝ、すっとぼけな壱さんを抱きしめ、

「と、刀さん。なにを突然、だいたんな っ！」

渾身の力を込め、壱さんをぶん投げる要領で一人の身体を横転させ、どうにか不意打ちの一閃を回避する。

粗いの外れた刃が地面をえぐる音と共に、横転の勢いでオレの口から壱さんの拳が抜ける鈍い音が聞こえた。

本気でアゴが外れてしまったかと心配になつたが、それは杞憂に終わり、

「壱さん！ ピンチですっ！」

自由になつた口で、どうにか危機を知らせる成功する。「い、いきなりのしかかつてくるなんて、覚醒した刀さんの以外な行動力には驚きましたよ。その初めてが野外だなんて私」

なんのピンチを感じているのアナタはっ！　いりませんよ恥らつた表情とか。

「やうじやなくつてー！」

もじかしく思いながらも、オレは警戒と再確認の為に背後へ視線をやる。ところで、我が首を刈る為に薙がれたと思しき剣が迫っていることを知る。

「ひいっ」

反射的に全力で身体ごと頭を下げた。後頭部から首筋にかけて、なにか不吉なモノがいつそ清々しい勢いで通過するのを感じ、次いで顔面が温かで柔らかでタフンタフンと弾力のある素晴らしい感触を心地よく味わう。

もう少しで首が落とされるといつ心臓が止まりやつた出来事に、意図せず呼吸は乱れ、

「つはつあはあはあ……」

過呼吸氣味になつてしまい苦しくて動けず、しばし心地好き温かで柔らかな弾力に顔をしずめる。すると、どうしてだらう気持ちが落ち着いた。

て、落ち着いている状況ではない。

「壱さん、絶対絶命ですよ！」

名残惜しみつつ柔らかなソレから顔を上げ、オレは再度、現状を端的に言つ。

「確かに、乙女の絶体絶命です……。まさか覺醒した刀さんがこれほどとは

さつきからアナタは何と戦つているのですか？

「しかし刀さんが露骨な変態さんになりさがつてしまつたのは、私のわがままボディーの罪なのです。ですから刀さん安心してください。私が全力で　肅正してさしあげますっ」

なんの話をしているんですか。という疑問を口にする間もなく、壱さんが放つた掌撃をもろに喰らつたオレは吹っ飛ばされ、ワイヤーアクションのような人生では経験しないだらう浮遊感を体感し

たのち、地面に叩きつけられた。そこで初めて、剣技を揮っていた

人物を視界に捉える。土色をした丈の長いフード付きコートを曰深にかぶっているので表情はうかがえなかつたが、オレが吹つ飛ばされてきた事に、若干の戸惑いを覚えていたように思えた。

それも当然だろ？、オレだつていきなり掌撃を放たれた理由がわからないのだから。

「さてさて……」

壱さんはのつそりとホコリをはたきながら立ち上がり、

「どこからでも襲つてくるといいですよ。貴方の変態さんハートが砕け散るまで、あしらい続けてさしあげますから」

半身に構え、音の高い舌打ちでリズムを刻み始める。

けれど、根本的に間違つていますよ壱さんっ。といつか殺氣を感じ取つたときのアナタはどこにこいつちゃつたんですか……。

オレは思考のズレを壱さんに指摘しようとしたが、それよりも早く謎な襲撃者が動いた。思うに、彼女の態度を挑発と受け取つたのだろう。

襲撃者は右下段に剣を構え、壱さんの隙をつかがいつつ、摺り足で間合ひをつめる。

「…………あら？」

隙なく身構えつつも壱さんはなにか疑問に顔をしかめる。

「刀さんいつの間に道具を装備したのですか？ ズルイですよ、私は素手だというのに」

音の高い舌打ち 反響定位のなせる技なのか、壱さんはオレと襲撃者との決定的な違いに気がついたようだ。

「オレは何も装備してませんから！ いいかげんに気づいてくださいよー！」

ミゾオチにクリーンヒットした掌撃のせいか、ちょっと苦しかったがどうにか声を張つて言つことができた。

「あら？ あらあらあら？ 身体の位置より遠くから声が聴こえてきますけれど……刀さん、どのような技を使つているんですか？」

たとえ使えたとしても利点がまつたくないそんな奇抜な技を体得した憶えはありません。

「壱さん、すっとぼけるのもタイガイにしてくださいよ。最初に殺氣を感じ取ったのアナタでしょ？！ もつきから殺氣の発生源に襲われてるっていうのにっ！」

「え？ ……殺氣の発生源は刀さんの煩惱では？」

なにその「まさかそんなん？」て言いたげな表情は。どうして煩惱から殺氣を感じるのさ。

「オレは殺氣立つほど飢えちやあいませんよ」

「えー、私を前にして？」

と意味のわからない疑問符を壱さんは頭の上に浮かべる。その瞬間に「隙あり！」と判断したのか襲撃者が動いた。大きく右脚を踏み込み、同時に右下段にあつた剣が重みを付加し一閃、おまんじゅうの詰つた壱さんの腹部を斬りにいく。オレはとっさに視線を逃がした。

次瞬、鈍い音が聞こえ

「ちょっと何するのですか。ものすげジンジンするじゃないですかつ！」

ずいぶんと不機嫌そうな壱さんのお声が飛んできた。

オレはゆっくりと、恐怖心を説得して黙らせながら逃がした視線を呼び戻して様子をうかがう。

そこには、お腹の前に構えられた左腕のヒジで刃を受け止め、その剣の柄を襲撃者の手ごと右手で押さえ込み固定し、なおかつ踏み込んできた相手の右足を自分の左脚で踏みとめている、という壱さんのお姿があつた。

「いま、刀さんと大事なお話をしているのです、邪魔しないでください」

襲撃者のことなど、服に羽虫がとまつた程度のことがごく。抗議を口にしながら、壱さんは腰を落として全身で剣ごと相手を引いた。と体勢を崩しかけた襲撃者はバランスを保とうと左脚を出す。

そこへすかさず壱さんは自分の右脚を引っ掛け、流れる動作で自らの全体重を相手に押し当てた。すると後に踏ん張れない襲撃者は、

「ガツハア！」

渋い声質のあえぎを漏らし、じつにあつ氣なく押し倒される。そのとき襲撃者は反射的に身をかばおうとして剣を持つ手から力を抜いてしまったようで、壱さんは相手を押し倒すと同時に剣を奪い取つていた。

「まつたくも」

ほっぺをふくふく膨らませて「機嫌斜めなお顔はなかなかにしてちょつと可愛いが、苛立ち紛れに奪い取つた剣をぶん回すのは」遠慮願いたい。そんな現状の壱さんに、

「あ、あのう、ななにがあつたのう？」

戦々恐々と声をかけるのは、いつからそこにいたのか、なにかを大事そうに胸元で抱えるウサ耳ツインテイルなバツであつた。

「あり

と壱さんは背後からの声に、ぶん回していた剣を不意に手放し自由になつた剣は嬉々としてぐるんぐるんと風を斬りながら数回転したのち、押し倒されて後頭部でも強打したのか地べたにひんのびていいる自らの持ち主たる襲撃者の頭部数ミリ横に帰り突き立つ。

「なにか美味しそうな匂いがしますね」

いま物凄い事故が起きそになつた事や、せつかく剣を奪い取つたのにまったく意味がなくなつてゐる事など知る気もなく、壱さんはパチンと拍手を打つて嬉しそうに微笑む。

「お、お姉ちゃんが作つたおまんじゅうを、いいお姉ちゃんに試食してもらつてつて」

バツは胸元に抱えていた布袋から、湯気のぼる蒸したてのおまんじゅうを取り出すと、「ふうーふうー」とちょっと冷ましてから壱さんの手に乗せる。

「私に食べ物の味見を頼むとは、素晴らしい思考の持ち主です」

シミさんを称賛しつつ壱さんはまんじゅうを一つに割ると、それは美味しいに「はふはふ」しながら喰い始めた。

食べ物をやたらと美味そうに食べる人を見ると、なぜだか不意として表情がほころんだりする。そんな優しい表情でまんじゅうに喰らいつつ壱さんを見上げていたバツは、ハタとしてこちらに気がつき、

「と、トウお兄ちゃん、道に寝転んだりして、ジビンしたの?」「

戻悪いながらもこちらへ駆け寄ってきて、地べたに両膝をつき、「だ、だいじょうぶ?」

氣遣わしげな眼差しでのぞきこんできてくれる。

なんだろう理由はわからないけど、いつもを幸せと呼んだりするんじゃなかろうか。

なんて弱り気味なことを思つてしまつたのは、たぶん壱さんの一撃が予想以上に重たかつたせいだらつ。

「大丈夫。肋骨は折れてない」

胸部に残留する痛みをメンタルパワーによつて払拭することを試みつつ、オレは上半身を起こす。

「クッ ソッ!」

時を同じくして、なにやらダンディズム溢る悪態を我が耳は察知した。音源の方へ視線をやると、そこには苦悶と憤りに顔を歪めたどこかで見たことのある氣のする、一人でハードボイルドな雰囲気をかもしだす渋いオツサンが、地面に突き刺さつている自分の剣を引き抜きながら居た。

渋いオツサンは迅速に身を起こすと、こからになど眼もくれず、無防備にも背を向けながら蒸したてのおまんじゅうを試食している壱さんを斬りに行く。

「壱つ!」

とつそこに口から出た叫びゅえか、オレは腹から出せるだけの声で壱さんを呼び捨てる。

「なんですか、そんなに焦らなくても分けてあげますよ? 刀さん」

腹の底から叫んでも蒸したてのおまんじゅうを食べたがるなんて発想はアナタしか持ち得ないという現実は後々お教えするとして。渋いオッサンが斬りかかるより数瞬早く、壱さんは訝しげに眉をひそめて、まんじゅうをほおばりながら振り向いた。

刹那。

「ヒイツ！」

猛々しく剣を振るおつとしていた渋いオッサンは情けなく口から空気を漏らすと、その場に尻を着く。

突然のこと過ぎて状況がまったく読めず、言葉も出ない。

果たして渋いオッサンには、まんじゅうを喰つている壱さんの姿がどういう風に見えているのだろう？

「や、やめてくれっ」

「ん？ 急に渋いお声になつたりして、意外と隠し技をもつてますね刀さん。軽蔑しますよ」

せめて尊敬してほしかったなあ。

「て、そんな技をオレが持つてるわけないでしょ？」

「冗談ですよ、じょーだん。そんなムキにならなくていいじゃないですか」

なんで、「冗談で軽蔑されねばならんのだ。

「それで、どなたかは存じませんが」

と壱さんが一步足を動かすと、

「じつちにソレを ひついい、お恐ろしい」

なぜか腹部に手をあてがいながら渋いオッサンはジリジリと後退り、壱さんから離れようと必死である。

「なんですか失礼ですね。こんなにもタオヤカな乙女に向かつて恐ろしいだなんて」

まんじゅうを咀嚼しつつ、ほっぺをぷくっと膨らませ、壱さんは「不愉快です」と態度で示し、ズイと一步踏み込む。

「う、ひつい、そそソレを、ここちに近づけるなっ」

どうやら本気でなにかを恐れている様子の渋いオッサンは、額に

脂汗をにじませ顔面蒼白である。

「……ソレ？ 近づけるな？」

「これといって持ち物の無い戻さんば、

「いつたい何をです」

意味がわからないと疑問に顔をしかめた。

しかし浅いオッサンはソレの名詞を口にするのもイヤなようだ、

「ソレをだつ！」

と過呼吸氣味に、戻さんのある一辺を親の仇でもねめつけよう  
に凝視する。

「だから何を」

相手の視線を読めない戻さんは、面白くなくなさうに本氣で困つて  
いるふうに聞き返す。

しかし浅いオッサンは戻さんの態度を攻撃手段のひとつと思つた  
ようで、憎々しげに睨み返しつつ苦痛に耐える。が、長くは持たな  
かつたようで、結局は折れて、

「……まんじゅうだ。頼むから、ソレをいつひ近づけないでく  
れ」

懇願するふうに口状した。

「……はあ？」

何を言つてこのか理解できない、ところどころに数泊のあいだ戻  
さんは呆け

「ああ」

と、ひとつ答へを導き出し、

「まんじゅう怖い、ですか」

愉快そうな笑みを浮かべた。

「そんな“まんじゅう攻め”に期待するような回りくびい事しなく  
ても、普通に言つてくれれば分けてあげますよ

言つて、戻さんは「はい」と手の中にまだあった半分のおまんじ  
ゅうを差し出す。

「だから近づけるな」

顔面に飛翔してきたゴキブリを払い除けるが」とく、渋いオツサ

ンは差し出されたまんじゅうを志さんのお皿」と金子で投げ

ね  
「

あきれた、と言いたげに肩をすくめてから、志さんは「好きなんだ  
け取らせてあげなさい」と、まんじゅう入り布袋を抱くバツをつけ  
がした。

「今まで事をあつ氣」とられながら傍観していたハツは、一  
つと「惑い氣味にうなずくと、渋いオッサンに駆け寄り、布袋  
の中身を提示

サー、と血の氣を顔面から引かせ、まんじゅう入り布袋から全

奥全靈で御退院

渋いオッサンは捨てゼリフを置いて、村とは反対の方角へ猛ダツシユで消えていった。

しばし時を忘れて、去りゆくオッサンの背中を眺めていたが、ふと思つことがあつたので、

「やうこえせむわん」

「はふへうか？」

即行で返答して下さるは嬉しいけれど、  
「モノを入れて蝶らないでくださいよ」

ねまんじゅうだつたモノが言葉と仲良く飛び散つてますから。なんか似たような事を近しく言つた気がするのは、確信をもつて氣のせいではないと断言してもいい といふのは置いといて。

「てつ！ 壱さん、せつかく口の中についたモノ飲み込んで喋りやすくなつたのに、なに次のおまんじゅうに喰らいつこいつとしてるん

ですか？」

指摘された志津さんは、

「…………」

もつすくべ逡巡してから、意を決したよに食べよつとしたおまんじゅうを布袋へと押し戻す。

「そ、それでは、刀さん」

なんかお声が、とっても涙声に聞こえたのは、オレの幻聴か空耳かな？

「じょうけんはあつ、なんですか？」

強がりな子どもが泣くまこと感情を押し殺して声を震えさせちゃつてる　みたいな喋り方をして、アナタはそんなにおまんじゅうが食べたいのですか？

「べ、べつに」

志津さんは下唇を噛みしめ、

「そんなことないですよ」

ふいっとわざっぽを向く。

「…………」

や、そんな、ふるふる震えながら堪えなくてむ……。

「もう食べていいつ！　食べていいですよ、志津さん！」　喋る前に飲み込んでくれれば、それでいいから。もう恥づ存分、食べてください」

志津さんは「いいのですか？」と似合にもしない遠慮がちな態度で訊いてから、「では」と、また喰らこつきを再開させる。嬉しそうに、幸せそうに、美味しそうにまつたくもつて、惚れ惚れするぐらいいナイスな表情でお食事しますね。

ところは切りがないので気にしない事にして、話を先に進めよう。

「で、ですね志津さん。ずっと気になっていたのですけれどなんですか？」　志津さんは「全くぜんぜんぐもぐ」喰いながら小首を傾げる。

「さっき剣をヒジで受けてましたけど、大丈夫なんですか？」

たとえアレが剣のような刃物でなかつたとしても、金属質なモノをまともに喰らつたらヒジの骨はヒビ折れるなり碎けるなりします。どうしてことなさげにしているけれど、衣服の下ではとんでもない事になっちゃてるんじゃないかと心配なのだ。

「んんー」

志ちゃんは左手をグーやパーと一緒にギーギー動かしてから、左腕を屈伸させ、

「問題なく動きますけど……どうにかなっていますか？」

見てみてヒジをこちらに突き出す。

紫が主色の民族衣装みたいな志ちゃんの着物。そのヒジ部分は、やはり剣という刃物によつてパツクリと裂かれてしまつてゐるが、しかし血がついているとかそういうことはない。着物の裂け目から突き出たヒジには、縦に一文字の短いミミズ腫れがあるだけで、素人目ではこれといって問題があるようには見えなかつた。

「どうにかなつてゐるよつには見えませんけど……本当に平氣なんですか？」

念押しを込めて訊いてみる。

「ダメだつたら、そう言つてますよ。それに、この程度でどうにかなつてしまつようでは、一人旅はできませんよ」

いまは独りじゃないですけどね、とことみなげに言つて、

「さあ、そろそろお散歩を再開させましようよ」

杖の代わりになれと手を差し伸べてくる。オレがその手を取ると、我がもう片方の手をバツが取り

しばらくキトウに三人でぶらつこつから、帰路へとついた。

「……結局、なんだつたんだ？」

という疑問を生んだ出来事を、ロヒさん宅へと帰還したオレは件の手帳に書きとめた。

「お腹が空いて魔が差してしまったんじゃないですか」

お茶をすすりながら壱さんはあっけらかんと呟いた。「けれども、襲われたのは、バツがまんじゅうを持って現れる前ですよ?」

「どうか殺氣を察知したのはアナタだったでしょ?」

「そういえば、そうですね。まあ、なにか目的あってのことなら、また出現するでしょう。その時にでも、お訊ねすればいいじゃないですか」

簡単に言つけれども、少し違えば自分の首が斬り落とされていましたかもしれないのだ。オレは壱さんみたいに余裕ではいられない。

「そんな事より、夕食はまだですか?」

我が生死に関わる問題は“そんなこと”呼ばわりですか。ていうか、今の今まで蒸しまんじゅうをたらふく喰らっていたのに、

「まだ喰つ無いですかアナタはつ!」

## 承／第十四話・マシマシマハ（其の三）

額から全身からにじみでた汗の滴が、荒い吐息と共に零れ落ち、「ぼボク、もう、がまん、できないよう、で出来る」苦しげ悩ましげに表情を歪めて、ウサ耳シンティルをいまは一つのお団子に結い上げているバツは、最後にわづわづとイッてしまつた。

かくいうオレも、

「壱さん……オレ、そろそろ死線を越えちやうで、す」

限界は既に突破していた。

「なにを言つていいのですかあ？」

グロテスクに沸騰する釜を引つかきまわす魔女がごとく、壱さんは口の端を薄く吊り上げて、妖艶で怖氣すら覚える微笑を浮かべ、「まだまだあ！ これからですよおつ…」

ほとんどやけくな投げっぱなしの言葉と共に、桶から焼け石に水をぶっかける。生肉に火が通せるほど熱せられた焼け石は、瞬時に水を蒸気へと変化をせし、息を詰りせてしまいそうなモンモンとした熱さをつくりだす。

壱さんの暴挙により、二畳ほどの広さしかない密室空間はアツといつ間に熱い水蒸氣で満たされ、体感温度が急上昇してゆく。

ああ、なんだか呼吸するのが辛くなつてきた……。

オレはぼやけた意識の片隅で、

「エヘヘヘヘ

と焼け石に水をかけてジヨワジヨワ蒸発する音を面白がりながらノンストップで熱さを生み出す、水も滴るどろか滝のごとく汗を噴ぐ壱さんを見やつた。このお人は熱さで頭がオカシクなつちゃつたんじやなかろうつか、と思おつとしたやうき、

「はふうん

「ちよつー、壱さん！」

鼻からツーと赤い線を垂れ流して、彼女はぶつ倒れた。

まだどうにかオレは自分を保てていたので、白い湯浴み着に点々と血痕を染み付けてしまった壱さんを早急に風呂場の外へと運び出す。

先に退場し、庭にある井戸から水をくんでほてつた身体を冷ましつつ洗っていたバツが、ぐつたりした壱さんを見るや目を丸くして動転し、シミさんとローハさんを呼びに慌て駆けて行く。

オレは風呂場の外壁に壱さんの背をあずけてから、彼女の茹で上がった身体を冷却するために井戸から水をくんで、それを頭頂からぶつかけてさしあげた。そして止血の為に、小鼻の柔らかい部分を親指と人差し指で両側から「これでもかっ！」というくらい強く圧迫する。

ゆでダコのように真っ赤っかな壱さんのお顔を拝見しつつ、

「なんだかなあ……」

ステテコのような白い湯浴み着姿で、お人の鼻をつまんでいる自分の姿を思い、

「なんだろうこの状況は……」

壱さんの鼻血が止まるまで、状況整理といつも過去回想現実逃避をする事にしよう。

といつても、こまわつきの出来事なのだが

「まだ喰つ氣いですかアナタはつ！」

ヒトの生死に關わる問題を“そんなこと”呼ばわりして、夕食を所望するそのお方は、

「食事だつてヒトの生死に關わる立派な命題 命に直接影響を及ぼす重要な事柄ですよ？ 食べられるときに食べておかないと、次にいつ食事をいただけるともわからないのに。食べたいときに食べられる幸せを満喫しようとしてなにが悪いと言いますか？ 常々思うことがありますよね。現在に至るまでは、幸運なことに水にも食にも困ることなく来ていて、旅をしていれば飲まず喰わずで数日過ごすなんてことは常であり、恵まれなければ死に至ることすら珍しくありません。おわかりですか？ いまの私たちは罪深いほど幸福なのですよ？」

ものすこく眞面目な表情で真剣におっしゃった。

「うん。まあ、確かにその通りなのでしょうから[註]延ばすできないですけれど……」

でも壱さんがなにを言つたって、食わなきゃ損々つてことじどう？

「自然の恵みと畜産農家と料理してくれる人に感謝しつつ、です」  
飲み干したお茶のおかわりを注げ、と見せつけるように空の湯のみをズーズーすすりながら壱さんは付け加える。

つまりは“いただきます”と“じきそつせめ”が大切である、と言いたいのかなこのお人は、

なんてことを思いながら、壱さんの要求通りに空の湯のみへ茶を注いでいると、

「お風呂の準備が整いましたので、お夕食の前にいかがでございましょう？」

風呂桶のようなモノを胸の前で抱えたローハセさんが「」登場した。

がしかし彼女は、

「お着替えは」の中につりますか」「

抱えてきた風呂桶を示し、それを条件反射で受け取りに動いたバツへ手渡すと、

「シルさんは料理を手伝つてくだれるので、バツさんは皆様とお風呂をすませてくださいませ」とのことです

シルさんからバツへの言伝を伝え、

「では夕食の準備がありますので」

と言い残して、早々に「」退場してしまった。

承／第十六話・ムシムシがへる（其の參）

「まだ夕食が食べられないなんて……」  
ためらいもなく衣服を脱ぎながら、声をひた深々と溜め息を吐き  
捨てて、ガックリ肩を落とす。

「どんだけ夕食が楽しみなんですか……」

あきれつつも、オレは田のやつばに困った。

あまりにも堂々と素っ裸になりおる声をんを前にすると、むしり  
こっちが恥ずかしくなつてくるのはなんでだろ？

「ていうか、なんで脱いでるんですかっ！」

残念なことに色々と感覚がマヒしててこののが、指摘するのが  
遅れてしまった。

「なんでもって、お風呂に入るからですよ」

当然、と声をんは隠す物の無いネイキッドな胸をシンと突き出す。  
お風呂に入るから、ところはわかりましたけれども、どうして  
アナタはただでさえ自己主張の強い一つのお口を、こまゝの場でさ  
らけだしてくれるんでしょうかね？

「脱ぐならお風呂場で脱いでくださいよ」

まったく、困ったお人だよね 常識といつ心の逃げ場になつ  
つあるバツへ、苦笑の同意を求めて視線をやると、

「……なつ」

そこには、エプロンを外して上着を脱ぎつゝある“彼”的姿があ  
つた。

我が心のようど二ひ、最後のハイブン（H a v e n - 避難所）が、  
衣擦れの音と共に崩壊し露出してゆく……。

そんな嘆きとも似た我が眼差しに気がついたバツは、

「あ、うう……」

ギュウッと身を縮めて、肌の露出面積を最小限にみつと最善を及  
くし、

「そ、そんなに、み見ないでよう」

羞恥で真っ赤に染まった顔をうつむきかげんに、小動物の「」と潤んだ瞳で抗議してくる。

「え？ あ、」「メンツー！」

とつさに、そっぽを向く。なんだろ？「」の強烈にマイ・ハートを責め立てる“してはならぬ事をやらかしてしまった”ような罪悪感は

つて！ 男同士でなにやつてるんだろ？

と気づけども、だからとこつてバツの生着替えをまじまじと眺める意図も意味もない。

「というか、なぜにバツまで」

脱いでのるんだ……。

あれか、悪い例が間近に居るから無垢がゆえに影響を受けてしまつたのか。

なんてことをしてくれたんだ、と全裸な志さんに抗議の睨みをやる。

がつ！ 不覚にも、改めて見るそのパーティの造形美に生睡を「」とクンしてしまひ。

鴉の濡れ羽の「」とき黒髪が自由奔放に跳ね踊る、華奢な肩口。鎖骨から絶妙なラインを描いて、奇跡的とも言える素晴らしい形状にふるんふるんと張り出たお胸。思わず指を滑らせたくなる優雅な曲線美の、腰のぐいれ。ふりふりだがキュッと引き締まつたお尻。ヒョウやチーターを連想させる躍動的でしなやかな肢体。上質な絹の「」ときすべやかな肌に、刻まれた無数の傷痕すら美しさをひきたてる演出のようである。

もしもこの場に芸術家が居たら、発狂の勢いで彼女をモチーフにしたがるだろ？

黙つていれば つましやかにしていれば、志さんせとじゅ……

……はつ！ なにを魅了されてるんだ自分つ！

不甲斐なさに形容しがたく身悶える。そんなオレに、

「お、お風呂に入るときは、ゆ“ゆあみぎ”をき着ないとダメなんだよ」

バツは脱衣の理由を教えてくれる。

「ゆあみぎって……湯浴み着?」

見れば、バツは滝につたれる修行僧みたいな着物姿に衣装チェックしていた。

なぜ入浴するのに衣類を着るのかよくわからない、といふか先だって宿場町のお風呂屋さんではこんな着なかつたハズだが? 疑問はぬぐいきれないけれど、“郷に入らば郷に従え”と言ひし、なにより真っ裸で突つ立てる壱さんをこのまま放置するわけにいかないので、面倒だが彼女に“湯浴み着”を着せて、自分も着替えることにする。

オレに用意されていた“湯浴み着”は、我が祖父がご愛用しているステテコみたいなモノだつた。お祭りで御神輿を担ぐ人が、股引の代わりに着用してしたりするやつだ。

これが男性用の“湯浴み着”なのだろう。

じゃあどうして長い黒髪をお団子結びにしているバツは、壱さんと同じ形状の女性用“湯浴み着”を着ているのか 　とこいつのは、気にしてはいけない。

これでいいのだ。

色んな意味で。

## 承／第十七話・ムシムシ須ヶ原（其の四）

着替えを受け取るとさきにローハさんから場所を聞いた、といふバツの案内でお風呂へ向かうことになった。

けれども、

「庭にお風呂が？」

バツは黒い板張りの廊下に出ると、すぐ目の前にある縁側から庭へ降りて、トコトコと転びそうな危うい足取りで先に行ってしまう。

「家にお風呂がある場合は、普通そうですよ」

風呂は庭に在るものだ、とお教えくださいむ志さんとの声には「あたりまえ」という響きがあった。

「まあ普通と言つても、いい御家柄に限つての話ですけれどね」

彼女が補足するには、水を注いだ大きめの桶に浸かつて体を拭い洗うのが庶民の普通なのだと。住んでいる所に、先だつての宿場町のようにお風呂屋さん（公衆浴場）が在つたなら、そこを利用するらしげ、それは少々娛樂的要素を含む贅沢であるらしい。健康ランドとかスーパー銭湯のような感覚なのだろうか。

ともあれ、

「じゃあローハさんは、いい御家柄の次期当主さんだったんですね？」

…

じつはすごい人なのでは、と意識したとたん、失礼はなかつただろうか、と心配になつてきた。というか、無遠慮にまんじゅう喰いまくつているヒトを約一名ご存知なので気がきではない。まあローハさんならば、あの天使のごとき微笑で無かつた事にしてくれそうだけれども。

「“メスマ屋”といふ店名を聞いた時点でわかることだと思いますけれど。刀さんは、ご存知なかつたのですか？」

この世界の事柄に関しては、大抵どころかまったくご存知でないですよ。

ええもうなんだか、すねてもいいですか？

「それはそれで、拗ねちゃった刀さんを、たつぱりと愛でて慰めて差し上げる、心と体の受け入れ準備はバツシリですけれど？」

よつしやーーー！ てなぐあいに両手を広げて身構えないでくださいよ鹿さん。オレの心と体はバツチリもなんも準備できていませんから。まったくもつて図々しくも、すねたりして申し訳ございませんでした。

「あら…… そうですか？」

それは残念です、と鹿さんは蠱惑的に尾を引く微笑みを浮かべてから、

「といつのは置いといて 」

架空の“何か”を両手で挟んで脇に退かし、

「 メスマ屋さんはですね、クレベル王室が頼んで“おまんじゅう”を献上してもらつて、それはそれは厳格な、老舗中の老舗なのですよ」

とじ解説していくだる。

つまりは、王室御用達のお饅頭屋さんであるといつことだらうか。あまり実感がわかないけれども、とってもスゴイ事であらうとは、なんとなくわかった。

シミさんがここへ到着してからずつとおまんじゅう作りを教わっているのも、それが理由なのだろうか？ 王室御用達の味を盗む、みたいな感じで料理人魂に火がついてしまったとか。

きつとねうなのだらう。さすがは料理人。  
うん。

そして もうひとつ、とてもとても得心をした事がある。

ローハさんがお礼を申し出たとき、鹿さんが有無を言わせぬ勢いでそれを即承諾したことについてだ。

きっと、あのときの鹿さんは「やつたあ！ 王室御用達の美味しいおまんじゅうが食べられるうつ！」みたいなノリで居たに違いない。

「なにかそれだと、私がとてもイヤシイみたいじゃないですか。」  
我が心の声を盜聴していたらしく壱さんは、ムッとしたように眉間にしわをひそめ、不満を示すように下唇を突き出して頬をぷくつと膨らませる。

壱さんはイヤシイところより、ただの食いしん坊だと思いますけれど。

それはさておき。

とくに脈絡もなく、無性に、登山家が“そこに山があるから”と頂を目指して登山するが、とく、オレは素晴らしく見事にぶくつと膨らんだ壱さんのほっぺを両側からブツシューしたい衝動に駆られた。

数秒間の葛藤の後、オレは自分に素直であることを心に誓う。勘付かれぬよつ密やかに自らの右と左の手を彼女の頬の左右にセツティングし、優しく丁寧に、しかし素早く圧力を加え

「ぶうっブウウ」

壱さんの口の中に溜まっていた空気は、最初だけ破裂的に吹き出て、あとは彼女の唇を小刻みに振動させ唾液を飛散させつつ終息してゆき、

「ウウふつ」

最後の最後は、か細く鳴つて散った。なんとか哀愁を感じるよう人が尾を引く。

間髪いれず、

「なにするんですか」

ブーブークッシュョンみたいに愉快な音を発していたのと同じお口が、今度は唇を尖らせて抗議してくる。ともすれば可憐らしきそんな表情の影に隠れて、

「グゥツヌオツ！ ありがどづ！」ぞこまづつー。」

ガツチリ握り固められた拳が、神速の勢いで我が腹部にえぐりこみ、

「な・に・す・る・ん・で・す・か」

一音一音を強調するが」と、内蔵を引っ掻き回すよつにグリグリと動く。

志さん、穏やか過ぎる微笑がとても末恐ろしいです。

「い、いや、なんと申しますか……そこに膨れたほっぺがあつたもので、つい」

危険で過酷な状況に陥るとわかつていっても止められない。ああ、なんでだか登山家さんの心情がわかつた気がする。あくまで、気がするだけ、だけれども。

## 承／第十八話・ムシムシ須ヶ原（其の五）

そんな感じに歩みを止め、縁側で少々くつ喋っていたらば、「ちちやんと、つづいて来てよう」

ちょっと涙目になつたバツが駆け戻ってきた。

「え、ああ、『めん』

オレは詫びてから、自らの腹部にめり込んだ志さんの手をとつて、「段差あるから気をつけてください」

縁側を降り、案内役たるバツの頭にある一つのお団子を田印に、改めてお風呂へ向かうことにする。と言つても、見わたす限りに広大な庭というわけではないので、バツが案内し向かう目的地はさつきから認知できていた。

丸太をログハウス風に組み上げて作られた、しかしお風呂場というよりは、少し大きめの物置という印象の建物だ。入り口と思われる木製扉の正面延長線上には、村の広場にあったモノよりは小規模な井戸がある。ここから水を汲んで湯船に注ぐとは、ひとつ風呂浴びるのも肉体労働だなあ……蛇口をひねるだけで事足りる現代文明のありがたさが、身から遠退いて改めて身に染みてくる。なんてことをしみじみ思いながら、物置風お風呂場へ一步足を踏み入れ、「ん？」

想像していたモノとは違う光景がそこにあり、一瞬だけ思考が停止する。疑問で眉間にシワを刻む間に、再起動した我が脳ミソは速やかに以前と類似する情報を記憶から検索して探し出す。

「これはお風呂というより、サウナ？」

ムワツと暑い部屋の中心には、大小の黒い石がぎっしり詰まつた金属質な円筒形の入れ物と水の注がれた桶が設置されており、それを囲むように壁を背もたれ代わりにした木製の長椅子が置かれていた。身体を湯に浸からせることができるようなモノはない。五右衛門風呂のようなモノがあると勝手に予想していたのだが、見当違い

だつたようだ。

「なんですか？　“わづな”って」

我が手をちょこちょいと弾っぽり、壱さんが問うてきた。

「えーと、じゅうこりつ“お風呂”的ことを、オレの生まれた所では“サウナ”って言つたですよ。“ミストサウナ”とか“スチームバス／蒸し風呂”っていうのもありますけど」

「刀さん御出生の地では、お風呂にも様々な呼び名があるのですねえ……面白いですね、こと細かくて」

興味を懷いたふうを裝つて、ずいぶんとバッサリな物言いをしつつ、壱さんはズイズイと室内へ歩みを進める。

そして手探りで長椅子の位置を確かめてから、

「お風呂はお風呂でしょ！」

と呑めつ腰を下した。

「まあ、否定はしませんけど」

オレが言葉や名称を決めているわけではないので、めんどこと言われましても、どうにもできません。

壱さんは腰を落ち着けると、「ふう～」と一息吐いてから、左手で自身の左隣をポンポンポンポン叩き始めた。それはなかなかどうして終わりを見ないので、

「この形式の“お風呂”に入つたら、ひたすら左手でイスを打ち鳴らす、のが“しきたり”だつたり“あたりまえ”だつたりするんですか？」

知らぬ世の疑問を自問自答してもどつしたつて答へは出でこないので、单刀直入にお訊ねする。

「…………」

だがしかし、壱さんは答えてくれるどころか、ポカンと口を半開きにして、手の動きと一緒に全身の動きを止めてしまう。

なんだこの無言の間は……。

訊いちやいけないことを訊いちやつたのかな？

無言の圧力にオレが不安を感じ始めたとたん、

「うぶなまめかわらわ」

い今までお地蔵さんのごとく固まつていた壱さんは、土石流みた  
いに豪快な勢いで腹抱えて笑いだした。それに誘われるようにな、我  
が背後で慎ましやかにしていたバツまでもが「くつくふふふ」と忍  
び笑いしてくれている。

なんだか、目の前でバスが出発しちゃって、ぼつねんと独りバス停に取り残されたときのような物悲しさを感じて、まったく一人のようく笑えないのだが。

どうにかこうにか“笑い虫”を抑えこんだらしい堀さんは、それでも頬をピクピク震わせつつ、

「刀さん、突然、あまりにも真面目に奇抜な事を言うんですもの、ツボに入つてしまつて」

惚れ惚れするくらいのところでもいい笑みを顔面いに浮かべて、イスを打ち鳴らしていた理由を教えてくれる。

「私の隣にあ  
座  
りなさいな、つ  
てそれを刀さん、くつ  
ふふふ」

冷静になると、もつすぐ恥ずい！

顔を真っ赤にするところが、全身が熱で汗がタラタラ滴つてしているのは、ここがサウナだからというだけではないだろう。

あまり温かくないですね。もとアツアツにしましょ。

「そうですか？ オレは十分にアツアツだと思いますけど、で、なにをお求めですか」

室温と羞恥心をあわせて超ホットな我が身体的には、もう満ち足りてゐるんですけどね。

「焼け石に水を注ぎたいので、『ひしゃく』を

水蒸気を発生させて体感温度を上昇させる、といつもさんの『』要望にお応えして、オレは彼女に『ひしゃく』を握らせて、水の注がれた桶の位置と、焼け石が詰まつた円筒形の入れ物の位置を教えた。のだが、後悔は先に立たないといふか、未来は知れないといふか。

桶から“ひしゃく”で水をすくい、焼け石にぶっかけ、その蒸発する音を聞いたとたん、志さんは何か面白いモンをめつけちゃった。幼子みたいな雰囲気を満面に浮かべた。そのお顔を見た瞬間に、オレは「ああ、なにぞいらん事を思いつきやがつたな」と悟ったのだが、時すでに遅し。

「根競べしましようよ」

オモシロ楽しそうに二タニタしながら、志さんは“ひしゃく”を握りしめて言った。

志さん主催“その場の思いつき根競べ”には拒否権なんて最初から用意されておらず、彼女は右手に“ひしゃく”を握り、左手で逃げられないようにオレの腕を固定し、どう頑張つたって身体の毒にしかならないような競技を強行し

## 承／第十九話・ムシムシ須ヶ原（其の六）

状況整理といつも過去回想現実逃避は終わる。

結局、“その場の思いつき根競べ”は主催者が鼻血を噴いて強制終了とありなり、自業自得な壱さんはあてがわれた部屋へと送還された。ちなみに運んだ者の感想として、くつたり脱力したヒトを背負つて運ぶというのは、なかなかの重労働であつたと、あえて言つておこう。

部屋に到着しても、壱さんはへばつたまま微動だにしないでの、ツミさんと口工さんが連係プレーで汗と鼻血を噴いた彼女の身体を拭き、寝間着に着替えさせた。当人は無抵抗主義なお人形さんのごとくされるがままを貫いて、いまはベッドの上でのびている。

オレはと言えば、さつきまで壱さんのことを“うちわ”的な物で扇いでいたのだが、途中から聞こえてきた彼女の安らかなる寝息を聞いたとたん、ヤル気が失せたので、件の手帳に事ここに至るまでを書いてヒマを潰すこととした。

バツは最後の最後まで壱さんの事を心配してオロオロしていたが、ツミさんに料理の助太刀を頼まれて、

「い、イチお姉ちゃんが、ガガツをつけてくるれるような、おおいしいモノが作れるように、ガガンバッテくるよつ！」

と勇んで炊事場へ。なんとまあ、健気な子だろう。すやすやと寝息をたてていて、愛くるしくもアホな御方とは大違ひだ。

夕暮れの終わった空が夜色に染まり、炊事場からただよつ美味しそうな香りが鼻孔をくすぐるころ。

「はっ！ 夕食つ！」

ガバツと唐突に半身を起こして、壱さんは起床しなさいた。お化け屋敷の仕掛けみたいで、じつちの心臓に悪いので、以後は「遠慮願いたい起き方である。

「まさかっ！ 私としたことが夕食を食べ損ねた？ いや、まさかそんなこと

その執着心は、もはや尊敬に値するが、

「 刀さん、刀さんっ！ とうーさんっ！

死にもの狂い過ぎる形相で名前を連呼されると、チト怖い。

「はい、はい、はい、”とうーさん”はここに歸りますよ」と答えつつ近づいたら、伸びてきた手に胸ぐらを力強くつかまれて、恐喝するがごとき迫力をもつてグイと般若にみたいなお顔に引き寄せられ、

「夕食は、夕食はっ、夕食ばっ！」

壯絶なまでにツバをぶっかけられながら、単語の発音に強弱をつけただけで「まさか、もつ食べ終わってしまった、なんてことはないですよね？」という意思を相手にわからせる、壱さんのどうでもいい技を弩近距離で「拝聴するハメになつた。

なんというか彼女の必死過ぎるその姿勢に、死に際の武士が君主の安否を気にかけているような、ある種の“忠”を感じてしまつて、「ヤベエ、超カッケー」と一瞬でも思つてしまつたオレは、いよいよ壱さんに毒されてしまったのかな……。

あ……なんか自分自心がとつても心配になつてきた。

なんていう惑いは、顔面にかかつた壱さんのツバと一緒にぬぐいきることにして。

「夕食はですね」

と言つたところで、イタズラ心といつのかイジワル心といつのか、がオレの脳内にふと顔をのぞかせた。わざとではないにしても、顔面を唾液まみれにされたのだ、ブチ報復したくなるだろ？。だってオレは、人間だもの。

「 美味しく残さず、の・こ・わ・ずッ！ いただきましたよ。いやあ美味しかったなあー」

現状、もつとも壱さんが聞きたくないであろう言葉を、あえて強調して言つてみた。むろんデマカセであるが。

「…………」

志さんさ、かの如画“ムンクの『叫び』”になつて「聞いてない  
聞いてない聞いてない」と耳をふせぐ。が、しかし逆にその行動が、  
しつかり聞いてしまつたと物語つている。

「…………ど、どつして、起こしてくれなかつたのですか」

「まだ耳をふせぎながら、志さんはつづむきかげんに、精も魂も  
燃え尽きてしまつたよしなか細い声をもらした。

「気持ちよさそうに寝ていたので、起こしかや悪いかなあと」  
「これはまあデマカセではない。

「そ、そうですか……」

彼女は何もかも失つてしまつた人のよつな哀しそぎる微笑を、ふ  
つと浮かべた。

やつておいてイマサラだが、予想以上に衰弱してしまつた志さんは見るに忍びなく……しかしそれゆえに「じょーだんでした」とネタばらしをしたら何されるか想像できず恐ろしい。

が、しかし弱つた姿よつは、ふりふり怒つてこむお姿のほつが志さんじこと言うが、しつくづくと重いつか

まあそんなわけで。

もう何をされてもいいと覚悟を決め、ネタばらしをしようつと  
したり、

「…………ううう」

志さんは耳をふせいでいた両の手で顔を覆い隠し、

「…………うう」

その場にペタンと尻をついて、

「うううぐつ…………ううう」

肩を震わせて嗚咽を

ま、まままたか志さん泣こむよつ！

「あ、あの志を」

「うううぐつううう」

なんかもう、オレなんかが生まれてきて“メソナサアアアアイツ！

ほんの[冗談のつもりだったんです。アナタを悲しませるつもりなんですが]「ほどもなかつたんですね。もうほんとに申し訳ないっ！」

いまここに人類史上最上級の土下座でもつてお詫びを

「じじゅ準備ができ……た…………よ？」

しようとしたら、なんともバッダなタイミングでバツが「登場した。

目前の状況が把握できないのか、“彼”は数瞬その場で呆け……  
そして、咲さん「おこない」と肩を震わせて泣いているのを認知  
すると、

「ビビビビバ、ビウしたのうつ？　い、イチお姉ちゃんっ！　ビビ  
うビビビビヒテ、な泣いてるのう？」

動搖しそぎて瞳をうるわる潤ませる。

「ううぐつ、刀さんがあ、うううつ刀さんがあ」

夕食を食べ終わつたつて言つんです　　と最後まで言い切つてく  
れないものだから、オレが何かして泣かせたみたく聞こえ、しかし  
実際その通りなので、激しくいたたまれない。

「ど、トウお兄ちゃん？」

やめてえバツう、無垢な瞳でうつむを見ないでえつ！  
心が、心が苦しいつ！

そんなヘビの生殺しみたいな痛い立ち位置に、心の臓をかきむし  
つてもだえていたら、

「刀さん、とーさん」

聞き覚えのある　しかし、いまはありえないあらう声が、ま  
るで悪魔のささやきがごとく密やかな音量で呼びかけてきた。  
まさかそんな、と思いつつ声の聞こえたほうを見やつてみると、

「…………」

思わず、一度見してしまつた。

自分の眼球がとらえた視覚情報を、これまでに疑つたことは、  
いまだかつてない。

そこにあつたのは、してやつたりつて感じの薄ら笑みを浮かべて  
いる咲さんのお顔であつた。さつきまで泣き顔を覆い隠していた両  
の手は、観音開きのようにパカッと開かれている。

なんかもう色々と理解が追いつかず、言葉もなく立ち去へしてい

たら、

「どうです？ 」のいたたまれない状況から抜け出すために、私からとても素晴らしい提案があるのでけれど、聞きたいとは思いませんか？」

「タリとした表情はそのままに、彼女はヒンヒンと言の葉を投げてきおつた。

もひ、わけがわからない。

が、「とりあえず聞いたけ」と我が危機感知生存本能が警告していくので、

「で、提案とは？」

お訊ねすることにした。意図せずヒンヒン声になってしまったのは、なんでだひ。

「これから食べる」となる夕食、刀さんの分を全部 とは言ひません、半分でいいです、半分、刀さんが私にわけてくれるなら、事態は万事解決ですよ」

なんか引つかかるが それで、さつきからずうーと我が家心の“やわらかい場所”に刺さりっぱなしな潤んだ瞳の無垢な眼差しを抜くことができると喜びのならば、

「壱さんの『満足ゆくまで差し上げますから、万事』に解決願いたいっ！」

それを聞くや、壱さんは満足げに口の両端をニヤと吊り上げ、

「では 」

と乱れた寝間着の裾を正しながら立ち上がり、

「 そろそろ“亭主関白”はやめにしまじょうか、ね？」

刀さん

しつとそんな事を言つのだ。

まるで何事も無かつたかのよひ。

いたつて平静な態度で。

……恐ええ。ちょー恐ええ。なんか寒氣を覚えるわつ、その平静れひ。

ていうか、なんですかね？“亭主関白いりつ”って！

## 承／第一十一話・ムシムシ遊び（其の八）

「あらあら、おかしなことをおっしゃいますね、刀さん」

セイジで鹿さんは可愛らしく　いまのオレにとひしてみれば、おだましくらいの可愛らしさで小首を傾げて、

「せつかく夫婦になつたのに、あまりにも仲良し過ぎて変化が少しいから、試しに“亭主闘白”やってみたいって　そつ提案してきましたのは刀さんですのに」

どこら辺で？　どこら辺でそんな血迷つたこと言つました？

オレにはそんなゆる～に闘白宣言をした記憶はないぞこませんよつ！  
「もお恥ずかしがつちやつてつ」

このこの～つてなぐあいに、彼女は指一本で見事な地獄突きを我が胸部に放つてきおる。そりやあもう、このヒトは人差し指でオレの肺に穴を開けるおつもりだな、と察せるくらいの見事さだ。世界地獄突き選手権があつたら、きっと伝説になれるだろ。

しかし残念ながら、我が肉体はぢゅめつけたつぱりに心乱しおる彼女を受け止められるほど強靭ではなく、なにより人差し指で人を刺すとか、おもしろくないうえに、やられる側はたまたもんじやないので、オレは順調に掘削作業中な彼女のお指をつかみとつて強制終了願うことにしゅりゅ。

が、お指は望まれない使命感を發揮して掘削作業を続行しようとしておるので、「もう勘弁してくだせえ」との念を込め、その指をにぎにぎ握つて説得していたり、

「と、トウおお兄ちゃんと、い、イチお姉ちゃん、けケンカして、いイチお姉ちゃん泣いてたんじじやないのつ？」

ここまで不安げに所在無く立ち廻っていたバツが、どこかほつとしたような声色で訊ねてきた。どうやら“彼”は、ケンカのすえに鹿さんが涙々したと思っていたようだ。

「まさか、私と刀さんがケンカするなんてありえませんよ。わつき

のは“じつに遊び”ですから。それに、もしケンカをしたとて、刀さんは女性を泣かせるような人ではないハズですよ?」

そう答える壱さんのお顔には、“彼”を安心させるような、「ね、そう思うでしよう?」と同意を求めるような微笑みが浮かんでいた。その答えにバツは、しばし潤んだ瞳でオレを見つめ、

「や、そう、そうだよね」

じつに、と純朴な笑みをくれる。それは不条理な世に咲く一輪の花が」とぐ、見ただけで胸の内に現在進行形で蓄積されてゆくアレやコレやを一瞬で消し去つてくれる特効薬であつた。もつ食べちやいたいくらいである。……あれだね、じ老体が自分の孫は眼に入れても痛くないっていう心境と、ムツ「ロロウ王国の王様が「よおしよおしよおし」といふんな意味でものす」」「ミロニケーシヨン能力を発揮して動物に接する心境が、とてもよく理解できた気がする。彼の方々はこの境地に居たのか、と。それは非常に形容し難い、しかしすこぶる単純明快で純粹な

「といひで」

ヒヅさんは問答無用でオレの思考をぶつた切り、

「準備がどうとか、なにか言いかけてましたけど?」

わざとらしいぐらいの疑問顔で、おおよそ見当がつきそつなことを、あえて訊く。

「え、あ、う、うん。じゅ準備ができたから、ゆゅ夕食た食べようよつて、とトウお兄ちやんと、いいお姉ちやんを、よ、呼びに来たんだよ」

というバツの返答に、

「あら、ついに待ちに待つた夕食のお時間ですね」

壱さんは、それだけで「はん三杯食べられそうな素晴らしき喜色満面を浮かべて、

「このまま待ち続けていたら、お腹が空き過ぎて背中とくつ付いてしまつところでしたよ」

「まんまにタヌキが」と軽快な腹太鼓をひとつ打ち鳴らす。

.....。

.....どひつてだらう、みょーに和むのは。

空腹のヒトが腹を叩いただけなのに、なんでハッピーハンドを迎えるそうな、ぬくい雰囲気が室内に満ちるのだろう。

.....摩訶不思議だわつ！

いや、だからと言つて、べつにこの雰囲気を否定するつもりはない。志さんがあなたには安堵を覚えているし、やっぱり泣き顔より顔面の筋肉緩ませてこらぼうが彼女らしいと思つから、この室内に満ちているぬくい雰囲気を否定するつもりはない。だが、しかしそれを差し引いても、個人的には色々とお訊ねしたいことがあるわけで、

「あの……志さん」

このまま雰囲気にのまれて強引に流れを持っていかれたら訊くなイミングを逃がしてしまっては困るので、そんな前に先手を打つことにする。

「なんですか？……あ、夕食やっぱり半分はイヤだとか、そういう交渉には応じませんからね」

そんなキッパリと、全力で的外れなことを先回りで、回答をされても困るのですが。

「じゃあ、なんだつてこうんですかあ？」

そんな不満たらたらに、ほっぺをふくつて膨らませられても困るのですが。  
ていうか、他に思い当たらないんですね……。いや、まあ、ここですけどね。

.....氣を取り直して、オレはもうすぐ疑問極まる事柄をお訊ねさせただく。

志さんがじ起床なさつてから、事じじに至るまでに起つた、トリックキーな出来事について。

「んんー、『まんじゅう怖いの応用編』ですけれど、それがなにか？」

ずいぶんアッサリと意味不明なこと言いますね。

「なんですかね、『まんじゅう怖いの応用編』って？」

「ほり、刀さんが話してくれた、心理戦の極意を指南する落語『まんじゅう怖い』ってあつたじゃないですか。相手の“イタズラ心／イジワル心”に火をつけて、結果的にこちらが得をするっていう……はい？ いつから落語はそんなタクティカルなお話になつたんですかね？」

「刀さんが、しょーもないウソを吐いたとき、これはいい機会だと思いまして、試しにおこなつてみました」

応用編なのは状況が微妙に違つからです とじ親切におっしゃつていただきても、全体的に何を言つているのかよくわからないのですが、

「オレがウソ言つてるって 」

「バレバレでしたよ」

なんでも、ウソを吐いたときの我が声には、普段とは違つ“形容し難い感覚的な違和感”があつたそうな。そして、オレが喋るときその吐息に食後特有の一オイがなかつたこと、炊事場からは美味しいな二オイがしていたし調理中な音が聞こえ続けていたこと、バツと思しき足音がこちらに近づいて来ていたことなどなどを総合的にかんがみて、壱さんはオレがウソをこじていると直感したらしい。

改めて、壱さんの空間把握能力といつか状況認識力のすゝみを思い知るわけだが、

「ということは 」

精も魂も燃え尽きてしまつたようなか細い声とか、何もかも失つてしまつた人のような哀しすぎる微笑とか、我が精神ライフポイントを「リゴリ削つたお涙とか は、やつぱり、

「演技ですよ」

どうです、なかなかの演技力でしょう と、壱さんは胸を張る。オレは思わず目を見開き、

「あ、あかか……そんなつ」

足元をよろめかせ、

「志せん……恐ろしい子つ！」

と白い皿で盛きたかったのだが、「そんな」とよつ、早く行きましょうよー」と志せんが三度ほ乱心の勢いで急かしておるので、「わかりましたっ、わかりましたからっ！ 隠あらば地獄突きかまそつとするのやめていただきたいっ！」

なんだか消化不良な感じだが

そんなこんなで夕食のお時間とあいなつた。

## 承／第一十一話・ムシムシ匂へし（其の九）

ある意味で「ガガーンッ！」という効果音がバツチリくる絵図ら  
だつたかもしぬない　とか思いつつ、オレは件の手帳に事じに至るまでを書き記した。

なんだかんだで小まめに日記を書いているのが、自分でも意外だ。  
というか、まあ、それ以外に夕食後のようにタイムを潰す術  
が、オレにはないだけなのだが。

「ん～～～～つぐ

書き記す行為で「リ固まつた背筋を伸ばす。首を右に左に傾けたらバキボキと小さいきな音が鳴つた。

ちよいとスッキリしたところで、室内へと視線を転じてみる。

最初に我が視覚がとらえたのは、ウサギのたれ耳を思わせるツイ  
ンティルな黒髪であつた。

なにやらバツは床にペタンと尻をついて座り、自らの手元に真剣  
な眼差しを注いでいる。

なにしているのかなあと素朴な疑問に駆られて注意深く見やつて  
みると、なんと“彼”はお裁縫道具らしきモノを駆使して“まんじ  
ゅうを見て逃げ出した襲撃者”によつて切り裂かれてしまつた壱さ  
んの着物の袖をチクチクと慣れた手つきで縫つていた。

頼まれてもいいのにっ！

なんと健氣でよくできた子だろ？

もつすつごく頭をなでなでしてあげたい衝動に駆られるが、作業  
の邪魔をしてはいけないので　頑張れ、我が自制心つ！

衝動に負けて身を任せてしまつまえに、気合で眼球を動かす。

次に我が視覚がとらえたのは、ベッドの上で大の字に伸びている  
おヒトの上に“もりもり”と、しかし“とろける”ようにそびえて  
いらっしゃる、ふたつのお山であった。だらしなく着こなされた寝  
間着の襟ぐりは大胆にはだけてしまつていて　ちきょうつ！　頑

張れ、我が自制心つ！

「壱さん、寝間着がダメなへりこはだけやつてしますから、わせんと着直してくださじつ」と着直してくださじつ

視線のやり場が一点集中しきやつて困つますから。オレが。

「ええー、だつてえー」

と、壱さんは寝そべつたまま口を尖らせて反論してきおつた。

「満腹なんですよ、わ・た・しつ」

だからどうしたつ！ と壱こたえていたりあるが、それは脇に置いといじ。

なんだか、いまの壱さんに“あるヤツ”がものすげく似合つて、  
そうな気がしてならない。

「壱さん、ちよつと“じつあん”ですかー！」 つい壱つてせんせんせんか？

そんな脈絡のない提案に、

「…………」

壱さんは思考を巡らせるよつて眉根を寄せてい しかし、すぐこ  
ど一でもよくなつたりじへ、

「“じつあん”ですかー！」

……すばりしく、相撲取りのよつで、ちよつと憲話しあつ  
なのが絶妙である。

けれども、この行為に深い意味はまったくない。もれなく浅い意  
味もまったくない。

ただオレが聞きたかっただけである。

といつのも、まあ置いといじ。

そもそも壱さんの言わんとするによつて、「ええー、だつてえー」と彼女の口から発せられた時点でわかっていた。最近、我が察し能力は無駄に鍛えられてるので、こんな朝飯前もとい夕食後である。

満腹で苦しいからお腹周りにゆとりが欲しい ところのが、壱さんを大胆にはだけさせちゃつてる理由だらつ。

「わかつてくれていいのに、どうして刀さんは『寝間着を着直して満腹のお腹を圧迫しろ』だなんてヒドイこと言つたんですか……ですか、苦しくてもだえる私の姿にハアハアしたいんですか？」  
ハアハアしないために、寝間着を着直していただきたいと申しているんですがねえ。

察してつ、我が心情をつ！ 自制心が頑張つてゐるだけにつけ……いや、まあ、満腹のお腹を圧迫したくないといつ気持ちは、オレにだつて当然のように経験があるのでよくわかるんですがね。でも、だからこそ、

「胸元にゆとりはいらぬでしょ」

と言いたい。

「私も、そう思いますよ」

壱さんは同意を示してくれつとも、

「……でも

と、なにやら深刻そうな口調でおおつしゃる。

「どうしてでしょ、胸が苦しこんです」

「胸焼けじゃないですかね」

さつき夕食をガツツコビンの分まで「ゴッソリ喰つてしまつたものね。

「そういう苦しさとは違つのです」

壱さんは抗議をするように、ふくつとほつぺを膨らませる。

んんー、間違つてこるのは思えないけれども……他に考えられる事はといえば 胸元に実つてる果実がとってもタワワだから物理的に苦しいとか、もしくは、

「食道に食べた物が詰まつちやつてゐ、とか？」

壱さんはほつぺを膨らませたまま、

「…………」

無言どころ不満の念でお返事くださつた。

べつに壱さんが納得したから正解とか、そういう事柄ではないと思つけれど、

「じゃあ、どうこう苦したなんですか？」

オレとしては寝間着を着直してもらえば、それでいいので、壱さんがご納得してくれそうな妥協点を探すことにする。

「圧迫されるような、締め付けられるような、なにかつつかえているような」

壱さんは少々苦しげに表情を歪めて言い、

「それでいて、なぜだかちょっとぴり切ないです」

と皿の胸元に片手をあてがう。

もう絶対 胸焼けでしょ。

サツマイモ食べ過ぎたとき似たような症状になりましたよ。まあ、あのときオレが感じたのは「ちょっとぴり切ない」「じゃなくて「ちょっとぴり酸っぱい」でしたけど。

「だ、だ誰かを、す好きになると、む胸がくつ苦しくなるって、ぼボク聞いたことがあるよ」

不意打つよ、お裁縫する手を休めてバツが言つた。

それを聞くや、

「ま、まさかっ！」

壱さんは一気に上体を起じて、まるで驚愕の真実に気がついてしまつたが」とき勢いで、

「これが、恋の胸キュンっ！」

違うと思います。

いや、恋の胸キュンがどうこうモノか知らないので断言はできませんがね。

でも現状のそれは、限りなく胸焼けに近い恋の胸キュンだと思いまますよ。

ところは、まあそれはそれとして。壱さん、起きたついでに胸の辺りでこぼれちゃいそうになつてるモノを収納してくださいつ。

「もー、わかりましたよう」

ショーガないなあ、ところが壱さんは寝間着を着直してくれただ

れぬ。

……こまとうながり、びつじてオレがお願いする側なのだらう。

……め、いつか。

気になら負けだ。  
うそ。

と、そんな感じで開き直つて、身も心も柔軟する気分で再び背筋を伸ばし、首を右に左に傾けてバキボキ鳴らす。

「あんまりバキボキやると

すつと寝間着の襟元を正して、

「痛めてしましますよ?」

志さんはとがめる口調で囁つ。

「いや、まあ、それはわかつてゐんですけどね  
わかつちやいるけど、やめられない。

といふが、一連の動作がクセになつて無意識にやつてしまつのだ。

「うつてこむのなら、私がモニモニヒト揉み解してあげますよ」

と言つて、志さんは準備運動するがごとく両の手をにじわにじわする。  
お気持ちはとつても嬉しい。

けど、どうしてだろう。志さんの「揉み解してあげますよ」

とこつ言葉が「握り潰してあげますよ」と聞こえてしまつのは……。

よし、ここは丁重にお断りさせていただこう。

「あー、刀さん、私の腕前を疑つていますね?」

望まれぬ勘違いと云ふか深読みを、どうもありがとひざります。  
てか志さん、なして立腹と見せかけて、ちよつと嬉しそうなんですかねつ。

いやもうオレは、その嬉しそうなお顔を見ただけで満腹ですよ。身も心もゆるゆるに弛緩しまくつ、口つ離れまくつ。志さんは存在自体が極上のマッサージです。いちそうさまでした。

なので断じて、揉み解しの腕前を疑つてゐるとか

「そういうわけでは

なくてですね。

テンション上ると加減が利かなそうな、たくまし過ぎる腕の筋の強さをお持ちの壱さんですから、できれば痛いことになる前に、オレとしては「遠慮申し上げたい」ところなのですよ。

「ほら、へんに揉むと“揉み返し”がきて、むしろ痛めてしまつ」

とが

聞くや、壱さんは眉根を寄せて、

「やつぱり疑つてるじゃないですか」

ふくつとほっぺを膨らませる。

アカーンッ！ 言葉のチョイス間違えたわつ。

「私、これで旅の資金を調達したりするんですよ」と嬉々と誇らしげに、壱さんは訴えてきおる。

なんでも、壱さんはフトコロ事情が寂しくなつてきたり、そのとき宿泊している宿屋の亭主にお願いして旅人や旅商人が泊まっている客室を回らせてもらい、長旅で疲れている彼らを“整体／マッサージ”的な技術で癒やし、その対価として報酬をいただくのだそう。旅館とかではマッサージ師さんを呼ぶサービスがあつたりするから、それと似たようなモノだつ。この場合は、マッサージ師さんが自ら売り込み営業しているが。

「ちゃんと報酬が頂ける腕前なのですよ」

壱さんはふんぞり返るように胸を張つて言い、

「それとも……刀さんは、私になんかモリモリされたくない……ですか？」

一転、いじけたふうに訊いてくる。

そう言われちゃつたら、もうオレに残された選択肢はひとつしかない。

「まっさかーっ！ そんなわけないじゃないですかっ！ オレもう全身バツキバキにコリ固まっちゃつてて、是非とも報酬が頂けるほどの腕前をお持ちの壱さんに揉み解していただきたいですよっ！」

我ながら残念なほどに文芝居であるが、

「や、そうですか？」

壺さんはへらと顔面筋を緩ませて、

「刀さんがそこまで言つなら、私の超絶技で身も心も揉み解して昇天させてあげますよ。」

オレのわがままにじょーがなく付き合つてあげる的な態度で言い、こつむに来いとベッドの上をポンポン叩いて示す。

壺さんの言う昇天が、そうなつちやつほど心地好いとこつ意味である事と、万が一にも片道切符ではなく往復切符であることを切望しつつ、オレはベッドに歩み寄つてその縁に腰を下ろた。

「うつ伏せになつてください」

とこつ壺さんの「」指示に従つて、オレはベッドに上がり、うつ伏せになる。

こままで壺さんが大の字になつて寝ていたそこには、彼女の匂いと体温が残つていて……どうしてだろう、妙に生々しく温かつた。

壺さんはベッドの上をはわすように手探しし、それがオレの身体に接触すると、そこから全体を確認するように手を動かす。背中とか首筋とかをソフトタッチで触られるのは、非常にくすぐつたいた。

「では、始めますよ」

壺さんはそう言つと しかし何も始めた。といふか、オレの身体はモリモリされている触感を感じなかつた。

どうしたんだらうか、と思い首と眼球を駆使して壺さんのいらしやるほうを見やつてみると

「つーつー」

ふとももつ！ と思わず口から出やつになるのをどうか堪えるも、やつた視線はブラックホールの超重力に捕らわれてしまつたがごとく脱出困難な釘付け状態に陥つてしまつ。

視線をやつた先にあつたのは、なぜか膝立ちしている壺さんの寝間着の裾からチラリとのぞく しなやかでありながらも、どこかムチツとムニッとしているしゃる、色っぽこと言つよつ口つぽいふとももであつた。正確に言つと、うちももであつた。

もつすつじく惹き付けられてしまつのは、男として産まれたがゆえの“宿命／必然”だ。いたしかたない。

が、それに真つ向から勝負を挑んでフル稼働しちゃつてる優秀で強靭な自制心がオーバーヒートを起しすまえに、首と眼球に全力でムチ打つて視点をずらす。

「…………？」

壱さんは、なにやら真剣にオーケストラの指揮者が「」と両の手と腕を動かしていた。

意味がわからない。

ので、ここは素直にお訊ねせいでいただく。

「あの、壱さん……お取り込み中に申し訳ないんですが、いつたい何をなせつているのですかね？」

しばしの間を置いて、一連の動作を終えてから壱さんは「」回答くださる。

「手を温くしていただんですよ」

それをオレは準備運動的な意味合いだと受け取つた のとほぼ

同時に、壱さんの手がオレの腰辺りに置かれる。

「…………！」

ちよつとビッククリするぐらい、壱さんの手は熱を帯びていた。温かいことこりよりは熱いという感じの、最高温度に達した使い捨てパイロを押し当てられているような感覚である。

てつくり比喩的な意味での“手を温く”だと思つてたが、どうやら事実としての“手を温く”だつたらしい。

氣功のような技術だらうか とか、そんな些細な疑問などどうでもいいと思えるくらい、壱さんの温い手はじんわりとしみわたるよつに我が筋肉の緊張を解してゆく。

告白しよう。

とつても眠い。

例えるなら、冬場に、ほどよく温もつた布団で寝るとそのよつな、なんとも形容し難い至福に満ち溢れた眠気とでも言おうか……。

もつ……正直、思考するのも面倒臭いような。  
なんだか……とつても……マブタが……重たくなつて  
き……  
……

承／第一十一話・マジシャン（其の十）

「 はつ…」

いかん、いかん、寝落ちるといひだつた。

危ういところで覚醒した我が意識は本能的に自身の置かれている現状を把握しようとしたし、目ん玉だけをギョロリギョロリと動かして辺りを見回し確認する。

どうやらオレは、ベッドの上で顔を左に向けてうつ伏せになつていたらしい。

……まあつまり、一瞬意識が途切れるまえと同じ状態なわけだ。うん、なんら問題ない と安堵しようとして、しかし重大な問題に気がつく。

さつきまで見える範囲にこりつしゃった志さんのお姿がないっ！なぜに？

と冷静に慌てつつ、腕立て伏せの要領で我が身を起しつゝ たら、

「おはよひござこます、刀さん」

まるで朝の挨拶でもするかのように、聞き覚えのあるお声が呼びかけてきた。

ベッドの上でよつんぱりとこつ姿勢のまま、オレは首だけ動かして音源の方を見やる。

窓際のイスに座り、そのおヒトはお茶をすすつていた。

だだそれだけなのに、どうしてだらつ……窓から差し込む日光の中にあつて淡い光に縁取られたそのお姿は優しく麗しく、その消えてしまいうな哀しい美しさに我が目ん玉は完全に魅了され オレは思わず息をのんだ。

「 ……あれ？ 刀さん？」

著名な画家が全身全霊を込めて描いた絵画に登場する人物が「」とあそのおヒトは、

「一度寝……ですか？」

いぶかるように小首を傾げて、

「もへ、しょーがないですね」

ふくつとほっぺを膨らませてから、

「どうーせーんつ！ 朝ですよー！」

騒音としか言いようのない大声を容赦無くぶつ放してきおる。悠然たる匠の力作が、一瞬で無邪気な子供もの絵になってしまった。

「どうーせーんつ！」

黙つてこると近寄りがたいほど美麗なのに、口を開くと好い意味で残念なくらいフランクなおヒトである。

「どうーせあ」

その過剰に元気ハツラツな呼びかけは、

「起きてますっ！」

いよいよもつて我がお耳が潰れそつなので、

「オレは起きてますよっ！ 韶さんっ！」

そろそろ止めていただきたい。

「起きていのなら返事してくださいよ、もつり」

堀さんは眉根を寄せ、ふりふりと怒ったふうに抗議を述べてから、

「おはようござります、刀さん」

なんか今日も頑張れそうな気持しがせる、とても素敵な柔らかい微笑みをくれる。

「おはようござこま」

と口から出したといひで、薄々とは気づいていた疑惑が、

「す？」

ちよいと顔をのぞかせる。

朝晩の感覚が不定期になりちな御仕事をしているヒトまたは生活を送つてこむヒトからしたら、対面時の挨拶はすべからく「おはようござこます」になるらしいが、一般的に「おはようござこます

と言えば朝の挨拶だ。

が、しかしそうなると今現在が朝であるといつていいなって  
しまう。

まあかそんなこと、と思つただが、

「初めて聞きましたよ、疑問系の“おはようござります”なんて」  
そう言つて薄つすら苦笑する志さん の背後にある窓の外には、  
朝日が照らす清々しい朝の光景が広がつていた。

どうやらオレは、完全に寝落ちていたらしい。

「なんか寝た感覚がない……と言いますか、気づいたら朝になつて  
た感じで、いまが朝だつていう実感が薄くて……」

いいかげん、よつんぱいでいるのもアレなので、オレはベッドから  
降りて背伸びをしつつ、朝の挨拶が疑問系である理由を説明した。  
「それはきっと眠りが深かつたからですよ」

と志さんは思い出したよつてまくほく顔になつて、  
「とっても気持ち良さうに寝息を立てていましたもの、刀さん」  
ムフツと血ひのまゝペニ画の手を包み込むよつてあでがつておつ  
しゃる。

「もう食べかけいたいくらいでしたよつ

それほどどういう意味ですかねつ？」

食欲旺盛な志さんに言われると、どつしてだか比喩表現に聞こえ  
なくて未恐ろしこんですが。

「刀さんたら、やめたい」と話きますね　」

「じりじり恥らうように唇を尖らせ、志さんは言つ。

「 言葉通りの意味ですよつ

ゾワゾワッと背筋に悪寒がはしるのよ、何がしかを死守せんとする  
防衛本能からの忠告か、はたまた生存本能からの警告か。

といつて正直、志さんがおっしゃるとここの“言葉通りの意味”  
の意を正しく理解できていないのだが、  
「そんなことよつ　」

と志さんは、空腹のオオカミを前にしたか弱き子羊が「」とくフル

フルしちゃつてるオレの」となど知らぬ存ぜぬといったふうに、

「お散歩に行きましょ。お散歩。ね、刀さん」

なんぞ遊園地の入場口でテンションが最高潮に達した子どもがごとく、「早く、速く、は・や・く!」と急かしてきおる。

「べつに行くのはかまわないんですけど……なぜに散歩を?」

そんなオレの素朴な疑問に、吉さんはオモシロくなさそうにぱくつとほっぺを膨らませて、

「……理由がないとダメなんですか?」

むうーっと不満ありげな仏頂面で訴えてくる。まるでどこの超戦士がみなぎらせる鬪気が「とく、その顔面からは威圧的なオーラがヒシヒシと発せられていた。

あんまり強くない我がハートであるからして、そのプレッシャーに耐えられるわけもなく。

「思い立つたが吉田つて言こますものね、理由なんていりませんよね」

……どうしてだろ? 親父の背中が、お袋の尻に敷かれて加齢臭と一緒に哀愁かもしだすちやつてる親父の背中が、走馬灯の「とく脳裏にチラつくのは……。

## 承／第一十四話・ムシムシ感へし（其の十一）

オレ以外の面々は、すでに朝食を済ませたらしい。  
なして起こしてくれなかつたのか、といつあたりまえな我が問  
に、

「だつて　」

と壱さんは困つたふうな微笑み顔でお答えくださる。

「呼びかけても、刀さん無反応を貫いて起きなかつたんですねもの」と。

そんなの、まったく記憶にない。

のは、まあ、オレが爆睡していた証拠か。

ちなみにオレの分の朝食は、

「私が美味しくいただきましたよ。残したら作つてくれたヒトに申し訳ないですから」

という壱さんの善意によつて、キレイさつぱり美味しく食された  
そうな。ありがた過ぎて泣けてくるぜ、チキシヨーー！

というか、なぜにオレが起きてくるまでとつておくといつ発想がないのだろう……。

シミさんとバツは、“夫婦大食い祝事（決勝）”に提供するため  
の蒸しまんじゅうを作る口工さん率いるメムス屋の方々を手伝つた  
めに、いまは戦場と化している炊事場へ出陣しているらしい。

一宿一飯どころか四、五、六飯ぐらゝの恩があるのだから、オレ  
や壱さんも手伝つたほうがいいんじゅなからうかと思うのだが、  
「私もそう思いましたけど」

壱さんいわく、

“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場する新婚夫婦さんに手伝わせ  
るなんて、そんなバチあたりなまねはできません”  
と口工さんに強くお断りされたとのこと。

バチあたりなのは、夫婦だとウソぶつこいて“夫婦大食い祝事”

に出場しちゃつて、じつちのほつなのだけれども……。しかしその事実を述べても、祝い事をやつているがゆえか、好いほうへ物事を解釈されてしまい 結果、いまさら後には引けないとここまで来てしまって……とりあえす、いまは心の中で全力土下座の謝罪をしておこひ。

「どうか、忘れていたが いや、無意識のうちにあえて忘れようとしていたのかもしないが、そういうえば本日は、壱さんの望まれぬご活躍によつて出場することが決定した“夫婦大食い祝事”の決勝戦がおこなわれる日であった。

だからなのか、朝っぱらから村の方々のテンションは熱を帶びて高い。こちらの姿に気がつくと決まって「がんばれよー」とか「応援してるぜー」とか「お幸せにー」という力強いご声援を飛ばしてくれる。

やましい事実があるので、とつても心苦しく申し訳ない。

「ご声援に応じると同時に、心中では土下座の連續である。なので、あまり強くない我が精神ライフポイントは、どうぞの毒沼を移動するがごとくゴリゴリ減少してゆく。

あまりにもいたまれないので、拳動不審と警戒されるぐらいチヤキチャキ歩いて、いまは壱さんご希望の散歩コース 昨日の夕時に歩いた畦道である。

いたたまれない状況と村の人々の熱氣から遠ざかつて、あらためて感じる早朝特有の爽やかで清々しく冷たい空気は非常に心地よく、呼吸するたびに吸い込む空気には都会のそれと違つて混じりつけなしの新鮮さがあり 我が人生において初めて、ただの空気をとても美味しいと思つた。

眠気がぶつとぶ爽やかさ。  
脳ミソがシャキッとスッキリする清々しさ。

とでも言おうか。

せつかくなので、喰いつぱぐれた朝食の代わりにたらふく味わうことにする。

ちくしょうつー！ なかなか満腹にならないぜつー。  
と、全力で空氣を味わっていたら、

「…………あの…………刀さん」

そよ風に遊ばれて流れる、肩口でテキトウにぶつた切った漆黒の  
髪が口に入らないよう片手で押さえながら、壱さんは遠慮がちに  
といふか、ちょっと引き気味に訊いてきた。

「なにを、その「…………せつ」から、すうはあすうはあしているので  
すか？」

シャキッヒスツキリ覚醒した脳ミソがですね、働くのに必要不可  
欠なエネルギーをですね、欲しておるわけですよ。ブドウ糖をね。  
それを摂取するための朝食をねつ！

でもそれは、アナタ様に喰われてしまつて叶わぬ願いなので、  
「こ」の美味しい空氣をいっぱい吸い込めば、少しくらいはお腹膨れ  
るかなあ、と思いまして」

「空氣を吸い込んで膨れるのは、ビーがんばつても肺だと思います  
けど……」

「こりませんよ、そんな当然の「」指摘とか。

「…………もしかして刀さん、お腹空いたんですか？」

なにぞ確認するように問うてくる壱さんが、ちょいと恨めしい。

「もしかしながら空腹です！」

オレは少なからず憤怒の念を込めて返した。

のだが、

「じゃあっ」

と壱さんは嬉々とした様子でパチンとひとつ拍手を打つ。

「こっちが仰天するほどの空間把握認識力をお持ちなのに、ビーハー  
て場の空氣は読めないんだろ？ と思つたのは一瞬のこと。  
「この辺で、ちょっと遅めの朝」はんにしましょうか。ね、刀さん  
おつしゃつしている言葉はわかるけれども、

「それは、えつと……どーいう意味ですか？」

そんな我が問いかけに、

「なつ！ なんといひ」とてしょ、「ひー、あまつ」もお腹が痛め過ぎで、刀さんの頭がひとつも残念なことない。」

ガガーンッ！ という効果音が聞こえてきたらなほひ、志村さんは大げさに芝居がかつて驚きわななく。

まつたく失礼極まりない。

ちよつとカチンときたので、物理的制裁措置を発動する！」といふ。

右掌を志村さんの顔前に向け、左手で右手中指を後方へ反らしぶつ放す。

「アタツー！」

ベチンッといつ地味な音を発して、我が右手中指の腹は志村さんの額に打撃を加えた。

「もひつー、そんな！」とある悪こ子には

いたわるよにぬでこをねうつり、

「朝ごはんあげませんよつ？」

ひとつでも立腹と語るがじるとく、志村さんはふくらとほっぺを膨らませる。

「あげませそよ　ひとつ前ひ以前ひ、志村さん手ぶらじやないですか」  
「やつ、志村さん「朝ごはんにしまじょつか」と言つておいて手ぶらなのである。だから「やつ、やつ セオレは「ビー」という意味ですか？」  
とお訊ねしたのだ。ともすれば「これから新鮮な朝食を狩りに」とか言い出しても不思議ではないのが志村さんとこうおヒトである。  
万が一にも朝っぱらから野性味溢るる現地調達へ「こや、出陣つー」  
するのは、せつに遠慮願いたい。せめて、せめて眞面目かりじてつ。

「手ぶらですけど、朝ごはんは

ちゃんとこじこじ、と志村さんは胸元のちよつと下なつと口から、  
なにか笹の葉つぼい植物の葉で包まれたモノを取り出る、

「ありますよつ」

と、その葉をどじてこねヒサの結びをほどいて中身をあらわします

る。

なんとも不恰好なおむすびが、二つあった。

解放させるこの瞬間まで壱さんのフトコロで、ギュウギュウと圧迫されていたがゆえか、とっても窮屈そうに身を寄せ合ひあわせている。

といつぐあいにその存在を認識したとたん、「ぐう～」と切なげにお腹が鳴った。どうやら腹の虫は、どんなにがんばっても自分の気持ちにウソがつけない真っ正直なヤツのようだ。

「くつふつふふ

我が腹の虫の鳴き声に、デコレンかまされてもタムスッとしていた壱さんは顔面筋を緩ませ、

「刀さんたら、そんなにお腹空いてたんですか？」

おもしろ楽しそうに堪えきれぬ忍び笑いを漏らしつつ、愚問と言つべきことを訊いてくる。

それに対し、真っ正直な腹の虫が、

「ぐう～

と大声で、オレの代わりに返答してくれた。

承／第一十五話・マシタシ飯（其の十一）

そんなわけで。

畦道の脇 雜草の生むる斜面に腰を下して、ちよつと遅めの朝食タイムである。

「その……」

なにやら心配事でもあるかのような表情で、

「お味のほうは、どう……ですか？」

志乃さんが訊いてきた。

が、しかし。

まだオレは一口も喰っていない。

というか、おむすびはいまだもつて志乃さんの手中である。それなのに座った次の瞬間に味の感想を訊いてくるなんて……。

まったく、江戸っ子もビックリのセツカチさんだ。

なんてことを頭の片隅で思いつつ、葉の包みじと志乃さんからおむすびを受け取り、ビックタリと身を寄せ合ひ合ひやつて、不恰好なおむすびのひとつを引つペがして手に取る。

そして、

「いただきまーす」

唾液を分泌しまくつて受け入れ準備万端な飢えたるお口へと運ぶ。

が、堪えきれずに口の方から喰らいつきにいき、喰らいつく。じっくりと咀嚼して、しっかりと味わい、ゴックンと嚥下する。

それはそれは シンプル・イズ・ザ・ベストな“塩むすび”であつた。

なのでお味は可もなく不可もなく

「 とっても美味しい」

腹が減っているときほど、シンプルな食べ物の“真の美味さ”が

よくわかるものだ。

「空腹という究極の調味料 その美味を倍増効果、絶大なりつ！」

「そ、そうですか？」

「我が味の感想を聞いた壱さんは、「えへへつ」と嬉しそうに表情をほこりぱせる。

その瞬間、パツと世界が明るく華やいだ ように思えた。そして同時に、我が心の栄養補給が急速チャージで完了した。

「これは、壱さんが握ってくれたんですか？」

お味の感想を訊いてきて、その後に素敵な笑顔を見せてくれたことから察するに。

「だつて、私が食べてしましましたから 壱さんは少々きまりが悪そうに、」

「 刀さんの朝食」

はにかんで言い、

「あ、ちゃんとお茶も淹れてきたんですねよ」

と思い出したように、フトコロから竹のよつな樹木を利用して作られた水筒を取り出す。

ちょうどお口が水分を欲していたので、

「いただきます」

ありがたく飲ませてもらひ。

そんなかんじで、ちょっと渋めのお茶を味わっていたら。

なにやら壱さんが、またもフトコロから笹の葉っぽい葉の包みを取り出していたので、

「……それは？」

率直にお訊ねしてみた。

「これは

言いつつ、壱さんは葉の包みを広げ、

「 私の分です」

と不恰好なおむすびのひとつを手に取り、「いただきます」と流れる動作でそれをほおばる。

……まあ、しつかり自分の分を用意しているあたり、じつに壱ちゃんらしいと思ひ。

一心不乱に喰らこ過ぎて、米粒ビリウカ米塊をほっぺこへつつけちやつてるとこもね。

慌てて喰わすとも、誰も取つて喰やしない と進言したところ、「全力で味わつてるだけす」と口から喰つたモノを撒き散らして言い返される絵図らが容易に想像できるので、もはや多くを語るつもりはないが、

「ついてますよ」

気になつてしまふがないので、米塊だけは取らせていただく。取つた米塊は捨てたらもつたひないので、いたしかたなくオレが喰づ。米一粒にはハ十八の神様が宿つていると聞くしね。それを塊で捨てられるほど、オレの心臓は幸い強くないのだ。

とか、そんなんぐあいに。

滞りなく、ちょつと遅めの朝食タイムは終了した。

食後は、とくに動き回ることもなく。

オレも壱さんも雑草の生ゆる斜面に腰を下したまま、ぼおーっとしていた。

ときおり、やさしくなぐるよつにそよ風が流れ、その風になぐられた地べたの雑草たちが、くすぐったがるよつに葉擦れの音をささやかに発する。

と、不意に。

そよ風と雑草の奏でる大自然のヒーリング音と調和するよつに、聞き覚えのあるメロディ・ラインが耳に流れ込んできた。

なんとも聞き心地の好い、鼻歌バージョンの『見上げて』らん夜の星を』である。

お耳が吸い寄せられるよつに意図せずして特定した音の発生源は、我お隣にいらっしゃる おむすび食べて元気百倍上機嫌な壱さん

んであつた。

これもオレと同じような境遇のヒトに教えてもらつたのだらうか  
なんて疑問は頭の隅に追いやつて。いまは穏やかな表情で鼻歌  
を歌う壱さんの横顔に見惚れ、その鼻歌に聴き惚れるとしよつ。

「ねえ、刀さん」

歌い終わつた鼻歌の尾を引く残響のよいんから続くなめらかな流  
れで、しかし壱さんは不意打ちのようになつて、

「世界から空腹がなくなつたら――」

まるで世間話をするがごとき平常な態度で、

「――世界から争い」とが半分くらいなくなると思こませんか?」

そんなことを言つてくる。

あまりにもいきなりだったので、オレはとつぜん返答を考えつけ  
ず、

「え、ええ、まあ……たぶん」

申し訳なくも言ひよどんでしまひ。

そんな我が惑いを鋭敏に察してくれたと思しき壱さんは、

「言つのが突然過ぎましたね、すみません」

眉尻を下げて困つたふうな微笑みを浮かべる。謝るのは間違いだ  
ろつに。

「ただ、なんとなく思つただけなんですよ」

と壱さんは、しかし真剣な表情でおつしやる。

どいか、ここではない遠い場所に想いをはせるがごとく。

“夫婦大食い祝事”を楽しめるこの村くらい、世界が食に恵まれ  
ていたら、世界が空腹じやなくて満腹だつたら、きっと世界から争  
いごとの半分くらいはなくなるだらうなあ――

それは旅人として少なからず世界の様々な表情を肌で感じたこと  
のある壱さんだからこそ、身から出でてくる言葉なのだろうと思ひ。  
うまく言い表せないけれど、壱さんの言葉からは“生々しい説得力  
”が感ぜられるのだ。世界が空腹だなんて、今まで実感したこと

もなければ考へるどころか想像したことすらない、とくに食べるごとで深刻なまでに困つた経験のないオレからじゃ、どんなにがんばつても出でこない “生々しい説得力” が。

「…………」

「…………なんて、ガラにもなくひょっと正面正面向けにしてしまいましたね」

オレの無言をじつ受け取つたのか、とたん志やんせおじかたふうに「あはっ」と笑つて、

「どうです？ 刀さん？」

有無を言わせぬ超高压的な笑顔で、

「私の真面目で知性的な一面を知つて、胸がキュンキュンしついたりしちやつたりしましたか？」

強引に、いまの話を冗談めかして終わらせる。

## 承／第一十六話・ムシムシ感へし（其の十一）

「も、ももうそろそろ、ふ“夫婦大食い祝事（決勝）”が、が、は始まるから、もも戻つてきてって」

とバツが呼びに来てくれたので、昨日と同じように二人で来た道を戻る。

村の中を歩くと、またもじ声援が飛んできた。それらの声は諸々の事情から矢のごとくトランスマチームして、我が心身にズブリズブリと生っぽい音をたてて突き刺さつてくる。

ので、逃れるように急ぎ足で進むことしばし。

メムス屋さんの前で、なにやら行つたり来たりを繰り返している拳動不審な人物と遭遇した。表情を隠すように目深にかぶられた丈の長い土色のフード付きコートが、その行動とあいまつて怪しさを倍増させていく。

本来なら無視してしかるべきだったのだが、しかしどうしてかオレはその不審人物に引っかかりを感じ、

「あつ」

ふと昨日のことを思い出す。

昨日、なんの前触れもなく畠道で襲撃してきた人物の姿を。丈の長い土色のフード付きコートを着ていたのだ。

あの“まんじゅうを見て逃げ出した襲撃者”も。

いま目前に居る不審人物と同じく

「むつ？」

いいかげんオレの熱い凝視に気づいたと思われる不審人物は、いぶかるように行つたり来たりを繰り返す足どりを止めて、

「…………」

しばし状況を飲み込むための間を置いてから、

「……なつ！」

頭の上に『』が出現しそうなほど驚き口惑い、

「どうして、ここにつ

ちょっと感度の鈍い警戒心を全開にして、隙の無い体構えをとる。なんか不審人物であることが残念に思えるくらい、とっても渋くてカツコイイ声であった。

「……どうかしたんですか、刀さん？」

つないだ手をちょっと引っぱり、急に立ち止まつた理由を刀さんが訊いてきたので、「かくかくしかじか」と簡単に現状をじ説明した。

すると鹿さんは「なるほど」と真剣な表情でうなずき、

「昨日は強がつてもらうのを拒んだけれど、鼻腔に残留する蒸し込んだじゅうの匂いが忘れられなくて、時が経つにつれて食べたいとう思いが強くなり、本日いざ購入しに来た」と

グッと力強く拳を握つて、

「そういうわけですかっ」

まつたく的外れと思われる理解を示す。

「……一瞬でいいから、食欲を切り離して思考していただきたいものだ。

「刀さんは、私に“わたし／＼血／＼ヒトであること”を捨てると

「

不覚にも、我が脳内ぼやきは外に漏れてしまつていたらしい。

「そんな残酷なことをおっしゃるのですかっ！」

そこにありつたけの不満を詰め込んだがごとくほっぺをぷくつと膨らませた刀さんは、純情な乙女が感情を昂らせたときに放つ渾身のビンタがごとく、あらかじめ力強く握つて準備万端スタンバつていた拳で強烈なアッパー・カットを言葉と一緒に放つてきおる。

ズンッ！ とアゴに重たい衝撃を喰らい、口からではなく鼻から「ブモオッ！」と勢いよく空気が漏れた。危うく昏倒するかと思ったが、しかし我が脳ミンは強い衝撃で不具合を起こすほど緻密で繊細なハイスペックモデルではないらしい。残念なことに、意識はバツチリ保たれている。

「なつ！ お、おい、大丈夫か？」

不審人物に気をつかわれてしまった。

「らいじょうぶれす」

それにして（食欲を切り離す） = （“わたし／自卫／ヒトであること”を捨てる）だなんて、さすがは志さん、こちらの想像が及ばない超斜め上をナチュラルにゆくおヒトである。その食に対する執着、なんかもう尊敬に値するようなしないような もはや一般凡人なオレの価値観では推し測れない領域だわッ。

「ところで、ほんうのところ、こほどなにしたてんですか？」

オレは不審人物に問うた。昨日の今日であるからして、やはりここに居る理由は知つておきたい。まさか本当に蒸しまんじゅうを購入しに来たなんてことはないだろうし。

「まったく“あれつ”が回つてないぞっ！ 本当に大丈夫なのかつ？」

「ずいぶんと心配性な不審人物だ。

「らいじょうぶれすつて」

「…………」

不審人物はなにか物申したそつな間を置いてから、「なんだ、その、私は」「と律儀に返答してくれる。

が、その発言をさえぎつて、

「なにごとですかっ！」

「登場したのは、なにやら一升瓶のような物を手にしたロロさんであつた。側らにはバツの姿もある。

どうやらバツはいち早く不穏な空氣を察して、いつの間にやら救援を呼びに行つていたらしい。かゆいところに手が届く、とっても氣のまわる、じつによくできた子だ。

「ぬつ！ あつ、ロ、ロ、ロ、ロ、ロロ……」

ロロさんの姿を見るや、不審人物は不審さに拍車をかけておおぎょうにたじろぎ、なにかとつても居心地が悪そうにソワソワしだす。

「え？ ……あ！ あなたっ！」

口工さんも口工さんで、不審人物の姿を見るや、目を見開いて驚きの声を上げる。不審人物とは対照的に、どこか嬉しそうだ。

というか、なんというか、

「あふお……、つぬかことをおふかがいしましゅが、おふひやりはしえりはいかなにかですか？」

口工さんと不審人物の態度を見るにつけ、どうにも初対面には思えなかつたので、もしかしてお知り合いですか？ と素朴な疑問をお訊ねさせていただいた。

すると口工さんは、

「え、ええ」

なぜかオレに対しても疑惑の表情を向けつつ、返答へださる。

「彼、ジンは、私の夫です」

……

「……………ええっ！」

口工さん、人妻だつたのぉつ！

壱さんのアッパー・カットよりも予想外な不意打ちに、思わずビックリ、お口あんぐり。まさか現実でマスオさんみみたいな驚きかたをしちゃつた自分にも、それはそれでビックリ していたら、

「と、とトウお兄ちゃん」

いつの間にやら隣に移動していたバツが、なにかヒソヒソ話でもするように声をひそめて呼びかけてきたので、

「ん？」

オレは腰をかがめて、話を聴く体勢を整える。

「あ、あの、あのね」

と自らの口元に左手をそえ、ちょっと背伸びをして我がお耳に口ソコソとくすぐついたい吐息を吹きかけてくるバツの話に、

「…………ええっ！」

またもマスオさんみたいな驚きかたをしてしまった けれども同時に、不審人物こと口エさんの夫であるジンさんに感じていた“引っかかりのようなモノ”の正体が知れた。

それは全体的に残念な空氣をともなうから、果たしてオレは、あえてハツキリと気づかないようにしていたのかもしれない。あるいは彼に対する、共感にも似た同情の念が無意識にそうさせたのか：

ツミさんとバツと出会つた宿場町にて志さんは、朝冷えによる腹痛でただでさえ辛い状態の腹に下剤をもるといつ、まさかの外道を極めたようなおこないをしなさつた。その外道の直撃を喰らつたヒトが、誰あろう、腹痛先生にして不審人物こと口エさんの夫であるジンさんだったのだ。

とは言つものの、人物としての印象よりも、残念な状態ばかりが色濃く脳裏に焼きついていて、オレは、すぐに同一人物だと見抜けなかつた。ゆえに、ずっと“引っかかりのようなモノ”を感じていたわけだが、どうやらそれは、畦道にて“まんじゅうを見て逃げ出した襲撃者”と接近遭遇していただバツも同じだつたようで、いまさつき“彼”も同一人物だと気づき、そして“そうだ”という確信を得たらしい。

その確信というのは 挙動不審の雰囲気が同じだつたから、というもの。

ツミさんとバツにとつては『両親の形見でもある“家宝の包丁”と“お食事処”』。それらを奪わんと毎度イヤガラセに来ていたガラの悪い連中。そいつらの用心棒みたいな立ち位置に居たらしいジンさんは、しかし実際はイヤガラセに加担するわけでもなく、お食事処の前で行つたり来たりを繰り返して、ただただ挙動不審なだけだつたようで。そのときのかんじと、さきほどのメムス屋さんの前でのかんじが、バツいわくピツタリ一致したのだそくな。

なにかノドに引っかかるつていた魚の小骨が取れたときのような、地味だけれど心地好いスッキリ感である。

「おや？みんなそろつて、いつたいなにを」

村の広場がある方向からシミさんが、額の汗を日光で爽やかにキラめかせつつ、ポニー・テイルを揺らしながら小走りでやってきた。どうやら“夫婦大食い祝事（決勝）”の会場セッティングを手伝つていたらしい。お疲れ様です。

「て、えつ！」

シミさんは驚くと同時に、守るよつてバツを自身の背後に隠して、「どうして、あなたがここに…」

威嚇するネコのような鋭い眼光を、ジンさんに向ける。

そんなシミさんの反応を見て、

「……あら？」

しかし口工さんは少々ズレのある感性で、

「面識がおありでしたか？」

自分の夫を知っているようなそぶりのシミさんは、心の底から意外を感じているふうな表情で訊ねた。

「おありもなにも」

口工さんとジンさんが夫婦であることを知らないシミさんは、語りをオブラーートに包むなんてことはせず、「かくかくしかじか」と面識がある理由を述べた。

なにか、引き千切れたような音が聞こえた。

普段めったに怒ったりしないであろう温厚な性格のヒトが、希に本気でキレると、それはそれは恐ろしい、ということを改めて実感した。

まさか、あの天使のごとき微笑みをくれる口工さんが、手に持つていた一升瓶のような物でジンさんの脳天ぶつ叩いたうえに、強制土下座の連打でジンさんの額を地面にドッカンドッカン打ち付けるなんて。タマゴが割れるみたいに頭の中身がポロリしちゃいそうな、誰も望まぬポロリが発生しちゃいそうな、そんな肝を冷やす、まさ

かの光景を、この惨劇を、いったい誰が想像できただらう。

怒髪天を突く勢いで怒れる、鬼の形相の口工さん。ウソぶつこいで祝事に出でしまったという負い目がオレにあるからか、彼女が全身から放つ憤怒の気迫に、思わず身が縮み上がる。べつに自分が怒りの対象になつていいわけではないのに、気配を殺して、自分がこの場に居ないようよそおつてしまつ。

そんな、危うく股間にある“マイ・蛇口”が水のトラブルを起こしてしまいそうな、居心地が心臓に悪すぎる状況から、自然な流れで逃る公然たる理由をくれたのは、誰あらう、壱さんであつた。

「なにやら深刻にお取り込み中のようにすけれど……刀さん、私はちはそろそろ“夫婦大食い祝事（決勝）”に」  
修羅場から逃れる理由として、“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場するという既成事実は、じつに最適なモノだつた。まさか壱さんの望まれぬ功績に感謝する事態に陥ろうとは……。これぞまさしく不幸中の幸いだ……いや、一寸先は闇　かな？

承／第一十七話・マシモジヤツ（其の十四）

ともあれ。

そんなわけで今現在、オレと志せんは“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場すべく、会場になつていい村の広場へと歩行進行中である。  
「しょれにしへほ、しゅじはつたれすね」  
黙々と歩くのもアレなので、お隣にいらっしゃる志せんへ時事ネタをふつてみた。

「すゞかつたですね つて、なにがですか？」

よもや、いまのさつきで訊き返されるとは思わなかつたが、  
「しゃつきの 」

修羅場がです、とお伝えすると、

「ああ……」

志せんは少し困ったふうな表情をしてから、

「すゞく痛そうな音してましたね」

と苦笑する。

なにもあそこまでボコボコしなくていいのですよね、と意を述べたら、

「私は、むしろ当然だと思いますよ」

真面目な顔で言い返されてしまった。

「家族が、夫が、他人様に迷惑をかけてしまつたのですから、家族として、妻として、きちんと叱るのは当然のことでしょう？」

言つていることは間違つていないと思つけれども、果たして、さつきの撲殺未遂的なアレを叱る行為と考えていいのだらうか？

「“愛のムチ”というヤツですよ」

実際はムチじゃなくて鈍器と打撲でしたけどねつ。

「“愛のムチ”的打撃力は、相手を思う気持ちの大きさに比例する

ものです

ゆえに口工さんは、それだけジンさんのことを見ついている　と

壱さんは言いたいらしい。

「だつて“怒る／叱る”つて、相手に対しても関心があるからこそその偽りのない“感情／気持ち”じゃないですか」

静かに力強く断言する響きのある、けれどもそれゆえに気さくな口調で、壱さんは自らの意を述べる。

「子どもが悪さしたら、たとえ他人様の子であろうと大人は“怒る／叱る”でしょう？　ダメなことはダメって教えるために。それは誰にとつても子どもは等しく宝で、大切な存在だから、よりよく成長してほしいと願っているからこそ。つまり相手が大切だからこそ

“怒る／叱る”わけですよ」

相手をおもいやる気持ちがなければ“怒る／叱る”は成り立たない。それが壱さんの“怒る／叱る”に対する考え方であるらしい。

カミナリおやじが稀有な存在になってしまったオレの育ちし現代は、つまるところ、他人様の子どもに关心がない、誰にとつても等しく子は宝ではない、おもいやりに欠ける、そういう世の中ということになるのだろうか？

あるいは、“怒つて／叱つて”くれるヒトに対する信頼が希薄になってしまったのか。

「ですから、その……」

壱さんは一転して、どこか親とはぐれてしまった迷子を思わせる、不安と切なさの混在した顔になつて言う。

「……自覚があるのに“怒られ／叱られ”ないと、……ちょっと寂しい、じゃないですか。本当は自分に関心ないのかなつて、そう思えてしまつて」

その心情は、経験があるからよくわかる。

まだ小学一年生だった頃、オレは親にかまつてほしくてショボイ悪さをした。トイレスの便座とフタを瞬間接着剤で接着して使用不能にするといつ、よくよく考えれば自分も非常に困るお粗末極まりな

い悪行である。

当然のように即刻その悪行は親の知るところになるわけだが、  
「欲しがってたゲーム機、ソフトも一緒に買ってやるぞっ！」

そう言って我がご両親は、じつにあつわりと事を流した。そのときの、ふたりの酔っ払いのふうなニヤニヤ顔は、いまでも鮮明に憶えている。

お咎めなしビンタか、気持ち悪くすらある寛容で寛大な対応に、しかしおれはまったく嬉しさを感じず。田の前に親父とお袋は居るのに、どうしてだか“気がつけば公園でひとりぼっち”な感覚が胸の内にシクシク湧いてきて 耐え切れず、オレは泣き喚いた。

そんなに当選した“ロトくじの券”がいいのかよつ、と。

寛大と無関心は、やつかないこと、とても似ているのだ。それを受ける側がどう取るかによつて、どちらにもなりえてします。

……まあ、いまにして思えば、親父とお袋が酔っ払いみたいニヤニヤして理由も、気持ち悪いくらい寛容寛大になれた心情も、理解できなくはない。

当選金額 五十七万四千六百円。

クソガキのショボイ悪さんアウトオブ眼中だよねつ！

「…………」

金に目がくらんでニヤニヤしてくる父親と母親の姿と、若干トラウマな光景を思い出して、ほんのちょっぴりホームシック混じりの残念な気持ちになつていたら、

「……刀さん」

意を決したふうに、けれど、もじもじしながら、志さんと記いてきた。

「刀さんは、“怒らない／叱らない”んですか？  
なにを？」

「頭が、おバカになつてしまつたことを」

予備動作なしで、バツサリ斬り込んできますねつ！

まあ、自分の脳ミソが低スペックであることは否定できない。と

いうか否定するための材料が悲しくも残念ながら存在しないので認めるしか選択肢がないわけです……がつ！ なしてこのタイミングでオレは、勉学に勤しまなかつた過去の自分を“怒らねば／叱らねば”ならんのですかねつ？

「……ですから、その、さつきから刀さんの“ろれつ”がまわつてないのは、私の一撃で頭がやられてしまつたのが原因と思われるわけで……、私は“怒られて／叱られて”当然なわけで……」「めんなさい」

どうやら、さすがの壱さんも氣にしていたらしい。

まあ事実として、やつきの強烈なアツパーカットが原因なわけだが。しかしオレの頭はどうにもなつていよい。低スペックでも正常に稼働中である。喋りがちょっとへんなのは、ガツンと喰らつたときに噛んでしまつた舌をかばいながら発音して喋つているからだ。

「せう、なんですか？ 私はてつきりやつてしまつたかと……」

どこか「ほつ」としたふうにおっしゃる壱さん。

舌を噛んでしまつたので、まったく痛くなかったというわけではないけれど、いままで喰らつたダメージと比較したら、こんなのがバツけときや治る程度の超軽傷だ。やつちまつたと言つならば、そしてやつたことを気にするのならば、いきなり我が口に拳を突つ込んできたときとか、軽いノリで地獄突きかましてきたときとか、泣かせてしまつたんではなかろうかと本気でうろたえてしまつた超絶演技な泣き戯居のときに、少々でいいから、していただきたかつたわつ。

「でも、刀さんが舌を噛んでうまく発音できなくなつてしまつたのは、やはり私のせいですから……」「こは、きつちり責任をなして壱さん、いまに限つて妙に律儀なのつ？」

「だつて、“律儀者は子だくさん”と言つでしょう？」

まあ、律儀なヒトは遊び歩いたりせずには家庭を大事にするから自然と夫婦の営みがバツチコーエイツ！ となつて子宝に恵まれる、とかつて言いますけど……。

「だからですっ」

「なにがっ？」

そんなキッパリ言われましても、まったく答えになつておりませんよっ！」

てか壱さん、なんであたりまえのようにオレの頭部を両の手でガツチリ挟んで固定していらっしゃるんですかね？ ビックリするぐらにピクリとも自分の意志で頭が動かせないんだけじゃ！

「ですから」

壱さんはオレの頭部をグイと引き寄せ、吐息のかかる距離で言ひつ。

「責任を取るために」

いつたいどんなふうに？ 具体的に詳細をお聴かせ願いたい。 「刀さん、心の内でおっしゃっていたじゃないですか、『こんなのがバツけときや治る程度の超軽傷だ』って」

なにその限定期過ぎる超高感度な以心伝心つ！

……つて、いや、まあ、“うれつ”がまわっていないオレと難なく意思疎通できちゃう壱さんですから、こまちら驚くことでもないですがね。うん。てか、そこを気にしてしょーがない。

「ですから、せめてそれくらいは私が“やるべき”かと思いましてこれっぽっちも具体的じやないけれど、いたつて真撃にお答えくださいる壱さん。

そんな壱さんの真面目な表情が近くて、不覚にも、なんだか妙にドキリとしました。

のは、一瞬の氣の迷い。

迅速に覚める。

そして改めて、いまここにある状況を認識した脳ミソが、常識にとらわれない壱さんだからこそやりかねない“まさか”な可能性を脳裏によざりさせる。

……いや、さすがにそれはないだろ？

とは思つものの、その可能性を完全に否定することはできません。なのでこゝは完全否定するためにも、あえてお訊ねさせていただこう。

吉さんつ、 “やるべし” つて、 なにをですか？

「そんなの、決まってるじゃないですか」

あたりまえのこと說話のふりで書かん

「ツバをつければ治る懸念で、ペルツツバをつかむんですよ」

のぞかせる。

アナタはもつと常識にとらわれてえーっ！

その限りを知らない“まさか”的発想力には、ビックリ脱帽です

上へ!!

カリんですけど……。

ともあれ

か  
?

」  
?」

怪訝そうに眉根を寄せて吉さんは、小首を傾げる。

「……………そんな」と詰へんのです?」「……………」

どうしてあなたやつぱり自分の悪いことわかつてないようですね。

オレが負傷したのは舌なわけですよ？ そこにツバつけるつて、それってつまり“イントゥ／into”するつてことじやないです

「それは

ヒカルの世界 | 第二章 ハーフワールド、二度と出でなくなろう

「私がばつちいから生理的にダメと……」

よ、そんなこと。

「じゃあ、なにがダメなんですか？」

そこは訊かずに察していただきたかつたつ。

とこりうか、どうしてそこを察してくださいならなこいつ。

いまここは村の道の真ん中なわけですよ？ セリセから村に住まう方々の好奇に満ちた眼差しが全身に突き刺さり続けてる、とつても公衆の面前なわけですよ？

「なんですかそんなこと。べつに恥じるようなことしてないんですから、堂々としたらしいんです」

壱ちゃんが鉄のハートをお持ちなのは、重々承知しております。けれどもそれを基準に物事を考えないでいただきたい。これ以上こんな状況でなにか（主に“イントゥ／ンカト。”なこと）やらかして注目を集めてしまつたら、こいつ恥ずかしに耐え切れなくなつた脆弱なマイ・ハートが新しい“なにか”に田覚めてしまうわつ。

「傷も治つて、新境地も開拓できて、まさに一石二鳥ですねっ！」

恐ろしく前向きなご意見、どうもありがとうございます。

でもね、そもそも論、これだけは述べさせていただきたい。

口内で唾液の漬物状態な舌こ、わざわざ“イントゥ／ンカト。”

してまでツバをつける意味はないでしょ、と。

「増量してさらヒタヒタすれば治りも早く

なりませんよつ。

いや、唾液には身体を守る成分が含まれているから、量が多いほうが口内の清潔が保たれるつて話は聞いたことがありますけどね。でも、それと治癒速度はあまり関係ないでし、なにより“自分の”で事足りてます。

壱ちゃんのお気持ちだけはありがたく、そりやあもう末代まで語り継いぢやうくらいありがたく受け取らせていただきますから、いまはとりあえずオレの頭部を解放してくださいませんかね？ 周囲の視線が突き刺さつてるつえに、壱ちゃんのお顔が近すぎて、なんかもうダメな感じに心臓がドキドキしちゃつて、そろそろ身と心が限界です。

「…………わかりましたよ」

どうしてだか壱さんはぶくつとほっぺを膨らませて、なにかおも

しろくなさそうに、我が頭部の拘束を解いて貰ださる。

オレは緊張して強張つた首筋を軽く揉み解しつつ、自分の意志で自由に首が動かせる喜びをしばし味わう。

「ところで、刀さん」

ぶーたれ顔から一転、というか急転、壱さんはなにかおもしろいモノ見つけちゃつたヒトの「」とく微笑みながら話しかけてきた。あまりにも急な変り身つぱりに、どことなく不気味なモノを感じつつ、けれども不機嫌でいられるよりは百倍よろしいので、「ふあひ?」

そのまま話に乗つかることにする。

「人体には“失神するツボ”があるんですよ、ご存知でしたか?」

「ふえ?」

承／第一十八話・ムシムシ感ひ（其の十四）

「 はっ！」

なんかうたた寝しあやつたときのよつた意識の空白が一瞬あつた  
気がするが、

「おおうっ！」

そんなことよりも、鼻先が触れるくらい間近に志村さんの顔面があることに驚いた。

「あの……志村さん、なにをしていらっしゃるんですかね？」  
至極当然な問い合わせである。

「なにを、って」

志さんは困つたふうな微笑みを浮かべて、顔を離し、

「素晴らしい豪快に転んでなかなか起き上がる気配のない刀さんを、  
甲斐甲斐しく助け起こそうとしているんですよ？」

なにぞ意味のわからないことを、幼子に言ふ聞かせる口調でおつ  
しゃる。

「 ……はい？」

まつたくもつて、状況がのみこめない。

けれども、どうやら自分は道の真ん中で横たわっているらしいこと  
いうことは、バストアップ画な志さんの背景に青空が広がっている  
ことからして察せられた。まあ、だからこそ余計にわけがわからな  
いのだが。

しかし、いまは湧き起つる疑惑と格闘するよりも先に、ひとつと  
身を起し乍ら。

「 ありがとうございます」

志さんが差し伸べてくれたお手を拝借しつつ、起き上がる。  
そして改めて、

「 ん~、転んだ憶えなんてないんだけどなあ……」

湧き起る疑念との格闘を開始する。血の意志で自由に動かせる首を、惜しげもなくひねつて。

「転んだときに頭でも打つて、つかり記憶を飛ばしてしまったんじゃないですか？」

「ついぶんとまた軽く言つてくれますね。」

「つかりで記憶喪失なんかになりたくないですよ。てか、なりません」

「じゃあ、ちやっかり？」

言ひ回しは似てますけどね。

なんですか、ちやっかり記憶喪失って。

「壱さんが“失神するツボ”じつのつて言つたどこのまでは、憶えてるんですけど……」

逆に言つと、そこから先がピンボケしているわけで。

正直あまりヒトを疑つて物事を考えたくないのだが、言動と状況から推察するに、というかどう考へても

「言つてませんよ、そんなこと」

ひとつ答へを得ようかとこつその瞬間を、“疑わしきれのヒト”は狙つたようにぶつた斬つてきた。

「え？」

「ですから、私はそんなこと言つていなこと述べてこるので、

壱さんは断言するように胸を張つて言つて、

「なんですか“失神するツボ”って。初めて聞きましたよ」

心の底から不可思議そうに眉根を寄せた。

「やめてくださいよ、それだとまるでオレが妄言を言つてゐみたいじゃないですかっ！」

「妄言とは言いませんけど……、頭を打つたときの一瞬の夢”を見たんじゃないですか？」

一步どころか半歩すりぬけてなく壱さんを、それと併せんな返しをしてくる。

なんとか、いまの壱さんは“ひやつかり記憶喪失”とい

「言葉がピッタリなんじゃなかろうか。

「…………」

あまりにも頑強な精神状態の壱さんを相手に、果たしてオレには言い返すべき言葉が思いつけない。

「さあ、さつ、刀さんっ」

我が沈黙をどのように受け取ったのか。……まあ、どう考えても壱さんにとつて好ましいほうにだらうけれども。壱さんは鼻息を「ふがふが」と荒げながら、

「些細な事柄に囚われてまじまじするのは、ひとまずいいまでにして、いまは“夫婦大食い祝事（決勝）”の会場へ急ぎましょーつ！ 正直ちょっと引く感じの気迫を全身からみなぎらせて、我が手をむんずとつかみ、

「さきほどから美味しい匂いが食欲を刺激して、私っ、もう辛抱たまりませんっ！」

溢れ出る唾液をじゅるりとすすり、美味なる匂いのする方向へ力強い一步を踏み出す。

脳ミソが混乱している当人としては、まったく些細な事柄ではないのだが……。しかしだからと言つて、“食”に突き動かされている壱さんをどうにかできるわけもなく

## 承／第一十九話・ムシムシ感へし（其の十六）

「私は、私の胃と腸に誓つてつー正々堂々、美味しくいただきますっ！」

どうにも积然としない我が心情などおかまいなしに、 “夫婦大食い祝事（決勝）” は開始された。なぜか完全にこの場の主役になつている壱さんの、無駄にカリスマ的な宣誓によつて。

夫婦であるとウソを吐いて祝事に出場してるのでから、この場の主役になつてしまつてはダメだと思うのだが……。なんというか、これも人徳というやつだろうか。それとも自然体でウソが吐けるヒトほど人心掌握がお上手なのだろうか。

まあ、それはそれとして。

お祭り効果によつて妙にテンション高く盛り上がる“夫婦大食い祝事（決勝）”だけれども、実際やつてることは蒸しまんじゅうをひたすら食すという行為のみで、これといつて語るほどのドラマがないので、ここは端的に、結果だけ述べておこう。

本日、壱さんは“生ける伝説”となつた。

「……どうして、手拭いなんだろ？」「会場からの帰り道。ふと疑問に思った。

ともすれば夫婦限定の大食い大会にしか思えない“夫婦大食い祝事”で、望まぬ名誉とともに得た“モノ”である。

両腕をいっぱいに広げたよりも長い、白の手拭い。やつたことが“食べる”だけであつたとしても、収穫祭の意味ある行事のひとつだったので、オレはてっきり勝者には、なにか“食”に関連したモノが大量に贈られたり、あるいは儀式的な使命とうか役目が与えられたりするものだと思っていたのだが、しかし実際に贈られたのは称賛の言葉と、なぜか白の手拭いだつた。

参加賞かとも思ったのが、他に出場していた方々には贈られていなかつたので、どうやらこれは勝者限定の品らしい。

手拭いを贈ることに、なにか意味があるのだろうか？

あつたとしたら、その意味とは？

あえて気にしなければ気にならないような、これこそ些細な事柄だけれども、気にしちゃつたので、とても気になるのだ。

断じて、断じて、霧岡気にのまれてちょっとお祭りが楽しくなっちゃつて、結果的に志さんのご活躍に拍車をかけてしまった自分の、重大な落ち度から逃避しようとしているわけではない。なんだろうねつ、手拭いを贈る意味つて？

「“厄除け／厄落とし”ですよ」

お隣を歩く“生ける伝説”さんが、つないだ手をちょいと引っぱり、

「手拭いは“厄除け／厄落とし”的道具でもありますからね」とオレの知らぬ手拭いの一面を教えてください

「へえー。でも、それなら出場した全員に贈つてもよさそうですね」「ど

むしろお祭り的には、そのほうがよろしこと想つただが。

「それはですねー」

新たに憶えた知識を披露する子供の「」と、壱さんは楽しげな得意顔で言つ。

「夫婦大食い祝事」の勝者に贈られる手拭いは、この土地の神様から与えられる“神聖な証”でもあるので、勝者しか受け取れないんですよ」

「神聖な証”……なんですか？ 手拭いが？」

「そうなのですよ」

脳内エンジンの回転数が上がってきたのか、とても冗舌上機嫌に説明してくださる壱さんなのだが、少々回転数が上がり過ぎているようだ、まさか“収穫祭の起こり”から語りだす。

じつに興味深いお話なのだが、あまりにも長くえに正直なところ八割くらいなに言つてるのかわからないので、ここには断腸の思いで、ざつくりと理解できたことだけ述べておこう。

なんでも、“夫婦大食い祝事”の勝者は、土地の神様に“選ばれた者／認められた者”であると考えられているらしく。勝者に贈られる手拭いは、“厄除け／厄落とし”的道具であると同時に、神様が“選んだ／認めた”証しとして与える“神聖な証”でもあるらしい。

「つまり」

壱さんは人差し指をビックリ立て、

「夫婦の“幸せ”を願つておこなわれる祝事で勝つということは、その“幸せ”に、神様の“おすみつき”がいただけるということなのですよ」

と学問を説く教師のような口調で言つて、長かったお話を締めくる。

果たして夫婦であるとウソを吐いて祝事に出たオレと壱さんが、“おすみつき”をいただいちやつてよかつたのかな……。

とは思つものの、いまさら神様の判断に異議を申し立てる度胸は

なぐ。

この土地の神様はとつても御心が広いサービス精神の権化なのだ  
う、と思うことににして気にしないことにする。

なに」とも、気にしなければ気にならない。  
これぞ十円ハゲと無縁な頭皮で生ける極意であり秘訣であり基本  
である。

「 それはそうと壱さん」

語ったつたと満足気な、ほくほく顔に、

「 どうしてそんなに、この村の収穫祭に詳しいんですか？」

オレは素朴な疑問を投げかけた。

この村の出身というわけでもないのに、なぜ得意気に“収穫祭の  
起こり”をべらべら語れるのだろう？

「じつは私、これでも旅人なんですよ」

ちゃかすように微笑んで、壱さんは居がかつたヒソヒソ声でお  
っしゃる。

「ご存知でしたか？」

ええっ！ てっきり“流浪のフードファイター”だと思つてしま  
たよつ！

なんて、うつかり言つと話が長引きそつなので、

「ご存知ですけど……。それと詳しいことと、なにか関係あるんで  
すか？」

「とつてもすゞく関係ござりますともつ」

喰い氣味に、勢い込んで壱さんは言つ。

「旅人が旅する理由。旅の醍醐味。それがなんたるか、刀さんおわ  
かりですかつ？」

おわかりですかと問われても、修学旅行くらいしか旅っぽいこと  
の経験がないオレに、本物の旅人の心がわかるわけない。

「んー、その土地の個性ある“美味しい味／郷土料理”に出会える  
とかですか？」

世の旅人がなにを思つて旅をするのかはわからないけれど、“壱

さん”とこう旅人的にはこれで正解な気がした。

「非常に惜しいつ！」

壱さんは自らの額をぺしゃりと叩いて、

「けれどさすがは刀さんつ！」

語尾に“音符の記号”が付いてそうなノリで、

「ほほ大正解ですつ！」

喜色満面な残念顔をする。

「…………えつと…………つまり、どういうことですか？」

“家庭料理の味”は家庭ごとで異なり、食いしん坊な旅人は“その味”を知りたがる、 つてことです

「おおうつ。壱さんがいつたいなにを伝えたいのか、さりぱりわからぬ」

「あら？」

壱さんはわざとらしくズッコケて、

「刀さんにならつて、我ながら的を射た比喩を言つたつもりだったのですが……」

笑いにスベツたヒトの「」とく、なんとも渋そうな微笑を浮かべる。これつまづちも“意”を回収できない脳ミソで、……なんか、申し訳ない。

「つまりですねつ！」

己の中のスベツた感を払拭するように声を張つて、壱さんは言う。“異なる文化／異なる価値観”を知ることが、旅人が旅をする理由であり、旅の醍醐味である、 といふことなのですよつ……」「ああ、なるほど」

言われてみれば納得な、至極当然とも言える“正解”だった。

「だから旅人である壱さんは、この村の“文化／価値観”である“収穫祭”を知っている といふか“知つた／学習した”、と。……でも、いつの間に？」

出逢つてからほほ常時、壱さんは行動をご一緒にさせていただいているが、しかし旅人として情報収集しているお姿を拝見した憶え

は、『どうも思って当たらぬ』にか喰つてゐ姿なりば、理はずとも瞬きと同時に思い出せるのだが。

「おやおや、自分の知らないところでの“妻の行動”が、とつても氣になつてしまつ感じですか?」

田中さんは一やけた口調で言つや、つないだ我が手腕を胸の前で抱くよひにして、

「ダ・ン・ナ・セ・マツ?」

と“猫なで甘々ボイス”を一音発する」とい、グイと、グイとこちらに身を寄せせて とこうか、身を押し付けて、“压”をかけておおむ。

田中さんは“压”に対応するのが遅れ、かみされてしまい、「ちよつ」と心の深いところをわじつとおおむ。

「ちよつ」

その結果、

「おぶほべぶおー。」

足がもつれて、オレは地べたにダイブをかますことになつてしまつた。

……なんだらう。極めて最近、ものすゞく頻繁に、これっぽつとも意味なく、地べたさんと「ここにしちゃ」しまくつてゐようなどつにも不要な経験値を稼いで、いろんな意味での“打たれ強さ”を体得してしまつた気がしてならない……。

だ、だからつて、べ、べつに“打たれる悦び/Masochism”に覺醒しかやつたとかじや、ないんだからねつーか、勘違いしないでよねー！

「あらあら、大丈夫ですか? 田中さま?」

どうでしょ?……いま、ものすゞくダメな方向に傾いてしまつた気がします……。

ところのは、ちよこと脇に置いておいて。

「おやん……、『ひやつかり』とこつか『しつかり』自分は手を離して、オレと一緒に転ぶのを回避してこひつしやるあたり、もせや“れあが”としか言えません。

「ひづき氣づかう言葉とどもこ差し出された、おやんのお手」、「……ありがとひ……『ひでこまわ』」

「どりにも釈然としない既視感を覚えつつ、

「……あの

けれどもその手を離つて、オレは身を起して、

「おやん」

この際だからハツキつて、想つてひづきを述べやかしてただくじてにした。

「その、『田那さま』つて呼ぶの、『ひ遠慮願いたいのですが』

「……イヤ、でしたか？」

ちよつと不安な物問い合わせ顔で、おやんは確かめるよづき語いてくる。

「イヤとこづか」

むしろ胸はドクキドクキ高鳴つひやつてるんですが、しかしだからひや、『ひ遠慮願うわけです。』『ひが心臓の、正常な鼓動のためにつ。』名前で呼ばれるほうがしつべづぐると言いますか、好ましいなあと

いや、まあ、ウソ偽りなく言えば、ただ単純に、ひつ恥ずかしいだけなのだけれどもね。決して、イヤではない。それは断言してもいい。けれど、どりにもこつ恥ず。どつかご理解願いたい、この微妙な“野郎心／＼おとこ心”を。

「……ですか」

なぜだかおやんは少々残念そうに眉尻を下げて、しかし、  
「わかりました」

おひらじく「クリ」と小さく首肯し、理解を示していく。おひらじく「ちよづきよこので、ひひで閑話休  
「では、刀さん」

題なんて間を与えてくれることなく、

「（）要望通りお名前で呼ぶ代わりに、私のお願ひをひとつ叶えてくださいな」

壱さんはなんぞわけのわからぬことをおっしゃる。

決して“タダ／無料／得なし”では転ばないその揺るぎない姿勢は、じつに壱さんらしい。まあ、実際に転んでいるのは、しかも毎度“タダ／無料／得なし”で転んでいるのは、オレなのだけれども……。それに、なんでギブアンドテイク的なことになつてているのか、いまいちまったく理解が追いつかないけれども……。

「えつ……、と……、その……、ちなみに、そのお願ひといふのはなんじょ？？」

拒否したところで事態が好転するとは思えないでの、そもそも拒否権がオレにあるとは思えないでの、諦めといつよりは無抵抗主義的に訊いてみる。

「私のことを“オレの嫁ええええつ！”って高らかに言つてしまいです」

おっ、おっ。訊かなきやよかつたぜ！

下唇に人差し指を当てて、まるでお菓子をねだる子どものように「ほしいです」と言つ壱さん。その絵図らだけは、断じてその絵図らだけは、とてもキューートである。

絵図らだけはねつ！

口から出てきた言葉の、その“残虐性／残酷性”たるや、もはや潔癖的使命感のある（）の集団や（）の行政機関が“発言／表現／言論”に規制を掛けんと動き出すレベルである。健全な青少年であるオレの、健全な心身と健全な人格形成を護るためにねつ！けれど、残念無念なことに、オレの現在位置は日本国ではない。法律も条例も不可侵な、異世界である。法律や条例の守備範囲内の“日常／現実”とは違う、法律や条例の守備範囲外の“非日常／非現実”が、守備範囲外であるべきの“非日常／非現実”が、オレの現在位置なのである。

と現実逃避的なことを考えてみても、結局はそこにある“事実／現実／困難”と向き合わなければならないわけで。

「なぜに壱さんは、オレに“そんなこと”言わせたいんですかね？」

拒否できないにしても、せめてそれをやる理由っぽいモノは存在してほしい。

「“そんなこと”ではありませんっ！」

むうと眉根を寄せて壱さんは、

「せつかく夫婦になつたのに、刀をんたらせんぜん“それらしいこと”を言つてくれないんですもの」

と、ふりふり不満げに言つて、ほっぺをぷくつと膨らませる。

だつてそもそも夫婦じゃないですもの、と言い返したいけれども、少なくともこの村では、オレと壱さんは夫婦ということになつてるので、しかもそのウソが引き返せないとここまで行つてしまつているので、公衆の面前ではなんとも言い難く……。だからといって要求されていることもまた、公衆の面前ではおこない難く……。けれど選択肢も拒否権もオレにはなく……。

「い、壱さんは、オレの、よ嫁……」

「…………え？　いまなにか言いました？」

わざとらしく耳に手をやり、おおげさな口調で訊き返してきおる壱さん。一や二やと笑みの浮かぶ、なんとも楽しげなお顔である。

「い、壱さんはっ、おオレの嫁つ」

「…………え？　いまなんと？」

見ることが得意でない代わりに、空間把握能力やら聴力やらがずば抜けて優れている、心の声まであつたり聞き取る壱さんである。オレの言つたことが聞こえていないわけがない。といふか、その笑みあるお顔からして確實に聞こえていると判断できるのだが

生命の危機的状況において身体のリミッターを解除してその場を切り抜ける、いわゆる火事場のクソ力があるように。精神の危機的状況において精神のリミッターを解除してその場を切り抜けることがヒトにはできたりする。

オレも“オトコ／男／漢”じゃけえ！　ばつちやつわせんばこつ！  
といつ、いわゆる“自暴自棄”である。

「……」しかねる“血暴自棄”である  
なに言つてんだからう自分は……。

なんかもはや自分を見失いつつあるなあ……。

なんてことを薄つすら残つた冷静さで思つたりするが、もうね、もつ、どうでもなれつていう心情なのさ……。

だからオレは、たらふく肺に空気を吸い込み、ス

「堺さんはああっ！ オレのおおっ！ 嫁えええええええつ！」  
めに大声で叫ぶがごとく、その言葉を口から発した。

「それでなんでしたっけ？ 私がいつ“収穫祭”について“知った

いまさに、健全な青少年の健全な精神と健全な人格形成が斬り殺されました。バツサリと。スッパリと。容赦なく。

ちなみに、壱さんがいつ“収穫祭”について“知った／学習した

”のかどういう問題の答えは、一万个気持よさそうに寝たまま起きてくれなくて、とってもおヒマな時間ができたので、その間に「  
とのこと。

正直、失ったモノが大き過ぎて、もはやどうでもいいお話をしました  
ありがとうございました。

## 承／第三十一話・ムシムシ感へし（其の十八）

と、そんな具合に、好くも悪くもキャツキヤウフフしていたら。

いつの間にやら、ローハさん宅にあるといふのメムス屋さんがもう目と鼻の先である。

やういえば、ローハさんとジンさんは“あの後”どうなったんだろ？……とくにジンさんは、このちが引くくらいローハさんにボツコボツにされていたジンさんの容態が、とても気にかかる。“いのち／生命”的な意味で。

そんなことを考えていたからなのか、とても既視感を覚える光景を“そこ”に見た。

ひとりの人物が、メムス屋さんの店先に突っ立っていた。濃紺が主色の民族衣装っぽい服を着て、右手には身の丈より長い棒のようなモノを持ち、いい具合に大根がすりおろせそうな坊主頭をしている。

まんじゅうを販売しているお店なので、店先にヒトがいることそれ自体に不思議はない。しかしその人物は、どうにも雰囲気からしてまんじゅうを買いに来たというふうではなく。かと言つて、ジンさんのように理由あつて入店をためらつているというふうでもなく。あえて言つなら、そう、誰かと待ち合わせをしてゐるふうであった。

柔軟な表情で、その人物はこちらに向かつて軽く頭を下げる。道でたまたま会つた知人に対する“それ”と同じように

オレは意もなく反射的に頭を軽く下げ

吉さんは、オレとその人物との間に割つてはいるようの一歩前へ出る。つこむつきまでふにやふにやに緩んでいたのがウソのようだ、

いまはどこか研ぎ澄まされた刀を想わせる凜として冷たく鋭い風格ある表情をしている。

「お久しぶりです、壱さん」

坊主頭の人物が、人好きのする温和な音声で言った。

「その声は……、シズですか」

壱さんは表情を和らげることなく、けれど口調だけは親しげに、「久しぶりですね。できれば、このまま一度と再会したくありましたがんでしたが

と答えた。ほんの一瞬だけ、どこか“痛む／傷む／悼む”ヒートのような表情が見えた気がしたが……たぶん、気のせいだろう。

「ウソ偽りなく言えば、私も“それ”を切に願つておりましたが

」  
坊主頭の人物 シズさんは、空のその先を見上げ、

「“現実／運命の女神”は、しばしば酷な演出を好むようです」

と苦笑を浮かべる。

ふたりの、いまのちょっととしたやり取りの間に、オレはどこか遠くに置き去りにされたような“近くて遠い気分”になり、

「えつと……お知り合い、ですか？」

会話の中に“明確な答え”があつたことを、あえて確認するように、壱さんに訊いてしまった。

「ええ」

壱さんは、壱さんらしからぬ感情の薄い声で、

「かつて」

ただ淡々と“ひとつ的事実”を告げるよう、「

「友でした」

そう、教えてくれる。

なぜに過去形？

んー、再会したくなかったと言つたからして、壱さんがなにかやらかして、ケンカ別れをしてしまったから氣まずいとか、そういう？

「とにかく」

シズさんはオレのほうを見やり、

「お名前を、お訊ねしてもよろしいですか？」

他者を安心させる柔らかい笑みで、訊いてくる。

「え、ああ、えっとオレは――」

果たして“磨磨佐刀／＼ときまたとひ”と血らを貫いて名乗るか、自分としては重大な問題なので、少々逡巡していたら、

「彼の名前は、刀さん。旅の道中、出逢いましてね。意氣投合して、向かう先も同じだったので、ちょっと一緒にしているんですよ」

と鹿さんがオレの名乗りをぶつた斬つて、

「ただそれだけの関わりの“ヒト／＼他人”です」

きつぱりと、そう紹介してくださる。

……どうしてだろう。胸の奥が、ちょっと苦しい。

「そうですか……。それにしては、ずいぶんと仲がよろしくようと思えましたが。いましがた、とても興味深い宣告が聞こえてきましたし」と、シズさんは思ひどりある顔つきをする。

「適度な遊び心は、円滑な人間関係を築くために必要でしょ?」  
「さりとて、あつれりと、流すよつて鹿さんは言つた。

「そうですね」

シズさんは感慨もなさずに軽く首肯してから、

「では、鹿さん。そもそも、“現実／運命の女神”が好む演出の、“つまる話”を済ませてしまいましょう」

話題を、身にまとう雰囲気ごと一変させる。急に、近寄り難いヒトの“それ”になつたのだ。柔和を思わせる表情は、同じなのに。

「……ええ」

鹿さんは諦めるヒトのような顔をしてから、

「やうですね」

と同意を示す。

なんのこつちやいまいち理解が追いつかないオレであつたが、「ここでは村の方々に迷惑ですから、場所を変えましょう」

といふ壱さんの言葉を聞いて、ひとつ察することができた。

きつと“つもる話”は、拳で語り合つぼうの“話し”なんだらうなあ、と。

「刀さんは、先に帰つていてくださいな」

ふと、こつもの柔らかな表情に戻つて、けれど突き放すよつて言う壱さんに、

「いえ、じ一緒させていただきます」

そもそもそれが当然のことであるかのように、オレは告げた。

常識的に考えて、久しぶりに再会した方々の“つもる話”に部外者が立ち入るのは、相手の承諾があれば完全にダメなことではないだろうが、しかし確實に迷惑極まりない行為である。だから、

「不粋ですね」

壱さんが責めるふつこつしゃるのも至極当然のことであり、百も承知のことである。 と、承知してくるくせに言つてるのだから、なおのことよのしくない感じだが、

「初めて氣づいたんですけど……、どうやらオレはかなり嫉妬深い性格らしくてですね……。ほら、壱さん言つてたじゃないですか、『自分の知らないところでの“妻の行動”が、とっても気になつてしまふ感じですか?』って。 もうオレ、この時点で気になりまくりで、どうにかなつてしまいそうなんですよ! なぜつて? 壱さんはあつ! オレのおおつ! 嫁ええええええつ! ですからああああああつ!」

果たしてオレに、“なにが”できるかはわからないし、“なにができるかどうかもわからない。いざ實際に行動できるかもわからぬ。 だが、よろしくないことが起こる可能性のある場所へ、

「はい、わかりました」と壱さんを送り出せるほど、オレは壱さんに無関心ではない。……けれど、たぶんオレのこの行動は、正確には、厳密には、壱さんのためではない、と思つ。……いや、確信を

持つて、壱さんためではない言える。そもそも自分より圧倒的に強い壱さんに対して“ため”なんて、おこがましいにもほどがある。結局、自分がイヤな思いをしたくないのだ。自分の知らないところで、もし万が一にも“無関心ではいられないヒト／壱さん”が“どうにか”なつてしまつたら、という限りなく“無ノゼロ”に近い“有ノイチ”的可能性を、未来を考えられる生き物であるがゆえに、イヤでも想像できてしまつから。

なにも“好みたくないこと”が起こることなく、“迷惑極まりないヤツ”という称号をオレが獲得するだけで終了してくれたら、それでいい。いや、それがいい。

けれど、“現実／運命の女神”が好む演出は

「“そちら側”にも“見届け人”があつたほうがより公平だと思いまして、私に反対の意はありませんよ」

シズさんは、壱さんから視線を外すことなく言った。いまいちよくわからない言い回しだが、オレが“つもる話”にて一緒に緒しても問題ないということだらう。

そして壱さんは、肯定の言葉も否定の言葉もなく、

「…………」

ふいとそっぽを向いて、ほっぺをぷくっと膨らませている。まったくもつてよろしくじ機嫌ではないようだが、でもオレには、わきほどの刀じみた表情と違つて、そこに微笑みがあるように見えた。

そして。

壱さんとシズさんとオレは、場所を移す。

## 承／第二十一話・ムシムシゾー（其の十九）

その場所は

壱さんが己の拳をオレの口に突っ込んできた場所であり、壱さんが握ってくれた“塩むすび”と一緒に食べた場所である、畠道であった。

「先だつては、勘付かれてしまったうえに、想定外の邪魔がありましたが」

シズさんは背を向けて十歩ほど歩みを進め、壱さんとオレの前方へ出て立ち止まり、向き直つてこちらをいや、壱さんを見据えて、

「今日は、“与えられた使命”を果たせそうです

そう言って、身の丈より長い棒の先端に手をやり 刃を出現させる。刃の長さは、開いた手の手首から人差し指の先端ほどで、棒の全長と比べたら極短い印象がある。

どうやら、シズさんの“それ”は、“槍／殺すための道具”だつたらしい。

恥ずかしくも迷惑なことを迷惑にも叫んで“つもる話”にじり一緒にしたオレであるが、いまここにある状況に、まったくもって完全に置いてけぼり状態だつた。“つもる話”が、拳で語り合つぼうの“話し”かもしれないとは思つたけれども、少なくない確率でそっちのほうの“話し”だろうとは思つたけれども、けれども、まさか“確實に殺すための道具”がこうもあつさり出でくるとは思つていなかつた。というか、“その可能性”は考えていなかつた。

壱さんに“殺すための道具”が向けられる場面を見るのは、これが初めてというわけではないけれど、“それら”的場合は、壱さんが自ら“その状況”に首を突っ込んだことに少なからず“それ”を“向けられる理由”があつた。しかし今回は、過去の“それら”とは決定的に違うところがある。

ひとつは、壱さんが“能動”ではなく“受動”である」と。

そしてもうひとつは

壱さんは、シズさんのことを“友”と述べていた。なぜか過去形ではあつたが、それでも知り合いであることには違いない。いまでは他者の事情に首を突つ込んでいたので、相手は全て他者だったが、今回の相手は、壱さんが知つてゐるヒトなのだ。

だからこそオレは、もつと平和的な、例えば飲食の料金を壱さんが強引にシズさん持ちにしたとか、そういう理由で、“つもる話”を拳で語り合ひうのだろ？と想像してゐたのだが

いまここにある現実に、そのような“温め／平和”は感ぜられな  
い。

こやとなつたらジャパーンズピーポーの究極奥義な特技であるとこの“ザ・土下座外交”を發揮して、あるいはこの場をどうにかしようと考へてみたりも一瞬したが、もはやそれが受け入れられるような寛容さのある雰囲気ではない。完全に。

「……壱さん、いつたい“なに”やらかしたんですか？」

状況的にあれなので、お耳に口を近づけて小声で訊いてみた。

「さあ」

壱さんは肩をすくめ、

「思い当たる“なに”が多すぎて、わざぱりわかりません」  
軽いふつむきな口調で言つて、

「……ところで」

と転じて真面目な口調で、

「“ズンッ！”とされるのと、“ギュンッ！”とされるの、刀さん  
はどうぢらがよろしいですか？」

なにぞよくわからないことを問うてくる。ちなみに、“ズンッ！”では拳を作つた右の手で神速のボディーブローを放つような動きを、“ギュンッ！”では開いた右の手で“なにか”をわしづかみ天へ突き上げるような動きを、それぞれ見せてくれた。

どうしてだろ？ 壱さんの“ギュンッ！”の動きに、“もうひと

りのオレ”がガクガクブルブルと怯え震え縮み上がり、

「“ズンツ！”のほうがよろしいです」

問いの“意”を脳ミソが理解するまえにオレの口は、そう返答していた。

次瞬。

オレは“ズンツ！”と“ギュンツ！”がどういう“意”的問いであつたのかを、脳ミソではなく腹部で理解した。瞬と叩き込まれていた。えぐり込むように。捻り込むように。鳥ができなくなるほど強烈な一撃が。壱さんの拳が。

そしてまだ腹部に喰い込んでいる拳に、全身で圧すよりにして力が加えられ

オレは、後方へぶつ飛ばされる。

「 がつはあつ、ぐぶ

またも“地べた”さんと墨まぬ「こんなには」をしてしまった…

…。

「どう……して……」

四肢が笑つてしまつてうまく力が込められず、オレはうすくまりながら訊いた。というか、訊かずにはいられなかつた。

「これは、私の“つもる話／問題”ですからね」

壱さんはシズさんのほうに向き直るや一歩半、前へ進み出て、「刀さんは、そこでお静かにしていてくださいな」

背をこひらに向けて、そう述べ、

「 あ

そして思い出したふうに、

「どうしてもとおっしゃるなら、私の“あんな姿”や“こんな姿”を妄想してハアハアしても、いいですよ?」

真面目ふうな口調で、そんなことを言つてくる。からかう笑みの浮かぶ表情が、肩越しにちらりと見えた。

「それなら、手を出すまえに、“口／言葉”で述べていただきたいかった

あえて言わざとも万人に「理解いただける」とは思つが、ハアハアのことではなく、お静かにしていて、のことである。

「『口先／言葉』では、容易く偽れてしまひますからね。ですから、

これは確実さを求めた結果です」

確実さを求めた結果が肉体言語つて……。いや、そんなことはどうでもいい。どうでもよくはないけれど、どうでもいい。

いま問題なのは

壱さんに“槍／殺すための道具”が向けられているとこだ事実だ。そしてその壱さんが、いまに限つてほぼ常に持つていてる杖もなく、まつたくの素手であるという現実だ。

それら“事実”と“現実”を指摘すると、

「槍ですか……」

けれど壱さんは、とくに驚いたふうもなく、

「それで私を“どうにか”できる、と？」

どこから湧いてくるのかわからない余裕まで、言葉を投げる。

「いいえ」

シズさんは、なぜか首を横に振り、

「自らの力量は重々わきまえているつもりですよ、壱さん」

困難に直面しているヒトのよつな苦笑を浮かべて、言葉を返す。圧倒的優勢であるがゆえの“謙虚さ”かと思つたが、しかしシズさんからそういった部類の“いやらしさ”は感ぜられず。むしろ、山中で野生の熊と出くわしてしまつた登山者のような、どこか余裕のないふうがあった。

「ですから今回は」

シズさんは恥じ入るように、ふと地べたへ視線を落とす。

そして、なにかを決したヒトの眼で再び壱さんを見やり、

「刃に、神経毒を仕込ませていただきました」

言つて、半身になつて腰を落とし槍を構える。

平和ボケしているヤツの希望的展開として。武の道を歩む者がゆえの真剣勝負をして、そして決着という瞬間に最後の一撃をす

ん止めして、どちらともなく一やりと笑みをこぼして再会を喜ぶ。そんな熱い感じの展開になる可能性を、薄つすらと期待してみたりもしたが、槍の刃に神経毒を仕込んでいるというシズさんの言葉によつて、それはさっぱりと消え去つた。あるいは冗談を言つているといつ可能性も、まったくないとは言い切れないが、形容し難いこの場の雰囲気が確信をともなつてそれを否定する。

シズさんは、私たちの“いのち／生命”を奪いつもりだ。

承／第三十一話・マジマジ恋へじ（其の一十）

「……そうですか」

表情は見えないが、壱さんのその背中からは悲哀のようなものが感ぜられた。それは自らの圧倒的劣勢を絶望して、というふうなものではないようにも感ぜられた。あることはどちらか、オレの思い違いかもしれないが。

壱さんの返しに、対するジズさんの顔には自嘲的な微笑が浮かぶ。はっ、と唐突に“それ”は脳裏をよぎった。“こまこ”的瞬間”のタイミングを逃がしたら、すべてが終わるまで口をはさめなくなってしまう。 と、根拠もなく悟つてオレは、

「壱さん！」

悪足搔き的に、思いつて何を述べさせていただく。

「逃走しましょー！」

「……はい？」

「ですからー！」「じゃあ“戦闘”ではなく“逃走”を選択しましょーよー！」

「刀さん」

壱さんは妙に優しげな声色で諭すふうに、おっしゃる。

「…………少しばかり空気を読みましょー」

それだけは、それだけは壱さんに申されとうなかつたわー！

「というか、空気を読んだから言つてるんですよ。壱さん、神経毒が仕込まれた槍を相手に、素手でなんぞやらかそうとしてるんですけどものー」

この場面にあって“戦闘”か“逃走”かの選択肢があつたらオレは、“逃走”を推す。ラノベやマンガやアニメやゲームの主人公だつたなら、なにかカツコイイ感じのことを言つたりやつたりするのだろうけれど、“死の可能性”がすぐそこにあつて余裕をかませる“主人公スキル”など、オレにはない。“死の可能性”を突きつ

けられたら、怖い。そして“無関心ではいられないヒト”へ想わんに“それ”が向くひともまた、怖い。だからオレは、カッ口悪くとも“逃げること／生きること”を選ぶ。

「……もう、しょーがないですね」

子どもの駄々に根負けした母親のよつて言ひで御たさせ、フタロロに手を突っ込み、

「これで、素手ではないですよ」

と“夫婦大食い祝事”で勝利して贈られた白の手拭いを取り出し、その両端をそれぞれ右と左の手に巻き付けて握り、バンザイするようにして頭上に掲げる。「これでよいでしょ？」「と述べるよつて。」  
「もちろん」「くちゅう」とだけ素手じやくなつたのは事実ですが、そもそも戦わないつていう考えは、ないのでしょうかね？」

「まったくありません」

遂巡する気配もなく、せつぱつと真剣な口調で石垣に立つてゐる吉川さん。

「なんでそんなに戦いたいんですか？」

まるでお菓子を買ってほしこと駄々をいはむナビものよつて、

「死んじゃうかもしれないんですよ？」

地べたにうずくまりつつ、オレは強めの語氣で問つた。

「…………戦いたいわけでは、……ないですよ」

ささやくよつて吉川さんは述べた。声は小さかつたが、言葉には深いこといろいろから絞り出されたような“濃縮さ”が感ぜられた。

吉川を見据え、檜を構えて対じしてくるシズさんの顔が一瞬、その言葉が発せられたと同時に“痛む／傷む／悼む”ように歪んだ。

よつて見えた。

「じゃあ、どうして

思わず、責める口調をその背へ投げつけてしまった。

言つてゐることもやれつとしていることもチグハグじやないですとか、と。

「“忠”を頼んでくれた人への、最低限の“礼儀”です

硬球を弾き返す「コンクリートの壁のよつ」、その背はま揺らぐ」となく。どひしてだらう、轟さんがとても遠ことじろに立っているような錯覚を覚えた。“孤高”という言葉を、その背に想つた。

「“忠”って……、どひして“それ”で

あるいは核心に触れられたかもしれない問いの言葉は、しかしさえぎられて消える。

まわしく問答無用に。  
開始されてしまった。

“戦闘”が。

先に仕掛けたのはシズさんだつた。構えの姿勢から踏み込み、槍で突きを放つ。第一、第二、瞬々と突きが繰り出される。鋭利な切つ先が、壱ちゃんの“胴体／胸部と腹部の間の辺り”を襲う。壱さんは、シズさんの足運びと運動するように後退してギリギリ槍の切つ先をかわす。

#### 第四の突きが迫る。

同じく後退してかわそつと、壱ちゃんは足を後ろへやると見せかけて、迫る槍に白の手拭いを下からすくい上げるようにして素早くからめ巻き付け、切つ先の進む方向を御し、転じて一気に肉迫する。

「心遣い、感謝します」

なぜかお礼の言葉を述べてから、壱さんはシズさんの側頭部ヘビジで一撃を放つ。

シズさんは上体を反らして、それを避ける。

次瞬。

壱ちゃんは足を刈るよつとして踏み込み、身体で“压す／押す”。踏ん張るための足を刈られて姿勢を保てず、シズさんは背から倒れる。が、槍の尻を地につけて支えにし、まるで空中静止しているかのように堪え、背を打つことを回避する。そしてその体勢のまま、壱さんの腹部を狙つて足蹴りを

壱さんはシズさんの側面へ跳ぶように一步で移動する。それに合わせて、白の手拭いで御している槍を引く。

支えにしていた槍が動き、シズさんは体勢を保てず背を地に落とす。足蹴りは空振りし、勢いが活きたまま地に落ちることになつた足を強打する。

静寂の間が生まれた。

そよ風が、「いまだ！」とばかりに手刀を切つて通り流れる。

秘められた力よ、覚醒してくれ。御都合主義的な展開になつてくれ。 と、心の底から祈り願つたオレの焦燥感は、けれど杞憂だつたらしい。とてもとても喜ばしく幸いなことに。

壱さんは、見ることが得意でない。しかしそれを補つて余りあるほど空間把握能力や聴力がずば抜けて優れている。だからこそ以前あつた多々の戦闘においても、相手と互角以上の戦いを演じていた。が、以前の戦闘にあつて今回の戦闘にないモノがある。“音の高い舌打ち／反響定位”だ。壱さんは戦うとき“音の高い舌打ち／反響定位”をおこない、その反響音で“空間／存在の位置関係”を把握しながら行動していた。こと“戦闘／激しく動くこと”において、“音の高い舌打ち／反響定位”が壱さんにとってとても重要なモノだとわかる。 にもかかわらず、まだ“それ”はおこなわれていない。だからこそオレは焦燥感に駆られたわけだが

しかし、いま“それ”は疑問感に姿を変えて頭の中にある。どうして壱さんは、“音の高い舌打ち／反響定位”をおこなうことなく、シズさんの動きを完璧なまでに把握できているのだろう？

静寂の間が終わる。

風の流れが、息をのむように止む。

## 承／第三十五話・ムシムシ感へじ（其の一十一）

「動きの“基本／基礎”が相変わらずですね、シズ」  
郷愁と哀愁が混在する音声で、壱さんが言った。

「戦士としての知恵と技術を教授してくださった“師匠／せんせい”が、とても“優秀なヒト”でしたから……」

郷愁と哀愁が混在する音声で、シズさんが応えた。

そして。

会話の間を、その隙を逃がすまゝと、動く。

寝そべりの姿勢から、壱さんの足首に向け低空の蹴りを放つ。蹴り足にかかる遠心力を利用して、上体を起こす。

すっと飛び退り、壱さんは蹴りから逃れる。

シズさんは上体が起きたと同時に倒れても手放すことなく握っていた槍を繰り、壱さんのノドを狙つて突く。

壱さんは白の手拭いで槍の軌道を御しつつ、身をかがめて刃をかわす。そして流れる動作でシズさんの頭部へ蹴りを入れる。

シズさんは回避しようとするも間に合わず、一撃を喰らう。鼻が変な方向に曲がり、ツーと血が垂れ、滴となつて地に落ちる

という猶予など与えることなく、壱さんは槍を放すまいとしているシズさんの手腕を容赦なくその足で痛めつける。耐えかねて、

槍を持つ手の握りがふつと甘くなつた。その瞬間を逃すことなく、壱さんは槍を奪取し、そのまま素早く飛び退つてシズさんとの間に充分な距離を作る。

「…………こうなるとわかつていたなら」

奪つた槍の切つ先を地面に突き刺し、突き立て、

「……教えたりしませんでしたよ」

悔いているヒトの表情で、壱さんが言つた。

「あるいは私も、ふつ！」

シズさんはかすり傷に消毒液を塗るような軽さで、曲がった鼻の

向きを手で強引に修正してから、

「ひつなることがわかつていたら教えを乞わなかつたでしょ。……」

衣服に付いた砂埃を掃いつつ立ち上がり、

「でも、それは“たられば”的話です。壱さん」

言つて、半身に構えて格闘するヒトの姿勢になる。

「退いては、いただけませんか」

諦めきれない、懇願の響きある音声で壱さんが訊いた。

「“勝ち”得なぐば“生きる／活くる”に等しからず」「シズさんはくつがえし難い事実を告げる口調で言い、

「それが」

覚悟を決めた眼で壱さんを見据え、

「私に“与えられた／課せられた”使命ですか？」

諦めたヒトの微笑みを口元に浮かべる。

「……………」

壱さんの口元にも、シズさんと同様の諦めたヒトの微笑みが浮かぶ。

「……………」

一步、二歩、三歩と、壱さんは言葉なく進み出で、

「…………私も、“果たすべきこと”が“ひとつ”できたんですね、やや腰を落とした半身に構え、

「ですから、それを“果たすまで”は

叫ぶ。

「“勝ち”は得せません

## 承／第三十六話・ムシムシゾー（其の一）

壱さんの“意志／言葉”を受け取つてから、シズさんが攻め込む。鋭く踏み込み、右の拳を壱さんの腹部に向かつて放つ。

壱さんはそれを対応した手でいなす。 いなそうとして、しかしその手は拳に触れることなく空を切つた。体勢が崩れる。

シズさんは腹部を狙つた殴りで反応を釣り、転じて隙の生じた壱さんの“急所／聴覚／耳”へ左の掌を打ち込む。

掌が迫るのを察知した壱さんは、体勢が崩れるのを利用して身を低くし回避する。そして体勢を戻す勢いを載せて、がら空きになつているシズさんの横つ腹へ拳を突き刺す。重い衝撃が、シズさんの身体を打ち抜く。

「 んぐっ 」

シズさんは苦悶の声を漏らし、身を折る。

流れる動作で、壱さんは容赦なく追い討ちを仕掛けん。一時的に動きが停止したシズさんの、先ほど“急所／聴覚／耳”を打とうとした手腕を左の手でつかみ取り、手前に引く。そうして伸びた腕へ、体重を載せた右のヒジを打ち落とす。

「 がはあっ！ 」

シズさんの腕が、ダメな方向に折れ曲がつた。

しかしシズさんは地に伏すことなく、奥歯を噛みしめて、動く。

折れた腕をつかんでいる壱さんの手に、生きているほうの手をやる。

だが、シズさんがそこから反攻に転じることはなかつた。

手に手が触れた瞬間、壱さんはつかんでいる折れた腕に“ひねる／ねじる”力を加えた。それによつて生ずる“痛み”で、シズさんの行動を制す。

シズさんは尋常ならざる精神力を發揮し、額に脂汗を噴出をせつとも、堪える。

が、壱さんがその“堪え”の隙を逃すことなく、シズさん

の足を払つて体勢を崩し、後頭部へそえるようにして手をやり、押し倒す。

受身を取れず、シズさんは頭から地面に突っ込んだ。生めいた鈍い音がした。

静けさが訪れる。

シズさんは地に伏して沈黙し、動かない。

「 」

壱さんは張り詰めた緊張の意と解きほぐすよつこい、「はあ……」

深いところからひとつ息を吐いた。

空に顔を向け、しばし黙る。

そよ風が、嘆息するよつこいに流れた。

承／第三十七話・マジマジ恋へじ（其の一回目）

志さんは“なにか”を切り替えるように、皿のせっぺを両の手でペシペシと叩いた。それから探しモノをするように、音の高い舌打ち／反響定位”をおこないながら顔を右に左に前に後に後ろに動かす。

そして。

なにも行動できず傍観に徹していたオレのまくべ、“それ”は至る。

志さんは身を向けると、風呂上りのおつかみたに由の手拭いを首に引っ掛けた

「……や、戻りましょう。刀さん

ネガティブな色のない気軽な音声で言つて、やや急ぎ足で接近してくる。

「まあ」志はこゑと、お夕食にて間に合わなくなってしまったからねっ！」

いまのさつきで、もう夕食のことを考えていらっしゃるとは……。正直に、ウソ偽りなく告白しそう。こまオレは、志さんと対して“恐れ／畏れ”にも似たモノを懷いていた。なんというか、とても形容し難い感覚的なことなのだが、“強すぎる”と感じるのだ。腕つ筋も。精神的にも。オレでは、まるで比較にならなくくらい。身体を動かしたあの食事は格別の美味しさがありますからねー。もつ想像しただけでヨダレが。うふふ

志さんはふにゃけた表情でそんなことを言つながら、口元をふきふき、歩み寄つてくる。はずなのに。……とても遠い、縮まり難い距離がそこにふてぶてしく横たわっているようにかんじてしまつた。

が、それを些細と思つて流す事態が起きた。

沈黙していたはずのシズさんが、地に突き立つ槍を折られていな  
い手腕で引き抜き、それを腰の位置で構えて立っていた。折られた  
腕は“ひねられた／ねじられた”ときのクセをやや残して力なく肩  
にぶら下がり、対して折れる気配のない“心／芯／真／紳／仁”あ  
る眼差しが壱さんの背を捉えている。鼻から垂れている血と、額か  
ら噴出している脂汗が、顎の先で混じり合つて一滴となり、ポタリ  
と地に落ちた。

「壱さん後ろつ！」

と言つたときには、もうすでにシズさんは壱さん田掛けて突進を  
始めていた。神経毒の仕込まれた切っ先が、与えられた役割をいざ  
果たさんと猛進する。

「どうして、“正義／意志”を貫くことには、しばしば“痛み／傷  
み／悼み”がともなつてしまふのでしょうか……」

壱さんはそのお顔に疲れたふうな愁いの影を少なくなくにじませ  
て、“誰か”に問いかける口調で言つた。背後に迫る危機を気にす  
るそぶりは、まったくない。

オレは槍より先に壱さんへ体当たりをかまそつと思ひ至り、いま  
だ笑つている空氣の読めない四肢を叱咤した。　が、こんなとき  
に限つて、“トイツら／四肢”は反抗期をこじらせやがる。うまく力  
が込められない。立ち上がれない。駆け出せない。

壱さんに、殺すための切つ先が迫る。

「はあ……」

壱さんは寝起きに背伸びをするがごとく、いかんともし難いこと  
に対する気だるい心情を薄つすらお顔に浮かべて、動く。小粋に散  
歩を楽しむヒトのように後頭部の位置で両の手を組み、その体勢の  
まま左斜め後方へひょいと軽く跳ぶ。　足が地に着く一瞬前、腰  
をひねつて狙いを定めるように上体の向きをやや変える。右ヒジの  
位置とシズさんの顔の位置との軌道が、狂いなく一致する。

転瞬。

満身創痍がゆえに愚直な突進を選んだシズさんは、まさか自ら危

機に近づいてきた壱さんに対応しきれず、跳びの勢いと振り向きの勢いが足された右ヒジが待つていいそこへ、吸い寄せられるように突っ込んだ。突進の勢いも足された右ヒジが、顔面を打ち抜く。頭部だけ強制的に後方へやられ、それに首から下で活きている突進の勢いとが連係し、身体が宙を舞つた。わずかな浮遊の後、シズさんは手招きするような重力に引っばられて地べたに墜落する。後頭部と背中を同時に強打するカタチで。

その光景は、どうにも現実味が薄く、もはやギャグにしか見えなかつた。生々と痛々し過ぎて、一切、笑えないが。

今度こそ確実に沈黙したと思われるシズさんの側らで、

「さて」

壱さんは仕切りなおすようにパチンとひとつ拍手を打つてから、「戻りましょう」

ヒトひとり地べたに沈めた事実なぞなかつたかのような“普通さ”で、そう言つた。

結局のところ。

オレが槍より先に壱さんへ体当たりする必要はなかつた。壱さんは、自らの力のみで、自らの脚のみで、そこに確と立つていた。立つていい。

どうしてだらう。またも壱さんに対する“恐れ／畏れ”にも似た、あるいは表裏の、“強すぎる”という感を懷いてしまつた。

「といひで」

こちらに歩みを進めつつ、壱さんが思に出したふうに言葉を投げた。けれどそれは、

「“これ”をあなたたちに命じたのは、ロンですか」

オレに対するのモノではなかつた。

「…………はい」

感情を御して殺したような音声が応じた。その声の主の姿は、まるで影のように音も気配もなく、気づいたときにはもうすでに、沈黙しているシズさんの側らにあつた。黒紅色が主色の民族衣装っぽ

い服を着て、肩口の辺りで切られた黒髪の、左で結んだ髪の一束を斜め後ろへたらじしている。

「我々に命を下したのは宰相閣下です」

折られた腕に添え木を当てて固定する、といつ应急処置を淡々とシズさんに施しながら、そのおヒトは述べた。

「またずいぶんと出世しましたね」

壱さんは世間話をする気むぐさで驚きを表してから、すっと真顔になつて、

「……まあ、故郷を想ひと、あまり素直に喜べるお話ではないですが」

「ぼそりと、心配事があるヒトの臺つある音声でやつしぽじた。

「あなたが去らなければ」

シズさんへの应急処置を早々に終えた黒髪のおヒトは、停止しているシズさんを「ふつ」と気合ひとつ身体全体を使って肩で抱き、

「きつと“状況／情勢”は違つていたでしょつ」

と、“批難するよつな／切実に懇願するよつな”眼差しを壱さんとの背中へ向ける。

壱さんは、言葉を返すことなく黙してそれを受け取つた。自嘲しているよつな、泣いているよつな、なんとも形容し難い複雑な表情がお顔に滲んでいた。

不意に。

そんな表情を吹き飛ばすかのよつに。

強烈な突風が吹き抜けた。

巻き上げられた砂埃が、無差別に容赦なく襲つてくる。

オレは反射的に顔をそむけた。

一瞬の後、速やかに視線を戻す。

そこに、シズさんと黒髪のおヒトの姿はなかつた。

ただ、

腹部を押さえて苦しげにうずくまる壱さんの姿があつた。



結果いつなるといつ要因は、当たり前だが事前に示されていた。  
どうして“それ”に気づかなかつたのか。どうしてもうと配慮する  
よう働きかけなかつたのか。いまさらながらに、つべづく自分の浅  
はかさを思い知る。

「だ、大丈夫ですか！ 売さん！」

「んー、正直、あまりよろしくはないですね……」

そう言って、売さんは苦しげに微笑む。

明らかに大丈夫じゃない雰囲気のヒトに向かって、なに言つてん  
だオレは。

「……やはり、食後の過度な運動は避けるべきでした」

「…………は？」

「自分は“適度さ”を守れる、といつ過信が、私の“おじり”が、  
この、時間差で横つ腹が痛くなるという無様な結果を招いてしまつ  
たわけですから、なんとも情けないお話です……。笑ってくれてか  
まいません。もういつそペロペロ」

いまここにある事実だけを述べよう。

そりやあ、“夫婦大食い祝事（決勝）”で伝説になるほど蒸しま  
んじゅうをたらふく喰つたあとに戦闘なんていう激しい運動をされ  
ば当然、横つ腹も痛くなるでしょうよつ。

……そう。売さんは、べつにシズさんの槍の一撃をじつは喰らつ  
ていたとか、黒髪のおヒトがなにか不意打ちをしていてそれを喰ら  
つていたとか、そういうことではなく、ただ単に、食後に激しく動  
いたから横つ腹が痛くなつてしまつただけだった。

強いんだか弱いんだか、もうオレの低スペック脳ミソでは判断で  
きないわ。……まあ、どこぞを負傷してしまつたわけじゃなかつた  
のは、素直に幸いと喜べることだけど。

「ん~、も~、一步も動けませ~ん。とお~せ~ん、おんぶ~」

幼い駄々っ子のようであり、計算高い大人の女性のようでもある音声と雰囲気で、そんな要求を告げてきおる壱さん。いまさつきのシリアルな空氣感との激しきるギャップに、薄つすらと女性の恐ろしさを感じつつ、オレは壱さんの手を取り、“おんぶ”を全面的に受け入れる体勢になる。

だつてオレは、“いやです、NO”と言えない日本人ですかう。

とか、べつにそういうのは一切関係なく、そもそも“おんぶ”を拒む理由がない。むしり“おじしやすつー／Welcome！”とおもてなしの心を持って最高の笑顔で両手を広げ、全身全靈でお迎えするべき事態だ。

背後に、壱さんの存在を感じた。我が背中に、壱さんの温い手が触れ

「はあああああんつ」

「ど、どつしたんですか。いきなり変な声を上げたりして……。刀さん、とっても氣色悪いですよ……。正直、ドン引きですよ……」「いや、ま、ま、だつて壱さん、不意に背中をこじくりまわすんですよ、……」「なんと申しましようか。出ちましたんです」

さわさわと不意打ち的に背中をいじくられたら、それもこれから身を預けるモノの信用性を査定するがごとく念入りにいじくりまわされたら、きっと誰だって、絶対に、オレと変わりない反応をするに違いない。

「一切に願いたいところです。はい。

「もうですかー。出ちましたんですかー。じゃー、しょーがないですねー。しょーがないことですねー」

「元壁すきる棒読みつ！…………どうじてだらひへ…………心が折れ

そうですか」

「わうつ、じょーだんですよつ。じょーだんつ」

やう言つて、壱さんは笑けるようにバシバシと我が背中を叩く。

「出ちまつなら時と場所を考えて自分だけじゃなく相手を気持ちよくしてからにして、という清い乙女からのお願いですよ

「…………　じゅ」と？　壱さん、あなたはいつたい“なにについて物申していらっしゃるんですか？

いや、まあ、よくわからないけれども。ただ、揺るぎない確信を持つて思います。真に清い乙女はそんなお願いしない、と。……たぶん。

そんなこんなで。

受け入れ準備超万端な我が背中に、ついにやつと壱さんのお身体があぶさつてきた。

「おお、び……」

創作された物語の主人公のように、「おおう……、なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」とか言える主人公スキルなんぞ一切、オレは備えていないので、壱さんをおんぶして感ずるのは「おおう……、ずつしり……」である。主人公スキルを備えているヒトのようには、麗しい女性と節操なくベタベタイチャイチャした経験がなく、現在のヒトと過去のヒトを“比較する”ということができるないから、「おおう……、ずつしり……」としか感じられないだけかも知れない。けれども、けれどもしかし、こっちが引くくらい食べ物をたらふく喰らう健康優良淑女であらせられる壱さんという“生きているヒト／生命／いのち”なのだから、それなりに重量があつて当然だと、個人的には思う。生まれたばかりの赤ちゃんだつて、けつこうずつしりくる確かな存在感があるわけだし。まあ、スーパーなどで市販されている一袋およそ五キログラムのお米を、けつこう重たいと感じる“貧弱・マイ・ボディー／オレという存在”だから、余計に“そう”なのかもしねりない。　念のために、あらぬ誤解を生じさせないために、あえて付け加えておこう。オレは、べつに決して壱さんが重いと言つてはいるわけではない。もし仮に、実際に羽毛のように軽いヒトがいたら、それに気づいた者は感嘆してないで、相手の健康のために一度お医者さんへ相談しに行つたほうがよろしいんぢやなかろうかと、そんな現実に気づかせていただいたという、“ありがとうございます”にも似た“意”が述べたいのだ。

ともあれ、いま、現在進行形で、オレも創作された物語の主人公と同じ“思い／感想／感情／感動”を懷いていたりする。

背中にっ！ オレの背中にっ！ いまこの瞬間っ！ とっても優しい、とっても柔らかきモノがっ！ ふにょんつてしちょる、よつ！ ほほお～いつ！

……思わず“自分”を見失つて舞い上がつてしまつたのだわ。  
……冷静になろい。

血制心つ！  
全開つ！  
無理つ！

うん。だつてほり、おんぶすると、ひづ、姿勢を安定させるためにお手々を、ひづ、ふとももからお尻らへんの辺りにそつとそえなければならぬじやないですか。必然的に。で、いま、現在進行形で、我があ手々は、おぶさる関係上ひづじょうもなくおぬし物の裾から「こんにちは」しけやつたさんとの、汗で少々しつとりとしている生な“むにむに／むちむち／もちもち”とした“ふ・と・も・も”の温もりと触感を恐悦至極「ひやつほお～いつ！」としているわけで。頭では冷静になりたいのに、オレの中の“誰か”が「熱くなれよつ！ もつと熱くなれよおつ！」といふるさく叫ぶわけですよ。冷静になれるわけ、ないじやないですかつ。熱くなるよつ！

と、そんな感じの、過剰な熱情ほど由々しかつたりするわけで。

## 承／第三十九話・ムシムシ感へじ（其の一十六）

眠っていた変態力をほぼ総動員してテンションを上げ、記憶を強制上書きしてみようと試みたけれども、しかしそうしようとすればするほど、考えないようにすればするほど、残念なことに“それ”はより鮮明さを増して脳裏に浮上していく。

なぜ壱さんは、シズさんに“いのちへ生命”を狙われていたのだるづく。

過去形で“友”と述べていたけれど、実際のところはどのようない関係なのだろう？

などなど。詮索するとか、失礼極まりないことだと重々承知しているけれども、ふたりの“やりとり”を“目で見て／耳で聴いて／肌で感じて／体感して”しまったので、どうしようもなく気になってしまうのだ。というか、いまさらながらに“そのこと”を自覚したから、余計に知りたいのかもしれない。壱さんが“何者であるのか”をほとんど知らない、“そのこと”を。

……なんというか。いやらしいな、オレ。

と、思いつつも、“知りたがりのオレ”はとても強く。

「ふと気になつたことを訊いてもいいですか？」壱さん

「はい？ なんですか？ ……あ、私の寝床での持ち技の数がふと気につてしまつて、刀さんはムラムラしてしまつたのですね。わかります。妻である私にはわかりますよおつ」

「いえ、違います」

「じゃあつ、なんだと言つのですか？」

なぜにちょっと不機嫌になつてしまわれたの？

といふか、寝床での持ち技の数つてなんですか。……あれですか、経験から思つに、首をロツクして意識を落とすとか、極上のマッサージ術で意識を落とすとか、そういう部類の持ち技のことでしょうがね？ といふのは脇に置いておいて。

「いや、その、さつきの戦いでは、“音の高い舌打ち／反響定位”をおこなつていなかつたんですけど、それでどうして、“あんなに機敏に戦えたんですか?」

じわりじわりと外堀を埋めて本丸を攻略するかのように、そんな問い合わせを、我がお口は吐いていた。

「訊きたいつて、“そんなこと”ですか……」

志也さんは安堵と落胆が混在するよくわからぬ音声で言つてから、「もうひー

面白くなさひびきほっぺをふくらと膨らませる。

顔の真横、横田で見た超至近距離に志也さんのほっぺがあつて、ツンツンしたくなるほっぺがあつて、オレは危うく“そこに山があるからせ”症候群”を発症しそうになつたが、“知りたがりのオレ”が速やかに“登山家のオレ”をコンクリート詰めにして心の海に“チンノ沈”してくれちゃつたので、ビリビリか事無きを得た。

「でも、まあ、やつぱり

志也さんはしみじみと感じ入るふつにおっしゃる。

「刀さんも、お玉々ぶら下げている立派な男の子なんですね」「ん、んん？　んん……。決して間違いではないんですけども。とい

うか、お玉々ぶら下げていますけれども。じゆことですか？」

“戦い／戦闘”に興味があるつて、いかにも男の子っぽいじゃないですか。ですから、刀さんも男の子なんだなあー、つて改めて思つたわけですよー、ふあー

脈絡もなく、語尾でふにゃふにゃとあぐびをかます志也さん。

「なるほど」

本当に興味があるのは志也さんに關してですけどねつ。なんて素直に言えるわけがなく。だから、

「で？」

と、姑息に疑問符でお話の先を催促する。

「むにゃむにゃ、へ？　ああ、はいはい」

我が知りたい意欲と反比例するように、志也さんはどこか遠くへ船

出しあうな空気感で応じてくれる。

「まあ、あえて言つなら、経験に由来する“感覚／予測／勘”とでも申しましようか。そもそも“音の高い舌打ち／反響定位”は“空間認識／空間把握”的補助でしかないのに、絶対におこなわないとダメといつわけではないのです。それに“空間認識／空間把握”で頼りになるのは反響音だけではありません。空間には常時あらゆる“情報／頼り”があります。空気の“触感／質感／温度／湿度／濃度／流れ／風味／におい”、地面の“触感／質感／硬度／粘度／震動／風味／におい”、水の“触感／質感／水温／水質／硬度／軟度／流れ／風味／におい”、光の発する熱の触感や質感、風や水の流れる自然の音、生き物が動く音、などなど。“そこ”にも“ここ”にも“あそこ”にも常時、動作を決定するにたる“情報／頼り”があるわけです。なにより、反響音にはどうしても“反響して耳に届いてそれを解釈するまで”の時差が生じてしましますから、状況に応じて臨機応変におこなうか否かを判断します。閉鎖的な場所や、対複数では、自分との位置関係を知るためにおこなう場合が多いですね。逆に、開放的な場所や、即応しなければならないときは、おこなわない場合が多いです。まあつまり、ザッククリ申しますと、私の動きは“音の高い舌打ち／反響定位”だけを頼りにしているわけではないわけですよ。それに、さきほどの場合は、私が相手、シズの“動き方／戦い方”をよく知つていましたから、時差の生じる“音の高い舌打ち／反響定位”をあえておこなう利点がなかつたのです。というわけで。刀さん、おやすみなさい」

「おやすみなさい、壱さん つて、ええつ！」

なんともヌルツとした急展開にビックリして真横を見やると、そこにお口を「むにゃむにゃ」させていた壱さんの安らかなお顔があつた。

「ぐうーぐうーすやすやにゅせんへへ..

もう寝息を發していらっしゃる。しかもいい夢を見ていろつぽこ！ どうこと？

ん、んん、んん……。なんというか、外堀を埋めている間に本丸が受付を終了しちゃったといつ……。どれだけ寝付きよろしいのさという、この事態……。

攻略は計画的にねつ。と、どこかの誰かが言つていたような気がしないでもないことを、じつして失念しちょつたよつ！ オレつか！

しかし、だからつて、寝てゐるおヒトを無理くり起しにアレやコレや訊き出すなんて非人道的な行為、いくら“知りたがりのオレ”でもやううなんて思わないわけで。

いや、まあ、いざれ正しいカタチで“お訊きできる機会／教えていただける日”が訪れるだらう。たぶん。きっと。……そうなるといいなあ。なるかなあ。本丸攻略作戦、どうにも壱さん最先読みされていて、寝落ち強制終了という先手を打たれてしまったような気がしないでも……いや、さすがにそれは考えすぎか。

まあ、なにはともあれ。とりあえず。

壱さん……、よだれを垂らして我が首筋の極々一部を「テロ」テロに保湿してくれちゃうのは、“ありがとう迷惑です”といふか、自分そこまで上級者じゃないつすといふか、切に“勘弁願いたい。まあ、すでに手遅れなんですけど”。ああー、もおー、存分に潤っちゃうわあーい。ひやつほおーい……。ああ……、生温かあーい……。  
「……なんだかなあ」

思わず口から出たそんな言葉は、けれど壱さんの望まれぬ保湿行為に對してではない。そして脈絡もなく、ちよいとした息抜き的に、ふとした拍子に間違えて自分を“俯瞰視／客観視”してしまった結果、ボロッと出できちやつた“感想／見解／批評／言葉”だ。

アレやコレや述べたり、アレやコレや知りたがつたり、他者の領域にしたたかに踏み込まんとするのに、自分が安全圏の内側に立っている確証があるときしか“そつ”しない。さつきだつて、殺すための槍の切つ先が壱さんに迫つてゐるのを認識していながら、四肢が反抗期だと自分に對して都合のいい言い訳をのたまつて、どう

にかしょと行動しなかった。壱さんが“たまたま強かつた”から、幸いにして今現在、オレは背中に壱さんの温もりを感じていられるけれど、“たまたま”が少しでも違うふうに作用していたら、まったく異なる今現在を実感することになっていたかもしない……。想像するだけで、背筋に強烈な“悪寒／怖気”がはしる。けれど“それ”は、申し訳なくもありがたいことに、いま背面にある圧倒的な“温もり／存在”によつて速やかに中和される。

「……なんだかなあ」

まあ、だからって、オレが“創作された物語の主人公的な行動力”を身に付けたところで、“なにか”が変わるといつ保証はどこにもないけれども。

けれども。  
しかし。

ひとつくらいは、主人公スキルを身に付けたいと心の底で切望するわけさ。オレだってやっぱり、お玉々ぶら下げている立派になりたい男の子ですもの。“関心ある異性”の前では、ええカッコいいになっちゃうのです。

だから。せめて。そう、せめて、「おおう……、なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」とか、呼吸するよりにサラッと口から吐けるようになりたいわけですよつ。

でも実際、どうしたら“そう”なれるのかなあ……。いや、まあ、奥義書的な近道を模索するより、地道に足腰を鍛えるのが正解だろうつてことは、もうすでに重々承知しているんですけどもね。うん。

んんー、壱さんをおぶつたまま走り込んだりスクワットしたら、いい感じの“加重／負荷／Weight”になって、効果的に足腰を鍛えられたりするかしら？

繰り返しになりますが、べつに決して壱さんが重いとかそういう意味じゃないです。決してつ。決してつ、ねつ！

……うん。

むくつと思ふ立つた田が畠田ですよ。

と、どこの偉そうなおヒドが言つたような言わなかつたよ  
うな気がしないこともないので。

とりあえず、メムス屋さんまでの帰路を、鹿やんをおぶつたまま  
走つてみるとこした。

そして。

走り始めてほどなくして。  
心は折れなかつたけれど、心臓が“パーン！”って爆ぜやうになつたので、我が生命戦略的にいたしかたなく“走り”的一時中止を断行した。

「ハアハア……つ、こりゃあアカン。ハアハア……つ、非常にアカン。ハアハアハア……」

と、素で口からお漏らしあり、それはそれはキツウ「ございました。走ることなめてました。申し訳ございませんでした。「そんなに深々とハアハアしたりして、私をおぶつてたきつてしまつたのですか？」

「はあああああん！」

不意打ち的に音のある吐息でお耳をなでられて、それはそれはすぐつたくて、意思とは関係なしに、また出ちまつたといつてか、耳に吐息をふうふうしないでくださいこよつ！　つて！　壱さん起きてたんですか？』

「これはこれは、お早いお田覚めおせよ！」とつに搖る振りながら…

「なんですか、その妙な言ひ回し」

それにどうして最後の「ね？」は、やたらと恥ずかしそうなんですかつ。

「でも、事実ですよ？」

無垢な幼子を思わせる色の声でしつと語つてきおなじみ。

「それはまあ、そつなんですけれども……」

「…………で、どうかしたのですか?」「

改めて状況を確認するように声を立てる。言葉を投げてくる。

「え、いや、ちょっと走つてみちゃつただけですよ」

「…………なぜ?」「

そんな素で問われると、どうしてだか“いたたまれない気分”がじんわり胸の内に広がってきおるんですが……。

「ほら、なんだかんだオレも男の子ですから、ふと氣まぐれ的に強くなりたいと思つて走つてみちゃつたりするわけですよ」なんと申しますか、纖細なところをお察しいただきたい。

「“強烈”的“ありかた”を、どうか“間違え／履き違え”ないでくださいね」

「え? なにか言いましたか?」「

極々微妙に、もうひとと言葉のようなモノが聞こえたような、気がするような、しないような。

「いいえ。ところで、刀さんご存知ですか?」「

「……なにをですか?」「

「経験者といつのは、やたらと教訓を語りたがるのですよ

「ん? どう? ですか?」「

「“「かちやうさま”をした直後に激しい運動をおこなつてしまつて、横つ腹がとつても痛くなるのです」

Hくんと鼻を鳴らすお姿が意図せず脳裏に浮かぶ音声で、声をんはH教授ぐだぐだ。

これぞ経験者が語る“言葉の重み”と云ふモノだらうか。尋常なりある実感がずつしりと伝わってきた。

「これはこれはもつあんじへためになる」H教授、どうもあつがどうじであります

そんなこんなで、

ありがたい教えを聞きながら、

ありがたい温もりを背中に感じながら、心臓が“パーン！”って爆ぜない程度に、えつちひおつちひと“いま”を堪能するよひこ、ひとまずの帰路に着く

承／第四十話…マシマシマハ（其の一十九）

「申し訳、やいませんでしたつ！」

戻ってきた壱さんとオレを、そのおヒトは床板に額をこすりつけ  
る全力土下座の体勢でお出迎えしてくれた。体勢的にお顔は見えな  
いけれど、ボロボロとこつかボロボロなかんじは場の空氣から迫る  
よつこ伝わってきた。

そのままお隣には、

「ジンが、夫が、無礼なおこないをし、迷惑をかけてしまい、申し  
訳ありませんでした」

同様に正した体勢で頭を下げて居るロヒさんの姿があった。  
床板に額をこすりつけているそのおヒトとロヒさんの夫さんで  
あるジンさんと、真撃に頭を下げているジンさんの奥さんであるロ  
ヒさん

「夫婦そろって仲良く謝罪体勢でお出迎え、……といつ。  
それがよりにもよつて衣食住をお世話になつてている相手、……と  
いつ。

「おひと……」

正直、激しくいたたまれないぜつ。

とりあえず、

場所を居間に移して

あつれえ……。

いまここにある実体のない“それ”に直面してオレは、心の内側  
で首を三百六十度ほど傾げた。

居間というのは、基本的にまつたりくつろぎ空間である。“個  
々人／家々／家族”それぞれの“嗜好／思考”が反映されるので一

概に言い切ることはできないが、意図せずして無防備に“素の自分”をさらしてしまう空間であると、個人的には認識している。だといふのに。

どうしてかしら、とっても息苦しいわ。

けれどもアレやコレや逃るる術を考えたところで、現実はこれっぽっちも“早送り／スキップ”できないので、ここは潔く、やや伏し目がちに、“それ”と向き合つことにする。

現在位置である口工さん家の居間は、古きよき田本家屋つぽい木造で、我が学び舎のひとつクラスおよそ四十人の生徒がそれなりにゆとりを持つて机を並べて教師の話しを聞き流せる教室ほどの広さがあつた。板張りの床には絨毯的なモノが数枚重ねて敷かれてあり、その上に座布団的なモノを敷いて座す。　ただいま、志さんと並んで座しております。

志さんやオレやツミさんやバツが寝起きさせてもらつている客間とは異なり、居間には家主の生活の一部として共に時の流れを経験している証明として、独特の“におい的な雰囲気”があつた。ヒトによつては“それ”が苦手だったりするけれども、個人的にはなんとなく落ち着くモノがある。……感じえるモノが“よく知つている”を胸の内によぎらせるから、郷愁チックにそう感じるかもしない。

向き合つと述べておきながら。

居間の内装をじつくり“鑑賞／観照”するとか、“視線／意思”がだいぶ寄り道しちやつたけれども、さすがにもう“それ”へ辿り着いてしまう。

正面に並んで座していらっしゃる、ある意味で仲がよろしく、

ご夫婦に。

謝罪の意が伝わる真摯なお顔の口工さんと、ボツコボコ過ぎる痛々しいお顔のジンさん。

…………なんというか、ジンさんがもはやただの重傷者といつ。

「……あの」

あんまりにもあんまりなので、治療的なことをしたほうがよろしくんじやなからうかと進言してみた。

「“害した者”を気づかつとは……、なんと器量の大きい……ジンさんは感心したヒトの口調で言つてから、

「現役のとき味わったモノと比べたら、大したことない。だから、そのお気持ちだけ受け取らせてもらひおひ。　とにかくで、“られつ”が治つたようだな」

と、気づかいの言葉をひちりて投げてくれる。やたら洪くてカッコよい音声で。

「おかげをまで、氣がついたら治つてました」「なによりだ」

器量が大きいのは間違いなくジンさん、あなたです。  
ともあれ。

この状況でオレは、いつたいどうしたら“正解”なんだらうか？  
そんな我が疑念に対し、 “かくあるべき”と模範解答を教授してくれるヒトの姿は一切なく。

ただただ、なんとも述べ難い“沈黙の間”が生じた。

けれど“それ”は、“それ”を“言葉なき闇話休題”と解釈したローハさんの発声によつて、刹那で終わる。

「お話を、シミさんとジンの口からうかがいました」

長い金髪で縁取られたお顔にある、初対面したときひちりかと言えば柔和な印象を受けた眼差しが、いまは真摯で真剣であるがゆえに刃物的な鋭さを放つていた。けれどそれは他者を害する暴力的なモノではなく、極々純粹にローハさんの“そのヒト”に対する“気持ち／想い／心”を語るモノと感ぜられた。

ローハさんは金色で装飾された白主色の法衣のような服のなりを、ツと手で整えてから、

「まいとに申し訳ありませんでした」

改めて、深々と頭を下げる。

そんな奥さんであるとの口の姿を見たジンちゃんは、『痛む心』の底から申し訳なれりつた、せとど泣いてこるよつた表情をしてから、責任あるヒトの顔になつて、口の上をかばつよつに前に出で、「悪いのはすべて」と謝罪の言葉を口にする。

「ふえ、あの……」

どうしたらよろしくのか、どんな顔をしたらよろしくのか、オレにはもうこれっぽけもわからなくなっちゃつ。……こたたまれないのだわ。

そんな渦中、

「ふあ～、むにゃむにゃ……」

あまりにも場違いな『ほほん空氣』でカットインしていく猛者が、驚くなれ、我がお隣に座していらっしゃつた。

猛者」と書きたまどてもとても眠たそうに顔を洗つネコみたいな動作をして、

「込み入ったお話を聞いてるといい申し訳ありませんが……、ふあ～、むにゃ……、私はちょっと……、むにゃむにゃ……、食後の運動後の仮眠を」

ぽんぽこタヌキの置物が横転するがごとく、『ロボ』と寝転がる。

「ああ～、あとこのことはすべて夫である刀さんに任せしますねー。あ、それから、お夕食の準備が整つたら必ず起きてくださいよつ！」約束ですよつ！ 約束つ！ おやすみなさい

「おやすみなさい つて、ええ！」

悲さん寝いんじやなくて面倒臭いだけでじゅうつー絶対つ！

「ぐーーぐーーすやすせにせにやえへへへへ

くそつーー夢の世界に逃げられてしもつたわつーーの速や、船は手漕ぎじゃなくて超高速モーターボートかつー

「……ぐぬぬ

いの状況で手元に選択できるカードが一枚もないわたくしが、

つたい“どうしたら”よろしくののでしょうか？

胸の内で、お隣

の眠りタヌキネコにお訊ねしてみた。それにあわせて、抗議する眼差しを向けてみる。至極ついでに、極々ついでに、そこにある憎たらしきほどやすや寝息のお顔を“鑑賞／観賞”させていただく。

それはそれは、とつても愉快そうに、微笑んでいらっしゃいました……とさつ。……これ、寝てるんだぜ？

とか、意図せずして現実逃避している間にも、田の前の仲良じい夫婦はお詫びを申し上げてきなさる。…………こと過度じゃなかろうかと思うのですが。

こちおう関係者というか当事者といつか関わりがなくもない立ち位置だけれども、もつとも距離が遠いところに立つていてるのがオレである。いろいろとお詫びするべきはオレではなく、ツミさんやバツが的確というか道理じやなかろうか。…………ふたりの次に、ちよいとばかり拳で語らつた経緯のある志さんだが、今度は言葉で語らつたら、なんとなく収まりがよろしいんじやなかろうか。…………なして田の前の事実は、まったくそつなつていないのでしょうね。摩訶不思議だわつ。

ここまで詫びられるに備しない立ち位置にありながら、ここまで詫びられるといつのは、言葉を選ばずに述べると“苦行”である。まさに心苦しいといつか、心が苦しい。悟りの境地に至つたお坊さんじやないので、耐えられるわけもなく。…………なので、

「…………あの～」

と話題をやや右斜め前方へそらすことにする。…………この状況で話題をガラリと一切変えられるよつた猛者と書いて志さんの域に、オレは至つていないのです。

他者へ気づかいの言葉を投げることができ、きちんと血の非を認めて謝ることができる、接してみるとじつに“まとも”なオッサンであると知れる、品行方正と称しても過言ではないジンさんが、少なくとも我が育ちしお国の“行政の運営に關わる先生ら”よりはよっぽど品行方正だと思えるジンさんが、“あんなこと”を積極的

にやらかすような人物に思えず。じつは背後に“やん”とない理由“があるんじやなかろうか。”と、逃避のためにフル回転した脳

ミソが推察しちゃったので、そのあたりを問わせていただいた。

それに対して、口エさんとジンさんは“あんなこと”に至る経緯を語つてくださる。

の、だが。

先ほどとは性質の異なる“苦行”が始まひとつは、予想外で“じぞいました。

まさかね、ふたりの“馴れ初め／のろけ話／過去回想”から語られようとはね。いつたい誰が予想できますか。口直しと思つて口にしたモノが超甘すぎて、まつたく口直せなかつたときの、なんとも言えない気分ですよ……。

……配慮なく、言葉を選ばずに述べさせてもらひります。

この“苦行”おしばり夫婦めつ！ まつたく、お幸せそうになりよりですよつ！ だから！ もつ本当に勘弁してくださいお願ひします……。

口エさんとジンさんが語つてくれた“あんなこと”に至る経緯といつ頃田の“馴れ初め／のろけ話／過去回想”は、なんかもう糖度過多で心身に毒なので、断腸の思いでざつくりバッサリ編集したモノを述べておく。

数年前。

場所は、クレベル王国の王宮だつたそつた。王室に“おまんじゅう”を献上するため参上した口エさんと、王国近衛騎士団に属し王宮の警固に当たつていたジンさんは、“運命の女神”的小粋なイタズラとしか思えない出来事によつて、偶然といつ頃田の必然によつて、“出逢つた／出逢えた”的といつ。

なんかもうこの時点で、ふたりがちゅうちゅしちやう物語が成立しそうな、ロマンティックな雰囲気がバシバシ感ぜられるわけだが

。それはそれとして。

手を取り合つていざ歩まんとするふたりの前に、高い壁が立ちはだかる。身分の違いだ。

騎士といつのは、てつきり職業軍人的な職種のことだと思つていたのだが、どうやら国王から『えられる貴族の“階級／称号”であるらしい。

王室が頼んで献上してもらつてゐるといふ由緒ある“まんじゅう屋”の次期当主である口エさんでも、列記とした“騎士／貴族”であるジンさんとでは、そもそも生まれが違う。ふたりの歩みは、周囲から一切の理解を得られなかつたらしい。とくに口エさんは、女の身体を武器にして貴族に取り入る“悪女”云々と、暴力的な耳に届く陰口を投げつけられたそうな。ジンさんがわりと騎士として名の通つた人物であり、なにより婚約者のある身であったから、余計に“そう”なつてしまつたらしい。

ちなみにその婚約者といつのは、国王に近い貴族なお偉いさんの令嬢さんで、将来有望なジンさんと“家”がつながりを持つために立場を利用して勝手に取り決められた存在のようだ。なんでも、面識もなく名前を聞かされただけで、婚約が成立したことになされてしまつたらしい。

そんなこともあつてジンさんは、ひとつ決断を、けれどわりとあつたり当たり前のようにくだしたそうな。“身分／名前”を捨てる。その決断を。

国王から与えられたモノを、与えられた側から放棄するというのは、なかなか大胆不敵な行動であるらしく。ともすれば、投獄されたり処刑されたりしてしまつほどの大事のよつで。そのことからジンさんの、そして口エさんの、手を取り合つて歩むことへの覚悟がうかがい知れるわけだが。

どうやら国王も、その“ふたりの覚悟”を正しく受け取れる器の人物であるようで。とくに罰することもなく、かといって盛大に“ふたりの覚悟”を称えるでもなく、こゝそりとさりげなく美味しい

お酒を贈ってくれたとのこと。なかなか粹な国王である。

けれどだったら“身分／名前”を捨てなくてすむように取り計らつてくれたら、と思わなくもないが、というか思うが、社会の構造とか個々の立場とか周囲の感情とか価値観とか利害が関わってくる事柄だから、これが“完璧ではないが最良な落とし日正式のだろ”。“たぶん”。

そんなこんなで。

糸余曲折を経て、ついに手を取り合って歩みだしたふたりは、幸せと同義である苦労を味わいながら“おまんじゅう屋／メムス屋”を喰み。

末永く幸せに暮らしましたと。めでたし。めでたし。

で終幕していたら、まあ当然こんな“苦行”な事態にはなつていはないわけで。

今現在からさかのぼる」と一週間と数日前。  
家出してくれちゃったのだ。

ジンさんが。

驚きと抗議の気持ちを半々に、「なんですかーっ！」とオレは思わず口にしていた。

「…………剣の道を、忘れ去ることができるなかつたんだ」

じつに渋くてよろしい音声でジンさんは、そう述べた。

戦争はある種の麻薬である。と、ビートの偉いヒトが述べていたような、気がするような気がする。やっと戦場から帰還した兵士が、家族と過ごす平穀無事な幸せなだけでは刺激が足りず、家族を置いてまた戦場へ戻ってしまう。そんなことが実際に、それもなくなくあるらしい。まあ、平和ボケと称される日本で育つたオレなので、これは映画だったか小説だったかで得た知識だが。ジンさんもまた、そんな生命の危機的な刺激の中毒者なのかと瞬だけ思つたが、どうやらそうではないらしいという気配が感ぜら

れてしまつたので、どうにも困惑してしまつ。発言した瞬間から、まるでウソを述べたヒトが」とく視線が泳ぎまくつているのだ。  
…どうじうことなのだろう? 真の家出の理由は、この場では述べ辛い内容なのだろうか?

……はつ! まままままさかつ! つ、浮気とか、そういう大人な理由のかしら。いや、下手な勘ぐりはやめておう。そもそもジンさん、そういうこととするタイプに思えないし。ともかく。

ジンさんは家を飛び出してくれやつたのだ。そしてその勢いのまま、シミちゃんとバツが食事処を営んでいた宿場町に流れ着く。ただ、剣と身ひとつで飛び出してしまつたので、まったく所持金もなく、さっそく路頭に迷つてしまつたよつて。どうしたものかと悩んでいたらチンピラにからまれてしまい、けれどあつさり撃退。その後を買われて用心棒にならないかと勧誘され、生命的に困つていたジンさんは“その話”を受けてしまつたといつ。

結末的に、壱さんと拳で語りついとになつてボッコボコにされてしまつたわけだが。

ちなみに。

この村へ来る途中で、“巨大なイノシシ的動物／壱さんの朝食”と追いかけっこしている口エさんと出会つた経緯だが。

ジンさんが宿場町に居るらしいといつ話を風のウワサで聞いた口エさんが、時間差で宿場町を訪れ、ボコボコボロボロになつていたジンちゃんを発見。いろいろと話し合つて、とりあえず家には帰るといつことになつたのだが、多々事後処理するべきことがあつたジンさんは、いますぐは帰れないと言つ。口エさんは絶対一緒に帰るという確固たる意思を表明するが、ジンさんに“収穫祭”的“夫婦大食い祝事”的仕込みをおこなう使命があるだろうと指摘されてしまう。口エさんは現当主である父親やその弟子が代わりにやつてくれる云々と主張するも、使命をおろそかにするのはよろしくないとジンさんに説得され、不本意ながらも先んじて帰路に着く。

それからほどなくして樂しくない追いかけっこが始まり、壱さんの朝食が一丁あがりで“ちしつをまでしたとなつたわけです。

「まあ、ここまでふたりのお話をつかがい。

人生いろいろだなあ、と思いつつ、なんとなくふわっと事情とうか事の流れを察し把握した。そして改めて、頭を下げられるのは自分じやあないなと確信を得た。　まあ、それはそれとして。

お話をうかがってもなお、いまいちどうにも釈然としない“ジンさんの行動”があった。というか、お話をうかがって不可解さが増した。壱さんに“まんじゅう怖い”を話して聞かせた散歩のとき、畦道で襲撃してきたことである。

お話をうかがうまえにも思つたことだが、接して知つてみると、ジンさんが“そういうこと”を積極的におこなうとは想像し難いのだ。あるいは顔面の皮がふてぶてしいほど分厚いのかも知れないが、いま実際に目の前にあるボッコボコに腫れて厚みの増した顔面を見てしまつと、ヒトとして到底そうは考えられない……。とか、あんまりにもあんまり過ぎて考えたくない。いや、まあ、隣にいらっしゃる女性に、どうにも敵わないというところで、妙な親近感を懷いてしまつたから、そう信じじたいだけなのかもしれないけれど。　ところは、ちょいと脇に置いておいて。

いまは、なぜに“あんなこと”をしたのか、その真意をお訊ねさせていただぐ。

「あのときは

と、恥じ入るような微苦笑を浮かべる、ジンさんいわく。

誰かが誰かに襲われていたから、最初は助けるためにいたしかたなく剣を振ったとのこと。この“誰か”は、前者がオレで、後者が壱さんのことだろう間違いく絶対に。問答無用で口に拳を突っ込まれたときのことだもの、忘れてても忘れられないわつ。

つまるところ。

オレにとって忘れられないその“構図／光景／思い出”が、ジンさんにはヒートがヒートを襲っている現場に見え、誰かであるところのオレを助けるために武力介入したというのが、事の“真相／真意”であるようだ。これを聞いて、どうしてジンさんは責められよう。少なくともオレには、責められません。

ただ、“最初は”、とあえて述べたのは、ビハーヴィーなのだろう?

そのことについて聞くと、

「“あのときのキャラたち”だとわかった時点で、剣は納めるつもりだったんだ」

ジンさんは居心地がよろしくなれず、じつに歯切れ悪く述べる。

そこから継ぐ言葉が出てくるまで数瞬、沈黙の間が生じた。

「しかし、その……、剣の道に“生きる者／生きる者”として、いや、“生きた者／活きた者”として、どうにも、真の強者を相手に、血がたきってしまったというか、心が躍ってしまったというか、ムキになってしまったというか、…………申し訳なかった」

自制できなかつた自らを叱るような苦々しい表情を浮かべてジンさんは、またも頭を下げる。

こまつたことを、あえて言葉を選ばずに述べさせていただく。どうやらジンさんは、愚直な剣の道バカのようだ。

ふと。

そういえば、といつ軽いノリで。

もうひとつお訊ねしておきたい事柄が、脳裏に浮上してきた。「おおおぼえてるよー」とジンさんが捨てセリフを置いて去ったときのことである。

「あのとき、ビハーブでジンさんは、おまんぐむつー。」

おまんじゅうを怖がるような態度をしたんですか? と言い終えるより先に、鬼気というか危機迫る勢いで肉薄してきたジンさんの

手に、口をふさがれてしまつた。

ジンさんは追い詰められたヒトの表情をじりじり近づか、我が耳元で、

「こまキニが言わんとしてこむ」といつては、場を改めて、必ず話す。だからいまこの場では、訊かないでくれ」

せつかくの渋さが台無しになる必死さ伝わる小声で、そつとつてく。

よくわからないが、なんかダメっぽいことこのまばたきヒンヒンと伝つてきた。オレは一切の迷いなく、即返答する。

黙して、ひとつ小さく首肯。

それを受けたジンさんは、安堵するよつと小さく短く息を吐く。そして我が口から手を離して、『ありがとうございます』といつ意が伝わつてくる眼差しをこちらにくれ。刹那、その眼差しは驚きの色を滲ませながら瞬と遠ざかる。

口工さんが、ジンさんの襟首をむんずとつかんで引き戻したのだ。「もつーーー！ どうしてあなたは失礼なことばかりやるんですつーーー！」

なんかもはや大きいくどもを叱る母親にしか見えない口工さんと、「いや、その……すまん」

ジンさん、ただただ平謝り。

なんでだらう、平穏無事とつ言葉が思い浮かぶのは。

ともあれ。

やつと“苦行”から解放される。

と思えたのも一瞬のことだ、いまここにある現実はまったくそんなことはなく。田の前でいちやいちやしゃがってこの幸せ者どもめつおつと、ゲフングエフン。さすがにもう、“心身／精神”が耐久限界なので、“ご勘弁願いたい意”を丁重かつ遠回しにお伝えする。「わかりましたから、もう許してくださいお願いします」と。

そしてついていく。

短いよつで長く、長いよつで長かつた“苦行”が終了した。

ローハさんは夕食の準備に、ジンさんはお風呂の準備をしてみると言つて退室した。

「はあ……」

心身が、全身全靈が、解きほぐれるよつに弛緩する。

土下座外交の申し子たるオレが、まさか異世界で土下座外交に通ずる恐ろしさを実感することにならつとは……。こんな強力な武器を潜在的に保有しておきながら、どうして我が育ちしお国は“外交／交渉能力”が低弱なのだろう。いや、まあ、実際はそう単純じやがないのだろうけれども。

それはそれとして。

広い居間に、いまは壱さんとオレだけである。

しかも壱さんは夢の世界に旅立つていらっしゃる。

ときたら、これつーひー、なにがしか、ひー、凹に凸する餅つき大会というか、凸が凹に鉄砲玉をぶつ放す的なイベントが発生しちゃつ、ラノベやマンガやアニメやゲーム的な状況なんじゃな

かろうかつ！ 田のお餅を杵で“つく”か“つかない”か、鉄砲玉をぶつ放すために鉄砲の引き金を“絞る”か“絞らない”か、その選択肢が表示されるちよるような状況なんじやなかろうかつ！

はつ！ いかんいかん。“苦行”から解放された反動で煩惱全開になつてしまつたわ。

大きく深呼吸して自制心を呼び戻さなくてはつ！

「すうはあすうはあすうハアハアハアハア」

……よし。やや過呼吸になつてしまつてけれど、問題ない。

改めて、すやすや寝息の壱さんを見やる。こつちまで気が緩む、じつに気の抜けた寝顔がそこにあつた。

こつちが“苦行”に耐えている間も、“こつ”であつたのかと思うと、怒りではないけれども、どうにもすんなり納得できないモノがある。

ので。

氣の抜けた寝顔にある、ふんにやり緩んだほっぺを、ちょいと突つついたつたわっ！

ちょいちょい、と続けざまに突つつく

そうしたらもう、やめられない止まらない。手が、人差し指が、離したそばから、壱さんのほっぺの触感を求めおる。

なんなかしら、この中毒性つ。

ちょいちょい、ちょいちょいちょいちょい

ちょいちょい、ちょいちょいちょいちょいちょいちょい

よい  
「かつぶんちよ」

おやおやあ？

いまだ壱さんのほっぺを突つついていた我のお指が、どうしてかしら、壱さんのお口に喰われているように見えるのは？ 我のお指が、絶妙な力加減で奥歯に噛まれているような触感を味わつてるのは、どうしてかしら？

いや、うん、わかってるんだ。相手が寝ているのをいいこと

に、ちよことばかり調子に乗って、“引き際”とこつ重要な事柄を失念していた結果だつてことば。

いま、まじめになく、壱さんに人差し指を喰われている。くわえられてこる。甘噛みと本気噛みの間くらいの、痛くはないけれど引っこ抜くこともできない噛み加減で。

間違つて指を喰い千切られたら困るので、無理に引っこ抜こうなんていふ強行は最後の最後までおこないたくない。けれども「就寝中の壱さんをこの状況で起こすというのも、なかなか気が引ける」というか、かなりの度胸が必要だ。……さて、どうしたものか。ここは真剣に、安全かつ隠密に指を引っこ抜く策を考えよう。

と、したらば。

我のお指が、壱さんのお口にもてあそばれてこるような触感があつた。ねつとりと舌がからみ付くような、コリコリと歯がいじめてくるような、くすぐつたくすらある触感。けれどそれは不思議といやな感じではなく。むしろ、なんとも形容し難い“快感／快楽”のようだ、イケナイ感じのモノがムクムクと湧き起つてきて、ちよこと気持ちよくすらあるのだわん。

「んー、んん、あひ、うふひ…………れすねえ…………むこせむこせ

……あひふあ

壱さん、いま“味が薄い”とか、そんなようなことをおっしゃられたような……。

てか、口口口やられたときこ、タイミングを見計りつて指を引っこ抜けばよかつたのに！　くわう！　なに気持ちよくなつちやつてるんだよ、オレつー！

冷静にならう。冷静に。“リビドー／強い衝動”をなだめすかすんだ。気持ちよくない気持ちよくないかもしれないような気がするようなしないこともないような気がしないこともないような気がするようなしないような……

気持ちいいぜつー！

「…………ふう

心機一転。

改めて、いかにして安全かつ隠密に指を引っ込めるかを考えよう。  
指がふやけて軟らかく食べやすくなってしまつまえにっ！

どうするべきか。

どうなるのがより好いのか。

やはりここには、壱さんに“自然なカタチ”でお口を開いていただくのが好ましいだのひ。

では、どのようにして“そう”するか。

こちよこちよして笑わせてその隙に引っ込める。名付けて“  
くすぐり作戦”つ！

……いや、笑った拍子にバチンとグチャツとやられてしまっそう  
だからダメか。

なんか、こう、ヌルッとお口を開かせるところが、お口の締まり  
が甘あく緩んじようはつ！ そつだつ！ 甘い吐息だ  
つ！ 「お口で甘あくといえば甘い吐息じゃありませんかっ！」

と、我が煩惱が、抑えきれない“リビドー／強い衝動”が、前のめ  
りに告げてくる。「壱さんがお口から息を吐けば、それにあわせて  
締まりも緩むんじやないでしょうかっ！」 と。

そんなわけで。

壱さんにお口から息を吐いていただくべく、お口から息を吐いち  
やう状況を生じさせる手段を、名付けて“はあはあ作戦”を、こざ  
実行させていただく。

失敗は許されないので、自由が利くもう片方の手指をワキワキと  
動かして準備運動。万全を期す。

「ゴクリ、と生唾をひとつ。

慎重に、冷静に、その手を、壱さんの“その部位”へやる。

「 んつ」

手が触れた瞬間、ピクッと壱さんは身を震わせた。最悪の事態を  
思つて一瞬ドキリと焦つたが、どうやら大丈夫のようだ。

我が手が、与えられた任務を遂行する。

「ん、うんんー、んうー」

壱也さんは眉根を寄せた、苦しげに切なげにビビを鳴らして身じろぎする。

「んうう」

徐々に、お顔が薄つすらと赤くなつてゆく。

「うんう、んんんんん」

そしてそれは蓄積したモノが爆発するがごとく突然に、けれど静かに起つた。

「んんつ はあはあ」

半開かれたお口から、湿り氣と熱を帯びた艶かしい吐息が荒々と吐かれる。

刹那、オレは指を引っこ抜いた。口と指をつなぐよじて唾液の糸が引く。

おかえりつ！ オレの人差し指つ！

壱也さんのお口の中で保湿され過去世で「ロロテロロテロふやふやシワシワになつてしまつていたが、お指のこの無事な姿が確認できた。壱也さんも起床してしまつた気配はないし、とりあえずは一安心である。

安堵の息を吐きつつ、壱也さんの“その部位”であるところの“お鼻”から手を離す。まあ、つまるところ、すやすや寝息の鼻呼吸を強制遮断して、艶かしい吐息の口呼吸へ強引に移行していただいたわけだ。

不覚にも陥つた恼ましい事態は、そんな“はあはあ作戦”的成功によつて静かに終了した。 ただ、どうしてだろう。この、胸の内じゃなくて人差し指に生温かくモヤッと名残惜しこよづな気持ちがあるのは。

ふと、指から続く唾液の糸をたどつて壱也さんを見やる。いまさっきまでそこにあつた苦しげな艶かしさはもうなく、いい夢を味わつてこると快活に物語る無防備な寝顔があつた。

「むにゅむにゅ味が薄い、ときめ、ふへへ塩を、それで、むにゅむにゅ美味しくなるのですよ～、へへ、へへへ」

なんとも恐ろしこ寝言を最高の微笑みを浮かべて、「むにゅむにゅ

と漏らしつつ、のつそつと寝返りを打つ壱さん。寝返った拍子に着物の裾が乱れて、あらあら、まあまあ、ふとももをここんにしちつ！

と、まあ、こちおつり挨拶は済ませたので、やれりと裾の乱れを正す。ふとももさんがあらわになつていらっしゃると、いろいろな意味で悩ましくて困るのだ。ふとももさんはよつむらつ！ また逢う日までつ！

そんな出逢いと別れを経てオレは、

「ふう……」

と、ひと息。家出しかけていた平常心を呼び戻す。

冷静になつてみると、居間の広さがどうにも居心地好ましくなく。身の程に合わない広さ、とでも言おつか。トイレという狭くて機能的な空間に妙な落ち着きを覚えてしまつ貧乏性なオレには、どうにも広すぎるのだ。落ち着かなくてお尻が浮く とこうが、なんかそろそろ“お尻／ケツ”がダンスを始めそうである。

放課後の学校の教室にぽつんとひとり取り残されてときにも、これと似たような感覚を味わつたことがある。空間が広くて遠いのだ。普段、当たり前のようにある存在感、圧迫感が一切ないといふ、慣れない感覚、違和感。まあ、あのときは、期末テストで赤点を獲得しちゃって、居残り補修を課せられちゃつた気分の悪やと、早く帰りたいという心情もあつたわけだけれど。

まま、いまは、放課後の学校の教室と大きく異なり、お隣で壱さんが「すやすや」と寝息を發していらっしゃるといつ救いがあるのと、百倍マシではある。

が、居心地が好ましくないことには変わりない。

どうしたものかなあ、と思いつつ壱さんを見やる。

うん。寝てる。

もういつそのこと一緒に寝ちゃおつかしい、なんて思つてみたが、壱さんほどの寝付きのよさを持ち合せていないので、ちょっと無理なお話か。

客間に戻るつかなあ、と考えつゝ姫さんを見やる。

やつぱり寝てる。「でへへえ」とよだれを垂らして寝てる。

絨毯的なモノが敷いてあるとはこえ、姫さんをこのまま床でお寝んねさせて自分だけ客間に戻るところのは、なんだか心苦しい。

「へーん。

「ひ、ひーん。

「ひ、ひーん。

と、低スペック脳ミンをフル回転させて、ちよろひと思案した結果

果

姫さんと一緒に客間へ戻つたらこじやなあーい、とこいつを案をひらめいた。

もぢるんつ、姫さんにはベッドで安眠していただくためですつ。

そつとなれば話は早い。即行動である。

眠れる姫さんの肩と脚の下に手腕を滑り込ませ、いわゆる“お姫様抱っこ”をしようとした足腰に力を

……そつと姫さんから手腕を離す。

「…………」

ちよいどばかり調子に乗つて、“お姫様抱っこ”で姫さんをベッドまで運ぼうとか思つちやつたが、いざ抱っこせんと力んだ瞬間、足腰さんが「修羅の道を行くのかい？」これ以上やると、壊れるぜつ？」と投げかけてきた。

修羅の道より、安全な道を時たま道草喰いながら歩むのが好きなオレである。

改めて冷静に足腰さんと意見交換した結果、ijiはやはり、自分の身の程に合つたやりかたで、姫さんをお運びしつゝヒーヒーハラハラだった。

承／第四十一話・マジマジ恋へじ（其の一十九）

そして。

ほじなくして密間に到着。

室内には、折り紙をしているバツの姿があった。ウサギの垂れ耳を思わせる黒のツインテイルが、楽しげにひょこひょこ動いている。「あ、おおかえりなわい」

じつちに気づいたバツは手を止め、

「ど、トウお兄ちゃん、イチお姉ちゃん」柔らかな微笑みでお出迎えしてくれた。

「うんっ、ただいまっ、超ただいまっ！」

「ぼわわ～んと温い気持ちに満たされつつ、オレはとりあえず毛布をベッドの上に運んだ。「むにゃむにゃ」と口を動かしたりしているが、起きる気配はない。万が一にも寝冷えしてお腹を痛くされたら、どうしてだかこいつが困ったことになるような気がするので、毛布のようなモノをお腹にかけておく。

「い、イチお姉ちゃん、どうかしちゃったの？」

眉をハの字に、瞳を潤ませ、バツが心配そうに訊いてきた。本当にっこ子だなあと思いつつ、オレは首を横に振り、

「壱也ん、夕食まで寝るんだって」と教えてあげた。

バツは安心したのか、「ほつ」と表情をやわらげる。

「あ、そうだ」

ひとつ、とても重要で重大なことを思い出した。

「夕食の準備が整つたら絶対に起こすよつこって頼まれてるから、起こすとき、バツ、手伝ってくれる？」

もし万が一にも忘れたり起こせなかつたりしたら、酷薄な微笑み

を浮かべた悪戯に、「ちよつと歯を喰こしづつて表に出ましょつか?」って優しい声色で外出のお誘いをそれでしまいそりだからねつ。バツには、是非とも協力してほしい。“味方／心の支え”としてつ。

「うんっ」

守りたいこの笑顔、と心の底から思つ素敵な笑みを浮かべてバツは承諾してくれた。

よつしゃあああ! これで確実! 備えあればば回避できると鉄拳制裁つ!

そして、いざれ起こされた件のおヒトは、

「でへつ、むにゅむにゅんにゅんっ」

守りたいこの寝顔、と心の底から思つ平和な笑みを浮かべて、いまはまだ夢の世界を味わつている。

しばしそのお顔を鑑賞

「と、トウお兄ちゃん」

なにぞ呼ばれたので、「ん?」とバツのまつを見やると、

「おお茶、じうわー」

この百億点満点のよい子は、いつの間にやらお茶を淹れていく

れた。

なんとかしら、心が温くなり過ぎて田頭が熱いわ。

「ありがとう」

湯のみを取り、厳かな気持ちで口元に運び、ズズツと一口、全身全霊で味わう。なんてこった! でら美味いぜつ!

そんな美味しく淹れられたお茶を味わいつつ、「そういえば

とバツに訊く。お婆の見えないツミさんのお所在を、である。

「お、お姉ちゃんは、ゆゆ夕食のじゅ準備のお手伝いをしてるよつ

「そうかー」

訊いておいてアレだが、そりだらつないとは予想していた。見事に的中したわけだが、そもそも予想それ自体に“意味／意図”がないので、なにがどうなることもない。なんとなあくである。

……お茶を一口、からのがぶ飲み。

とくにこれといってやることもないのに、バツと一緒に折り紙でもしようかと思ったところで、「いやいや、他にやるべきことがあるだろ?」と思いつ出す。

「いずれ“関心ある異性”をひょいと“お姫様抱っこ”して、「おおっ……、なんでこんな羽毛のようにならんのだ……」とか言えりやうよつになるために、いまは足腰を鍛えよ。」

軽く身体を伸ばしたり準備運動してから、スクワットを始める。足腰を鍛える方法ですぐに思いつくのがスクワットといつ無知安直さだけれども、なにもしないよりかは、やれることをやるほうが、極々微々たる距離でも“前進ノ漸進”できる と信じたい。

ふんすふんすと生温かい息を吐きながらスクワットしていくら、くすぐつた熱視線を感じた。なんだろうか、と熱源のほうを見やる。

「じい~」

バツが、興味津々と瞳を煌めかせていた。

「えーと、その……」

くすぐつたといふに、なんだかいたたまれなくてスクワットビリロではないので、

「じう、ね、衝動的に足腰を鍛えたくなつてね」と、ウソ偽りのない事実を伝える。

「ほえ~」

なんかもうそつとお持ち帰りしたくなる愛らしさで、バツは相づちを打つ。

けれども、くすぐつた熱視線はなくならない。

純真無垢な子に煌めく瞳で見つめられながら、ふんすふんす生温かい息を吐いてスクワットするとか、なんか新境地を開拓しちゃいそうだぜつ。なんて、このまま行くと、後戻りできずに、変態王座への階段を三段飛ばしで駆け上ってしまつ気がギンギンする。まだ、というか永久に、そんな階段、駆け上りたくない。

“どうする、どうしよう、どうしたものが、と眞面目に考へる。時たま「いいんじゃね？」とか語りかけてきおる“もつひとつ”的自分

”パンタかまして正氣を取り戻しつゝ、極めて眞剣に考へる。

「 そうだ！」

「 とても素晴らしい、非の打ちどころが一切ない解決策をひらめいた。

「 ちょいちょい、と手招きしてバツを呼ぶ。

バツは疑問符を頭の上に浮かべつつ、「な、なあに？ とトウお兄ちゃん？」と好奇心溢るほくほく顔で、我が目前まで来てくれる。

「 ちょっとオレをいじり倒すように踏んで じゃなくて、オレの上に乗つてほしいんだ」

「 え？」

小動物の“ぐとく瞳を潤ませて困惑する“彼”に、いらぬ誤解をされぬよう、正しく趣旨を説明する。ほどよい感じの“加重／負荷／Weight”があると、効率よく足腰を鍛えられそうな気がするから、“おもし”になつてはくれまいが、と。

バツは意を決するよに胸の前で両の手をギュッと握り、「と、トウお兄ちゃんのおお役に立てるなら、ぼボクの身体、使って、どうれつ！」

と黙つて、うなづる潤んだ瞳で真つ直ぐ見上げてくる。ふにふにと思われるほっぺたが、ほんのり赤い。

なんかみなぎってキタア のを抑えつつ、極めて紳士的にバツの肩に手を回し、その身をちょいとこぢりへ引き寄せ、

「 ふえつ？ とトウお兄ちゃん？」

くじくじお田々をパチクリさせて驚き戸惑つている顔を横田で見やつつ、もう片方の手を“彼”の脚の下にやり、

「 よつこらおおいつ」

少しの気合を一発かまして、いわゆる“お姫様抱っこ”をした。鎖骨のあたりから首、顔、チラリとのぞくおへんのあたりから足

首、つま先、腕から手、指先、と、バツは全身を“熱のある朱色”に染めて、もじもじと身じろぎをして、

「は、は恥ずかしいよ！」……

羞恥に困り果てたふうに眉尻を下げる、目尻に涙一粒ある潤んだ眼差しで“抗議するよ”うに、懇願するよ”うに、じらりを見上げてくる。“彼”的身体に触れているところから、やや高い体温がほんわか伝わってきた。

ふえーいつ！ 魂を撃ち抜かれたぜえーいつ！

バツの愛らしさに胸の内で生温かいお祭り騒ぎを起しつつ、けれど頭の一部は冷静に、“ひとつ”しみじみと思った。というか感じた。

「おおひ……」

壱也んと比べて、

「なんでこんな羽毛のように軽いんだ……」

我が足腰さんが、「まだまだイケるぜつー」と親指を立てて余裕の微笑を浮かべている ような気がする。

「むにゅつ！ ふえふえふえふえ～」

不気味な笑い混じりの聞き覚えある声に、

「とお～さ～ん

いきなり呼ばれ、

「はいいいいつ！」

背筋がゾクびくうーんとあわ立つた。

べ、べつに、壱也んのことを重いつて言つたわけじゃないんです

からねつ！ か、勘違いしないでくださいよねつ！

「んん、むにゅにゅー、あとでえ、煮物お、お話しましょ～ねえ～」

「はい！ わかりま

まずいつ、どうしようつ。この状況での“煮物”にいつたいどんな意味が含まれているのか、さっぱりわからん。

「わかりたいのですが、オレの勉強不足でまことに申し訳ないのですが、“煮物”的意味がわからないので教えてくださいお願ひ

します

「じゅるつ……むしゃら……んぐう~」

安らかな寝息がよくよく耳に届く無言の間

「……あら?」「

「……」は素直に訊くのがよろこびとしたのに、じつしてだらり、応答がない。

「……」

なんか、変な汗が滲み出てきたわ。

そんなオレを見かねてか、

「に、煮物はね」

心優しいバツが、食べる程の煮物について丁寧に教えてくれた。「すごくよくわかったよ。ありがと」

心が、“彼”的優しさに救われた。けれどもしかし、“彼”的優しさに対する感謝の気持ちは本物だけれども、さすがのオレでも食べる程の煮物については知っている。オレが知りたいのは、この状況で言つところの“煮物”についてだ。

が、それについて確實に答えを持つてゐるあたりおヒトからば、いまだこれっぽっちも反応がない。

「……」のままだと、ただバツを“お姫様抱っこ”しているだけになってしまつ。

のど、

「あのあ~」

「おひらから答えを頂戴しに向かうことにする。

そお~っとビシドに近づき、そお~っと様子をうかがつ。

「……あれ?」

そこには、どう見ても、よだれを存分に垂らしてすやすや寝ているようにしか見えない志さん姿しかなかつた。

まさか、まさかまさか、さつきの、寝言。

なんだな~もお~驚かせてくれちゃつて、このお~。

……やましこことなんて一切なしのこ、もつすごい~「……ほつ

としたのだわ。どうしてかしら？

ま、それは永久に、脇に置いておいて。

自分のために、足腰を鍛えることに戻るとしよう。

よだれじゅるりの眠り姫さまには、この中の安心のためにも、夕食のときまで安眠しておいていただきたい。なので“バツとの共同作業／運動”は、なるだけ密やかにおこなうことにする。

とりあえず無知のひとつ覚え的に、スクワットを。

屈伸するときの衣擦れの音。

自分の、吐いて吸う呼吸の音。

志せんの寝息と寝言とよだれをする音。

こちらの屈伸の動きと回調しているバツの呼吸と、時たま唾液をゴックンする音。

室内が静かなので、ヒートの発する生の音がよくよく耳に届く。そして斜め下のほうからは、ほっぺをほんのり朱にしたバツの、潤んだお熱な眼差しが突き刺さってくる。

なんでだろ？、この静かな状況でふんすふんすスクワットしていることが、急に恥ずかしくなってきた。いま、とてつもなく、“音を発してくれる機械／ポータブル・オーディオ”が欲すううう！ソウルフルな音楽を中くらいの音量でシャツフル再生して、お耳をふぞぎたううう！ 気をまぎらわせたううう！

けれども、どんなに渴望したところで、我が育ちし文明の利器であるところの現実逃避援助マシーンは“いま手元にない”ので、「あ、ふう、いえっぱあ、はあ、さあ、ふう」

スクワットをしつつ、ラヴリーでマイ・エンジュルなバツとお話すことできをまぎらわせ、なおかつ羞恥熱でこげた心を癒そう。話題は、オレと志せんが“夫婦大食い祝事（決勝）”に出場すべく戦略的撤退をしたあと、残されたツミさんとバツとロエさんとジョンさんは、いつたいどんなことになつたのか。じつにタイムリーな話題である。まあ、個人的に気になつてることを訊きたいだけ、とこうか、訊いただけ、だが。

## 結果的に。

保留、ということになつたらしい。

確かに、ジンさんは赦し難い“向こう側”に身を置いていた。しかし、イヤガラセ行為をおこなつたわけではない。ただ、“向こう側”的の用心棒として、田の前で起こつていていることを正しく理解していながら、“見て見ぬフリをしていた”。

責めたくないけれど、ジンさんが“見て見ぬフリをしていた”ことを責めてしまうと、同様に“見て見ぬフリをしていた”近所のよく知るヒトたちも責めることになつてしまつ。それは、できない。もし自分が“近所のよく知るヒトたちの側”だったとき、田をそらすずに行動できる自信がないから。

でも、責めないからといって、“向こう側”にいたジンさんを赦したわけではない。簡単に割り切れることがじゃない。

けど、口エさんは信じたい。自分の夫のために頭を下げる、自分の夫を心から慕う、真摯な彼女は信じたい。

だから、口エさんを信じて、自分の気持ちとの折り合にもつけて、とりあえず“このこと”は、保留。

それが、ツミさんとバツの意なのだと。う「それに、あ、あんなに、か顔を痛そうにしているヒトを、お怒るなんて、で、できないよ」

そう言つてジンさんの顔面事情を思い出したのか、バツは心配そうな顔をする。

……なんというか。

スクワットしながら軽い気持ちで聞くことじやなかつたなど、聞き終わつてから気づきました。失礼いたしました。“ごめんなさい。

「……なにを、しているんだ？」

ウワサをすればなんとや。り。

声のしたほうを見やると、そこにはジンさんの姿があつた。バツを“お姫様抱っこ”してスクワットするオレを見て、頭の上に疑問符を浮かべている。

「突発的に、足腰を鍛えたくなりまして」

だから、バツに“加重／負荷／Weight”になつてもらつて、“運動／スクワット”していたんです。と、オレは、爽やかな“スポーツ汗”を額に滲ませ、爽やかな“スポーツ吐息”を「はあはあ」吐きつつ、説明した。決して、断じて、バツを抱っこしていることに「はあはあ」しているわけではないのです。絵図的にはそう見えてしまつたかもしませんが、それは錯覚です誤解です勘違いです。

「……その

ジンさんは言い難そうにしつつ、重たげな口を開いて、「あえて言わせてもらつたが」と言葉を投げてくる。

違うんですって、

「“それ”だと

だからそれは錯覚で、

「鍛えるどころか

誤解で勘違いなんですって、

「むしろ足腰を痛めてしまつから

わかつてくださ

「やめたほうがいいぞ」

「……え？」

「キミの“それ／運動／スクワット”は、絶対にケガをするからやめたほうがいい、と」

ジンさんは気遣うヒトの表情をして、そう告げてくれる。

「あ、はい。わかりました」

ジンさんは王国近衛騎士団に属していた“騎士／戦うヒト”である。少なくとも確實にオレよりは、人体や運動に関する知識を有しているだろう。ここは素直に従つておいたほうが、文字通り“身のため”だ。

「忠告、ありがとう」それこます」

ジンさんに述べてから、腕の中のバツを見やり、

「バツも、ありがとう」

我が家思いつきに「イヤッ」と言わずお付き合いしてくれたことに、いろんな意味を込めて、感謝の意を伝えておく。もしこれで「イヤツ」と言わっていたら、オレは“この歳／高校生”にして、思春期の愛娘にウザがられる世の父親の悲哀を味わうことになつていただろうからねつ。本当に、本当に、バツがよい子でよかつたのだわつ。娘じやないけどつ。

「ど、どう、いいたしまして」

ほつペを微かに赤らめ、バツは口をもにょもにょさせゐる。じばし眼福な“それ”を継続してくれてから、はつ、と不意に“彼”は、なにか重大なことを思い出したふうにジンさんを見やり、

「か、か顔は、だだいじょーぶですか？」

ともすれば容赦なく心をえぐりにいつてゐるような言葉を、心配そうな表情で投げた。もちろんバツは、その天使のような愛らしさで心をえぐりにいつてゐるわけではなく。純粹に、純心に、ジンさんを気遣つてゐるのだろう。

「大丈夫だ、問題ない。ありがとう」

ジンさんは温かな微笑みある眼差しで、そう応じた。

正直なところ、まつたく大丈夫そうに見えない凸が凹な顔面事情

だが、本人が大丈夫と言つのだから、まあ、たぶん、ご本人的には大丈夫なのだろう。……田尻に若干、水分がたまつて粒になりかかっているように見えなくもないが、氣のせいだ。きっと“あれ”は、男の子が時たまお田々に滲ませる、漢の汗といつ名の、熱い汁だ。間違いない。

ジンさんは熱い汁が微かに滲む視線をバツからオレに移して、「風呂の準備が整つたから、よければ汗を流してくれ」と、ご報告してくださいさる。

「夕食の準備が整つまでは、もつしばし時を要するだろ？から、その間にでも」

「はいっ、いただきますっ」

ジンさんの熱い汁を見たらば、自分も熱い汁を流したくなつてきたのだわつ。だって、男の子だものつ。……いや、まあ、とくに性別は関係ないけど。

ともあれ。

適切でなかつたとはいゝ、スクワットという運動を軽くおこなつたあとのオレである。お夕食のまえに、多少なりとも噴出したベッタリ汗を、キレイにサッパリしておきたいと思つわけです。

「湯浴み着は、ここに置いておくだ」

ジンさんはそう言つて、人数分の湯浴み着を部屋の隅に置き、「では、これで」

と、軽く頭を下げてから去り行く。

その背を追つようにして、オレはスッキリ爽快するための一歩を踏み出す。

「行くぜっ！ お風呂場っ！ チヨー行くぜっ！」

「あ、ああああのつ、とアウお兄ちゃんつ」

無駄に喜び勇んでお風呂場へ行こうとしたら、バツにお呼ばれし

た。

「ん？ なあに？」

「あ、あのね」

バツは、眉尻を下げる、どこか申し訳なさそうな表情で述べる。

「トウお兄ちゃん、一緒に風呂場に行っちゃうと、いいイチお姉ちゃんがひとりになっちゃうから、ね寝ている間にひとりになっちゃうのは、ボクはとてもイヤだから、ボクはあとでお風呂に入ることにするよ！」

「あ、いや、この短い間に、ついつかり壱さんが安眠中だったことを、ついつかり失念していたなんてことは、まったくもって一切ないですけれども……壱さん、なんかごめんっ。だって、だって、バツの温もりと肌触りと重みがつ

「だからね、トウお兄ちゃん。ぼボクをね、お下ろしてほしいんだな」

いつの間にかしらん、この胸の内でたわむ形容し難いモノは……。

「トウお兄ちゃん？」

「おっとうつー！ 思わず超見つめちゃったぜつー！」

「で、なんだつけ？」

「ぼボクを、お、下ろしてほしいの」

バツは困り果てたふうに眉をハの字にくる。

「はは、『めん』めん」

べつに“彼”の困り顔が見たかったわけじゃあ、ない。念のため。いやあー、じつあー、うつかりだーなー。

万が一にもケガを負わせてしまったら、もう舌を噛み切つてお詫びするしかないので、慎重に慎重を重ねたゆっくりとバツを下ろし、解放する。

手腕に“存在／触感”を名残り惜しむ切なさを感じつつ、そういうれば、と気づく。無駄な喜びの勇み足で、湯浴み着に着替えるのをすっかり忘れていた。

速やかに全裸となり、ステテコのような湯浴み着に衣装チェンジする。バツが居るその前で全裸ったわけだが、べつに“彼”的前で

全裸になること」、なんら問題はない。壱さんガ“その場の思いつき根競べ”をやらかしたときの着替えも、そつだつたわけだし。うん。問題ないのだ。

違うんです、ただ着替えただけなんです。他意はないんです。  
と、事実であり真実である言葉をくつ付けると、あら不思議、  
たんに他意があるようにかんぜられるのは、どうしてかしらん?  
……本当に、本当に、ただ着替えただけなんだからねつ！ か、  
かか勘違いしないでよねつ！ わたくしは壱さんのしつとり“ふ・  
と・も・も”に心がお祭り騒ぎしきやハピコアで健全な青少年なん  
だからねつ！

……まま、それはそれとして。  
とりあえず、お風呂場へ向かおう。

## 承／第四十四話・ムシムシ感へ（其の三十一）

個人的には“サウナ”と言い表すほつがしつくづくの“Jの”お風呂の、ムワツと暑い室内に、ほぼ裸な身を置くことしばし。額のあたりにじんわりと滲み出た汗が、静かに粒となり、頬をつたつて、あごの先から、ポトリと落ちた。木製の床に落ちたそれは、滲み出てきたときの反対に、じんわりと床に染みて消える。そろそろ出ようかなー。

井戸水で汗を流してサッパリ爽快にならうかなー。

なんて思案をしながら風呂場の出入口を見やつたら、不意に扉が開いた。室内の熱気が外へ逃げ、代わりに入室してくる新たな空気に、今まで熱気を吸い吐きしていた鼻や口や気管や肺と、汗ばんだ身体が、爽やかな涼を堪能する。

なんとも心地好い　が、油断すると体調を崩してしまって、そので、堪能してばかりもいられない。

それにしても、どうして扉が開いたのだろう？  
体調のためにもその原因を探ろうとするまでもなく、原因はそこにヒトの姿をして立っていた。オレと同じくステテコのような湯浴み着という、ほぼ裸な身なりだ。どうしてだか、手に枝葉の束を持って。

承／第四十五話・マシマシ姫へ（其の三十一）

「アツー！ いだだだだつ！」

容赦なくベチンベチンと打たれてオレは、  
「無理です痛いですう！ ジンさんっ！」

早々にギブアップした。

「そんなに強くやつたつもりはないのだが……」

ジンさんはベチンベチンする動作を止めて、  
「ふんむ、どうやらキミは纖細らしい。すまなかつた」と、申し訳なさそうな顔をする。

「いえいえ、そんな」

実際にやつてみると、想像していたより“痛かった”から、反射的に驚いて声を上げてしまつたけれども。

「謝るよつなことじやあないですよ」

べつに、ジンさんが悪いわけではない。ただ、オレが慣れていな  
いから、よつ強く“そう”感じてしまつただけのことだ。

「あの、代わりと言つてはあれですけれど」

オレにやらせてもらひますか、とお訊ねしてみた。

「そうか？」

ジンさんは、こまだ凹凸の激しいお顔をほこりぱせり、

「では、お願ひしよつ」

こぢらに背を向ける。

必要な部分に必要な筋肉がある、まったく無駄のない、極めて実用的な、本物の“騎士／戦う者”としての“肉体／背中”が、そこ  
にあつた。汗ばんだその“肉体／背中”には、漢の艶がある。  
なんとこうか、志さんとは極めて似て極めて非なる“本物”らし  
さだ。 と、直感的、感覚的に、なんら根拠もなく感じた。

「……む？ どうかしたのか？」

「えつ？ いえ、どうもしてないですよ」

ええ、決して、断じて、ジンさんの汗ばんだテカテカ“肉体／背中”を注視していたなんてことは、ないのです。

「そうか？」

「ええ、そうですつ」

渾身の力でベチンと打つてオレは、ジンさんに応じた。

そこから間を置くことなく連続して、ベチンベチンと打つ。打ち込む。

輪郭がトゲトゲした葉っぱの、枝葉の束で。

太鼓にバチを打ち込んで響き轟かせるがごとく。

打つたびに熱い汁が飛沫となつて宙を舞う、“本物”的な“肉体／背中”を。

ベチンベチンと。

枝葉の束で肌を刺激し、発汗をつながして、より汗をダラダラかくのが、主に男同士で“この”お風呂に入った場合の、ひとつ風習なのだそうで。やるか、やらないかは、そのヒトの好みによるらしいが、男同士で“この”お風呂に入つたら大概、いわゆる“お約束”的なノリで、どちらがより汗をかくかという“おバカな漢の勝負”が開催されるらしい。我が貧弱ボディーの耐久力では、漢の“それ”が始まる以前に、「無理です痛いですう！」でございましたが……。

まま、それはさておき。

ここで、ひとつ想像してみよう。

普段はウサ耳ツインテイルにしている髪をお団子に結い上げた“これでいいのだ”的に女性用の湯浴み着をまとう“彼”であるところのバツと、ふたりつきりで“この”お風呂に入つて、“おバカな漢の勝負”をやつた場合のことを。

汗をしぶかせながら、ベチンベチーンとやりやられるわけですよ。みなぎつてくるじゃあ、ありませんかつ。たかぶつてくるじやあ、ありませんかつ。ねつ！

「……やつのは、黙つていってくれてありがと」

ファンタスティコな想像に、胸の内でグッと拳を握ついたら、

「助かつたよ」

なぜかジンせんに感謝された。

「え？…………えつと、…………あの、なにか助けるようなことじましたつけ？」

心当たりがないのですけれども。

「口エの前で、訊かずにしてくれただろ？」「ひ

……はて？　なにか訊いたかしらん？

「あのとき、場を改めて必ず話すと約束したからな

場を改めて話す？　うーんむ？

…………あ、ん？　あ、ああ、なんかヌルツと思に出したつ。

鬼気として危機迫る勢いで肉薄してきたジンせんに、口をふさがれたときのことか。

……確かに、その。畦道で襲つてきて、けれどジンせんの手にした“あるモノ”を怖がるふうに、「おおおおほえてりょー」と捨てセリフを置いて去つたときのジンせんにつけて、お訊ねしようとしたんだ。そういえば。「びりして、おまんじゅうを怖がるよつな態度をしたのか」と。

改めて“お訊ね”を声にすると、それを聞いたジンせんは、困つたふうでもあり、恥じ入るふうでもある微苦笑を口元に浮かべた。くたびれたタバコが似合いそうな口元である。

「誤解しないでほしいのだが

真摯な眼差しある顔に瞬と転じてジンせんは、

「決して、まんじゅうが嫌いというわけではないんだ」

最重要事項をえて主調強調する口調で、やつげてきた。

「は、はあ……」

言葉と行動が一致しないと思つのですが……。

とりあえず、相づちを打つ代わりに、枝葉の束でベチンッと一発、強めに背中を打つておく。

「それで、まあ、その、な、キミの間にに対する答えたが」

「まんじゅうが嫌いというわけではない、と前置きを述べたときの勢いはどけや。ジンさんはやや聞き取りにくい音声で、『にょー』によと話し始める。その背中が、今まで“本物”的“それ”に見えていたその背中が、一日に飲んでいい約束本数以上の酒をたしなんだうえに、ついつい飲んじゃつたつ。ごめえ〜んねつ。てべべるつ。なあんつってなつ。だははは」とか酔つた勢いでふざけたことぬかしてお袋の逆鱗に触れてこいつ酷く叱られてシコソンとしてる我が親父の背中と、似て見えてしまつのは、どうしてだらう。

……まあ、ともあれ、「てべべるつ」はなにぜつ、親父つ。

#### 閑話休題。

ジンさんの“お話／お答え”がちよいと道草喰い多めな言い回しだつたので、『にょー』は我がぞつくり解釈による要約を述べておく。

愛情に、肉体が耐え切れなかつた。

つまりは、そういうことらしい。

次期当主として時代に負けない“まんじゅう”的研究開発に熱心なロエさんを、ジンさんは“己にできること／材料運びなどの力仕事／家の掃除といった雑用”を全力でおこなうことでサポートしていたようだ。

“唯一の正しい選択”をしたと、ロエは“それ”が当たり前であるかのように言つてくれるんだ。一緒になつたことが原因の“よくないウワサ／風評”を、時に容赦なく投げつけられても、な。だから、せめて、ロエが“注力できる環境”を

そんなジンさんに全力で応えるがごとく、ロエさんは一日に数百という、とてつもない数の新まんじゅうを考案して試作品を作り出す。

そして、最強ソーターたるジンさんは、それらを試食して意見を述べる。時たま斬新が過ぎて、常人では食べられないモノもあつたとか。

ともすれば、なんら問題ない、支えあつよき夫婦の図である。

が、しかし。

一日に数百もの新まんじゅうを試食し、それが連日　といひの  
が数年、ついこの間までおこなわれていたわけで。

「ある日を壇に、まんじゅうを見ると腹の調子が崩れるようにな  
つてしまつてな……」

胃と腸が「もつ……勘弁してください」と書置きを残して家出し  
てしまつたのも、まま理解できるお話だ。どんなに“精神／愛情”  
が“強靭／一途”な限界知らずであろうとも、“肉体／胃腸”的には  
うには最後の一線、“生きる”的な意味で超えちゃダメな“限界／  
一線”がある。

しかしだからといって、胃と腸が書置き残して家出したからもう  
試食はできないと告白することも、まんじゅうを見たとたん調子を  
崩す姿をさらすことも、ジンさんは自らに許さない。ゆえに、胃と  
腸の後を追うように、「…………剣の道を、忘れ去ることができな  
かつたんだ」とウソを言い残して、家を飛び出した。

という諸々の事情から、“意図せずして／意に反して”まん  
じゅうを怖がるよつた態度をしてしまつ、してしまつた、らしい。  
複雑なような、単純なような、「もつ結婚しちゃえよ」と言いた  
くなる諸事情である。まあ、もつすでに「夫婦でござりますが。  
けれどもしかし、相手のことを想うのなら、素直にゲロつてしま  
つたほうがよろしいんじゃなかろうかと、個人的に思う。信頼して  
いる親しい相手に気遣われて“真”を偽られるのは、まったく嬉し  
くない“優しさ”だ。偽られたら、それに比例して知ったときのシ  
ヨツクは増量増大する。なにより、“偽り”はいざれバレるという  
のが世の既定事項だ。　が、我が親父のとき「てへペロッ」的  
な素直さは、相手の神経を逆なでするだけだろうから、あまりオス  
スメはしない。いい歳こいた大人の男がガチで平謝りする姿を丑撃  
した者としての、これは至極個人的な意見だが。

「ん、んん……。わかってはいる……のだが、な  
ジンさんはポソポソと口を開閉させて言葉をこぼし、そこに答え

が落ちてこるので期待するが、じとく床に眼差しを逃がす。それからまた、ボソリと口を開いて、一言。

「どう切り出したらよいものかと……」

そんな爽やかに困り苦笑を向けられましても……。

騎士なんだから相手の隙を見極めてズバッと斬り込んだらいいんじゃないですか。なんてふざけたこと言えるわけもなく。素直に

ゲロつたほうが、とか述べておきながら、いざだうしたものかと訊かれる

かれると、“的確な返答”を持ち合わせていないオレである。

反射的に正論ぶりっ子しちゃうの改めたほうがよろし、と脳ミンに戒めを焼印しつつ、ぶりっ子を發揮しちゃった手前、いちおう、頭をひねってみる。

## 承／第四十六話・マシマシ感へ（其の三十一）

空っぽのガチャポンをいくらガチャガチャしたところで、ポンッと“なにか”が出てくるわけもなく。

汗がダラダラな身体は、冷つこい井戸水を浴びてサッパリ爽快になつた。けれども頭の中には残尿感のようなモヤモヤがくすぶつて、どうにもスッキリしない。

かくかくしかじかと、突ついたら“なにか”が出しそうなんかじにほっぺをふくつと膨らませている壱さんにお詫ねしてみた。お風呂場から戻つたらば、“ロダンの『考えるヒト』”がごときボージングでベッドの縁に腰掛けているしゃつたのだ。その足下に一瞬、“地獄の門”を幻視してしまつ空氣感で。

「んん、ふふふふ」

壱さんは厳しいふうを装いつつ、微苦笑を漏らした。

「男の真面目なおバカに気づいていても、そつと気づいていないふりをしてあげるものなのですよ。いい女は、

「……はい？」

「ですから、ね」

壱さんは口元にやつていた右手の指先で、やや着崩れたお召し物の襟ぐりからのぞく、艶な鎖骨をつづらへとなぞりながら、おつしやる。

「寝ている私の鎖骨を、刀さんが思わず舐め回しちゃつたことに気づいていても、私は気づいていないふりをしてあげわけですよ」

「…………は？」

「ですから、刀さんが思わず、寝ている私の鎖骨にしゃぶつちやつたことは、

「」

「悪化してるとつづけ！ 思わずでそんなことするとか、それじゃあまるでオレ、とんだ変態野郎じゃないですか！」

「違いましたか？」

「...え?」

「...え？」

「」

最後、オレと起さん以外の音声が聞こえた。ややつわざつた“それ”が誰のモノであるかは、考へるまでもなく知れている。が、しかしだからにせ、“そちり”に意識を向けたくないわけで……。

「ん、んん……なにかな？ バツ？」

『新約』

困り果てたふうに眉をハの字にして、潤んだ瞳でチラリチラッとこちらをうかがいながら、“彼”はもによもよと口を動かす。

「ねね寝ているイチお姉ちゃんのさ鎖骨に、し、し、しゃぶり

いやああああああああああああ、唯一の真実の証言者たるバツに  
疑われたうえにしづつと引かれてゐるうううううううううううう  
。

閑話休題。

壱さんはちょいちょいと手招きしてバツを呼び寄せると、口元に薄っすら笑みを浮かべながら、なにか耳打ちをした。

転瞬、バツは顔を真赤にしてうつむき、そのまま

な足どりで元居た場所へ戻ると、ペタンと尻を着いて座る。あわあわするよつに揺れているツインテイルの間から、なんか湯気が出て

「ああ、バツになに余計な」と言つたんですか?」

疑いを懷いてしまつた眞実の証言者に、事の真相を説明して理解を求めるという難題に、これから挑まねばならぬといふのに。」  
「 」

「 」

壱さんはビクッと小さく肩を震わせ、

「どうしたのですか、刀さん？ そんなに語気を強めて」

眉尻を下げ、やや当惑した面持ちで、もじょもじょと控えめに口を開く。

「私はただ、“さつきのは冗談ですよ”って教えただけです。よう。あまり刀さんを“からかう”的もよろしくないと思って”バツのあのリアクションは、どう見ても冗談と明かされたあとの“それ”じゃないと思うのですが。

「まあ、それはそれとして、あつさりいなされたあー。

「少しお話を戻して真面目なことを述べますと

いまさつきの表情と態度はどうえやら、いろいろ知つてゐる大人のお姉さんふうを装つて壱さんはおっしゃる。

「時が経てば自然と治るキズもあれば、時が経つと治せない致命的なキズもあるわけですよ。致命的なキズは、それこそ致命的であるがゆえに最悪、死に至つてしまつ。自然と治るキズは、しかし自然治癒であるがゆえに消えない傷痕が残つてしまつ。以後ずっと、キズがあつた事実の証しと向き合い続けなければならないわけです」「……なんか、どっちも嬉しくない結果ですね」

「そうですね。しかしこれは、“結果／キズの治り”に対し一方的な受け身である場合のお話です。まあ、つまりどちらにしても“望ましい結果”にならないのなら、“望ましい結果”になる可能性が微々でもあることをるべき ウジウジ悩んで時間を浪費するくらいなら、お尻をキュッと引き締めて一步を踏み出したほうがお得だということですよ。少なくとも、なにもせず“うしなつて”から気づいて後悔するよりはよっぽど

言って、壱さんは“なにか”をのみ込むようにならひことつむべ。

それから数拍の間を置いて見せてくれたお顔には、やや眉尻の下がつた表情があつた。微苦笑を浮かべるよに些々と口が動かされ、言葉が発せられる。

「結局のところは、 “どうしたいか／なにを望むか” といつ当人の意志によりけりですけれどね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4092c/>

---

《ザ・刀と壱の旅》 ~The Tou and Ichi's travels~

2011年10月8日03時10分発行